
正しい魔導の使い方(仮)

羽田トモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい魔導の使い方（仮）

【Nコード】

N6453W

【作者名】

羽田トモ

【あらすじ】

世界には魔導という力が存在する。それは人類に与えられた古よりの力。いつ現れるやもしれぬ『魔物』に対抗する力。

しかしその『魔物』という存在は記録上には存在しない。誰も見たものもいなければ、文献もない。ましてや魔物の化石なんてものもない。

ただ残っているのはかつて人は魔物と戦争をしたという伝承とその戦争の遺物——魔導。

揮えない正義は悪へと転じ、その力はしばしば悪用される——魔触心牆——嫌われ者の魔導士。魔物が現れない現代。魔導士は畏怖される存在へとなった。

私立鷹光学園に通う魔導士——脇坂正道は魔導は正義のための力と信じている。

※仮のあらすじです。中途半端ですみません。

練習用の小説です。とりあえず公開してみようと思いました。ゆつくりですが連載できたらと思います。拙作ですが宜しく願います。

“ ” で囲まれているのはルビで・・・振る部分だと思ってくださいませ。携帯表示のことを考慮してそうしております。ちなみにサブタイトルも仮です。

区切りとして一巻に当たる部分が終わり次第大幅改稿予定です。

更新は今のところ毎日しております。午前零時更新か夕方までには更新予定。

また、更新につきましては活動報告をお読みください。

血と魔物

『魔に触れる者、心に牆^{かき}を立てよ』

牆とは垣根のことである。これは魔導士と接する際は一線を越えてはならないという意味の古いことわざで、現代では「損をする」という意味でしばしば用いられる。

要するに、魔導士は昔から嫌われていた。

いつか現れるかもしれぬ「魔物」。それに対抗する力が魔導であり、それを使役する魔導士なのだが——「平和な現代に無益な力を持った危険人物」——それがここ、日本での魔導士に対する一般的な認識である。

だが、魔導士すべてが“危険人物”かというそれは誤りである。むしろ危険人物は少数。魔導士の戦争投入、魔導を神の力と崇める過激派のテロ、日常における魔導を使った事件。最近だと三年前に起きた中東での戦争に魔導士が投入されたという噂。

これらの事象、魔導の誤った使い方が「魔力」を持たない人間に恐怖を与え、魔導士を危険視させている。そのため隠者のように正体を隠しこの世界を生きる魔導士も多い。

そもそも魔導とはなにか。詳しいことは不明である。

文献は何一つとして残っておらず、残っているのは数千年前に人と魔物による戦争が「消えた大陸」でおきたという伝承と「地水火風」四属性の魔導の使い方ぐらいなものであった。

魔導や魔物について研究する者もいるが、魔導士は魔導が使えるというだけで他の人間と“ある一点を除いては”血液も、皮膚も細胞も何ら変わりはなく、こと魔物に至っては大陸そのものが消失してしまっているので“魔物の化石”なんてものもなく、さらに何も

分かっていない。重箱の隅をつついても何も出てこないような状況に「魔導士こそが魔物の正体だ」などという研究者まで出た。

しかし、その意見には賛同する者も多い。



美泉市 みいずみ 第二埠頭 某倉庫。

立ち込めた冷たい夜気が男の蛮声に震える。

「だ、誰だてめえはッ！」

緊迫した声に周囲の男たちも立ち上がる。その数約二十。

「……！」

闖入者——漆黒のコートを纏った巨軀の男。齡は三十代後半から五十代。金髪のオールバック。跳ね上げ式の丸いサングラスが頑丈そうな骨格に不釣り合いな男……相手の特徴を完全に把握する前に全員が闖入者の両手に持たれた“もの”を見て息を呑んだ。それは赤黒く、まるで熟れたザクロのようである——

「これ、君たちのお友達だろ？」

低い声が響く。闇に沈んだ海を背に、男は重々しいブーツの靴音を鳴らして歩みを進め、その無骨な両手に持ったものを男たちに軽々と掲げて見せた。赤黒いそれが照明に照らされて林檎飴のように怪しく光る。それを見て男たちの誰かが確認するように声を上げた。「……ユウタと……タイキ……か？」

男の両手に持たれていたのは頭部を血に染めた男たち——ソーサラーギヤング「ブラザーフッド」通称「ブラッド」——のメンバー二人。この倉庫はブラッドのアジトのようである。

闖入者はその二人を床に投げ、

「あー、どっちがどっちな？」

丸太のような腕を組み、もはや血で顔の造作も判然としない二人を見比べた。倒れている二人は微かに呻いている、虫の息ではあるが死んではいないようだった。男は独りでに語りだす。

「いやね、私が街を歩いてるとだね急に路地に引つ張り込まれてね。そこでこの子たちが「色眼^{しきがん}」を見せびらかして、血……いや、ブラッドがどうかいってお金を要求してきたから……」

「ッ！ それでやったのかッ！」

殺気立った男たちのなかから左眼が黄金色に輝く少年が飛び出す。それは魔力を持たない人間との唯一の特異点「色眼」をさらす魔導士。

「おいおい、話は最後まで……」

「黙れッ！ 『土刀^{アイズソード}』ッ！」

瞬間。少年の手には木刀のようなものが顕現し、しかと握られていた。ただ木刀のようなだけで刃は鋭い。

少年は男に振りかぶる。男は巖のような巨軀、“見失いさえしなければ”どこにでもその剣撃を当てられる気がした。しかし——
「え？」

見失った。

勢い良く地面に叩きつけたせいで土刀^{アイズソード}が砕け散り、土の欠片が飛散する。

「——魔導を使うまでもない」

冷たい重い声。後方、振り向く間もなく少年の身体は積み荷の壁に吹き飛ばされた。鈍い衝突音を上げて少年が崩れ落ちる。男の動きは人間を超越していた。少なくともここにいる人間には男の動きが見てとれなかった。

あまりの実力の差、本物の戦闘力に男たちは凍りつく。

「では、話の続きだ」

男は突き出していた右腕を静かに戻し、サングラスを押し上げた。
「リーダーは？ ……いるんだろう？ なんでもこの街では名の通った犯罪集団だそうじゃないか。そのリーダーに是非お会いしたくてね」

「だからここまで来たってのか」

高く積まれた中身不明のコンテナの上から黒いパーカーの男が飛び降りる。左眼は先刻の少年と同じ黄金色——特化属性は「地」——闖入者の男とは違い、無理やり染めたような金色の短髪に耳を埋めつくさんばかりのピアス。顔立ちは整っているが眼つきはナイフのよう。その男は臆することなく歩を進め自分より頭一つ大きい男の顔を見上げる。

「君が……テルキ・アサマ君か。名前はそこの二人に訊いておいた」
「逆だ。浅間照樹だ。外人がなんの用だ。まさかとは思うが俺らを潰しに来たか？」

「外人ねえ。私は日系アメリカ人だよ。親日家の……でもまあ外人か」

男はいつて、押し殺したように笑う。

白い肌に自然な金髪。まるで軍人のような格好をした男は外人にしか見えない。浅間は男が流暢な日本語を話す理由を秘かに納得しながら怪訝そうに声をあげた。

「おい」

「おっと、そんな怖い顔するなよ。ここに来た理由はね、お金を“払いに”来たんだ」

「はあ？」

「そこで真っ赤になってる子たちの要求だよ。誰も拒絶なんてしてない。払うからリーダーの所へ案内を頼んだら襲って来てね。正当防衛だよ」

「どういう……？」

（なんだコイツ……街でいきなり絡んで来たやつ潰して、アジト

まで乗り込むか普通？　しかも金払うだと？　なに考えてやがる）
——判然としない浅間をよそに、男は両手を広げブラッドのメンバー全員に聞こえるように声を上げた。まるで舞台俳優のように朗々と。

「ブラッドは今日、この時を持って私が“オーナー”だ！　この組織を買い取らせていただく。金で動くのだろう？　君たちは。ならばこの私がブラッドというエンジンに金という名のオイルを注いでやろうではないか！　その代わり、私の為に働いてもらうがね」
突然の買収宣言に張り詰めていた空気がざわつく。男が入ってからまだ十分も経っていない。それなのにこの男は組織のトップに立つ氣でいる。

「ああ、あとっておくが……刃向かう者は——殺す」

殺す——男の口から出たこの二文字は重く、冷たく、そして鋭い。その一言で聞いたものを恐怖で蹂躪する響きだった。

規格外。常識ではない所でこの男は生きている——逆らえない。この倉庫にいるブラッドのメンバー全員がこの男に“殺される自信”があった。

「だが心配はいらない。君たちの仕事内容はそれほど変わらんさ。むしろ烏合の衆に目的、指針が出来るんだ、結束出来ていいじゃないか。なあ？　テルキ・アサマ」

この場の空気を支配してしまった男は笑みを張り付けて浅間を見る。この男が現れるまで場を支配していたブラッドのリーダーは小刻みに震えながら——笑っていた。

「ククク……アーツハツハツ！　なにいい出すかと思えば……おもしれえ！　どうせまともに生きてけねえとこまで堕ちた身だ。なにをするかは知らんが、その話乗ってやるぞ、おっさん」
「そういつてくれると思っていたよ」

どこか酷薄な笑みを浮かべた男の分厚い手が伸び、交わされる握手。仲間三人を叩きのめし、組織を丸ごと呑み込んだ謎の男に拍手が送られる。それは絶対的な死を逃れるための服従の音色。その音は手を叩いたもの自らを穿つ発砲音のように乾いて響いた。

「おっさん、名前は？」

「おっと、私としたことが、自己紹介がまだだった」

いって男はサングラスをそっと外す。浅間とはまた違う重く鋭い眼光。右は薄いブルー。左眼の鮮血のような赤が魔導士であることを示す。特化属性は「火」――

「私はグレン・F・タカサキ。魔導……いや、――『魔物』……かな」

「かッ、金が……」

市内中心部、美泉駅を中心に八方へ延びる大通りの一つ、「学園通り」。

片側三車線の車道には通勤に急ぐ車の群れ、歩道には同じ方向へ足並みをそろえる学生服姿の男女、街路に植樹された一年中咲く桜の花弁が風に舞い、林立する近代的なビルに切り取られた初夏の青空に季節外れの彩りを添える。

涼やかな風が吹き、鳥が鳴き、花弁が舞う。それはとてもさわやかな朝で、空を舞う花弁のようにこれから始まる一日に思わずステップを踏んでしまたくなるほどだった。

しかし、額に冷や汗をかき——左眼を宝石のように赤く輝かせる少年——脇坂正道の目には自らの財布の虚空しか映っていなかった。「あのクソ親父め……昼飯代を使い込んだのはお前だから追加はせんだと？ 息子が学校という閉鎖的空間で餓死してもいいのか……」正道は眉根を寄せて零距离で財布を覗き込みながら父親に対する呪詛をもがとつぶやく。つぶやくといっても正道の聴覚はヘッドホンから流れる大音量の歪んだ音楽に支配ひずされているのでその声は前方の人間が振り返るほど大きい。

しかし悪いのは正道であって、それを理解していないわけではない正道はコンビニ「スプリングマート」で昼食を買う同じ学生服姿を見てため息を盛大に吐いた。ガラスに黒いギターケースと整っているが少し無邪気さのある正道の顔が映る。その顔は心なしかやつれている。

自業自得。そんな顔になるのも限られた昼食代を趣味のギターに

つぎ込んだ正道が悪いのである。

ちなみに正道の背にあるべたべたとシールの貼られたギターケースには入るべきものは入っていない。入っているのは教科書やノートである。つまりそのギターケースは鞆代わりに使用されているのだった。

「くうー、こうなったら駅前で魔導芸でもするか？ ……いや、許可ないし、バレたらやばい。停学もんだ」

魔導を使用した商売は例え大道芸であっても許可がいる。違反すれば懲役、もしくは結構な罰金をとられてしまう。他にも魔導士に対する法律はいろいろ厳しい。

（そうになったら昼飯どころか晩飯も危うい……てか親父なら「臭い飯でも食って来い」とかいうんじゃないかなろうか……ひい）

正道は浮かんだ妄想をぶるぶると首をふって掻き消し、ガラスを鏡に茶色に染めたミディアムヘアをセットし直すとスプリングマート脇の路地を折れた。路地裏をジグザグに進んだ方が近道なのだ。遅れるほどの時間ではないが正道にとってはもはや路地裏は通学路となっている。

「しかしどうするか。五、六限目は体育。しかもバレーボール……栄養も補給せずに戦が出来るものか！ ……しかたない、今日は真美の弁当だな」

唯一の得意科目である体育に全力を出せないのは甚だ本意である。ここは幼なじみである真美の弁当に手を出すしか道はないと正道は決めた。おそらく真美は文句をいうどころか喜んで弁当をさし出すだろう。

高校生活が始まって間もないが正道はその「友情」にかこつけて弁当を分けてもらったことが結構ある。

一応申し訳なさそうにするが真美の弁当は美味しいので昼食の有無にかかわらず正道は真美の弁当を食べたいと思っている。

「む？」

路地裏を進むとスプリングマートの水色の路地裏のごみ箱が蠢いていた。それを見て正道は歩みを止めた。一匹の三毛猫のごみ箱を漁り、今日の朝食にありつこうとしていた。

「……」

しばし逡巡——ごみ箱↓コンビニの↓廃棄の弁当にパンその他もろもろエトセトラ。正道の手がなにかを求めるようにわなわなと動きだす。

「って、いかんいかん。おのれミケ助、俺を底辺に引きずり込むつもりだったか、この悪魔の手先め」

正道は独りつぶやいて三毛猫に指をさす。悪魔の手先でもなんでもない三毛猫（しかも勝手に名付けられた）は不思議そうに首を傾げ、正道を見ている。

正道はしばらくミケ助と見つめあったあと不意に瞳を輝かせた。

それはとても邪悪な光——

「お前オスっぽい顔してるな……ぐふ、聞いたことがあるぞ。三毛猫のオスは高く売れるとッ——」

正道はいつて「一攫千金！」と叫びミケ助に飛びかかった。ミケ助は危険を察知していたのか、毛を逆立て、正道の手が届くより速く身を翻し路地を駆ける。

「あっ、待てッ」

追う正道、逃げるミケ助。俊敏な猫の走りをぴったり追尾する正道。その表情は余裕に満ちている。どうやら遊んでいるようである。ミケ助はそんな正道の表情を見てぎよっとする。

こつちを窺ったミケ助の隙について正道は手を伸ばす。

手がミケ助のしっぽに触れるか否か——

ミケ助の身体は黒い一閃によってビルの壁に吹き飛ばされた。

「！」

正道は立ち止り視線を上げる。そこに立っていた動物虐待の犯人——黒いパーカーに黒いカーゴパンツの若い二人組。長身痩躯と短身肥満の縦にも横にも凸凹コンビ。深々とかぶられたフードの闇に長身は青、短身は緑の光が一点ずつ邪悪に灯っている。

魔導士——特化した属性は水と風。しかもこの格好……正道は、いや、この街に住む者なら知っている。自分たちをソーサラー（魔導士）ギャングと呼ぶ犯罪集団「ブラザーフッド」、通称「ブラッド」。黒ずくめの恰好はブラッドの“仕事着”。

しかし、闇の住人であるはずのブラッドがこんな時間からなにを？ 正道は怪訝に思いながら足が折れたのか上手く動けなくなっているミケ助を抱きかかえその二人組と正面から対峙した。ヘッドホンも外し、首にかける。漏れ聞こえる音楽がノイズとなり正道の心を乱す。

ブラッドと出くわしたら逃げるのがセオリーだがそうはいかない。正道にとってこのブラッドという集団は一番腹立たしい存在なのである。

『魔導は正義のためにある』

この信念を胸に正道は生きている。だから正道は魔導士の証である色眼は隠していない。

色眼を隠していないのは目の前のブラッドのメンバーや一部の不良と同じであるが、威圧のそれとは一線を画している。

魔導は世のため人のため。たとえ魔物と呼ばれる存在が現れないとしても魔導という力は正しく使えるはず——だから許せない。

欲望のために平然と力を使う者たちが。

父親に教えられたその精神はいつしか正道のなかで独自に育まれていた。

「悪い、お前の猫だったか？」

嘲るような低音が響く。長身の男が鉾のようなピアスが刺さった口元をにやにやさせながらミケ助を蹴った右脚をぶらつかせた。その表情に謝罪の感情は見とれない。むしろ愉悦に歪んでいるといった印象を受ける。目元はフードの闇で窺い知れないが、嘲りの色が浮かんでいることを容易に想像させる。

「猫、猫、にやにやにや」

短身の男はその後ろで独り言のようにつぶやいている。その声には起伏がなく不気味。音質は道化のような高音。つぶやきが発せられるたびフードから溢れそうな頬の肉が揺れる。フードの闇から延びる鼻梁は大きく丸く、時折ひくひくと蠢いている。

「お前、“タカタカ”の生徒だろ？」

「鷹、鷹、ぴーひよろろー……鳶^{とび}？」

私立鷹^{ようこう}光学園高校——鷹光の“鷹”と高校の“高”をとって通称タカタカ。

鷹をモチーフにした校章のついた濃紺のブレザー上下。見れば分かることを訊いてくるのは余裕からか。このあたりに鷹光学園以外に高校はない。学園通りの名の由来は歴史があり、建造物としても有名な鷹光学園そのものにあるのだ。

「タカタカは魔導士が多いのは有名だが、隠していないやつは初めてみた」

「炎、炎、あっちっち」

長身の男は青く輝く自分の色眼を指さす。短身の男は正道の色眼を一瞥してつぶやいた。

鷹光学園は理事長が魔導士ということもあってか魔導士への門扉も広く、魔導士の生徒が多い。その生徒のほとんどがカラーコンタクトなどで魔導士の証、生まれもつての自らの得意な属性——特化属性が色となって現れる色眼を隠している。隠してしまえば魔導士なのか普通の人間なのか判別がつかない。

色眼を隠さなければ不良に間違われたり、無闇に畏怖の対象になる。自分が魔導士であることを誇示するのは損することばかりなのだ。今の正道のように。

「てか……なんか喋れや」

「発言を許可します!」

短身の男の方は相変わらずだが、長身の男が殺気立つ。その声は怒気を孕み、表情は笑っていない。今にも“発導”しそうだ。

「……金なら、この通り」

ブラッドにとってカツアゲは歩く“ついで”にするようなものと誰かがいていた。やはり目的は金か? そう思っただけで正道は何も出てこない財布を片手で振った。

しかし、どうも違ったようで長身の男はその哀切な風情漂う財布を見て鼻で笑った。

「金なら間にあってる。お前みたいなやつは財布なんてあてにしねえよ」

「マネー、マネー、マネーあってるー、くふふふ」

「黙れ」

「黙る、黙る、しーん……ぶっ」

「うっせえッ!」

騒がしい二人組を見ながら正道は黙考する。目的は金じゃない? ではないんだ……不穏な空気に正道はミケ助を抱いていない方の左手に集中した。いつでも発導できるように咳払いも一つ。

魔導の使用——発導には「属性鍵語」けんごがいる。正道が咳払いしたのはその属性鍵語が裏返ったりしないようにするためである。

“正義の魔導士”がいざというときに声が裏返っているなど格好悪い。正道は二人を睨みつける。その視線に長身の男の顔が再び愉悦に歪む。

「なにその目？ まさかやる気？ ブラッドを相手に？ しかも二人」

「二人、二人、二倍、二倍！」

諸手を挙げてピースサインをしながら短身の男が楽しそうに小躍りを始める。その足取りは軽快そのもので飛び跳ねる毬のように見える。

「ククク、いやあ、“確かに”タカタカにはおもしろいやつがいるみたいだなア。色眼さらして、反抗的。果たしてそいつはよほどの自信家か……それともただの阿呆か。確かめさせてもらうぞッ！」

「阿呆、阿呆、俺？ 天才！」

歪な二人組は同時に地面を蹴り左右に分かれる。そしてほぼ同時に両手を突き出し発導——

『水蛇！』
すいだ
ヴァイントフィスト
『風拳！』

二人の手のひらがそれぞれの属性色に淡く輝く。水は青に風は緑に。

瞬間、狭い裏路地を蛇を模した水流が轟音とともに走り、空間を蹂躪する。そこに薄緑の空気を纏う道幅いっぱいの巨大な拳がその蛇を貫き、正道を襲う。

「って貫いてどうする！」

「あは。ごめんごめん」

暴れた水流と風の拳のせいで裏路地のごみ箱やごみ、自転車などは大通りの方へ吹き飛び、裏路地は舞うガラスやごみで荒涼とした景色に様変わりした。その景色に正道の姿はない。

「あら？ あら？」

「ちっ、やりすぎだ。マリオ。死んでたらどうする」

短身の男の名前はマリオというらしい。

発導したときガキの姿は見えなかった、大通りまで吹き飛んだか？
——そう思って長身の男は歩き出す。

大通りの方からは悲鳴のようなものも聞こえてくる。どうやら路地裏から飛んできた諸々のもので少しパニックが起きているらしいかった。

「バカが。あんなんじゃすぐポリが来ちまう……さっさと“回収”するぞ」

歯噛みして長身の男は進む。が、マリオからの返事がない。

「聞いてんのかマリオ……？」

不審に思った長身の男が振り返るとそこには……。

「さっきの属性鍵語ってドイツ語？」

「そう、そう、ぐーてんもるげん！」

正道とマリオがどこか楽しげに会話をしていた。

「な、なにやってんだこらあ！」

焦燥を帯びた長身の男の怒声にマリオははっと目を丸くした。どてどと腹を揺らし、長身の男のもとへ駆けてゆく。

正道より頭一つ小さいマリオの目は大きく、意外と純粋な目をしてた。マリオが見上げる形だったのでマリオの顔とフードの隙間からタトゥーの入った禿頭が見えた。

「ごめんよハリオー」

「獲物がいるときは名前を呼ぶな。決まりだろうが。……ちっ、お前どこにいた？」

ハリオーと呼ばれた男は憎々しげに正道に問いかけた。正道は二人の後方に回り込んだとしか思えない所に立っていた。左腕にはミケ助がしっかりと抱かれている。

制服や髪型、無駄に存在感のあるギターケースに乱れはない。

「属性鍵語がドイツ語か……かっこいいな」

正道はハリオーの問いかけを無視する形でつぶやく。

属性鍵語は基本的にその使用の容易さから英語が多い。しかしどこの国の言葉でもその意味さえ自分が“理解していれば”魔導は発導できる。鍵語さえ発声できれば前後につく言葉はイメージに準ずる。

剣を思い浮かべれば剣に。盾を思い浮かべれば盾に。地の属性が得意な魔導士は精巧な人形を生み出すこともできる。そのため魔導は自分の意識を具現化できる力ともいえる。

「おい、質問に」

「答えないと分からないのーお？」

正道は半眼になって口に手を当ててプププと笑う。

「な……なめやがって」

ハリオの歯噛みする音が正道の耳にも届く。怒りに震える両手は青く光り、暴発寸前。このまま発導されると大通りの方に被害が出るかもしれない。正道は二人組の頭上をこっそりと見上げ、“仕掛け”を確認した。

この二人は警察が来る前に逃げるだろう。しかしそんなことは許さない。逃がしてなるものか——その仕掛けを発導させるために正道は口を湿らす。

そして、丁度いいタイミングでパトカーのサイレンが近づいてきた。あれだけ派手にやれば通報も早い。

魔導士に対応する警官はM D A (M a g i c D e f e n s e A r m o r)と呼ばれる特殊な装備をしていて魔導が効きにくい。だからブラッドのような魔導をむやみに振り回す“小物”の犯罪者にとっては極力関わりたくない厄介な存在なのだ。

「ハリオ、おまわり、おまわり」

「だぁッ分かってるよッ！　あと名前呼ぶな！」

マリオが不安そうにハリオのズボンを引っ張る。

二人は見るからに焦りだした。

「ハリオさん」

「ああ？」

「さっきの質問の応え」

正道は今にも逃げだしそうなハリオの名前を呼んで、頭上を指さす。ハリオは名前を呼ばれてなにかいいかけたが素直に上を向いた。マリオもつられて上を見る。

「なんだ、ありゃ？」

そこにはマンホール大の燃えるような赤い円盤が四つ、等間隔に

並んで浮かんでいた。

「さっきの発導はあれを足場にして避けたってわけ」

「どうやって……」

ハリオは苦々しく頭上を睨む。円盤は頭上高く、魔導の力でも借りない限り常人の跳躍力では届かない位置に浮かんでいる。

魔導の発導は一度に一つの属性に限られている。二つ同時に発導する魔導士はいまだ確認されていない。すなわち、正道があつた円盤に乗るには過程としてもう一つの発導が必要不可欠だった。

このガキ、あの一瞬で二つ発導を——ハリオは再び歯噛みする。

（浅間の話を小耳に挟んで通学路を偵察に来た。来てみたら上手いことに“ターゲット”らしき色眼を隠さない魔導士がいた。そいつは誘ってもいないのにこのこと裏路地に入ってきた。まさには飛んで火にいるなんてやら……ここぞとばかりに接触したらそいつはただの阿呆ではなく自信家、いや、まともな魔導士だった——これじゃ俺が阿呆の自信家じゃねえか。くそう、調子こいた！ 最悪だ）

魔導士には“敵”がない。魔物などもやファンタジーの世界の生き物になっている。それゆえ、使い方は分かっているも自らに眠る魔力を行使しない者が大半で、戦える魔導士は少なかった。

その敵がいらないおかげで魔導士も普通の人間も分け隔てなくカモにしてきたブラッドのメンバーはお互いの魔導をぶつけ合うような戦いには慣れていない。

唯一、「ホワイトナイト」と呼ばれている謎のヒーローがブラッドの邪魔をするくらいで、敵がいなのはブラッドも同じなのだ。

一筋縄ではいかない相手。おまけに迫る警察。ハリオは困惑していた。

（なにもんだこいつ……ホワイトナイトみたいに自分を正義のヒー

ローとか思いこんでる狂人か？ それとも俺らが関わっちゃいけない相手か……あのグレンとかいうおっさんみたいに……ああもうどうでもいい。色々やべえ)

ハリオは考えるのをやめた。正道のことは黙っておけばいい。“先走った”ことがバレればどうなるか分からないし、今は逃げないといけない。固執して捕まるなどただのバカだ。

「まあいい、お前ブラッドを敵に回すことになるぞ。次会うときは……」

「会わない」

「ひゃ？」

息継ぎのタイミングで遮られたのでハリオの捨て台詞はおかしな息の音に変わった。正道は飄々と左手を挙げる。その手は淡い赤を帯びていた。

発導！？ ——ハリオは身がまえる。突如肩に衝撃。予期せぬ衝撃にハリオが息を呑んだ。

「ハリオ、ハリオ、上、上！」

衝撃の正体——マリオが上を向きながら跳ねるようにしてハリオを叩いていた。

「驚かせんな、今それどころじゃ……」

いいつも視界に捉えた円盤の一つが燃え上がっている。見まわすと他の円盤も同様に燃え上がっていた。それはまるで火の玉のように路地裏を照らす。

(なんじゃ？ てか、なんでまだあの円盤浮いてんだ???)

一瞬の思考停止。ハリオはその火の玉に見惚れるようにして立ちすくんだ。

すると後ろでばたばたと去っていく足音が鳴った。

「あッ！ マリオ！」

マリオがハリオを置いて走り出していた。

「ハリオさんってバカだね。マリオさんのほうがよっぽど賢い」
ハリオを置いて逃げるマリオ、丸い背中が揺れる。バカといわれこの期に及んで怒りをあらわにするハリオ。口から泡が飛んだ。目の前の光景がゆっくりと見える。それほど正道は集中していた。

「逃がすかよ——『炎弦の牢獄』！」
仕掛け——発導。

「なッ！」
「わわッ！」

発導と同時にハリオとマリオの上に浮かんでいた火の玉が弾け、尾を引きながら放射状に拡散する。引いた尾は消えず、燃え盛ったまま二人の退路を断っていく。

炎の弦をパンパンに孕んだ火の玉がすべて弾けると正道の前には細かい網目の燃える箱ができていた。もちろんそのなかにはハリオとマリオ、ブラッドのメンバー二人が入っている。

それは魔導学（学問を形成できるほどの資料がないので名前だけが）でいう、地雷型魔導の応用だったのだが、そんな名称は正道は知らない。

正道は自然に自分のイメージのまま魔力を扱える、稀有な高校生魔導士だった。

ちなみに、正道の使う魔導の名前には正道の好きな洋楽ヘヴィメタルやハードロックの邦題をイメージしている。少しクサイとも思っていたが、正道は魔導の名前を考えれば考えるほどわくわくした。

「あっち！ あっち！ ……やばいよハリオー」
「く、くそつたれがッ！」

網目から二人が熱さに踊っているのが見える。いよいよサイレン

の音も近くなった。警官が流れ込んでくるのも時間の問題だろう。

「ふう……成功。あ、決めゼリフ、決めゼリフ……」

正道は思い出したようにつぶやくと“温めておいた”セリフを決めるため背筋を伸ばし、びつと指をさした。

「正義の炎がこの身にたぎり、悪を倒せと血が歌う！ 美泉の悪はこの俺がロックしてやるぜ！ 正義完了！」
ジャステイスコンプリート

路地裏に響き渡る正義の声——正道は悦に浸りながら突き出した右手の人差指と小指を立ててメロイックサインを決めている。ヘヴィーメタルなどでよく見られるこのポーズには悪運や邪気を払う意味もあるので採用した。

決まった……ロックには打ち負かすとかそういう意味もあって、また閉じ込めるとかさそちの“LOCK”の意味でも使えるんだな。ふふふ——ネットと辞書で調べた知識を自分のものにして正道は心のなかで笑う。

それにしても反応がない。濃密な沈黙。

「……」

「……悪くない、悪くない」

「フォローすんなバカ」

炎の牢獄からは熱気とともに憐憫の空気が流れだしていた。ハリオとマリオの無表情に正道はポーズを解除して首を傾げる。

「……あれ？ ダメ？ ダメかあ。かっこいいと思ったんだけど……んー、まあいいか。やべ、学校遅れる！ 失礼！」

予期せぬ時間の圧迫に正道はびしっと敬礼をして、ミケ助を抱いて路地裏を駆けた。無遅刻無欠席が取り柄の遅刻はまずい。あとは警察におまかせである。

後ろから「覚えてろよ！」などありきたりな台詞が飛んできたが

無視した。というか興奮で正道の耳には自らの鼓動が響いていて、あまり聞こえていなかった。ヘッドホンからの音楽も耳に入らない。ガチガチと鳴る口を開けて正道は叫ぶ。

「ブラッドこえーっ！ 心臓はえー！ BPM200はいつてる！ まさにハートビート！ ブラッドこえー！」

——実は恐かった。

もちろん興奮もあった。だが背中中は冷や汗で濡れていた。発導してから少し落ち着いたが、不安もあった。

立ち止まるとおそらく震える膝を振り上げて正道は地面を蹴る。左腕に抱かれたミケ助が揺れてニャーと鳴いた。

自分の魔導は通用したし、ミケ助も無事だ。“初めての悪党退治”は正道が思っていた以上に上手くいった。魔導はやはり正義で、そして正義は勝つのだ。



「遅刻だ」

「きゃんッ」

短い悲鳴が響いた鷹光学園高校1—1組の教室。

鷹の像がついた豪華な門をくぐり、ミケ助をとりあえず保健室に預け、階段を駆けあがり教室に滑り込むと正道の目の前にはゴリラが屹立していた。

いや、正確にいうとゴリラのような担任教師の森 沙希である。生徒間ではもれなくゴリサキと呼ばれる。短髪、体育教師らしくつねにジャージ姿。180センチはあろうかというがっちりとした体躯に人類の進化を感じさせる進化論顔。その顔から視線を下げれば豊満な胸が二つ、筆舌に尽くしがたいアンバランスさを演出している。

そう、森は性別上女性である。このうえ魔導士であるなら俺なんか足元にもおよばねえ！　　と正道は思っていたがそれはどうやら杞憂だった。

今はショートホームルームの時間。運がよければ出欠をとっている可能性もあったのだが……残念ながらすでに名簿は閉じられ、閉じられた名簿は正道の頭に振り下ろされた。ぽこつと軽快な音が弾ける。

「い、いやー、先生。今日も素敵なお顔で。3Dテレビもびっくりの迫力でんなあ」

正道はダメもとで関西人顔負けの手揉みをしながら森に媚びてみ

る。イントネーションもそれらしく。

「お前それ褒めてんのか」

森は正道を見下ろしながら、一度耳にただけでは性別の判別ができない声を発する。どうも遅刻は免れないようだ判断した正道は半ばあきらめ、ウケをとる方向に思考を切り替えた。

「そりゃもう。同じ霊長類として誇りです。人語を巧みに操り、教員免許まで取得した奇跡のメスゴリ、らッ！」

再び名簿が正道の頭に降り下ろされ、教室に笑い声が咲く。窓からは温かな陽光が差し込み笑顔の花を照らしている。今日も学園には平和な時が流れていた。

「へへへ」

正道はおどけて頭をかく。笑顔。笑顔。笑顔。正道はこの平和な雰囲気が好きだ。

その気になれば大勢の人を傷つけることができる魔導士。それは時として魔力をもたない人間にもいえることだが、それはなんらかの兵器があつてのこと。“持っていないのに持っている”、「徒手空拳」という言葉があてはまらない魔導士はその存在を誇示するだけで畏怖される。

それでも正道は信念のもと、色眼を隠すことはしない。そんな正道をこの学園は受け入れてくれる。

魔物がいない現代、魔導士が魔物だなどといわれることもある。しかしそれは違ふと正道は思っている。魔導士は魔物なんかじゃなく“人”だ。悪いのはブラッドのような魔導を正しく使えない力に溺れた魔導士。そういう存在が魔導士差別を生んでいる。

そう、ブラッドのような。

結局、闇の住人が朝から動く明確な理由は分からなかった。あの二人は今頃逮捕されているはず。しかし、明日からは警戒をしなけ

ればいけない。

正道はハリオのいった通り“ブラッドを敵に回した”かもしれないのだ。

「で、脇坂。遅れた理由はなんだ？ 一応聞いといてやる」

「え？ あー、ええーとっ……」

森は名簿を開き何やら記入している。まだ遅刻のチェックはしていないらしい。まだチャンスはあるとその様子を見ながら正道は理由をいい淀む。

「登校中にブラッドの二人組に襲われて、戦ってました——なんていえるわけがなかった。警察沙汰になる。しかも攻撃性の魔導ではないものの発導してしまった。これは校則違反になる可能性がある。」

『私立鷹光学園高等学校校則 第十七条 校内、登下校中の魔導の使用について。◆本校の魔導士である生徒はいかなる場合においても魔導で人を傷つけてはならない。やむを得ず発導する場合は周囲の安全を確認し——』

どの学校にでもある基本的な校則であるが、やむを得ずという状況で周囲の安全にまで目がいくだろうか。もちろん、他人を巻き込むのはよくないので正しいとは思うが。

今朝のことはそのやむを得ずの状況に含まれる（しかも、周囲の安全まで確保）と思われるが、面倒になるのは見に見えているので、わざわざ進んで伝えることはない。

「なんだ？ ……怪しいな」

森の純粋な黒目がちのつぶらな瞳が正道に接近する。瞳までゴリラにそっくり！ とか思いながら正道はのけぞる。顔だけが飛び出してくるような異様な迫力に吞まれそうになり、気づけば腰骨が鳴るほど正道の身体は反っていた。

このままだと無遅刻無欠席の称号と俺の腰が！ 正道は冷や汗を滲ませて口を開いた。

「ね、猫を助けていました！」

一番大きな理由が抜け落ちているが嘘ではない。保健室に証拠だつてある。

森が怪訝そうに何かいおうと口を開けたと同時にチャイムが鳴り響いた。

「……まあいい。今回は初めてってことで見逃してやる。お前から無遅刻と体育をとったらなにも残らんからな。……授業中寝るなよ。寝たら顔面を挟んでやるからな」

なんだかひどいことをいって森は豊満な胸を寄せる。チャイムによつてざわつきだした教室が一瞬凍る。

なにを勘違いしているのか森はこの行動をたまにとる。教職員としてあるまじき行為かもしれないが、この学園の教職員は“アク”が強いのでこの程度は許容範囲である。が、不快なのは確か。あれは「欲求不満の怖さを生徒に教えるための行動だ」と誰かがいつていた。納得である。

森は恥ずかしかったのか少し頬を紅潮させ去っていった。正道は思わず叫び出しそうになったが耐えた。世の中にはいいことと悪いことがあるように、いい人悪い人がいる。森の発言はどちらも後者だった。

「吐きそ……」

よろけながら正道は窓際の自分の席に着く。

窓の外には美泉の林立するビル街が広がっている。ガラガラと陽光を跳ね返し屹立するその姿はさながらモノリスのようだ。

正道はぼーっと外を眺めながら今朝の路地裏での出来事を思い返す。

ハリオとマリオ——ためらいもなく発導してきた水と風の魔導士。目的のためなら手段を選ばないのだろう。やはりブラッドはこの街の平和を脅かす危険分子だ。今後、報復や復讐で対峙することがあるかもしれない。

その時は迷わず——戦う。

路地裏と魔物



——時は遡る。

「何やってるの君たち」

学園通り、スプリングマート脇の路地裏。重く低い声がサイレンと喧騒のなか響く。その声にはどこか嘲笑のようなものも聞いて取れる。

ハリオとマリオは炎を消火し、炎の牢獄から抜け出すところだった。その声はハリオとマリオ背後、抜け出した牢獄の反対側から聞こえる。

その聞き覚えのある声にマリオは震え、ハリオは冷や汗をかきながら鉛玉のような重い息を吞んだ。

なんで、あの男がここにいるッ！　ハリオは真っ白になりそうな頭をなんとか止めて状況を整理した。

まず、景色が変わっている。やけに暗く、正面から漏れているはずの大通りの光が“見えない”。

路地はハリオの数十メートル先で折れ曲がり、大通りへとつながっている。そこから漏れる光がない。ぶれる焦点で見上げる空は青い。この路地裏だけが谷底のように暗いのだ。

ハリオは自分がまるでケーキかなにかの箱のなかに入っている気分になった。しかし口のなかは苦くて酸っぱい。この状況に甘美なものは一切なかった。

視界の隅、ビルとビルの間はこの現象の理由が見えた。

そこにはなぜか壁が建っていて、陽光と人の出入りを許さない。その向こうからサイレンと怒号が聞こえる。警官がここに誰一人入ってきていないということはおそらく反対側も同様に塞がっている。こんなことをやってのけるのはハリオが知る限り一人しかいなかった。

よりによって二人で登場かよッ——やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、ポリよりやべえ！！……あのガキのせいでッ！いくら心のなかで叫んでも状況は変わらない。覚悟を決めてこれからどういう展開になるか怯えながらハリオはゆっくりと踵を返す。形を失った炎の牢獄が消え、視界を遮るものがなくなる。そこには案の定、“オーナー”のグレンとブラッドのリーダー、浅間照樹が立っていた。

グレンはいつもの漆黒のコートに軍用のパンツにブーツ。それにトレードマークな丸い跳ね上げ式サングラス。手にはスプリングマートの袋を提げ、口にはロリポップが咥えられている。グレンから貰ったのか浅間もロリポップを咥えガリガリとやっている。格好はハリオたちと同じ黒づくめの仕事着である。

「こ、こんなところで奇遇っすね」

ハリオは極力自然な笑みを心掛けたが、自分でも口角がひきつっているのが分かる。

「そうだね。朝食の買い物にきたらなんか騒がしかったんでね。ちよっと覗いてみたら君たちがいて驚いたよ」

グレンはそんなハリオに笑みをこぼしながらいったって冷静に応えるが浅間はイライラとした様子でロリポップを噛み砕き、残った棒を地面に突き刺さらんばかりに吐きだした。そしてすっぽりと被られたフードの奥から睨みつける。それは黄金色の狂気。

完全に怒ってる！——隣でマリオの震えが増す。買い物だと？

タイミングがよすぎる。どこかで見てたんじゃ……となると、やばい。一人のガキにいいようにやられて警察沙汰にまでなった一部始終……いいわけできねえ！ 浅間は直情径行で冷酷なのは知ってるがグレンとかいうこの男「逆らったら殺す」とか、自分のことを“魔物”とか真顔でいつてのけた本物の狂人だ、なにされるか分かったもんじゃねえ。消されるのは勘弁だ！

そんなハリオの思いとは裏腹にグレンはどこか楽しそうな表情を浮かべる。浅間の鬼のような形相は変わらないが。

「あの子」がテルキのいつてた子かな？」

「多分な。で……ハリオッ！」

「ひッ」

グレンへの返答もおざなりに浅間はハリオに向かって叫ぶ。震えて浅間の顔も見えないハリオはまともに会話できそうにない。それにハリオがマリオを巻き込んでいるのは分かっている。

「な、なんだよ」

浅間はリーダーだがハリオとマリオの方が一つ年上の二十歳なので敬語は使わない。かといって年下の浅間が二人に対して敬語を使うかといったらそうではない。付き合いが長いのもあるが、浅間は“誰に対しても”敬語は使わない。

「この世界には敬えるやつがいねえ」——浅間はそう考えている。

「勝手に何やってる。指示したか？ しかも負けて！ おまわりまですぐそこだ！」

浅間はハリオに詰め寄り胸倉を掴んで壁に押し当てた。顎に浅間の無骨な指輪がめり込み、フードがめくれハリオの黒い長髪が流れる。

「や、やっぱり見てたのか……た、たまたまだよ……」

「たまたまだあ？ お前らが盗み聞きしてたのは知ってんだよ！」

指示が出るまでに抜け駆けしておっさんに金でも貰う気だったんだろうが」

「げっ……し、知ってたのかッ」

ハリオは昨日の深夜のことを思い出す――

第二埠頭 某倉庫

ハリオとマリオはグレンが指示した“とある”仕事を終え、アジトである倉庫に戻った。朝も近い時間帯だったためか倉庫には他のメンバーの姿は見受けられなかった。倉庫内には夜気が充満していて肌寒く、ハリオは身震いした。

「……帰るか」

「帰る、カエル？ ゲロゲーロ……」

二人とも眠そうにつぶやいてハリオとマリオは帰ろうとした。誰もいないのなら夜まで誰も来ない倉庫にいても仕方ない。

「――」

「ん？」

倉庫の奥の方で声がした。その声が浅間の声なのはすぐに分かった。ハリオは静謐な倉庫に微かに響く音に不思議と耳を澄ませてしまった。

「やっぱりタカタカか――」

タカタカ？ 鷹光学園のことか。確かそんな通称だったな……高校時代は隣町に生活基盤があったハリオは鷹光学園ことは魔導士が多いくらいしか知らない。そもそもまともに高校もっていないのでその辺に関しては疎い。

「おもしろいやつねえ――へえ」

何の話だ？ おもしろいやつ？ 浅間がいうおもしろいは普通のおもしろいとは意味が違うはずだ。となると――

「狙って――」

……やはり魔導士の話か。狙うてことは仕事の話だな——ここからハリオは自らの浅はかな思考に没し、浅間の話は耳には入ってこなかった。

タカタカの生徒ってことは今から学園通りを見張ってればいい、それでそのおもしろいやつ？ おもしろそうなやつ？ まあなんでもいいが。タカタカの生徒でそんな感じの魔導士がいれば仕事をするまでだ。朝だし、他のやつらにバレることもないだろう、あとは適当に話しを合わせてグレンから報酬を貰えばいい……。

リーダーの指示の元動く？ ブラッドの決まり？ そんなもん知らねえ。どこぞの外人に一瞬で呑み込まれた組織に決まりもなんもないだろ。結果がすべてだ。

「おいマリオ」

「んー？」

「仕事だ。金が貰えるぞ」

「おお。マネー、マネー」

ハリオとマリオは意気揚々と倉庫を去っていく、その後ろの浅間とグレンの視線にも気づかずに。

——全部、まるごと、すべて知られてたッ！ 自らのマヌケっぷりを説明されて恥ずかしさと恐怖でハリオの顔がなんともいえない色になる。浅間の怒りのこもったナイフのような視線が痛い。物理的に顎と壁にこすりつけられてる頭も痛い。

「まあまあ、いいじゃないか。二人のおかげであの子が強いのは分かった。“強い魔導士と戦いたい”と頼んだのはわがままな私だし、ハリオもマリオもこんなことになるとは思ってなかったんだろう、なあ？ マリオ」

マリオは震えながらぶんぶん短い首を振って頷く。それを見た浅間はハリオを壁に叩きつけるようにして解放した。

マリオが心配そうにハリオに駆け寄る。

「けっ、俺は勝手に動いたこいつらが気に食わねえだけだ。その場でぶっ殺してもよかったんだが……」

「仲間を”殺しちゃいけないよ。今日はそんな仲間想いの私の提案でね。君たちには泳いでもらった。フフ、いい泳ぎだったよ」

——しかも利用されてたッ！　なにが「ちょっと覗いてみたら」だ！

「ハリオ、別に俺はお前の口でも喉でも舌でも切り裂いて“喋れなくしてから”おまわりに渡してもいいんだぞ」

容易に想像できる光景にハリオが身震いした時、浅間が造り出した壁の向こうから重機の音と掘削音が響きだした。

日本では警察や政治家のなかに魔導士はいない。海外では暴徒鎮圧や特殊任務のためにSWATのような魔導士部隊を置くところもあるが日本では未だ採用されていない。それゆえ、魔導士の放った炎は消火器で、土の壁は重機で対応せざるを得ない。

魔導士は採用試験や選挙に立候補はできるが魔導士というだけで通らないのが現状である。魔導士側に立つ為政者がいないことも魔導士の肩身を狭くしている要因であった。

「上から逃げるぞ。罰はそれからだ。『土の階段』」
アースステア

浅間が発導し、ビルに沿って茶色の土でできた階段が地上から延びる。浅間は罰という言葉にうなだれたハリオとマリオを引きずるようにしてその階段を昇っていく。

「おい、おっさん。何してる？　逃げねえのか？　あの壁ももう維持できねえぞ」

階段を中段まで昇った浅間がついて来ていないグレンに呼びかけた。魔力でできた壁は階段を作り出したことで脆弱になっており、

重機など使わなくてもいずれ崩れる程度の強度しかない。そうしている今にも通りからの声が鮮明になってきている。同時に二つの発導を維持するのは至難の業なのだ。

「私は家に帰るよ。君たちとは方向が違うからね」

いって、グレンは美泉の名前の由来でもある泉の方角を示す。そこは近代的な美泉の街のなかには似合わないほどの自然豊かな別荘地。グレンはそこに別荘を持っていた。

「……そうか。まあ気をつけるんだな。お前がいなきゃ財布を無くしたも同然だからな」

「ハハハハ、御心配どうも」

ビルの屋上に消えた三人に手を振って、グレンは“独り”で対話する。

『なかなかいい魔力だったナ』

——それはグレンのなかに響く内なる声。変声機でも使ったかのような甲高い声はこの世の者ではない響きをしている。その声はどこか陽気で。

「魔導士としては是非とも戦いたいね」

『それには賛成しねえナア、俺は自分の敵になる可能性があったから確認のため魔力を追ったんだぜ？　できればもうお目にかかりたくないネ。今お前に死なれちゃ俺まで消えちまう』

声の主は嘆息する。顔は見えないが、怪訝そうに腕組でもしている光景が浮かぶ。

「臆病だな君は。もしかして鳥チキンの姿でもしているのかい？」

『な、なにフーッ！』

「ジョークさ。私は“ただ人を殺すのに”飽きてしまったのだよ。私は戦いのなかで“人を殺したい”。命を奪うからにはこちらの命も提示しなければいけないと思うのだよ。違うかね？」

グレンは自らの衝動を抑えつけるかのように拳を握り締めた。

『ハッ、酔狂だネエ。ここは戦場じゃないんだぜ？ まあその願いは叶えてやるサ。だがちょっとマテ、もう少し俺の力になるんだ。そうすれば俺も外に出て、強大な魔力もお前のものになるル……そうすれば——』

「楽しみだなあ。私が“戦場”に帰る時、あの子が私の眼前に立っている気がするよ。私と同じ炎の魔導士……楽しみだ」

『おい、聞けヨ』

グレンは響く声を無視して地面を蹴った。グレンは跳弾のように壁と壁を蹴り跳ねていく。人間を超越した身体能力はその声の主によってもたらされたものだった。壁を飛び跳ねる漆黒の影はまさに魔物という言葉がふさわしい。

『俺も楽しみダヨ……』

——沈み込むようなその声はグレンには届かない。

壁が崩れ、路地裏に警官が雪崩れ込む。そこには荒涼とした景色があるだけで人影はなかった。



昼休みを告げる鐘が鳴り、正道は目覚めた。

目覚めて、寝てしまっていたことに気づく。魔力を使うことは疲労が溜まるのだ。

しかし、瞳を開けても視界がやけに暗く頭の両サイドがむにむにと柔らかい。机に突っ伏しているので暗いのは分からないでもないが、頭の違和感は謎である。

気持ちいい。マシユマロのなかで寝てる気分だなあ……寝たことないけど。これは夢だな——と正道が思い至った時、頭上から聞きたれた声がした。

「やっとお目覚めか」

「ッ！ やあああああああ！」

まさかッ！——『寝たら顔面を挟んでやる』——数時間前の情景がなぜかピンクな効果音とともに浮かぶ。正道はこもった叫び声をあげて顔を上げようとするもがちり挟まれていて自由が効かない。しかも腕を下にしていたせいで引き離すこともままならない。

「ふえんふえい！ ほれわへふはらふえす！（先生！ それはセクハラです！）」

というかただのハラスメントです！ てか、なんちゅう力！

「私は有言実行する女だ。脇坂が朝からずっと寝てると聞いてな。それになにがセクハラだ。滅多にない経験だろうが。素直に喜べ」

「ふはうほころがないふあらっふえ！（使うところがないからって

！……」

「何かあったか？」

「ぶはあッ！ はあ……いえ……はあ……何も」

森の魔手ならぬ魔乳から解放された正道は酸欠気味で赤くなった顔を上げた。ちらちらと星が明滅する視界で見ると森の懽然とした顔も紅潮していた。……違う意味だが。

生徒を何だと思っているんだ！ 呑み込んだ言葉と入れ替わりに胃液がせり上がってきて目が潤む。

「ふん。泣くほど嬉しいか？ ふふふ。脇坂、次は体育だな。遅れるなよ？ 遅れたら……」

「そつ、そんなことは断じて！ むしろ五分前行動で！」

正道が焦って手を振ると、森は再び寄せかけていた胸を戻して満足げに去っていった。

教室に残っている生徒から憐憫の視線が注がれるなか、正道は再び机に突っ伏した。

「悪夢だ、ナイトメアだ。夢は起きて見るもんじゃないだろ……バクよ、あの悪夢を食らいたまえ……できれば存在ごと」

「災難だったね。脇坂君」

突っ伏しながらぶつぶつと森に対する呪詛を吐いていた正道に哀憫の情を帯びた線の細い声がかかる。

「最悪の目覚めだぞ斗夜君よ。君も一度体験したまえ。ってお前は優等生だからそんなチャンスないか」

「あれはチャンスとはいわないよ……」

隣の席でスプリングマートの袋からパンを取り出し齧っている小動物のようなおとなしい男子生徒は苦笑した。

——さえじまどうや冴嶋斗夜。品行方正で素行もよく、成績も優秀。運動神経も抜群で、テニス部の一年生エースと聞く。優しそうな顔立ちで、身長も正道と同じ170センチくらいと見た目も正道が思うに悪くはない。ただどうも全体的に線が細く、おどおどしているのが男らしくない。

正道を見る斗夜の両目は黒く、それが自然のものなのか、色眼を隠してのことなのか正道は知らない。

鷹光学園のどの生徒が魔導士なのか。それを把握しているのは一部の教職員だけである。これは魔導士に対する差別的な発言などを未然に防ぐためであり、生徒間で誰が魔導士であるのかを知るには自己申告か正道のように色眼を隠さないことくらいである。

「あれ？ どしたの、それ」

正道は斗夜の額に絆創膏が貼ってあるのに気づいて自分の額を指さした。斗夜は栗色の前髪を持ち上げて額を見せる。額の丁度真ん中に絆創膏が一枚。

「マンガみたいな怪我の仕方だな」

「へへへ。ちょっとね……ぶつかったというか、“飛んできた”というか……」

斗夜は前髪を直しながら判然としない理由をつぶやいてはにかんだ。

「よく分からんぞ。まあ、犬も歩けばなんとやらだし、猿も木からなんとやらだからな。うむ、気をつけるべし！」

「そこ省略しなくても……でも、うん、気をつけるよ。……脇坂君もね」

「俺？ 俺は大丈夫だよ、犬でも猿でもないし」

かか 何々と笑う正道を斗夜は苦笑を浮かべ見ている。その視線は時折盗み見るように正道の赤く輝く色眼に送られていた。まるで見てはいけないものを見るように。

「……嫌いか？ 魔導士」

「えっ？」

前触れもなく切り替わった話題に斗夜の身体が小さく跳ねる。色眼を見ていたことがバレた恥ずかしさと後ろめたさに斗夜はうつむいてしまう。

魔触心牆——嫌われ者の魔導士。

鷹光学園は魔導士に門戸の広い学園である。だからといって魔導士への偏見が消えるかといえばそれは違う。

同じ空間のなかで時間を共有するにつれて魔導士も普通の人間と変わらないことに気づいてゆく生徒が大半であるが、やはり垣根を取り払えずにどこか一步引いて接していたり、または露骨に嫌がる生徒さえもいる。

正道はそんな環境のなかで魔導士を自ら誇示しているが、持ち前の明るさでその垣根を乗り越えていた。

「いや、そうじゃなくって……嫌いとかそういうんじゃないって……協坂君のその目って、なんていうかその、まっすぐっていうか……その、綺麗で……」

斗夜はうつむいたまま頬を紅潮させ、もじもじと消え入りそうな声でつぶやく。そのまま滔々と正道の色眼の素晴らしさについてつぶやいていくが一向に反応がないので顔を上げると、正道は半眼で眉根を寄せ、口はへの字。見るからにひいていた。

「ハッ!？」

「お前そっちの“組合”のお方だったのか……」

「違う違う違う! てか組合って何! そんなの加盟してない!」

「そんなムキになんなよ冗談だって! 否定しすぎると余計怪しい

ぞ、サエジマデラックス」

「変なあだ名つけないで！　うう……」

斗夜は頬をさらに紅潮させて再びうつむいた。正道は「可愛いやつめ」と斗夜の膝をつつき、表情をただす。

「俺は不良でもブラッドでもないからなー、」色眼が邪悪に輝く……とか嫌だし。正義の魔導士を目指す者としては嬉しいよ」

正道、満面の笑み。斗夜は少し恥ずかしくなる。

「正義の……」

斗夜は紅潮したままの顔を上げ、正道を見つめた。斗夜の黒の濃い瞳には正道の宝石のような色眼が映っている。

「そ、ホワイトナイトみたいに」

知る人ぞ知る、美泉のヒーロー、白騎士ホワイトナイト。

名前の通り、白いコスチュームに身を包み悪を倒す魔導士。その正体は不明で、活動も深夜限定、相手にするのは主にブラッド。現場から即座に立ち去ることから目撃されることも滅多にない。ゆえに、“知る人ぞ知る”なのだが、正道の父いわく、「俺が高校のときにはいたな」とのことなので、歴史はあるらしい。ただホワイトナイトはしばらく姿を隠していたようで再びその存在が噂されだしたのはここ一、二年の話である。

目撃したことはないが、正道はそんな正義のために魔導を使うホワイトナイトに憧れている。

斗夜はホワイトナイトの名前が出ると、なぜか急に表情を曇らせた。憧れるように正道を見ていた表情は名残もない。斗夜は引き結んだ口を開けて重々しく声を落とす。

「……あれは――」

斗夜が口を開き、何か言葉を出そうとしたのと同時にその音は鳴り響き、斗夜の小さな声を呑み込んだ。

それはたとえるなら獣の唸り声、いや咆哮。

しかし、この街、この学園にそのような咆哮を上げる動物はいないわけで……。

「悪い、斗夜。腹減った」

それは正道の獣の咆哮のような腹の音だった。

正道には本日昼食はない。ここで人の食事を見ながら悠長に話している場合ではなかった。

「真美のとこいつてくるわ！ 次体育だし、下手すりゃまた挟まれる！」

正道は悲壮な顔でいうや否や、教室を飛び出し、真美がいつも昼食を採っている食堂方面へ猛然と走っていった。

走り去る正道の背中を見送って、斗夜は独り正道に掻き消された言葉の続きを紡ぐ。

「……正義なんかじゃないよ」



カレー、ハンバーガー、ラーメン、カツ丼……食堂に入ると様々ないい匂いが正道を襲った。腹の獣が早く獲物をと鳴く。

鷹光学園の食堂は校舎とは別のところに建っている。食券システムの厨房、カウンターが建物の真ん中にあり、その上は天井まで吹き抜けの二階建て構造。その吹き抜けを囲むように長テーブルとイスが一階、二階と設置されている。二階にはテラス席もあり、天気がいい日はそこも賑わう。真美もそこで友人と昼食を採っているはずだ。

「腹減ったあ……」

正道は唸る腹を押さえてよろよろと二階への階段を昇る。一步步近づいてくるいい匂いに一步踏み出すごとに腹が鳴るという怪奇現象まで起きた。

「朝の“運動”のせいだ。ハリオとマリオめえ」

朝のブラッド二人組を思い浮かべる。上手く退治できたことを再び実感して正道はふふんとにやけた。空腹で悲痛な顔に乗る不気味な笑み、そしてぼそぼそと唸っているようなうわごとがプラスして昼食中の生徒たちが箸を、スプーンを、パンをちぎる手を止める。

そうこうしているうちに怪しい正道はテラスについた。陽光が暖かに差し込むテラスはビル街とは反対側に位置し、柵の向こうに目をやれば別荘地の森林が広がり、遠方には海まで見える。テラスには各テーブルを仕切るように様々な花の花壇が設置され、さながら自然の中に浮かぶ空中庭園といった趣きである。

「食い終わってなきゃいいが」

絶望的なことが頭をよぎりながらも正道はキョロキョロと自らの腹を救ってくれるであろう救世主^{まみ}を捜す。

「いた！ げっ……」

真美はバラの花が咲く花壇の近くの席にいた。しかし、真美と一緒に座っている二人の女子を見て正道は踏まれた蛙のような声を上げた。その二人の女子は正道の姿を目ざとく見つけたようで、正道のもとへ駆けてくる。本日、昼食への道のりはなかなか厳しいようである。

「正道ー！」

「正道」

女子の一人の方は当たり前のようににはしゃいで堂々と。もう一人の方は機械のように静かに淡々と正道の腕に腕を絡めてくる。

一人は赤い巻き髪ロングヘア、胸の谷間が見えるようにギリギリまで開かれたシャツに何かが見えそうなほど短いスカート。もう一人は黒いショートヘア、小ぶりの胸をきっちり制服に包み隠し、もう一人とは対照的。しかし、二人は性格や髪形や体型は違えど顔は見分けがつかないほど同じ。

朱川^{あかがわ} 凜^{りん}と朱川^{らん} 蘭。同じ二重の大きな目、同じ形の鼻、同じ形のぷっくりとした唇。つまり二人は双子。

この双子（特に凜）には入学当初から露骨な好意を寄せられている。しかし最初に声をかけてきたのは凜ではなく蘭だった。

入学式の日、蘭はどこか冷たい怜悯な声で正道に「『凜はあなたのその不良っぽい色眼と少年のやんちゃさを残した顔立ちに一目惚れしました？、よって、私の彼氏とします？』……と、姉様がいます」と絵文字も含めて伝令した。

驚いた正道がその姉とやらを捜すと、同じ顔をした派手な女子が正道に向かって投げキッスをしていた。

蘭は「あれが姉様です」といい、「ということなので、私もあなたのことが好きということになります」とわけの分からぬことをつけ加え去っていった。

その翌日から二人は正道を見るたびアプローチをかけてくる。凜は情熱的に、蘭は無気力に。

健全な男子として入学式の日いきなり美少女二人に告白されるという奇跡に「バラ色の学園生活の始まりだ!」と喜ぶべき事象だったのかも知れないが、正道は冷静と情熱の間に揺れることなく姉妹の異様さにひいてしまった。悪いやつでは決してないのだが……。

今思えば蘭が告白代理をしたのはもしダメだった場合凜が傷つかないためであり、蘭が「私もあなたのことが好き」といったのは正道が凜と蘭、どちらに転んでもいいように凜が指示したことだったのだろう。これは凜の『私のものは私のもの。蘭のものも私のもの』というどこぞのガキ大将的思想から来るものであろうと推測できる。姉妹は謎の主従関係で結ばれていた。

「なににー、凜を探しに来てくれたのお? 嬉しい!」

双子の姉である凜は赤い巻き髪を揺らして勘違いを叫ぶ。濃い香水の臭いが顔を覆い、腕に凜の早熟した胸が当たる。というか故意に当てている。

「嬉しい」

反対側では蘭が無表情で起伏のない感情を発している。凜と同じく上目遣いではあるが、その目は虚空を見ている気がする。もう慣れているが、蘭の本当の感情がどこにあるのか分からない。

「な、なんでお前らいんの?」

この二人が真美と昼食をともにするのは珍しかった。真美は正道と同じクラスだが、姉妹は2組であるし、真美は普段は同じクラス

の人畜無害な女子生徒と昼食を採っているはずだった。

「んふふふ。魔導士の勘ってやつう？」

凜は自分の左目を指さす。凜と蘭、二人は魔導士だった。

とはいえ、二人とも目はコンタクトレンズでもはめているのか、黒い。凜が正道に言い寄るときに「同じ魔導士として」とたまにいうので分かった。凜が魔導士なら姉妹である蘭も必然的に魔導士ということになる。

「魔導士にそんな機能はないぞ」

凜は「真美のところにいれば正道が現れる」と予想しただけだろう——正道はそう結論づけた。

凜と蘭が真美と友達なのもそういう打算的な観点からかもしれない。

腹が唸り、正道は真美の方を見る。真美はこちらに背を向ける形で座っていたが、今は振り返り正道に苦笑を見せている。

「真美に用？」

蘭が正道の視線を追って問う。

「そうそう。お前らには用はないの」

「むー……そんなあつ、私を捨てるのね……（ほら、蘭も）」

むすっとした次の瞬間におよよと泣き崩れる凜。指示を受け同じく崩れる蘭。注がれる周りの生徒の視線。

「ちよっ！ やめろよ！ 捨てるも何も俺の所有物じゃねえ！」

「きゃっ！ 女の子をもの扱いなんて……」

「ひどい」

「勘弁してくれ」

嘘丸出しの寸劇に正道が嘆いていると呼び出しのチャイムが響いた。そして朗々たる声ヴァルキリーが食堂全体に響く。その声は強く、玲瓏で戦場を指揮する戦女神をイメージさせる。

『生徒指導部の名において、あまばねれいあ天羽黎亜が命ずる！ 一年二組の朱川

凜！ 貴様の不貞行為をただす！ 即刻生徒指導室へ召喚されたし！
以上！』

——生徒指導部。複数人の教職員からなるこの学園の秩序と風紀をただす更生組織。

所属している教職員の数は公表されていないので不明であるが、指導を行うのは決まって二、三人の教職員である。なかでも天羽の登場回数が一番多い。

受け持つ教科が選択教科の情報処理なので暇な時間が多いのだ。授業中もファンタジーなネットゲームに興じているらしく（さきほどの発言もそのネットゲームの影響を受けているものと推測される）、裏では“美しき廃人”や“給料泥棒”と呼ばれることもしばしば。

「げっ、コスプ黎亜！」

凜が飛び上がって顔を歪める。

コスプ黎亜とは天羽のあだ名である。これまたネットゲームの影響か、天羽は教師あるまじき格好をしている。

魔法陣がプリントされたマントや入手経路の見当もつかない胸当てや籠手、指導室に幅の広い両刃の剣が立てかけてあったとの噂もある。それらの“装備”は変動するが、左眼に装備したアイパッチは不動のものとなっている。柄や色は変わるが、外しはしない。おそらくその下には何色かに輝く色眼が隠されている。

当の天羽はつくづくしてついたような“コスプ黎亜”というあだ名を嫌っている。

天羽いわく、「これは私の普段着だ！」とのことである。

「お前何したんだ……不貞行為ってその……」

「セッ——ふぐっ」

「ちが——うッ！」

凜が叫んでいいかけた蘭の口を塞ぐ。

「蘭！ あんたは昨日私が何してたか知ってるでしょ！ 『チルド』に遊びにいっただけじゃない！ 何もやましいことなんかしてないわよ！」

『チルドレン・オブ・ナイト』——通称「チルド」。“夜の子供たち”という名を持つクラブだ。

それは美泉駅から東に延びる美泉坂通りみせんざかに存在している。そこは“美泉市イチの歓楽街”と呼ばれる区画で、飲食店や風俗店、カラオケや映画館といった様々な娯楽施設がひしめき、夜だろうが朝だろうがおかまいなしに光源を放っている。

チルドは美泉坂の数あるクラブのなかでも人気がある。価格が安く、キャパシティも二千人と大きいので入店規制も緩く、入りやすい。

しかし、違法薬物の売買や、ブラッドのメンバーや他の“危ない人たち”の出入りも噂もあるため注意が必要であった。そもそも未成年は入店できない。

凜は顔を真っ赤にして怒りをばらまくが、学園の生徒がクラブなどという夜の施設に向かうこと自体校則違反である。

「何堂々といってたんだお前。てかよく入れたな」

「ふん。そんなものの私の色気でなんとでもなるわよ。でも……なんでバレたの」

「私が“売った”」

……

……

……

「……は？」

蘭は聞き流してしまいそうなほどさっさと起伏のない声で自供した。

凜の表情が身内の犯行に固まる。そして烈火のごとく怒りだした。地団太を踏むたび胸が揺れ、スカートが危ないところまでめくれる。とてつもなく目のやり場に困る。

「う、売ったって！ あんた！ 何でそんなことするのよっ！」

「……だって、姉様にはあまり危ないことしてもらいたくない。これ、約束したはず。昨日だって私の目を盗んで勝手に出ていったから。……罪には罰を」

蘭の怜悯な目が細められ、重く輝く。正道は蘭の周辺の空気が冷えたように感じた。同時に蘭の特化属性は「水」ではないかと推測を立てる。無表情で氷の刃を放つ蘭の姿が容易に想像できた。

「ひっ！」

凜は蘭に首根っこを掴まれて引きずられていく。蘭の細い身体はどこにそんな膂力があるのか。

「ま、正道ー！」

凜は手を伸ばしうるんだ瞳で訴えかける。しかし足を振り回して暴れているせいで正道は凜の見てはいけないものを見てしまい反射的に顔をそむけた。

「はうあ！ ま、正道いいいいい！」

「では、さようなら正道」

「お、おう」

蘭は正道に背を向けたまま姉を引きずっていく。こうして奇妙な主従関係の姉妹は去っていき、正道には空腹にプラスして疲弊と虚無感が募った。

頭に残像のように焼きつくのは凜のピンク色のパンツ。足をばたばたさせていたせいでサブリミナル効果のようなものが生まれていたのだ。

「ピンクかよ……」

つぶやいて、正道は歩を進めた。

思わずにやけた口元を押さえながら。

「ああ、煌めく鮮麗な黒髪、生きとし生ける者を癒す優艶な黒瞳。^{しゅくどう}その均整のとれた唇から紡がれる言の葉は福音となり世界を包み込む。おお、人の姿を借り我の前に降臨せし女神よ……」

「も、もういいよ……は、恥ずかしい。それにそんな体勢でそんなこといっても説得力ない」

真美は机に突っ伏したままごによごにいつている正道を見ながら嘆息した。冗談とは分かっている、真美の顔は赤く染まってしまった。

しかし、正道が真美を女神に例えて述べた口上は真美の容姿を捉えたもので、あながち嘘ではない。

来栖真美。^{くるす}正道と同じ1ー1組のクラスメイトであり、正道とは幼なじみである。正道の父と真美の父が親友だということで幼いころからたびたび顔を会わしてきたが、真美の父の仕事の関係で「学校」というものが同じになるのは高校になって初めてだった。幼稚園までは一緒だったのだがその頃の記憶はあまりなく、おぼろげだ。おとなしい性格に整った顔立ち、凜のように主張しないがスタイルもいい。男子生徒の間でも秘かに人気があるらしいが、入学早々親しく話す正道が彼氏と思われるようにいい寄る生徒はいない。ただ、そのことに関して正道は「ただの幼なじみ」と否定している。実際彼女ではない。

真美は普通の人間である。真美の父は魔導士であるがなぜか真美には魔力がない。こういった前例はないが、真美を出産と同時に亡くなった魔導士の母が関係しているのだと真美の父は考えているらしい。

真美の母は命を賭して『真美を人間にしてくれた』と。

この話を正道は真美から聞いていたのでそのことに關してはなるべく触れないようにしている。それは母の死について真美が負い目に感じているからだった――真美の泣き顔は見たくない。

「うっ……女神よ、私の腹を満たしたまえ」

「やっぱりそれか。そんなことだろうと思ってたけどね」

「へへへ、さすが真美様。バレてたか」

正道は悪戯っぽい笑みを浮かべ顔を上げた。その目にはなぜか恥ずかしそうにしている真美と花壇のバラが映る。

「なに照れてんだ」

「て、照れてなんか……はいっ」

真美は赤らめた顔を振って自分の弁当を差し出した。

昼休みも終わりに近付いているにもかかわらず、その弁当には色とりどりのおかずが半分以上残されていた。

それを見た正道が真美の顔を覗き込む。

突然接近する正道の大きな目、そして色眼、鼻梁の整った鼻、薄い唇……息を呑んだ真美の顔色がどんどん花壇のバラの色に近づいていく。

「お前体調悪いの？ 大丈夫か？」

「だだだ、大丈夫！」

「じゃあ、なんでそんな残してんだ」

「……まさちゃん朝スプリングマートの袋持ってたし。それになんか疲れてたみたいだったから……授業中も寝てたし。まさちゃん“見た目の割には”まじめだから寝るとかあんまりないじゃない？ だから、その……心配で」

付け足した正道を氣遣う声は消え入りそうなほど小さく、正道の

耳には届かない。

「見た目の割にはってなんだよ……俺は大丈夫だよ、朝ちよつと運動しただけだ。ん？ てことは俺のために残しておいたってこと？」
真美は小さくこくりと頷く。顔は今にも発火しそうなほどに赤い。肌が白い分余計に目立つ。正道はそれを体調からくるものだと思っただがどうやら違うらしかった。

「まじ女神！　じゃあ遠慮なく！」
安心して弁当を受け取った正道は真美の箸を使い弁当を平らげていく。

正道の幸せそうな顔を見ながら思う――
（これって間接キス……だよな）

たまにこういうことがあったので真美は箸を二膳用意していた。しかし、箸を差し出すのも正道と昼食を共にするのを“狙っていた”ように出せずにいた。正道も同じ箸を使うことを気にする態度も見さない。

（なんとも思っていないってことかな）

「ん？」

頬を膨らました正道が思案げな真美を見て目で訴えかける。

「ううん、なんでもない。味、大丈夫？」

「ふあいこー」

正道は聴き取れない「最高」を親指とともに突き出す。

正道が真美の弁当を貰うのはただ幼なじみという理由だけではなかった。腹を満たすだけなら凜にでもいえば食券くらいは買ってもらえるはずである。

しかし正道にとっては食堂の味より真美の弁当の方が格段に美味かった。“美味いから求める”。ただそれだけだった。だからできれば毎日食べたいと正道は思っているのだった。

「まさちゃん、今日はご飯買い忘れたの？ あ、食券も買ってないから財布忘れたとか？」

「……」

「？」

「ろ、ロックな出費を」

正道は箸を咥えながら財布を広げてひっくり返す。そこに重力が働くものはなにも入っていなかった。

「嘘……まだ月始めだよ！？」

「うむ。小遣いも昼飯代も我が音になるため供養された。なむなむ」
「我慢できないのね」

「うむ。しかしやがて輪廻のサイクルに乗り再び我のもとに……はっ！」

正道が合掌したまま口から米を散らす。

「ど、どうしたの」

「今思ったんだけど、明日からの飯どうすんの俺！」

「……」

今日一日の昼食のことだけを考えていた正道は次の小遣いの支給までほぼ一月あることや、貯金が底をついていることなどなにも考えていなかった。

「ぶ、武士は食わねど高楊枝……って武士じゃねえし！」

凜に頼むと“ なにか ”を要求されそうだし、蘭に頼んでも凜が出てくる！ 斗夜に貰うのはなんか悪いし……。正道は“ 真美の箸を ”齧りながら髪の毛を混ぜる。

学園生活が始まってまだ間もないので、いくら正道といえど図々しく「昼飯恵んで！」などといえる間柄の生徒は少ない。陽気な正道でもそこら辺は一応気を使っている。

（ああ、齧ってる齧られてる！ ……）

真美は齧られている自分の箸を見てどこか変態的なことを心で叫んだ。

「どないしまんねん」

まるで借金取りに追われている関西人の風情で嘆息する正道に真美が救いの手を差し伸べる。

「まさちゃん、お金ないならバイトしない？」

それは少し前から頼まれていたことだったが、真美はなかなかタイミングが取れずにいた。

「んあ？ バイト？ この俺が？」

正道は指を使って強制的に左眼を開く。

魔導士であることを誇示する者がそのまま仕事に就くことは難しい。ましてや高校生のアルバイトは接客業がメインなので色眼を晒す正道を雇うところはほばない。

鷹光学園は社会を知る一環としてアルバイトは許可されているのでアルバイトすること自体に問題はない。それに軽音楽部がなかったため部活に入っていない正道には時間もある。

——でも、魔導士である自分を雇うところなどどこにある？ 色眼を隠せばどこかあるだろうが。色眼を隠す気などない。そういう仕事なら断るか……てか、真美バイトしてたのか。だから部活にも？ 聞いてなかった。

真美も部活には入っていない。それを正道は真美の運動音痴が原因だと決めかかっていたがどうやら違ったようだ。入るなら文化系の部活もある。

（やっぱり綺麗……）

真美は返事もせず、開かれた正道の燃えるような色眼に魅入っていた。

「おーい？」

「えっ？ あっ、そう、バイト。大丈夫。パパの仕事だから」

「おっちゃんのこと？」

真美の父は仕事を辞め、真美の高校進学を機に地元である美泉に帰って来ている。

「うん。今手伝ってるの」

その手伝い。なるほど。正道のなかで合点がいった。

「おっちゃんってなにやってんの？」

正道はいいながら綺麗に食べ終わった弁当を真美に返す。

魔導士である真美の父に対して正道は幾許か奇人変人のイメージを持っている。風貌、性格、趣味。そのどれをとっても真美の父は一般、平均から外れているのだった。あの父親から真美の姿は想像するのは難しい。

正道は真美の父としばらく会っていない。父とは会っているようだったが、その父からも真美の父がなにをしているか聞かされていなかった。

「うーん？ 便利屋？ っていつでもまだこれからなんだけどね」

「怪しい」

「えっ」

「怪しすぎる」

正道は眉間にしわを刻みつけ真美に顔を近づける。

「あう……」

「あのおっちゃんが主の仕事なんて怪しいに決まってる。しかも便利屋？ 危ない匂いしかしねえよ。第一、なんで手伝ってるお前がハッキリ分かってねえんだよ」

「う……それは……まだ、従業員が誰も……」

「マジか」

真美は小さい顎を引くように頷く。

「お前とおっちゃんだけって、それただの来栖家じゃねえか！ 家

族経営というかただの家族！ 募集しろよ募集。“美泉ワーク”とかで。てかしてんのか？」

「いや、うちのパパ、シャイだから、知ってる人間がいいって……」

「四十過ぎた大人のセリフか、それ」

正道が嘆息していると、真美が手を合わせ頭を下げた。上目遣いの大きな瞳が潤み、ドキリとする。魔導士として生まれるはずだった真美の魔力はこの瞳に吸い込まれてしまったのだと正道は思う。

「まさちゃんお願いっ！」

「う、うーん」

「パパの力になりたいの……。明日からまさちゃんの分もお弁当作ってくるから！」

「よし乗った」

即決。話を端聞きしていた顔も知らない生徒が吹き出すほどの速度で正道は即決した。突如提示された真美の弁当と潤んだ瞳に正道の思考は切り替わったのだった。

男手ひとつで育ててくれた父の力になりたいという理由も聞き流せない。

「いいの？」

「もち。給料貰えておまけに昼食の確保もできるとなれば断ることもないだろ。バイトは条件が大事だ（やったことないけど）。幸い、部活も入ってないし時間もある。ギター触る時間は減るが、新たな仲間ギタを手に入れるためには致し方ない。ぐふふ」

正道はふんぞり返ってにやつく——（そうだ、いいことばかりじゃないか。なにをやらされるか分からんが、気兼ねなく喋れるおっちゃんギタが相手ならまだいい。真美の昼飯もゲットだし、新しいギタ

「も買えるじゃんか！ “特訓”は高校までだったから時間できたし。おお、楽しみになってきたぞ……ぐふふ」

「じゃあ契約」

「は？ えっ？」

顔を戻すとテーブルの上には一枚の紙が広げられていた。そのピンの紙には――

『僕と契約して従業員になってよ！』の文字と典型的な魔法の杖を持ったいわゆる魔法少女が一人。裏返しても記載されているのはそれだけだった。

「……あのロリオタめ」

それは真美の父の趣味が反映されたものだった。正道はその“契約書”を見つめ、真美に聞こえないようにつぶやく。そして歳がない趣味全開のふざけた契約書突き出して真美の顔を見る。

「これが正式書類かよ。これで契約ってヤバ過ぎだろ……第一、お前なあ……うっ」

潤んだ力強い黒瞳が正道を貫く。

「や、やめろよその目。だれも契約しないっていつてねえだろ」

「やった」

「くう……やっぱり不安だ」

正道は真美からボールペンを受け取って名前を書いていく。書き終わったところで昼休みの終わりを告げる鐘が鳴り、それを合図に周りが騒がしくなった。

正道と真美も自然と立ち上がり、教室へと歩いていく。

「ありがとね」

「まあ、不安だらけだが」

「まさちゃんなら大丈夫だよ。あ、今日帰りにいこう？ 事務所。美泉坂の方にあるから」

「あいあい、りょーかい。あ、俺体操服更衣室にあるから」

正道は体育館の方を指さす。正道は忘れないように体操服は更衣室に置いているのだった。忘れれば体育教師の森から何をされるかわからない。

「じゃ！」

「うん」

二人は分かれて歩いていく。

その様子を柱の陰から覗く人影に気づかずに――

「……脇坂、正道」

——美泉坂通り某ビル前。

「ここ？」

「うん」

真美の弁当で体育を無事に乗り切った正道は、真美に連れられ普段あまり来ることのない美泉坂通りへとやって来ていた。

ここは美泉坂通りのなかでも飲み屋が密集している地域。真美の父が経営する“便利屋”とやらもこのスナックや怪しげな事務所が入居しているこのビルにあるらしい。

美泉坂通りは学園から少し距離があるので時刻はすでに十七時をまわっている。そのため周辺のビルには猥雑な光が灯り始め、酔客を造り、誘う準備を始めている。それは目の前のビルもしかり。

通りを往来する人々は夕方ということもあって少ないが、この地域の向こう側には映画館やボーリング場やクラブなどがある地域なのでそちらに向かう若者の姿も見受けられる。車道を必要以上に重低音を響かせた車が走り去り、正道が顔をしかめる。

「あぶなくねーのかこんなところ。帰るの夜だろ」

「大丈夫。パパと一緒に帰ってるから。いざとなったらパパが守ってくれるよ」

「ああ……そうだった、おっちゃんなら喜んで発導するだろうな。“趣味”と実益を兼ねて」

「心配、してくれてありがとね」

訝しげな眼をしている正道に真美がもじもじと小声でいう。

「ん？ そりゃ心配くらいするぞ。幼なじみなんだし」

「幼なじみ……か、そうだね。うん。いこう」

「? おう」

真美は黒髪とチェックのスカートを揺らして階段を昇っていく。御丁寧にも真美は自分の尻に学園の指定鞆を当てていた。その鞆の向こうを想像しながら正道は真美の小さな表情の変化に気づくことなく真美の後ろをついていった。その途中、正道は足を止め後ろを振り返る。――視線を感じた。

夕日に染まり始めた美泉坂通り、陰影のついた街路樹、往来する車に人間。そこには特にこちらを注視する人影はなかった。

「……気のせいかな」

正道は真美を追う。

正道が入ったビルの反対側。電柱の影で闇が蠢く。

「……脇坂、正道」

その声は怨嗟の響きを持って。



真美の足音は高らかに、脇目もふらず階段を上がっていく。スナックがひしめく階を越え、事務所らしき扉もいくつか見た。それでも真美の足は止まらない。

「真美、どこまで昇んだよーって、マジかよ」

「マジマジ」

真美は振り向きもせず、屋上へと繋がる扉を開け外へ飛び出していく。

そこは鈍色の柵で囲まれた四角い空間。物干し竿。貯水タンク。並んだ室外機。周辺に見えるビル群は窓々に光を湛え屹立している。その屋上世界のなかに夕日に照らされた異物が一棟。

「じ、事務所ってあれかよ」

白く塗られた壁面でマイク片手に躍動する緑色の髪の少女。その隣にはデフォルメされたドラゴンに跨る魔法少女。その隣には必要以上に露出した装備の銀髪女戦士……その他もろもろ。

それは壁面をキャンパスにした“痛プレハブ”ともいうべきものであった。

「うん」

「なんだよあれ！ あんなもんに入る勇氣ねえよ！ てか混じりつけない違法建築じゃねえか！」

正道はプレハブを指さして真美に抗議する。

正道の父は建築士である。しかしそんな家庭環境でなくとも目の前の建物は誰が見ても異常でたとえ違法ではなくても違法の臭いがぶんぶん漂う代物だった。

真美は瞳を潤ましながらか、おずおずと衝撃的なことを口にする。

「あれ建てたのおじさんだよ？」

「は？」

おじさん？ 真美の伯父さんのことだろうか。それとも叔父さん？ そんな親戚の話聞いたことないし……真美がおじさんと呼ぶ人間……超知ってる。てか肉親。

「親父かよっ！」

叫んだ。柵で傍観していたカラスが飛び立つ。

「うん」

「ああ、ついに違法建築に手を出してしまったのか」

頭を押さえこみその場にしゃがみこむ正道に真美が優しく声をかける。

「大丈夫だよ。許可取ってるっていった」

「マジ？」

「うん。コネがあるから大丈夫だって」

「だまされてないか」

「多分……今は気にせずに」

真美は極彩色で萌え萌えなプレハブの前に立つと学園の鞆から携帯電話を取り出し耳に当てた。やがて通話が始まる。

「もしもしパパ？」

（パパって……なかにいるんじゃないのか？）

電話の相手は真美の父らしかった。てっきり事務所のなかにいると思っていたが違うらしい。携帯の向こうから下卑た甲高い笑い声が漏れている。ああ、“パパ”だ。

「うん。了解」

真美が携帯をたたむ。会話は一分もしないうちに終了した。

「もう終り？　今のおっちゃんでしょ？」

「え？　ううん、ち、違う」

真美があたふたと手を振る。ごまかそうところと表情を変え、真美は分かりやすい。嘘が顔と言動に出る。怪しい。嫌な予感がある。

「なんか企んでんだろ」

「た、た、企んでなんかないでござるよ」

「語尾がバグってるぞ」

さっきの電話は真美の父が『事務所についたら電話しろ』とでも真美にいつてあったんだろう。おそらく真美の父はなかにいて、正道が入ってくるのを狙っている。それに関する注意事項をさっきの電話で伝えたのだろう。と、正道は推理する。

「悪癖だ」

真美の父の趣味の一つに『イタズラ』がある。今回もその一つのはず。しかも久しぶりの再会で盛大に“魔力”を注いでくる可能性が大。

極彩色のプレハブはもはや巨大なビックリ箱と化した。正道はな

に飛び出すか分からない扉の前に立つ。真美はすでに正道から離れている……分かりやすい。

その扉には今にも関とぎの声をあげ、飛び出してきそうな褐色アマゾンの女戦士ネスが無骨な槍を構えこちらを睨んでいる。

正道は顔をこわばらせながらドアノブを回す。幸いドアノブには細工はなかった（過去に電流や高温だったことアリ）。そのことにとりあえずホッとして正道は勢い良くドアを開ける。その景色に正道は既視感を覚えた――

さっきまで見ていた褐色の女戦士が同じポーズで立っていた。

「いっ!？」

「——!」

女戦士は声にならない声を上げ正道に槍を突き出す。刃は正道の首元をかすめヘッドホンを吹き飛ばす。

「あぶねえッ!」

槍をかわし、後ろへ飛び退く。女戦士は槍を構えたまま歩を進める。女戦士は茶色の水着に腰みののような格好だけと露出の多い格好をしている。が、“揺れるべきところ”が揺れていない。瞳にも生気がなく、全体的に褐色というより土くれ色である。

——これは真美の父が造った人形。プレハブの窓から感じる視線は製作者のものだろう。しかし精巧にできている。これほど「地」の属性を操れる魔導士も少ない。

「楽しみやがって、あのオタクめ……やるな」

「——!」

「くおっ!」

女戦士の槍による足払い。意識を窓の視線に向けていたため反応が遅れ、正道は仰向けで倒れた。鞆代わりのギターケースが投げ出され真美の悲鳴が上がる。

「まさちゃん! あぶないッ!」

『ッ! 土壁!』

槍が降り下ろされるのとその叫びはほぼ同時。鈍い衝突音が響く。仰向けになった身体の上を土の膜のようなものが展開し、正道を槍の刃から守っていた。

正道の特化属性は「火」。しかしそれは得意、強力な属性がそれというだけであって他の三属性「風」「地」「水」も使えないわけ

ではない。それらは「基本属性」と呼ばれ、魔導士は特化属性と基本属性を使い分けることができる。

「あぶねえのはお前の親父だぞ。だせえ発導しちゃったじゃねえか……土壁って」

正道は壁が崩れる前に隙間から抜け出て立ちあがった。得意ではない属性は効果を保てる時間が短い。

窓からの視線が嬉々としているのが伝わる。というか興奮したのかブラインド（これも萌えなデザインつき）の隙間から眼鏡が飛び出している。その眼鏡の奥には魔導士の証、黄金色の光が一つ。

「パパ！ もうやめよう！ あぶないよ！ こんな聞いてないよ……」

真美が泣きだしそんな顔で叫ぶ。父のイタズラについて真美は聞かされてなかったらしい。いや、おそらく別のイタズラと聞いているのだろう。そうでなければ真美は父を止める。

娘の懇願にブラインドの眼鏡が揺れる。真美の父は真美を溺愛で真美にはめっぽう弱い。あと一言いえばプレハブを飛び出してくるだろう。そして今立ちつくしている女戦士を崩して真美に抱きつくのだ。

そんな情景が正道には見えたが、正道は真美の言葉を遮るように告げる。

「大丈夫だよ真美。おっちゃんは俺を殺す気とかないから。久しぶりに俺と会って遊びたいんだ」

「ほんとに……？」

ブラインドの眼鏡が縦に揺れる。

「ほらな。だから大丈夫」

心配げな真美にギターケースとヘッドホンを預け、真美の頭をぽ

んと叩く。

「う、うん」

恥ずかしそうな真美にニカッと笑って踵を返す。ブラインドにびつと指をさして、

「実をいうと……俺も遊びたくなってきたんだよなあ。成長ぶりを見せてやるよ、おっちゃん！ こいつ！」

眼鏡の奥の目が愉悅に歪み、女戦士が躍動する。突き出された槍が空気を切り裂き正道の制服の肩をかすめる。

ヴァイントステップ
『俊足の風！』

槍を回避したタイミングで発導。正道の両足を風が纏い高速移動を可能にする。正道は風の力を借りた跳躍で後方に跳び、女戦士と距離をとる。魔導が使えるからといって武器への対応にはそれ相應の鍛錬が必要である。正道は魔導が使えるだけでただの高校生なのだ。

「ヴァイント」とはドイツ語で風のことである。属性鍵語がドイツ語になったのはマリオの影響なのは明らかで、正道は体育後の休憩時間や帰りのホームルームの時間に検索して基本的なことは叩きこんだ。興味があることの覚えは速い。

「――！」

女戦士が口を咆哮するように開け、突進してくる。

「おっちゃん、人形なら壊していいよなあ」

ブラインドの向こうからは返事はない。ただ、あきらめたのか、ブラインドの向こうから諦念の雰囲気が漂う。人として“殺さず”の精神を持っている正道であるが人形は例外である。

「じゃあ遠慮なく。爆音でよろしく」

正道が腰を落とし、両手に魔力を流す。思考を支配するはたぎる炎。――発火。両手が炎に包まれ熱気に正道の髪が逆立つ。

「イメージばっちりっ、『フランスグレイス炎巨神の祈り！』」

両手を突き出した正道の手から巨大な炎の手が飛び出す。その手に挟まれた女戦士が足を止めたのは、操っている真美の父が驚いたからだろう。その手は正道の動きと同調して祈りをささげるかの如くその両の手を閉じた。

腹に響くような低音と熱風が巻き起こり屋上が揺れる。炎の手はまるで女戦士を天に運ぶかのように空に消えた。入れ替わりに冷たい風が二人の髪を揺らし、屋上の熱気をさらっていく。

「なむだぶ」

後に残ったのは経を妙に略して合掌する正道と、髪を乱し啞然としている真美の姿だけ。

「……まさちゃん、すごい」

真美が正道の発導を見るのはこれで二回目だった。初めて見たのは十年前、正道初めての発導——真美にとってそれは初恋の記憶。

「パパっ！」

「ご、ごめんよ真美たん……」

そこは事務所というより趣味の部屋もしくはアニメグッズ専門店といった様相を呈していた。壁面のデザインを生かしてそのまま開店できそうである。

事務机が三つと応接スペース的なソファーが二脚とその間にテーブル。その基本的事務所空間を囲むのは多種多様、大少長短揃ったフィギュアにポスター、コミック、小説……。それらが整然とディスプレイされている。真美の父は几帳面な性格なのである。

三つの事務机のうちの一つ。他の二つとは離れた位置にあり、モニター二つのパソコンと『室長 来栖☆真』とプレートが置かれた壁際の席に真美の父——真が座っていた。今は真美に怒られている。真美が真剣に怒っているので正道はどうすることもできず、応接スペースのピンク色のソファーに座った。

「“ましや”とは久しぶりだからさあ……」

「あんなにあぶないとは聞いてないっ！ 私は『ドアを開けたら巨大な手が飛んでくる』としか聞いてない！」

それでも十分にあぶないと思いつつも正道は真の方へ向き直る。

不意に座っているはずの真がそのまま“スライド”した。真の全身がちよこんと机の横に現れる。

えっ！ あそこまで小さかったっけ？？ ああ、俺がでかくなつたのか——真は座っていたのではなく立っていたのであった。正道は自らの成長を感じながら真を見る。

七対三の比率でびっちり分けられたポマードヘア。頬の肉に乗っているようなメガネは今のデザインではなく無駄に大きい。でっぷりとした風船のような腹を白いカッターシャツで覆い、短い足には黒のスラックス、そこからサスペンダーが延びる。一番上にはなぜか白衣をはおっている。

丸い顔に乗っているのは目尻の下がった細い目、団子鼻、分厚い唇。それにくつつくまるで二頭身のような体躯。どこを見ても真美の父とはにわかに信じにくい。

「ましゃ！ 僕を助けて！」

真がぼてぼてと腹を揺らして駆けてくる。そして正道の後ろに回り込んでふーふーいつている。額には汗まで浮かべている。

「この距離で汗かくな！ それにその呼び方やめろ、その見た目と歳で“僕”もヤバイ」

「あひー！ ましゃまで怒るの？」

「そら怒るだろ。てか、まず俺に謝れ。いきなりあれはねえよおっちゃん」

「いやあ、ついつい。つよちゃんからも色々聞いてたからねえ」
つよちゃんとは真の親友でもある正道の父、剛のことである。

「親父がなんて？」

「んー、あいつは魔導の使い方が巧いってさ」

正道は少し驚いて、どこか嬉しそうに頬笑む。父がほめることなど滅多になかった。

「へえ……いつもはそんなこといわないのに」

「いうとあいつは調子に乗るってさ」

「！ あのクソ親父」

いつて正道は表情を変え、近くにあった真の首を抱える。

「うげげげ、絞まってる絞まってる！ 助けて！ 真美たん！

マミタス！ マミリーヌ！」

「知りません。それにパパ、遊んでる場合なの？　せっかくまさちゃん連れてきたのに。お仕事しないんだったらまさちゃんの契約書破るからね！」

手を伸ばす父を切り捨て、真美は学園の指定鞆からあの怪しい契約書を出して破かんばかりに構える。それを見た真は慌てて左手を正道の顔の前で広げた。そして叫ぶ。

『クレイドル
土人形・壺式　土妖精ちゃん！』

真の左手が黄金色に発光、光のなかから茶色い妖精が生み出される。

「発導！？」

驚き、退いた正道の顔の前を手のひらサイズの妖精が舞う。

布一枚だけまいたような衣装の妖精は背に生えた四枚の羽を巧みに操り正道を翻弄する。手に携えられたつまようじ大のステッキが怪しい。

しばらくその妖精が右へ左へと舞うのに合わせて正道も身体を動かしたが……ただそれだけだった。

「おいで、土妖精ちゃん」

「あっ」

いつの間にか真は自分の席に座り、落ち着いている。その横で立つ真美は真の秘書のように契約書を机に置いた。どうやら土妖精はただの時間稼ぎだったようである。

「なんだよ、いきなり発導するからビビった……」

「まだまだなあ、ましゃも。さて、本題に入ろうか」

真は土妖精を手のなかに手品のように消して、手のひらを組み合わせた。今までの騒がしい空気は一変して張り詰めたものへと変わる。真の顔も真剣で、働く男の顔つきになっている。眼鏡の奥から鋭い眼光が正道に送られているが真は口を開かない。

それほど真剣な仕事なのか。ふざけた雰囲気なのはその仕事の緊張を和らげるため？ おっちゃんならそんなことをするのもかも——正道は張り詰めた空気のなか勘ぐる。

物音一つしない静謐な空気に息を呑むのもためらわれる。その空気を揺らしたのはけたたましいピピピという電子音だった。

「……ジャスト三分だ。いいラーメンはできたのかよ？」

真はなぜか決めゼリフのように言い放った。正道は状況が呑み込めないで目をぱちくりさせている。

「ら？ ラーメン？」

頷く真。正道の死角になっていたパソコンモニタの陰からカップラーメンと小さな四角い時計を持ったチャイナ服のキラクターフイギューアがでてきた。その背中には大きな鉄鍋が背負われている。机に手について立っていただけの正道は思わずっこけた。

「それ待ってただけかよッ!!」

「そうそう。腹が減ってたのでね、君たちが入る前にタイマーかけておいたんだ。あ、それと、驚くべき真実を一つ……」

真は割り箸を振りかざして真剣な表情に戻る。そして真実を告げる——

「三分といったが……これは、五分待つタイプだ！」

「プレハブごと吹き飛ばすぞ……ぐ」

正道の腹が鳴った。

「魔力を行使するとお腹が減るのは僕だけかな？」

「まさちゃんの分もあるよ？」

真美がカップラーメンを掲げて見せる。正道はバツが悪そうに、

「食う」

と、返事をした。腹の音を聞かれたからにはしょうがなかった。



「食いながら気軽に話そう」

二個目のカップラーメンにお湯を注ぎながら真は笑った。前歯にネギが付いている。そのことにも、二個目を食べることにあえて突っ込まず正道は自分のラーメンをすすった。

真美は真の隣に座ってお茶を飲んでいる。改めて二人の顔を見比べると血縁が謎になる。真美の母はよほどの美人だったのだろう。そうとしか考えられないが、なぜそんな美人がこんな……。

「なに？　なんかついてる？」

視線に気づいた真が正道と真美の顔を交互に見る。

「パパ、前歯にネギついてる」

「たはー！　ほんとだ、いつてよ！　ましやたん」

前歯を触ってネギを取った真は指についたネギを正道に投げた。

瑞々しい緑色の欠片が正道の顔の横をすり抜ける。

「なぜ投げる！　注意しなかった当てつけかっ！」

真はやれやれと嘆息して悲しげに、

「人は傷つけ合う生き物なんだよ、正道君」

「じゃあ、傷つけてやろうか」

「断る」

真顔でぴしゃりと断った真はその表情のまま続ける。

「しかしそれは真実。傷つけられたら傷つけ返す。それが人間だ。戦争という大きなものから隣の人の肩がぶつかったとかいう瑣末なことまで、耳を傾けるとこの世界は怨嗟の声で満ち溢れてる。そん

な世界でなにもしくともこの世界にいただけで怨嗟の声をあげられる存在がいる……そう、僕たち魔導士という存在だ」

真は今度こそ真剣に話し出したらしい。真美と正道の手も止まり真剣に耳を傾けている。

「魔導士というだけで悪者扱い。魔導士がいるから秩序が乱れるとかさ。実際は魔導士の犯罪は普通の人間より少ない。まあ法律も厳しいけどね。魔導士が絡んだ事件は派手だから印象深いだけなんだと思うんだ。僕はそんな魔導士の価値を高めたいと思ってる」

「価値？」

「そう。美泉はブラッドやそれを模倣した集団のせいで魔導事件の件数が他の都市よりずば抜けて多い。おかげで魔導士に対する風当たりも強い。僕を見てブラッドだ！ って叫ばれたこともある。ありえないだろう？ しかし、だからといって別に僕はブラッドを壊滅させようとかそういうことは考えていない。危険だからね」

真は話疲れたのか、ふーっと息を吐いて真美に「真美たんお茶」と手を伸ばした。口をお茶で湿らせてさらに続ける。

「そこで、この僕を室長とする“魔導便利屋”だ」

真は自らの名前のプレートを持って胸を張った。

「魔導便利屋……」

「いえす。この美泉の住人から依頼を受け、様々な仕事を魔導を使って完了する！ その結果！ 美泉の人々は魔導士への偏見をなくし、魔導というものが人のためにあるということが分かっていただけるのだ！ そしてその噂は伝播し、やがて人間と魔導士が本当の意味で共存できる世界が出来上がることだろう！ 我らが目指すべきは世界の安寧！ 魔導士に定められた宿命の相手、『魔物』、つまり世界の危機が訪れた時、魔導士と人間が手を取り合い脅威に立ち向かえる世界を創造することが我々の最終目標である！」

急に熱が入った真は机をたたいて立ち上がり、拳を握って熱弁をふるった。鼻息が荒く、広めの額に汗が浮かぶ。ただ、明後日の方を向いている目は真剣そのものである。黄金色の色眼も蘭蘭と輝いている。

「テーマでかすぎだろ」

「まあ冒頭以外は願望だよ。しかし夢はでっかく！ 魔導士の未来は明るい！ ぶひやはははは」

真は不気味に笑うとスイッチが切れたようにイスに沈みこんだ。ふーふーいいながら汗を拭く真の姿を見て“室長”は戦力にはならないと判断した。体力がなさすぎる。

「それで俺か」

真は従業員として魔導士を探していたようである。

「そうそう。知り合いで若い自由の効く魔導士っていうとまじゃくらしいか居なかったからねえ。ほら、僕シャイじゃない？」

「俺が断ってたらどうしたんだ……」

——まあ、美泉ワークに募集出したところで、まともな魔導士は来ないと思うが……。

「その時は自称天才魔導士、『マスターオブパペット』の二つ名を持つ僕が！」

「その人形大好きシャイ親父が生身の見知らぬ人間とお仕事の話ができるのか」

「はうあつ！ ……『土人形・壺、伍式 まことちゃん』」

ショックを受けた様子であったが、まだふざけるらしい。ぼそつと発導した真の左手には真をデフォルメして縮小したような腹話術人形が口をパクパクさせていた。

発導の際壺式や、壺、伍式といっているのはどうやら人形の大きさのこのようなものである。今顕現している人形は土妖精より二回りほど大きい。入口で正道を襲ったのは“伍式”といったところだろうか。

「オシゴトハボクガウケルヨ！ アハハハ」

空を食んでいた人形の口から甲高い声が出る。真の口は全く動いておらず、腹話術としては完成されていた。

「巧いな……」

「でしょ？ 若い頃は魔導芸をやってたこともあるんだ。それで二つ名がついたんだけどね。これなら恥ずかしくない！」

「でも、だれがそんな怪しいやつに仕事頼むんだ。“腹話術探偵”みたいな目指してんのか。依頼に来てそんなんができたら余計に偏見が深まる」

「……」

「……」

真とまことちゃんはうなだれて完全に沈黙した。

「なにいつてるのパパ。私がいるじゃない。というか事務とか依頼主の対応は私って聞いているんですけど？ パパ自分でいったじゃない、「僕は物静かな室長で、いざという時にだけ活躍するこの便利屋の救世主的ポジションでいたい」って」

沈黙を破った真美の言葉に真とまことは顔を上げる。動きが同調していて少し気持ち悪い。

「そうだった！」

「ソウダッタ！」

「動く気ねえじゃねえか」

「ぶふふふ、僕は情報収集とかが専門だよ。どんな依頼がくるか分からないからねえ」

「ハッキング！ ハッキング！」

「こらこら、まことちゃん！」

真は自分で危ないことをいって自分で突っ込んでいる。人は見た

目で判断してはいけませんが、真の風貌ではハッキングくらい簡単にしそうである。しかし、

「おっちゃん、ハッキングとか……そんなやばそうなのも受けるのか？」

魔導便利屋という怪しい職業。魔導士を利用して悪さをしようとする依頼もあるかもしれない。もしそういう悪事に加担するような依頼も受けるのなら、「正義」を掲げる正道としては断固として断らねばならない。

「ご安心！ 価値と一緒に悪名まで高める気はないよ。うちの依頼を受理する判断基準は人のためになるかそうでないか。そして、悪か正義か」

「セイギノミカタ！」

真ちゃんが至近距離でパクパクと叫ぶ。

「正義の……」

「そ！ ここはさながらヒーローの秘密基地ってとこかな？ ましやがレッド。真美たんがピンクで僕が司令塔。ブルーとかイエローも時期が増えてくれたらいいなあ……魔導戦隊だなあ……カッコいいなあ……魔導戦隊ウィザードとかどう？」

自分で言った例えが気に入ったようで、真は目を輝かせて同意を求めてくる。

「どうって……」

「はいはい、パパ。まさちゃんを困らせないの」

応えに窮していると真美が割って入った。再び娘に叱られている真の姿を見ながら正道は真が問うたことを考える。

——正直、カッコいいと思った。魔導戦隊というのは無理だろうが、そういう存在がいれば本当に魔導士の印象は変わるのかもしれない。美泉にはホワイトナイトがいるが如何せん知名度が低すぎる。しかしそういう存在がいればホワイトナイトも一緒に活動できるん

じゃないか。美泉を守る正義の魔導士たち……。

「で、どうなの？」

「え？ 魔導戦た」

「じゃなくて、働いてくれる気になった？ どうせずっと怪しいとか思ってたんでしょ」

いいながらもまことちゃんの口に契約書を挟んで提示する。ピンクの紙に描かれた魔法少女が真を模した人形に食べられる構図になっていささか不気味である。

「確かにそれは怪しい……でも、もう契約しちゃったし（真美の弁当つきで）。それに、人のために魔導を使えるんだったら悪くねえ。最初はなにやらされるか不安だったけど、てか今も不安だけど、魔導の正しさを広められるなら働くよ」

正道は、どうも自分は「正義」という言葉に弱いところがあるなと思いながらもここで働くという最終判断を下した。

それにここなら自分の信念も曲げることなく働けそうである。少しでも魔導で人のためになるなら。自分の正義が広められるなら。たとえそれが自己満足だとしても。

「おっほっほー！ ありがとう！ やったね真美たん！」

「うん！」

真と真美の親子は手を取り合って喜んでいる。真は純粋に仕事が始められることに喜び、真美は正道と過ごす時間が増えたことに喜んでいた。

（まさちゃんとお昼もバイトも一緒……ふふ。ふふふふふ）

真美は心のなかで笑う。それは音に出せば真の笑い方と似るところがある。しかもその笑いは心を飛び越え顔に出てしまっていた。

なぜか急に緩み出した真美の表情を見て正道はやっぱりこの二人

は親子だなど確信した。

「しかし、さすがつよちゃんの息子。正義の遺伝子引き継いでるねえ」

いいながら、真は左手のまことを消し去って正道に握手を求める。左利きというところも真の異質な部分を引き立たせる。

汗で光沢を放つ真の額を見下ろしながら正道は湿った綿のような手を握った。真は満足そうに手を上下させる。

「親父が正義ねえ」

確かに正道の信念は父、剛がいなければ形成されてはいない。だが今となっては正道にとって父はただのスパルタ親父だけである。しかも高校進学を機に諸々解放されそのスパルタ精神もあまり見ることなくなった。今はどちらかというと……。

「どっちかというとおふくろじゃね？」

「ああ、ありや強い」

正道と真は手を握ったまま同時にうなずいた。

「で、仕事は？」

「は？」

真は正道を見上げたまま表情を消した。その顔は腹話術人形のまことちゃんと類似して見える。

「なぜとぼける。は？　じゃねえよ。仕事だよ仕事。仕事しねえと給料もらえねえだろ」

「なにいつてるの、仕事はこれから。依頼なんてゼロだし。そもそも宣伝もまだだからね！」

「……てことは、どういうことだ」

正道はいやな予感に真の手を握る力を強めていく。真の指先が真

っ赤に染まる。

「依頼が来なけりゃ給料はなしってことか！」

「物分かりがいいね！ てか痛いんだけど！」

さらに強める。真が暴れ出したのでもう片方の手も掴んで交差させて上に引く。真の肩が狭まりもともなかった首がさらになくなった。

「いでででで！ そして苦しい！ 離して！ 離して！ 真美たー
ーん！」

真美は目と鼻の先にいるのに真はありったけの力で叫んだ。よっぽど苦しいらしい。

しかし真美は手を差し伸べることはせずに悲壮な顔をする真の隣に並んだ。この制裁は妥当だと思っているのかもしれない。

「ごめんね、まさちゃん。騙してたわけじゃないんだけど……お給料はこれからの依頼によるの。これから頑張ればお給料出るから……一緒に頑張ろう？ ね？」

「うっ……お、おう」

真美のチワワのごとき潤んだ瞳に見つめられ正道はゆっくりと真の手を離れた。どうもあの目で訴えられると胸がざわつく。

しばらくの空白、正道は真美と見つめあった。それは特に理由もない視線の合致だったのだが、不思議と目が離せなかった。

「うちの娘に手を出すと、たとえつよちゃんの息子といえど容赦せんぞ」

不意に真の顔が視界に割って入り、そうだった。真は目を見開き、射抜くように正道の目を見ている。気圧されるような迫力に正道は視線を泳がした。

「そ、そんなんじゃないよ」

「ふん。ならいいんだけどおおおおお！？」

いつもの調子に戻って両肩を回しながら机に戻った真が会話の流れのまま叫んだ。

「な、なんだ！」

「パパ！」

「タイマーかけるの忘れてたああああッ！ 麵^{めん}麻^まちやああんっ！」
わなわなと震えるその手には再び鉄鍋を背負ったチャイナ服姿のキャラクターフィギュア。名前もあるらしい。

そのフィギュアに持たれている時計は00..00のまま点滅を繰り返している。よく見るとそのキャラクターの足元に『鉄鍋魔導士メンマ!』と書かれたプレートがあった。どうやらそういうアニメの関連商品のようだ。

魔導士を主人公にしたアニメやマンガは意外と人気があるらしい。正義の味方として描かれることも多いが、敵役としての登場も多く、子供たちに夢を与える存在にはいささか遠い。そもそも基本は深夜アニメか大人向けのコミック雑誌だ。子供の手には届きにくい。

「パパ……」

「はあ……もう勝手にやってろ」

正道はギターケースを担いで帰り仕度をはじめた。もう時刻は十九時を回っている。仕事もないのにこんなところにいても仕方がない。ラーメン至上主義の変態の相手も疲れる。

「ふあら？ 帰ふの？」

真は延びた麺を咀嚼（結局すぐに食べ始めた）しながら湯気で曇る眼鏡のレンズを拭いた。

「帰るよ。仕事ねえんだろ？」

「まあね。今日はないね」

「じゃあ明日はあんのかよ？」

「明日はビラを貼りにいってもらおうかなと。ビラは今鋭意製作中」
いって真はスープを啜る。

「また原始的な……」

「千里の道も一歩から。ローマは一日にしてならずですよ正道君。フン」

真はカップラーメンをワイングラスのように回して理知的に笑った。その様子は滑稽としかいいようがない。

「はいはい。じゃあ帰るぞ。真美も気をつけて帰れよ」

「うん。また明日ね。ばいばい」

ドアの前に立つ正道に真美は小さく手を振って花が咲いたような笑顔を向けた。思わず正道の顔も緩む。

「あ、ましゃ。一ついい忘れてた」

ドアノブにイタズラがないかとちょんちょんと触っていた正道は呼びとめられて振り返る。

「ここの名前」

「決まったの？ パパ」

「決まってなかったのかよ」

そういえば契約書にも書いてなかったし、真美の口からもこの名前は聞いていなかった。自分がこれから働くバイト先、しかも魔導便利屋という特殊な仕事。普通は名前など先に決まっているものだが、今から発表ということにいやがおうにも興味がわく。

「これから僕たちが働くここの名前。この美泉を守る正義の集団の名前。それは――」

真は立ち上がって短い腕を振り上げた。そして宣言する。

「……『魔導便利屋 エムズ』だ！」

「エムズ……なんだ、意外とまともじゃねえか」

正道は真のことだからおかしな名前をつけてくるんじゃないかと危惧していたが結構まともに考えていたらしい。

「そうだ。エムズの“M”には色々な意味を持たせた。まず、MAGICのM。そして正義感などを示すMoral senseのM。ほかにもMakeやMeetのMという意味も含めた」

「おお」

真は鼻を鳴らして自慢げに目を光らせる。正道は正直感心した。そこまで考えていたとは……。

「そして一番大事な“M”がある」

会社の名前というものはその会社の信念や想いを乗せたものである。この『魔導便利屋エムズ』という会社の核となる信念。一番大事な“M”。真の短く丸い体躯がぐっと伸びる。振り上げていた腕を再び振り上げて指を突き出した。

「それは——『真』のMと『真美』のMだッ！」

「パパ……」

なぜか照れた真美を見て正道は嘆息した。

「はいはい。仲がよろしいこって。あとそこにMad（狂気）の意味も足しとけ。……まあ悪くはないよ。じゃあな」

正道はドアノブをひねって外に出る。外は夜の闇に包まれて少し肌寒い。ビルに入っているスナックなどがもう営業しているのか、屋上の室外機が回っている。

室外機からのぬるい風とビルの谷間を駆け廻ってきた風を頬に受けて正道はビルを降りていった。

「俺も“M”だよな……」
そんなことを思いながら。



ビルを降りると警察がいた。

ビルの前にパトランプを点灯したままのミニパトカーが一台停まっている。そこから降りた警官が二人、ビルのなかに入ってこようとしていた。

ビルのテナントでなにかあったのか？ と正道は思ったがどうやら違うらしい。警官の一人が無線で「屋上で……」だ「魔導……」だと通信していたからだ。

正道は肝を冷やした。心当たりがとももある。気がついたら正道はその警官に声をかけていた。というか階段の前に立ち尽くす正道と警官が対峙する形になったので自然と声が出た。

「あ、あの？」

「なんだ君は。高校生がこんなところでなにしてる？」

二人の警官のうち年配の方が怪訝そうに正道を上から下まで見る。夜は深くないとはいえ、ここは普通の高校生が入るようなビルではない。

「あ、いや、なんかあったんすか？」

「うん？ ああこのビルの屋上で炎が立ち昇るのを見たって通報があつてな。どうやら魔導らしいんだが……君、魔導士だな」

年配の警官は正道の色眼を見て明らかに警戒を強めた。その後ろで若い方の警官が「魔導士の高校生……」と無線に向かって喋っている。

ヤバい。捕まる――

「ちょっと、話聞かせてもらえるかな？」

「いや、俺はなにも……」

いいながらじりじりと横移動。若いほうの警官が警棒を抜こうと腰に手を当てている。それは抵抗もしていない高校生に対して過剰反応ともいえる反応だったが。正道は普通の高校生ではない。魔導士と分かっている以上その反応はマニュアル通りともいえた。先に牽制をしておかないと発導されてからでは遅い。

「そ、それ以上動くな！」

若いほうの警官が叫ぶ。

ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバい――頭のなかでガンガンと警鐘が鳴り響く。なにごとかとスナックからママさんらしき人が顔を覗かせる。

美泉の条例で路上での発導は禁止されている。違反者には十万円以下の罰金、または一年以下の懲役と路上喫煙禁止条例など非にならないくらい厳しい。ただその条例は“自己防衛の場合は除かれる”。なので朝のブラッドに対する発導などは条例の対象にはならない。

しかし屋上での発導は違う。完全なる無意味な発導。“熱くなつた二人がやりすぎた”、その天罰。

これに関してはおっちゃんも悪いが、あんなに派手にやった自分も悪い。バカだ、熱くなって油断してた。

「……すいません、いきます」

正道は覚悟を決めてパトカーの方に歩き始めた。おっちゃんを巻き込むのも悪い。と正道は観念したのだった。

停学……退学？ 少年院？ 魔導刑務所？ 死刑？

一歩進むごとに考えが飛躍していく。――正義の味方ここに死す！

やじうまも集まりだしたなか若い警官が後部座席のドアを開ける。するとその後ろに黒の覆面パトカーが嘶いて停まった。やじうまも飛び退くほどの速度だった。

白煙とタイヤの焦げる臭いのなか運転席から鋭い眼光の大男が出てくる。警官の二人が焦って敬礼をした。

短く刈り込んだ黒髪、前を開けたダークグレーのスーツ。口に啜えた煙草から紫煙をくゆらし、悠然と歩く。まるで超人ハルクを肌色にしたような風貌の男は正道の前でその足を止めた。

「げ、厳ちゃん」

滂沱の涙を流す準備を始めた瞳がその人物を捉える。

正道はその人物を知っていた。



「おう、正道」

厳ちゃんと呼ばれた巨軀の男は屈託のない笑みを浮かべて手を上げた。そして正道の横で背筋を伸ばしている警官二人に、

「いつまで敬礼してる、もういいいけ。PBに百円届けに来たガキが行列作るぞ」

いってガハハと自分で笑った。

警官二人は戸惑いながらもおとなしく去っていく。やじうまもつまらなさそうに散り散りになり、警官二人の乗ったミニパトカーはテールランプの尾を引いて角を曲がった。

たばたげんぞう

田畑厳造——美泉警察署刑事課強行犯係係長。役職は警部。歳は三十五歳。その事件に対する嗅覚と行動力から“狼”の異名をとる。無骨な骨格に揺るぎない眼光、頬に刻まれているいくつもの傷は今までの凶悪犯との格闘の証だと厳造はいう。

顔立ちは精悍そのもので、体格もかなりがっちりしている。女性警官からの人気もあるらしいが、恋愛には疎いらしく、結婚もしていなければ彼女もない。

田畑家は警察一家で十も歳の離れた兄の田畑 伝でんは美泉警察署署長を務めている。

その兄の伝は正道の父や真と同級生であった。昔は三人でよくつるんでいたらしい。田畑兄弟は昔からよく家を訪れては正道と遊んでくれた。特に厳造と遊んだ記憶が濃い。歳の離れた兄の友だちになかなか馴染めずに厳造は正道や真美の相手をよくしていた。

そんな仲だから連行されようとしていた俺を助けてくれたのか？

正道は判然としないまま啞然とネオンに照らされた厳造の三白眼を見る。

「厳ちゃんがなんで……？」

「派手な行動はいけないなァー正道い」

厳造が正道の肩を抱く。丸太のような腕がぐいぐいと正道の肩を寄せる。昔はアメフトで日本代表までなったらしい厳造はその隆々たる身体を維持したまま歳を重ねている。

「いや俺もな、さっき兄貴から聞いてよ。下のもんにもで連絡いってなかったみてえだ。そりゃそうだよ俺も聞いてねえんだから、ガッハッハ！」

いつてることがよく分からないが耳元で豪快に笑うのだけはやめてほしい。音の弾丸みたいだ。

「ど、どういこと？」

「はぁ？ 聞いてねえのか真さんから」

正道が首を傾げたと同時に厳造の覆面パトカーから無線の音が響いた。



「警察が協力ってどういう“コネ”だよ」

疲れた顔のサラリーマンが吐き出されてくる美泉の駅を横目に正道は家路についていた。

あのあと「詳しいことはゼロパトで説明してやる」ということで正道は厳造の覆面パトカーに乗った。厳造は一般人に対しても警察の隠語のようなものを使う。

厳造はどこか事件現場に向かう様子だった。詳しいことは教えてもらえなかったが、正道は厳造が凶悪事件を担当しているのを知っていたのでなにかそういう事件なんだと曖昧に思った。

厳造は「吸血鬼か」や「これで二人目か……」などと苦々しくつぶやいていた。それは今、美泉の街で起きている不可解な事件についてだったのだが――世間の出来事には疎い正道には分からなかった。

サイレンを鳴らす覆面パトカーがモーセのように車の海を割って進む。そのなかで正道は自分が解放された理由を聞いた。

「いやあよう。兄貴と真さんは昔からのダチだろ？　でよ、やっぱりダチはなんでも協力するもんだろ？」

「うん。で？」

「いや、だからな、そんなに突っ込んで聞けなかったがあのビルの屋上には違法建築があんだろ？」　正道は微妙に頷く。「そこでなんだか活動するんだろ？　魔導で」

「うん。するみたい」

「なんでも、正義のためと聞いたぞ？　そんな真さんたちの活動を俺達美泉警察は協力するってさ。違法建築も魔導の発導も容認してやる」

「ええ！？　友だちならなんでもアリなのかよ！」

「バカか、ものには限度ってものがある。そりゃ悪いことすりゃ誰であれとっちめてやるよ。兄貴は魔導士と人間の平和的な共存を望んでる。真さんの活動がいいように働いてくれると思ったんだらうよ……それに警察は真さんにお世話になってたしな」

“真さんが警察のお世話に”の間違いじゃ……いでっ」
厳造のグローブのような手が正道の頭をはたく。

「バカにするな、真さんは警察に大きく貢献してくれたんだぞ」

「はあ？」

おっちゃんの前職の話？　警察に貢献って、いったいなんの仕事してたんだ？　考えながら頭をさすっていると厳造がブレーキを踏

んだ。

「ほれ、こっからだと家近いだろ、俺は今からお仕事だ」
歩道に覆面パトカーが寄せられドアが開く、さすがにパトランプを回したままの車は目立つ。正道は歩行者の視線を浴びながら車を
出た。

「ご苦労様です」

正道はむっと口を引き結んで敬礼をしてみせた。

「うむ。まあ、お前も正義のために頑張るんだな、でもむやみやたらに発導すんじゃないぞ？ MDAを着た俺はこえーぞ？ ガッハッハッハ！」

厳造は爆発するように笑って覆面パトカーを急発進させた。急発進、急停車。この人の車の運転はどうかと思う。
そして今に至る。

「なんでそんな大事なこといわねえんだおっちゃん」

おかげで死刑になりかけたと正道はげえっと舌を出す。

真美は“コネ”とだけしかいってなかったし警察が協力してることは知らないんだろう。それにしても――

「疲れた」

思わず声に出た。今日は色々ありすぎたのだ。普段は駅前のCDショップやいきつけの楽器屋を冷やかして帰るのだが正道の若干ふらついた足取りは真っ直ぐに自宅へと向かっていた。

事件と現場



「――うっ」

なんだ、ここ。

暗いな。それに、なんだこの臭い。錆？

口は塞がれて苦しいし、変な浮遊感に身体が上手く動かない。

足音がする。あれ？ 誰か来たけど足しか見えない。

俺、吊るされてる？

「お目覚めかな？ えーっと、美泉大学一回生の戸田恵介君」

あ、俺の学生書。見上げてるのに見下ろしてる形になって目が攣りそう。

誰だこいつ……軍人みたいな格好して。てか、血が下りてきて頭いてえ……。

これどういう状況？

初めていった合コンが思いのほか盛り上がってそのまま美泉坂のチルドにいった。

正直チルドも初めてでビビってたけど酒の力も借りて人生で一番つてくらいはしゃいだ。大学デビュー万歳！ って感じで。俺は変われたんだ。反抗期だって親にも悪態ついたこともなかった神童のこの俺が。

で……そうだ、飲みすぎたから夜風に当たってくるとかいって、

目が痛かったからトイレでコンタクト外して裏口から外に出たんだ。そしたら、なんか黒い人がいて……そっから記憶がない。俺、さらわれた？

「へえ、法学部？ 将来は弁護士か。賢いんだねえ」

「——ッ！！」

「おいおい、ここは静かな別荘地だ。騒ぐと自然の音色が聞こえないじゃないか」

盛大に深呼吸した男の息が俺の顔にかかる。

そんな音色なんてどうでもいいよ！ この状況明らかにヤバイ！
さらわれて吊るされるってなんだよ！ 俺なにかしたか！？

「ん？ そんなに恐がらなくていい。君はこれから死ぬが、大丈夫だ。輪廻のサイクルの前に私のなかで生きることになるはずだからね」

「——ッ！」

なにいつてる、こいつ！

そうだ、俺は魔導士だ……こういうときに使うんだ！ 魔導を！
魔導、魔導、魔導……あれ、どうやるんだっけ、発導って——

「発導するか？ 地の魔導士よ。別に私は構わないが、私の“なかのやつ”がダメだというんでね。……なんでも無垢な魔力が欲しいらしいんだ」

男の腰から大ぶりのナイフが抜き放たれた。そいつはどこから差し込む月光に照らされて死の輝きを放ちながら俺の首筋へ——

「……その気も、ないようだね」

憐れむような目しやがって……ああ……くそつたれ。

「では、さようなら——」



「被害者は戸田恵介、十九歳。美泉大学に通う大学生です」

ここは美泉市郊外の廃ビル。田畑厳造は新人の部下から被害者の情報を聞きながら件の戸田恵介のもとへと歩を進めた。

「おい、あんこ。害者はやっぱり観音様か？」

「あ、あん？ 観音？」

「かーっ！ 観音様は裸かってことで、あんこはお前のことだよ！ 新入り！」

新人の刑事は「へえ」と目を丸くして『観音Ⅱ裸』『あんこⅡ新入り』と警察用語を手帳に書き込んでいった。

「あ、はい。害者は裸でした」

「じゃあこれで一連の事件の害者は三人目か」

「はい」

「“何色”だ？」

「黄色です」

「赤青、黄……まるで信号だな」

厳造は部下を引き連れ階段を昇る。色とは魔導士の色眼のことである。そのため警察では魔導士はイロツキという隠語で呼ばれることもある。

二人目の被害者が発見されてから約一週間が経過、この殺人事件の被害者はこれで三人目となる。一人目は火の魔導士、二人目は水の魔導士、そして三人目は地の魔導士の戸田恵介だった。どの被害

者も若く、魔導士という点で共通している。

この事件の被害者はいずれも全裸にされていた。そしてこの事件を象徴する特徴が他に二つ。

監識がうろつくフロアに辿りついた二人はずんずんと被害者へ近づいていく。窓際に横たえられた全裸の被害者は色を失っていた。外傷は首筋に赤い糸のようについた傷口だけ。そこから流れるものはない。

厳造は合掌してしゃがみ込む。被害者の横の地面には被害者の血で文字が書かれていた。これまでの事件でも同様である。それがこの事件一つ目の象徴的特徴。

「『魔導士に復讐を』ね。ホシさんは他に気の効いたこと書けないもんかね……」

「死亡推定時刻は昨日の深夜三時から早朝五時の間とみられています。そして害者は他の二人と同様、現場とは違うところで殺され、ここへ運ばれたようです」

このフロアには不法侵入者によるゴミや落書きなどはあるものの、血痕らしきものは見受けられない。

「害者の友人の話によると、害者は昨夜美泉坂のクラブ『チルドレンオブナイト』で飲んでいたそうです。そしてトイレに立って、いなくなったと」

「チルドねえ……売人にヤーさんにブラッド……でもこんなことするか？ 客のなかに猟奇的な野郎が紛れてたか……」

ブラッドは最近おとなしいが殺しなんかする集団じゃない。ヤーさんだってこんなことはしない。害者は人畜無害なやつばっかだ。

トラブルを抱えてるようなやつじゃねえ……犯人はなにもんだ、畜生め。

この連続殺人事件は厳造が関わってきた事件のなかで最も不可解かつ不気味だった。目撃情報も確かなものはなく、証拠らしきものもほとんどない。突拍子もなく死体が現れる。その被害者たちに繋がりはなく、通り魔的。

犯行の特徴としては、狙われるのは若い魔導士というのと現場に残される魔導士に対しての復讐心。そして――

「やっぱり犯人は“吸血鬼”だな」

それはこの事件の犯人についての通り名。その名はこの事件のもう一つの特徴を示す。

この事件の被害者の身体からは“大量の血液が抜かれていた”。猟奇的な犯行を際立たせるための行為だという見方が強いが、本当の目的は分からない。

「……また、抜かれてるんですかね」

「突っ込めよ」

「え？」

「お前、信じたのか。吸血鬼なんてこの世にいるわけないだろうが。いるのは人間か魔導士^{イロッキ}かだ」

厳造は煙草に火をつけて踵を返す。

「吸血鬼なんていてたまるか」

「そ、そうっすね」

「ほれ、地取りいくぞ、あんこ」

厳造はもと来た道を歩いていく。新人の刑事は再び登場した警察用語に首をひねった。

「じ、地鳥？　め、飯すか？」

「聞き込みのことだ、バカ」

「な、なるほど……」

廃ビルを出た厳造は迷うことなく自分の覆面パトカーへと突き進む。自然に部下もついてきて助手席に乗った。

「マジで電波だなこのヤマは」

「僕、電波じゃないっす！」

「あ？　また勘違いか、電波はわけの分からん事件ってことだよ、この事件みたいにな。書いとけ！」

「なるほど……」

ため息をつく厳造とうんうんと頷く新人刑事を乗せた覆面パトカーが唸りを上げる。そして急発進。

「ぐえ！」

油断していた新人刑事はシートに叩きつけられた。手帳とペンが舞う。

「ガッハッハッハ！」

厳造の操る覆面パトカーは笑い声と砂煙を巻き上げて夜が始まったばかりの美泉坂に向けて走り去った。

「じゃあな、ミケ助！」

ギターケースを揺らし走り去る正道を見てミケ助が鳴いた。

学園の巨大で豪華な門扉の上。金色の鷹の彫刻の上がミケ助の定位置となっている。

正道に助けてもらったミケ助は保健室で治療を受けた後、獣医にも連れていかれた。骨に異常はなく、次の日には歩き出した。今では路地裏に帰ることなく学園でのほほんと愛されている。

エムズに所属してから一週間、ブラッドからの復讐なんてのもなく、正道の日常は充実していた。

エムズにはビラの効果もあつてか依頼が舞い込み始めていた。料金体系は一時間千円と分かりやすいのも頼みやすいらしい。ただ、“魔導” 便利屋なので魔導を確実に使わないような依頼は断っている。「トイレを交換してくれ」なんていわれても専門技術を持たない正道にはできない。

依頼のほとんどが力仕事で、なかには「そのゴミを燃やしてくれ」など魔導士をバカにしにきているような仕事もあった。そこに正義の流布というものは感じられなかった。

しかし何事も一歩から。正道は文句をいうことなく汗を流した。

ただ、従業員は正道一人なので、無駄に忙しい。「この書類を〇〇まで届けてくれ」と依頼を受ければ風の発導で街を駆け、「引越を手伝ってくれ」と依頼を受ければ地の魔導で荷物を運んだ。

そのおかげで正道は基本属性の魔導の扱いが巧くなった。厳造のいった通り警察からの御咎めもなく、正道の両親も真から聞いていたみたいでなにもいわない。

真美は依頼が舞い込み始めてから自転車通学に変わった。正道より先にエムズへ向かい、一日の仕事の流れを確認する。真はその横で、ラーメンを啜り、フィギュアを愛でる——いや、二人が学校にいる間、いろいろまとめているようなので一応仕事はしているらしい。尚、室長がシャイボーイのためエムズには電話回線はない。仕事の依頼はすべてメールである。

「おは——ようッ!？」

快活にエムズのドアを開けた正道は突如繰り出された“攻撃”にのけぞった。

——女戦士^{アマゾンネス}再び。

「だああああっ!　こんなことやってる場合か!」

「リベンジだ!」

女戦士の後ろからにゅっと顔を出した真が正道を指差す。その動きに女戦士も同調した。

「稼ぎ頭を殺す気か!」

「そんなに怒るなよ稼頭^{かずお}央君」

「そりゃどこの野球選手だ!？」

「さあ冗談いってないで、着替えて着替えて」

女戦士を消した真は手をはたきながらプレハブへと入っていった。

「……俺が悪いのか？」



エムズでは正道のために制服が用意された。無地の白いポロシャツに黒いズボン。そして「M」と印字の入った帽子^{キャップ}。帽子に関しては「俺はマ○オカ」と突っ込んだが、なかなか清潔感があったいい。なにより制服を着ることで仕事をしているという気になった。

プレハブに更衣室なんてものはない。応接スペースでぱつと着替えた正道は目を背けている真美に「着替えたぞー」と声をかけた。真美が密かに正道の着替えを見ていたことは気づいていたが正道はなにもいわない。

真美が、

(うう、どきどきするなあ……写真撮りたい)

と思っていることは真美しか知らない。

「相変わらずいい身体だねえ……」

「おい、なぜ顔が赤い」

フンと意味深に笑った真の手から今日の仕事内容が手渡される。一日の仕事内容は住所なども含めて一枚の紙にプリントアウトされる。

「今日は引っ越し？　こんな時間に？」

今は十六時を回ったところ。引っ越しの作業は時間がかかる。こんな時間から引っ越しなど夜逃げのようである。それに基本的に引っ越しの依頼は学園が休みの日に受けると真はいていたのだが――

「そう。なんだか早く出たいんだって」

「危なくねえの？」

「大丈夫だと思うよー、普通のカップル。怪しい仕事もしてないし、前科もなし！」

「そこまで調べるか、普通」

「暇だったもんで、てへっ」

「超絶可愛くねえ」

おっちゃんが一番危ない。という言葉は呑み込んだ。仕事はメールで聞いたとして、前科の有無は警察の協力を仰いだのだろう。いくら真と署長が友人だからとはいえそこまで開示する警察もどうかと思う。

真の前職も情報開示に一役買っているのかもしれないが、前職がなにか正道がいくら聞いてもはぐらかされるだけだった。真美も詳しくは知らないらしい。

「まあいいや、いつてくる」

「ああ、私もいく」

正道が住所を見ながらドアに向かうと真美が軍手とエプロンを持って近づいてきた。

「手伝うよ。いつもまさちゃん一人だし。ね？」

「お、おう」

うるんだ瞳で見上げられてどきまぎしてると真の舌打ちが聞こえた。

見ると、真は鬼のような顔をしていた。

「寄り道せずに帰ってくるんだぞ……帰りに、美泉坂三丁目とかいくんじゃないぞ……」

「いかねえよっ！　そこホテル街じゃねえか！」

（ホ、ホテルっ！……！！）

心のなかで叫んだ真美の顔はのぼせたように赤くなった。



美泉海岸沿い。某高層マンション。

「ほえー、すげえマンションだな」

「うん……こんなところ引っ越すってなんなんだろう？」

正道と真美は二人して見るからに高そうなマンションを見上げていた。

美泉海岸沿いは高級マンションが立ち並ぶ区画となっている。塩害防止に植樹された木々が海の青とのコントラストを生み景観もよく、近くの港にはショッピングモールや水族館が併設しており日本最大級の観覧車まである。

美泉市民にとってこの区域に住めることは一種のステータスである。それを引っ越すとはよほどのことがあったのだろう。

エントランスの前にソファなどが乗ったトラックが停まっていた。依頼主はもう作業を始めているらしいが開始の時間は十七時三十分にしてあるので焦る必要はない。正道は理由を推察しながらエレベーターのボタンを押した。

「引っ越す理由ねえ。家賃を維持できなくなったとか……幽霊とか！」

「ぎゃー！」

ふざけていった正道だが、真美は本気で驚いたらしく、反射的に正道の腕を掴んだ。胸が正道の腕に当たる。

「おっ、おい。脅かした本人に飛びつくってどういうことだよ」

「ご、ごめん。おばけとか苦手で……」

二人は顔を赤らめたまま離れる。正道は所在なくエレベーターの階数表示を見たり、無意味にボタンを連打したりした。

「べっ、別に謝らなくても、いい。気にすんな」

「まさちゃん……」

（気にしなくてもいい？　ってことは腕組んでもいいってこと？）

「……だったらいいのにな」

曲解しかけたがすぐに軌道修正。

「はっ？」

「な、なんでもない」

スーっと音もなくエレベーターが開いてテレビを持った男女が出てきた。首にタオルを巻いて重そうにしている。依頼者だ。

「あ、エムズの人？」

「あ、そうです」

「ちようどいいや、これ運んでよ、重くて……」

それもそのはず。百インチはあろう大型の液晶テレビである。いたって普通のカップルに見えるがやはり住んでるところからいってハイエンドな暮らしをしているようであった。

「じゃあ、ちょっと置いて離れてもらえますか？」

カップルがゆっくりとテレビを下して距離を置く。それを確認した正道が発導した。

ヴァントアーム
『風の腕』

発導すると同時に正道の腕に薄緑色の腕が被膜のように重なる。地の魔導の方が臂力^{りょりき}を出せるが、壊れ物を扱うときはこれだ。地属性の魔導では性質上硬質なので傷つけてしまう。

正道は一人で軽々とテレビを持ち上げて、エントランスを出ていく。

「じゃあ、あとできてね。十一階だからね」

男が正道の背に声をかけ、エレベーターへ戻っていった。

その時にカップルの女が、

「あれで、殴るんでしょ？ 野蛮ね」

といっているのが聞こえた。

ついてきていた真美がぐつと唇を噛んだ。



カップルの引越しは順調に終わった。引越しの理由は隣に住んでいた大学生が死んだということだった。今日の昼にニュースを見て女の方が「こんなところ嫌だ」といい出したらしい。急な引越しだったため、たまたま知っていたエムズに依頼。それと、女の方が魔導士に興味があったらしい。

見世物にされた感じはあったが正道は文句をいうことなく仕事をこなした。料金を払う時に男の方が「魔導って便利なんだね」といったのがせめてもの救いだった。

「……」

「怒んなよ」

真美は口を尖らせてエレベーターホールの窓から暗闇に沈んだ海を眺めていた。十一階の高さから見る海はさぞかし絶景だろうが、ここから見える方向は海だけなのでただ黒い。依頼者のカップルは最後の荷物が運び終わるとそそくさとトラックを走らせていった。まったのでいない。なので、悪口もいえる。

「だって、まさちゃんのことバカにしたよ、あの人」

「まあな。まああんなもんだよ。便利っていつてもらえただけマシだろ」

「そうなのかな……私も魔導が使えたら……もっと魔導はちゃんと

した人のためになる力だ、って広められるのに」

悔しいのか、真美の瞳が潤む。

「お前はお前でいいよ。真美は真美。どうせ魔物なんていねえんだから、自由に生きろ人間。魔物が出たときは俺たち魔導士が守りいたします」

正道は帽子を取って英国紳士風の挨拶を試みせた。しばしの沈黙。

「なんつって……って泣いてる！」

顔を上げた正道はなぜか泣いてる真美を見ておろおろし始めた。大粒の涙が頬を伝い、端正な真美の輪郭をなぞるように流れ落ちていく。

「だって、だって…… “あのときの約束”、覚えてて、くれっ、た」
嗚咽混じりに真美はいう。しかし――

あ、あのときの約束？ どのときだ？

正道は記憶の引き出しを開けられるだけ開けまくったがそれらしきものは出てこなかった。

ここはごまかさなくてはっ！

「そ、そうだぞ、や、約そ……」

「ガッハッハ！」

正道がこの場を乗り切ろうとどぎまぎしていると不意に後方から爆発的な笑い声が割り込んできた。急な大音声に真美と正道は思わず飛び上がった。おかげで真美は泣きやんだ。

「げ、厳ちゃん」

「姫を泣かすとは騎士失格だなあ正道」
ナイト

正道が振り返ると想像通りの人物がにやつきながら紫煙をくゆらせていた。その隣には部下らしきスーツ姿の若い刑事があたふたしている。

「田畑さん！ こ、ここは禁煙です！」

「ああ？ そうか。あんこのくせに固いこといいやがって。アンコは柔らかいもんだぞ？ ガッハッハ！」

大笑いしながら、煙草を手のひらで握りつぶして消火。指の隙間から白煙が上がる。

「ひいっ、熱くないんですかっ」

「お前もこれくらいできるよになれば一人前の刑事だ^{デカ}」

葉のゴミと化した煙草を怪しい宗教よろしく、“神の砂”を出す教祖様のように手のひらから散らして厳造はしたり顔。

「がんばりまっす！」

「ガッハッハッハ！」

部下は感動したようで、目を輝かして両手を何回も開閉している。満足げな厳造の笑い声が波濤のようにエレベーターホールを呑み込んだ。

「……違うと、思うぞ」

「……うん」

二人が呆れていると、厳造はどすどすと真美の前にきて腰を曲げた。右手は胸に当てられている。紳士的な礼をしているらしいが、筋肉の鎧が邪魔してなんとも似合わない。美女と野獣のワンシーンかなにかのようだ。

「久しぶりだな、お嬢。魔物が出たときは私たち警察が^{正義の味方}お守りしますよ。魔導士は頼りないやつばかりだからな」

厳造は頭を上げると、正道を見てにいつと笑う。

「見てたのか……」

厳造は正道の他人にいじられると一番恥ずかしいシーンから見ていたらしい。どぎまぎしていた正道に助け船を出したのかもしれないが、こんな威圧感の塊のような人間が後ろで聞き耳を立てていたことに気づけなかった自分が恥ずかしかった。

「見てたなあ。見てたよ。いいマンションはエレベーターも静かでお前は気づかなかったみたいだな。お前は仕事か？」

「そうだよ」

「うむ。若者は働くのがいい。働け働け！ ガッハッハ！」

「お久しぶりです、厳造さん。あの、ここでなにを？」

真美がおずおずと尋ねる。真美は厳造のことが苦手だ。悪い人間ではないのは分かっているのだが、その巨軀と突如として爆発する大きな笑い声にびくびくしてしまう。

「まさか、厳ちゃんここに住んでるとか？」

「んなバカな。そんな高給取りじゃねえよ。この人間がちょっとな……地取りだ地取り」

「地取りというのはですね」

部下の刑事が黒い手帳を開けて一歩進む。自慢げな表情だ。

「聞き込みでしょ？」

正道がそういうと部下の刑事は悲しそうな表情を浮かべて下がったが、その理由は正道には分からなかった。件の刑事は「僕より若い子が知ってた……」などとつぶやいている。

「もしかして、ここの大學生の？」

「む。知ってんのか。正道でもニュースを見るとは……お前も大人になったんだな、関心関心」

厳造はボウリング玉でも拭くように正道の頭をわしわしと撫でる。

「ちよっ、痛てえし、ちげーよ、今日の仕事の関係だよ」

ニュースを見ないことは否定しなかった正道は今日の依頼の経緯

を厳造に話した。

「——なるほどな。わがまま女がわめいて引っ越しね」

「女は恐いっす、田畑さん」

正道の話を二人は身も蓋もないことをいってまとめた。あながち間違っていないが。

「迷コンビめ……」

正道が二人を半眼で見ていると、真美が不安げな表情で厳造を見上げた。揺れる瞳に不安の色が浮かぶ。

「厳造さん。私ニュース見ましたけど、やっぱり……“吸血鬼”の事件なんですか？」

真美はその身長差から、髪が後ろに流れるほど大きく見上げている。厳造は真美の問いかけには応えず、しばし視線を交錯させた。

宝石のような輝きを放つ黒瞳とナイフのような輝きの鋭利な三白眼。その両極に存在するような視線の交錯は真美が首をかしげることで離れた。

「あ、あの？」

「綺麗になった」

「えっ？」

厳造は久しぶりに会った真美を見て素直にそう思った。

『女』というものに疎い厳造は感情のまま臆せずストレートにいう。綺麗なもの綺麗で醜いものは醜い。ただ、人生経験上醜いものを醜いというのはデメリットしかないので面と向かってそれはいいわないうことにしている。婦警のビンタはなかなか痛かったのだ。

一方、綺麗と鮮烈なほどに直球で褒められた真美は「えっ？」を繰り返しながらロボットのようにな後退していった。

「恥ずかしがり屋さんなんですなあ、可愛いなあ」

若い刑事がゆるんだ顔で真美に追い打ちをかける。真美は「ほうっ」っとよく分からない音を出して沈黙した。

「あれ、なんか悪いこといったか？ ……で、事件^{ヤマ}のことか。そうだな、まだ正式な公表はしていないがおそらく吸血鬼の仕業だろうな。お嬢は首突っ込まない方がいい。まあ、狙われてるのは魔導士^{イロツキ}だな」

一応質問したのは自分なので、真美は下を向いたままこくこくと頷いた。

「お前が当たらなくてよかったな、正道」

厳造が正道に話を振るが、正道は判然としない様子で帽子の上から頭をかいていた。

「さつきからなに？ 吸血鬼？ そんなの信じてんのかよ」

正道のとぼけた一言に一瞬時間が止まる。

「出たな“バカ道”。ニュースはやっぱり見てないようだな。ギタ―とアソコばかりいじってねえで世間に目を向ける」

「やめろ！ いろいろ聞き捨てならねえ！」

（あ、アソっ……まさちゃんのアソッ……！）

人知れず真美は突如沸いた刺激にふらふらしていた。さつきのダメージも大きい。

「携帯でも開いてニュース見てみるんだな、多分乗ってるぞ」

正道はいわれるがまま携帯を開き、契約時に登録させられたニュースサイトに飛んだ。それは「注目のニュース」というところに上げられていた。

「なにこれ……」

『美泉の魔導士連続殺人。被害者はこれで三人目』

その見出しで大学生、戸田圭介の死について書かれている。ニュース記事の終わりにはこの事件の関連リンクがいろいろと出てきた。『犯人は魔導士に恨みを持った人間？』や『魔導士への裁き？』などの見出しが躍る。

そして『抜かれた血液。犯人は吸血鬼？』という記事には血を抜かれた死体の状況や今までの被害者の特化属性が違うことなどが書かれていた。そして、現場に残される犯人からのメッセージ――『魔導士に復讐を』

いわれてみれば、学園でもこの事件の話をしている生徒もいた気がしたが、音楽漬けでテレビすらまともに見ない正道はこの事件についてなにも知らなかった。

「了解か？ 多分次に狙われるのは緑だ。風な、風。だから正道には関係ねえと思うが、一応気をつけろよ。お前は色丸出しなんだからな。ヤバいのがいるぞ、この街に」

厳造はいうと広い背中を見せて歩いていく。

「お友達に風の魔導士さんがいたら夜には出歩かないよう注意しておいてください。では」

若い刑事も敬礼をして厳造のあとを追った。

正道はその姿を見ることなく携帯を握りしめたまま視線を落とし、その手は白くなり小刻みに震えている。

「まさちゃん？」

「魔導士ばっか狙いやがって……許せねえ」

正道は怒りに震えていた。

正義の味方のはずの魔導士が恨まれて、狙われる。しかも被害者はおそらくその犯人とは関係のない人たちなのだ。若く、魔導もまともに発導したことないような、普通の暮らしを送っていた魔導士。

吸血鬼と呼ばれる犯人は魔導士という“存在”に向けて恨みを放っている。魔導士すべてを悪とみなす犯人を正道は許せなかった。

「……うん。でも、私たちにはどうすることもできないよ」

なにが正義だ——形容しがたい無力感が吐き気のようにせり上がってくる。

「……分かってるよ」

正道は怒気を孕んだ声でそういつてエレベーターのボタンを叩いた。静かな駆動音でエレベーターが昇ってくる。

大きな事件が自分たちの街で起きているからといって所詮は他人ごとなのだ。自分たちが関わるとは思えない。テレビや新聞でその報道を見ても、たとえそれが家の隣でも、所詮は他人。違う人生なのだ。その人生が自分の人生と交差する確率は低い。

——そう、思っていた。



時刻は午後九時を回っている。

美泉坂通りは猥雑な光に溢れ、本来の姿を見せる美泉坂は生き生きとしている。派手な車が爆音でクラブへと向かい、歩道を歩く人間は酒気を吐きだし、揺れる。高校生の正道から見ればここは掃き溜めのような気がした。酔客とは違う目をした怪しげな人間も多い。そんな掃き溜めのような景色を見ながら、正道と真美はエムズへ帰ろうとしていた。移転しろという正道の願いは届いてはおらず、エムズもしっかりと掃き溜めの一部である。

「つけられてる」

不意に正道が真美の耳元で囁いた。

真美は一瞬なにごとかと思ったが言葉の意味を理解して身を強張らせた。心音が跳ねて神経が張り詰める冷たい感覚。

「振り返るなよ」

「……うん」

前方にエムズの入っているビルは見えている。

後ろからの気配はここ最近ずっと感じていたものだった。それは正道一人のときにはなにも感じることもない気配。狙いは真美らしい。

真美も「視線を感じるときがある」とはいつていたがそれ以上その気配に動きはなかった。真美は正道や真と行動することが多い。それを警戒して見るだけに留まっているのかも知れない。

真が危ないからと違法改造したスタンロッド（しかも二本）を真美に携帯させようとしていたが、今はそっちの方が危険なので正道が止めた。

しかし、害はないとはいえ。それは今現在の話。これからエスカレーターしていく可能性などいくらでも考えられた。

手の届く範囲にいる人間を守らないでなにが正義か——正道は行動を決意した。

「捕まえるか、“ストーカー”」

「えっ、あぶな……きやつ」

正道が小さく震える真美の手を握った。もじもじと動く真美の手の震えが正道の手のなかでおさまっていく。落ち着くと真美がほうと息を吐いた。

「あったかい……」

「なっ！　ば、バカっ、そんなんじゃないんだからなっ」

そんなんってどんなんだ？　っと自分に突っ込みを入れた正道は握り返してくる手の感触にドキドキとしながら前を向いた。こうして手をつなぐのは幼稚園以来である。

「——走るぞ」

「……うん」

正道と真美が同時に地面を蹴った。その瞬間、後ろの気配が慌てるのが分かる。往来のなかから抜け出した足音がこの計画の成功を伝える。

——かかった！

心のなかで快哉を叫んだ正道は真美を引っ張って路地を折れる。その際に正道がなにごとかつぶやいて地面に触るのを真美は不思議に思った。

「さて……なにが出る」

正道は路地を進んだところで足を止め、真美をかばうように後ろにやった。路地は飲食店の裏口ばかりなので暗く、人の通りはない。

すえた臭いが漂い、どこかのスナックから流れ出るカラオケの音声が夜気に舞う。

真美は恐いのか正道のポロシャツを握り締める。正道はその手をぽんと触ってやった。

その直後、真美のストーカーの足音が響いた。

ストーカーは二人が路地を走り抜けたものだと思ったようで、スピードを緩めることなく路地に侵入してきた。暗いのと、フードを被っていることで顔が判然としないが、体格は男、痩せ形で、身長は正道より高く見える。一瞬正道の脳裏にハリオの姿が思い浮かんだが、パーカーの色はグレーで、ジーンズ姿。なにより雰囲気違った。その男からは殺気というものは感じ取れなかった。

「ひッ！」

男は待ち構えていた正道を見てすぐさま踵を返した。やはりいるものとは思わなかったらしい。

そのタイミングで正道が“発導”する。

ヴァイント・ザ・フエイズ
『風の壁！』

風を巻き起こしながら、路地の入口に壁が出来る。ただ、壁とはいえ属性は風なので向こうの景色がぼやけて透過されていた。しかも夜陰に紛れて壁があることは分かりにくくなっている。酔客の目ではほとんど分からないといってもいい。

正道が路地に入る前に地面を触っていたのはこの発導の仕掛けだった。正道はそこに魔力を“置いていた”のだ。

それは、ハリオとマリオを捕えたときと同じで見ようと思えば見えるものだったが男はそんなことに気にもせず、

「ぶえぶっ！」

案の定、男は壁にぶつかって倒れた。そして鈍い音とともに大の字に仰臥^{ぎようが}。男はしたたかに頭を打ち付けたように完全に伸びた。

正道は倒れたストーカーに歩み寄る。フードがめくられてヒビ割れた眼鏡をかけた男の顔が露わになっていた。

「あれ……お前」

「あっ……」

正道と真美はストーカーの思わぬ正体に顔を見合わせた。



いそしましように
五十島翔太——十六歳。鷹光学園1—2組。出席番号三番。朱川姉妹と同じクラスの同級生——

「——以上」

「それだけっ!？」

縄に縛られた翔太は泣きながら吠えた。

真美をつけていた気配の正体は鷹光学園に通う同級生だった。正体を知った正道と真美は真に連絡をし、伸びている翔太をエムズへ運んだ。

そこからが大変だった。

自分の娘のストーカーを前に真はその身に鬼を宿した——

「キエエエエツ！」

まず、プレハブのドアを開けると改造スタンロッド二本を最大放電させながら真が奇声を上げて飛びかかってきた。青い燐光を放ちながら真は剣舞のように飛び跳ねる。ただ、その狙いは翔太だが翔太を背負っているのは正道なので危険なのは正道だった。

自分の肉体の限界を超えているような動きを繰り返している真の目は血走り、飛び散る汗が地面を打つ。

「落ちて着けて! おっちゃん!」

「そいつを、降ろせ! 正道iiiiiiiッ!」

真は正気を失うと相手の呼称を変えるらしい。

「ぬんッ!」「うおッ」

青い燐光が正道をかすめる。真は普段の動きからは想像できない動きをしているが、気持ちだけが先走っているようでうまく動いてはいない。とはいえ、人間一人背負った正道にとって真の攻撃は回避するのが精一杯だった。しかも背中の翔太は正道より大きいのだ。鬼神モードの真はストーカーをかばう正道を敵と見なしたようで、足をもつれさせながら両手に構えたスタンロッドを振り回してくる。屋上に運び上げる前にストーカーの正体を告げていたのだが真には関係ないらしい。

真はバチバチと放電するスタンロッドを打ち鳴らして構える。その姿と眼光は宮本武蔵を彷彿とさせた。

「魔導は使わねえのか」

「ハア……この手で、裁きを……ハア……下す」

真は息も絶え絶えにそういうと、地面を蹴った――

「パパ! やめて!」

「真美……」

正道は発導できるように、翔太を背中だけで支えて構えていた。真美の声に正道は発導の気配を孕んだ手を再び翔太の足に戻した。

「もう、いいから……」

結局のところ真を制御できるのは真美しかないようだった。

その悲痛な叫びに、真は足を止めて息を上げながら屋上に膝をついた。体力的にも限界がきていたらしい。

「娘は……真美は……渡さんぞ……」

いいながら真は気を失った。

「パパ!」

真美が泣きながら真の横に膝をついて揺さぶる。正道も心配して駆け寄ったが真の胸が上下していたので安心した。

「大丈夫、気失ってるだけだ」

真のこんな姿を見るのは初めてだった。気を失うまで真を動かしたのは娘への愛情。一種偏執的ともいえるが、正道はそこに『父親』というものを見た。

「大事にされてるな、真美」

真美は泣きながら頷いた。

——真は今、真美に見守られてソファーに寝ている。
翔太が目覚めたのはそれからすぐのことだった。

「ねえ、それだけなの、ぼぼ、僕って！　ねえ、正道君！」

「だって、知らねえもん。出席番号だって勘だ」

「か、勘だったの！？　当たってるし！」

翔太は真が襲いかかってきたことなど露知らず、まくしたてるように甲高い声の早口で唾を飛ばす。そしてヒビの入った銀縁の眼鏡を鼻の蠕動^{ぜんどう}だけで器用に上げる。

「そんな焦って喋んなよ……はあ」

正道は声に出して嘆息した。

翔太は真と“同類”のようだった。

形はいいが常に人を窺うような目、神経質に動く鼻がすんすんとも鳴く。必要以上に唇を湿らす癖があるようで、薄い唇からは蛇のようになめらかな舌が飛び出している。少し影のある頬にはポツポツとニキビが浮かび、翔太が正道と同じ青春を生きていることを示していた。

「で、ここはなんなの？ こ、こ、このぼつ、天国は！」
パラダイス

翔太は興奮気味に後ろに束ねた長髪をぶんぶん揺らして辺りを見回す。

やはり同類だった。翔太もオタクなのだ。

翔太は整然と並んだフィギュアを目を見開いて「あ、あ、あれは百式魔華ひゃくしきまかのノア・リヴンダルの限定！」などと正道には理解不能な言語を吐いている。

しかしこの話し方はなんとかならないだろうか。正道は頭をかいで、翔太と視線を合わせた。

「天国見る前に現実見ろ」

「あ、リュアン・キンダーク……じゃなかった正道君」

「……俺を二次元に持っていくな」

調子狂う——正道は嘆息して、おもむろに翔太の眼鏡を剥ぎ取った。

口をぱくぱくとさせる翔太の素顔は意外と整っていた。

「ああッ！ ぼつ、僕の銀輪ぎんりんの魔導鏡まどうきょうがッ！ それは世界と僕を繋ぐ魔導具なんだ！ きよつ、強制ログアウトは禁——」

「うるさい」

「ひっ！」

ぴしゃりといい放った正道に睨まれて、翔太はおとなしくなった。

「で、真美をストーキングしてた理由は」

「す、ストーキングとは失敬な！ ぼっ、僕はただ、来栖さんの“彼氏”である正道君がその若き欲望に任せて青少年にあるまじき行為を働かないように——ふがっ」

「まてまて」

正道は思わず早口で話す翔太の口を塞いだ。

「いろいろ曲解してる。ぐにやぐにやだ。お前の行為はストーキングだし。俺は真美の……その、か、彼氏なんかじゃねえ」

正道の手のひらのなかで翔太がにやりと笑ったのが伝わり、正道は手を離れた。

「心が揺れておりますぞ、脇坂^{うじ}氏。拙^{せつ}には分かりまする」

「うっ……って、なにキャラだお前」

正道は翔太に眼鏡を戻してやって、あぐらをかく。フィギュアパライズ人形天国を飛ばしていた視線は落ち着き、今は少し顎を引いて正道を見上げるように見ている。

「とにかく。お前はストーカー。な？ ストーカー認定試験合格。

満点だ。で、俺は真美の彼氏じゃない。幼なじみだ。オーケー？」

正道は諭すようにゆっくりと指差し確認しながら告げていく。指差した先にいる真美は恥ずかしそうにうつむいていた。

「僕はストーカーじゃない……クリスマス姫（注 真美のこと）を守る騎士^{ナイト}だ！」

「まず、一回その電波を切れ同級生。お前は俺と同じ高校生だ」

「むう、それは仮の姿で……」

「話にならない」

翔太は真より“イタい”らしい。

アニメや漫画や小説。そこから抽出した成分をもとに設定を築き上げ、想像のなかに新たな自分を生みだす。こういうのを中二病と呼ぶのだろうか。正道は思う。幻想に耽るのは別に悪いこととは思わないが、まともに会話できないのはつらい。真のように年季が入れば、分別もつくのかも知れないが、翔太のような幻想に浸りたての罹^か患者には、厳しいようだ。なにしろ一年前まで本物の中学生だったのだ。

と、正道が“そういうことにして”なんとか納得しているとソフアーが軋^こむ音と衣擦れが聞こえた。見ると真が真美に支えられて半身を起していた。

宿っていた鬼神はなりを潜め、今は気の抜けたような穏やかな顔をしている。飛びかかってくるかと、正道は武器になりえそうなものに視線をやったが、その必要もないようである。

「話は聞いていた。翔太君、君は真美たんを守ろうとしてくれてたんだね？」

翔太は真たちのいる方に背を向けていたので、縛られたまま器用に方向転換した。

「なっ……」

「真美の親父さんだ」

真美に支えられている真を見て、翔太は空気を食みながら、なわなど震え始めたが、正道の言葉で胸を撫で下ろしたようだった。そのリアクションには、正道も少し納得した。制服姿の女子高生に支えられる典型的オヤジタイプな真。どう見ても父親とは“違う意味の”パパにしか見えない。しかも魔導士。

落ち着きを取り戻した翔太は、幻想世界にダイブして囚われの騎士が王に弁明をするように語りだした。

「王よ……私は、イーグルライト国（注 鷹光学園）の一兵士として国に忠誠を誓ってきました。この命はこの国の民の安寧のためにあると……その正義に愛は枷かせとなる。私は愛を捨て、戦場に身を投じました……しかし私は愛を捨て切れなかった！ 私はこの国の兵士としてあるまじき感情を抱いてしまいました……容姿端麗、明眸皓齒うこうし、可憐な花のように慎ましい、まさに『姫』！ ……クリス姫を、愛してしまったのです」

「要は、真美のことが好きなんだな？ お前は」
セリフ調に話す翔太の言葉を正道が簡潔に訳す。これは自分が理解するためでもある。

しかし、こうキャラに入ると話し方まで変わるもんなのか。正道は感心しながらも翔太の話を聞いた。

「しかし姫には名将、炎のリュアンことリュアン・キンダーク將軍という許嫁が」

「どっかで聞いたぞ……お、俺の、ことか……」

「確かにリュアン様は眉目秀麗、性格は快活でお優しく姫との仲も良好と見えます。剣技の方も群を抜き、リュアン様一人で一万の魔物が巢食っていたスプリング砦を制圧されたのは伝説。私の、いや兵士全員の憧れです……しかし！ しかし、まだ姫とリュアン様はお若い……」

「お前は何歳の設定だ」

翔太は「無粋なことを」という目で正道を一瞥して王様役の真に向き直った。

「まだお互いの貞操を破るには早い！ 私は！ ……せめて届かぬ愛ならば……お二方の純潔を守ろうと……私は……っ」

翔太はついに歯噛みして泣いた。正道は翔太のなんでもないグレ

ーのパーカーが鎧に見えてきて思わず目をこすった。迫真の演技だった。

「そういうことだったか……お前、名はなんという？」

真が胸を張って威厳のある声で問う。白衣を着た肥満体の中年男性に今、イーグルライト王という新たな人格が宿った。

「乗ってきた……」

正道は片眉をひくつかしてさぞ困っているだろう真美へ視線をやる。

真美はイーグルライト王の横に座って、静かに話を聞いていた。両手は膝の上に重ねられ、その姿からは気品さえ漂う。

「はっ！ まさかお前まで……く、クリス姫なのか」

正道はそう思ったが、真美はリアクションも取れないので普通に話を聞いているだけだった。感化されているのは正道の方である。

「私は、ショティオ・イソジマ。クリス姫をお守りする者です」

「ふむ。イソジマ……珍しい名前だ。東方の者か」

翔太、もとい、囚われの騎士ショティオは王の言葉にうなずいた。

「東方……設定増えた……」

つぶやく正道はもはやこの世界に入り込んでいた。俯瞰的に見てはいるものの正道の見える世界はプレハブ事務所ではなく、赤い絨毯が敷き詰められた“王の間”であった。

豪華な玉座にイーグルライト王が座り、その横にはクリス姫。道を作るかのように立ち並ぶ銀甲冑の兵士たち。その兵たちをまとめるのは、炎のリュアンことリュアン・キンダーク。

妙な胸の高鳴りを感じる。次、翔太か真がリュアンなどと呼ぼうものならこの世界の住人になれる気がしていた。

しかし、リュアンの名は呼ばれることなくこの話しは終わる。

「では、シヨティオよ。これからは本当に姫の貞操を守る者とならないか？」

「――えっ？」

翔太の口から思わず“翔太の声”が漏れる。この時点でシヨティオ・イソジマは儚く雲散霧消した。



「どどど、どういうここ、とですか？ お父様」

「翔太君、君は魔導士だろ？」

「え？」

真が指をさす。正道が動揺している翔太の顔を覗くと眼鏡の奥の左目が青く輝いていた。先刻の“寸劇”で泣いたときに取れたのであろう、コンタクトレンズが一枚頬に張り付いていた。

正道がコンタクトを指で取って翔太に見せると「あっ」と短く声を上げた。隠していた色眼しきがんがバレる恐怖みたいなものは正道には分からないが、隠すということは見られたくないということ。翔太は見る見る表情をなくしていった。色眼が原因で過去になにかあったのかも知れない。

「そんなに、落ち込むことないじゃないか。翔太君、ここがなにか知っているかい？」

「ここまでは入ったことないので……知らないです」

翔太がうつむきながらぼそぼそと言葉を落とす。

正道はなんだかわいそうになって縄を切った。翔太は自由になった腕をだらりと床にたらし、動こうとはしなかった。

「ここはね、魔導便利屋エムズ。魔導で人助けをする人の集まる場所」

「魔導、便利屋？ 人助け……」

「そう。と、いつでも働いてるのは俺一人だけだな」

正道は翔太の目の前で笑って見せた。

真はどうやら翔太を仲間に引き入れようとしているらしい。真美

のストーカーという認識はなくなったようだった。

「どう？ 翔太君も自分の力を正しい方向に使ってみないか？ こにいれば真美さんのこともまじやのことも見ていられる。僕も不安だからね……二人の貞操は」

「さっきから貞操、貞操うるせえよ。大丈夫だっつーの」

「う、うん。そもそも、付き合って……ないもん」

真にジトつと見られて真美もささやかな抵抗をした。その顔はなんだか拗^すねたような表情をしていた。

「僕が、魔導で……」

「使ったことないか？ 魔導。それなら俺が」
「あるよ」

正道と同年代の魔導士で魔導を使ったことのある者は少ない。色眼を隠しているならなおさらだ。そう思って正道はいったのだが、翔太は正道の言葉を遮って、自嘲気味に笑った。翔太はその笑みが浮かんだ顔を両手で覆い隠して沈み込む。こもった震える声が指の間から洩れ聞こえた。

「僕は……イジメられてた」

翔太は膝を抱えて語り始める。うつろな瞳に輝く青はどこを見ているのか分らない。

「あれは、小学校の四年のときだったかな。僕は友達と些細なことで喧嘩をしたんだ。そのときにコンタクトが取れて僕が魔導士ってことがバレた。今思えばだけど、その学校は魔導士を忌避するような学校でね……ドン引きだよ。友達はいなくなったし、バカにされた。先生も助けてくれないし……でも、なんとか通ったよ。両親も耐えてくれてたし。でも、限界だった。ある日僕は原因を作った元友達に向かって……発導したんだ」

翔太の落ち込んだ原因がそこにあった。

翔太をそうまでさせる魔導士差別は許せないと思う。それと同時によくあることだ、とも思う。本当によくあることなのだ。翔太のように“キレた”魔導士が暴れることなんてざらにある。

翔太はそのときの情景を思い出していたのか、少しの沈黙のあと続ける。

「でも、幸い当たらなかった。なんせ、初めてだったし、それでよかったと思った。えぐれた運動場を見て、泣き叫ぶ友達を見て「ああ、この力は使っちゃいけないんだ、人を傷つけるんだ」って……そのあと僕は美泉に引越した。ここは魔導士にも比較的優しいしね。おかげさまで中学ではなにもなかったよ、学校では平凡に人間として振る舞って、家では二次元へ飛び込んだ。だんだん今の僕という人格が形成されていったよ」

不意に翔太が立ち上がった。やはり正道より大きい。埃を払って翔太は照れたように笑う。

「好きな人もできた……友達はいないし、学園じゃ朱川凜にキモがられてたりするけど、なかなか楽しい」

「凜か……」

凜ならいいそうだな。とても。正道は凜を思い浮かべて苦い顔になる。今度そんなところを目撃したらとちめてやろうと心に決めた。翔太はポケットから予備のコンタクトを出して左目にはめた。魔導士はこれで“やっと”人間になれる。

「だから——僕の生活に魔導はいらないんだ」

剥がれ落ちた設定、本音で話す本当の翔太。その言葉の響きに嘘偽りは微塵もなかった。

「魔導で人を助けるなんて、正道君はすごいと思うし、憧れもある。でも僕には多分できない。……恐くて、使えないんだ。だから、ごめんなさい」

翔太は真へ深々と頭を下げた。真は仕方なさそうにうんうんとうなずいている。そういう事情をもつ人間に無理強いはできない。

「……来栖さん。もうつきまとわないから、安心して。学園でも無視してくれていいから……今まで本当にごめんなさい……やっぱ、僕は誰とも、関われない……」

翔太はドアの前でもう一回深く頭を下げた。翔太の目からこぼれる涙滴が床を打つ。肩が震え、噛み殺すような嗚咽も漏れだした。

翔太は友達がいらないのではない。自分から作らないのだ。たとえそれが同じ趣味をもつ者でも、たとえ魔導士であつても——傷つけてしまうのが恐いから、自分が傷つくのが恐いから。

真美はどう声をかけていいのか分からぬ様子で手をもじもじと組み合わせている。嗚咽だけが響くを空気を切り裂いたのは正道の明るい声だった。

「友達を無視する友達は、友達じゃねえよな？ な？ 真美」

ちよつと、「友達」が多かったかという後悔と自分の声だけがやけに響いて少し恥ずかしかった。ばつの悪そうな顔で真美に助けを求める。

「え？ ……うん。そうだよ、翔太君。『私たちは今このときを持つて友情同盟を結ぶのです！』だよ？」

正道の意図を感じ取った真美が恥ずかしそうに、しかし高らかに。「な、なにそれ？」

友情同盟？ ——ニュアンスは伝わったが正道にはわけが分からない。要は友達になったということだろうが。

『魔法ヶ丘の鎮魂歌だ』
レクイエム

トーンは違うが翔太と真の声が重なった。顔を上げた翔太は真を見て気まずそうに笑う。ヒビ割れた眼鏡が涙で曇っていた。

「そ、それだけは知ってるの」

「だ、だからなにそれ？ 本？ アニメ？」

「ゆ、友情同盟は、一度契りを交わすと高校生活の間は切れないんだよ……そ、それでも……いや、僕に友達なんか……作っちゃ、いけない……ひっ！」

後ろ暗い発言をしているが、なんだか少し調子を戻してきた翔太の首に正道の腕が回される。

「おい、翔太君よ。とりあえずその友情同盟とやらを解説しろ。もしたらその同盟に入ってやる」

「チツチツチ、甘いな、これだから素人は」

頼んでもいないのに真が我が物顔で前進してきた。

「友情同盟は主人公である魔法少女、マホロバ・ロンドが唱える魔法であり「私たちは今このときを持って友情同盟を結ぶのです！」は詠唱である。その詠唱がなされた今、すでにましゃは友情同盟のなかにいるわけだ！ 友情同盟の有効範囲は半径五メートル。つまりここにいる全員が真美さんの友達というわけだ。そして真美さんの友達は翔太君の友達でもある」

「なんだその強制的な魔法は」

「防ぐにはサタンの耳栓というアイテムが……」

「だあー！ うっせえ！」

騒がしいいつもの感じ。怒りながらも正道は楽しんでいた。この輪のなかに翔太も入ればいい。というか入れてやる。

正道は翔太の前に仁王立ちして指をさす。

「とにかく！ お前は俺と真美とこの変態の友達だ！ 違うっていうんなら、盟約違反で友達にしてやる！ 友達を作っちゃいけないなんていうな！ 自分を否定すんな！ 魔導士だって人間だ！ いやつには自然と友達ができるんだよ！ お前はいいやつだ！ 俺たちはそれを知ったから、だから友達だ！」

「誰が変態だ！」

「パパ！ 今いいとこだからっ！」

「ちよっ、なんだよ！ 汗がっ、口に！」

正道に真が飛びかかりそれを真美がひき剥がす。

「ぶっ……」

三つ巴の正道たちを見て翔太が吹きだした。そのままの字になって笑う。泣き顔は笑い声に吹き飛ばされて今は純粹な笑顔しかない。しかし上げた翔太の顔には新しい涙の筋ができていた。その涙は翔太の過去に起因して流れたものではなかった。

「笑うなよ！」

「ご、ごめん。それと——ありがとう……」

正道と翔太は笑いあった。見ると真美と真も笑っていた。友情同盟で結ばれた四人の夜は更けていく——

「さあ契約だ！」

真が叫ぶ。

「ええっ！」

翔太も叫ぶ。

「大丈夫だ、俺がサポートしてやる」

正道が翔太の肩を抱き、真の机に連れていく。真美はただ呆然とその様子を見ていた。

「でも……」

「「でも」はなし！ お前ならできると。本当に強いやつは臆病さを持つてゐるって誰かが言ってたぞ。憧れてんだろ？ 魔導で敵を倒すヒーロー」

「そ、それは、二次元の話であって」

「それを三次元でできるのが俺たち魔導士なんだよ。力は正しいベクトルで放ったものが力と呼べる。それができるんだよ、俺たちには」

「ほんとに……？」

正道は自信満々に親指を立てた。

「いいこといった！ ましゃ！ 僕たちはブラッドなんかとは違う、正義の集団！ その名もエムズ！ さあ翔太君！」

『やらないか』

「ひっ！」

正道と真が頬をくっつけて一枚の契約書を突き出した。その声は寸分の狂いもなく重なった。

この後、契約するしないの攻防が少しあったのだが、結局翔太は契約書にサインした。——とある条件つきで。

「僕の、ノア・リヴンダルグが……持ってきた」

誰もいなくなった事務所のなかで真は椅子の上に身体を丸めて呻く。

他の三人は揃って帰っていった。

真は椅子を回転させて、そこにあっただはずの限定フィギュアの名残を見て笑う。

「まあ……いいか」

グレンと浅間

浅間照樹——ブラッドのリーダーである魔導士。特化属性は地。自らの色眼と合わせたような黄金色の短髪に耳を埋めつくさんばかりのピアス、特徴的なのは目で、まるで狂気から削りだしたようなそうぼう双眸そうぼうをしている。

冷酷で暴力的。怒りのままに力を振るう直情径行な性格はこれまで多くの人間を傷つけてきた。気づけば浅間はブラッドという粗暴な組織に入り、リーダーとなった。浅間の凶暴性や魔導の精度は他を圧倒していた。暴君のような浅間のやり方に逃げ出したメンバーもいたが、その強さがカリスマ性となり集まったメンバーも多い。

そんな浅間でさえ、手も足も出ない男がいる。——グレン・F・タカサキ。突如現れた素性も分からないその男はブラッドを買い取り、オーナーとなった。提示された金額は簡単に突っぱねられるものではなかった。それに、もしそこで拒絶していたら今頃ブラッドという組織は壊滅していただろう。もちろん、全員死亡という形でグレンはそんな予想を容易にさせてしまう存在だった。

グレンは自らを魔物と名乗った。浅間はグレンが本当に魔物ではないかと思うときがある。グレンが発導するところは見たことはないが、その巨軀からは常に魔力が流れ出ているような印象を受けるのだ。そして身体能力も異常だった。しかし、『魔物』などただの二つ名のようなものなのだ。そうでないならば、魔導士すべてが魔物ということになる。

巨額の金でブラッドを買い取ったグレンは指示を与えた。それは「魔導士を誘拐する」こと。

さらう対象の条件は魔導を使ったこともないような若く、普通の日常生活を送っているような魔導士。各属性一人ずつ。性別は問わない。対象には傷をつけないこと。さらった魔導士はグレンの家へ運ぶこと。そして——そこから先は一切関与しないこと。それが条件だった。

仕事は簡単で、高額な報酬も出る。金に浮かされたブラッドのメンバーたちはグレンの指示のもと動いていった。グレンが自分の家に連れ込んだ魔導士となにをしているかは知らないし、触れてはいけないことだった。だが、ある日美泉の街に『吸血鬼』が現れ、その被害者がハリオとマリオがさらった魔導士だったことが浅間の耳に届いた。——浅間の懸念していたことが現実味を帯びた瞬間だった。

やはり、グレンは魔導士を殺しているのだ。

浅間はその予感をもとより抱いていた。二人目までの被害者は女の魔導士で、グレンは異常な性癖の持ち主ということにブラッド内での噂でなっていたが、三人目の被害者の男が見つかり抱いていた疑念は確実なものとなった。

ブラッドには決まりとして殺人はタブーとされている。間接的だが殺人に関与している今の状況はブラッドの決まりに抵触する。今までにさらったのは三人。グレンがいう通りなら残るはあと一人。とはいえ、さらう対象が殺されることを知りながら協力はできない。ブラッドのメンバーたちにも動揺が広がっている。

浅間は今までさらった三人でグレンとの協力関係を終わりにしようとしてグレンの住む別荘地へと向かっていた。

——“人殺し”は俺だけで充分だ。

「おや？」

グレンは玄関から顔を覗かせると不思議そうな顔をした。外国のホームドラマにでも出てきそうなアメリカンスタイルの家にグレンの顔はマッチしすぎてここが日本だということを忘れそうになる。

浅間はグレンの家を訪ねるのは初めてだった。

「テルキがくるなんて珍しい。なにかトラブルかい？」

「ちよつと話があつてな」

「じゃあ、入りなさい」

グレンは浅間を招き入れるとキッチンの方へ向かった。漂う香りからして珈琲を入れにいったようである。グレンはいつもの軍人のような格好ではなく、ベージュのチノパンに薄手のセーターと年相応の恰好だった。特徴的な丸いサングラスもさすがに家のなかではしていない。この辺りであるの恰好は目立つからやめているのかもしれない。

聞いたことはないが、家族らしき人間の気配はなかった。

浅間はリビングのソファに腰を下ろす。室内の家具や調度品は高価なアンティークだったが浅間には古そうなものという印象しか与えなかった。それに今はそんなものに構ってられない。

下手をすれば殺される話をしにきたのだ。

そう、殺される。美泉の街で誘拐してきた人間はこの家に運ばれたのだ。グレンはこの家のどこかで殺しているに違いなかった。そう考えるだけで喉が渇く。水でもがぶ飲みしたい気分だが鼻をくすぐるのは気持ち悪くなるほど濃い珈琲の香り。

「今日はなにもないはずだろう、なのにそんな恰好して」

浅間が絨毯を睨みつけていると後ろから声がした。気配のない接

近に浅間が振り返ると、コーヒークップを二つ持ったグレンが笑っていた。

こいつ、いつの間に？ 自分でも視線が泳いでいるのが分かって浅間はソファに座りなおした。できるだけ自然に質問に答える。

「……俺は黒が好きなんだよ」

浅間は黒のパーカーに黒のスウェットと黒づくめの格好をしている。特に理由はないのだが浅間は黒が好きだった。

「じゃあ、ブラックで正解だったかな？」

猫足のテーブルに置かれた珈琲は濃い黒を揺らして湯気を立てている。そこに映りこむ自分の顔が緊張を孕んでいて浅間は目を閉じた。

「どうしたんだい？ えらく緊張してる」

庭に面した窓際に置かれた肘掛椅子に腰を下ろしたグレンは窓の外を見ながら訊いた。窓の外は夜の闇に沈み、時折吹く風が木々を揺らす。不定期に乱れるノイズのようなその音は浅間の心のなかを表しているようだった。

浅間は鏡面のような珈琲を見ながら口を開く。

「おっさん、お前俺たちに人さらわせてなにしてやがる」

「……」

グレンは外を見つめたまま、沈黙で答える。

「俺は殺しはしねえっていったはずだ。それをお前は納得したはずだろうが」

『死』をつきつけられて有無をいわず買い取られたブラッドだったが、グレンは名乗ったのち「ブラッドのルールは遵守する」と確かにいったのだった。

グレンは嘘をつかない男だった。

「誰かを殺したのか？ ブラッドは。私は魔導士を連れてくるよう頼んだだけだ」

それも、嘘ではない。しかし――

「殺してんのと一緒じゃねえかッ！ “吸血鬼”ッ！」

浅間の弾いたコーヒーカップが中身をぶちまける。テレビに衝突したコーヒーカップが音を上げて割れた。

絨毯に染みていく珈琲をグレンは氷のような眼光で見つめていた。その眼光は立ち上がった浅間の瞳に向けられる。相手の感情を恐怖で支配するような眼光に浅間は思わず後ずさった。

珈琲を一口啜ったグレンはおもむろに立ち上がり、浅間に歩みを進める。無言。不気味なほど無言。

不意にグレンの首が前にカクンと折れた。それは操り人形の糸が切れたように――

『吸血鬼……ネエ？ 俺はその呼び名は気に入ってネエ、俺は魔物だからナ！ ギャハハハハッ』

「ッ！？」

下卑た笑い声とともに起こされたグレンの顔は今までに見たことがない顔だった。

目は見開かれ、眼球はヒビ割れのように血走っている。限界まで吊り上がった口角は人間とは思えない。その口から発声される音は人間のものではない。グレンの声も聞きとることはできるが、ヘリウムガスでも吸ったような声が前面に出てきている。悪魔……いや、魔物が浅間の眼前に立っていた。

「……お、おっさん。……マジかよ」

『マジダ！ マジダ！ マジダ！ マジなんだヨォ？ 魔物はある

んだゼエ？ 俺は嘘つかネエ！ ギャーッハッハ！ おーっと！
発導しようなんて考えるんじゃないやねえぜ？ マジで死ぬかう。……お
前がナ！ ギャーッハッハッハ！』

グレンの皮を被った魔物はおどけた様子で部屋中を跳び回る。跳
躍し、壁を蹴って空中で回転。その着地地点は自分が飲んでいたコ
ーヒーカップのふちだった。

体重百キロはあろう大男が小さなコーヒーカップの上でバランス
を取っているありえない光景。浅間は言葉を失い再びソファーに沈
みこんだ。

『で、なにいいにきたわけ？ グレンに文句か？ オットット……』
ヤジロベエのようにバランスを取りながらグレンが自分の名前を
呼んだ。今声を出している魔物とやはグレンのなかにいるのだろ
う。

魔物は乗り移る幽霊みたいなものか？ ——浅間はそんなことを
思いながらここへきた目的を告げる。声は震えていた。

「……あ、ああ。もう俺たちは協力できねえ」

『ハハッ、あと一人じゃねえカ！ それくらい我慢しろヨオ。あと
一人だから“俺たち”が動いてもいいんだけどヨオ、こんな大男が
人さらにうろついてたら目立つダロ？ だからお前らみたいなの
が丁度使いやすいんだヨ。最後までやり遂げるのが仕事ってもんダ』
コーヒーカップから飛び降りた魔物はその勢いのまま浅間の横に
座って肩を抱いた。

『ナア？ テルキ君』

耳元で魔物が囁く。その声は首筋を舌が這うような感覚がした。
得体の知れない恐怖に浅間は慄然とする。

「好き勝手いいやがって、くそったれ……お前はなにしようとして
やる」

『ンー？　それが見たいならあと一人ダ』

「……見たくねえ。好きにしろ。とにかく、もう協力はしねえ。金は返す」

浅間は肩に置かれた手を払いのけて立ち上がる。思いのほか普通に立ち上がることができて浅間は少し拍子抜けた。

魔物は正面を向いたまま下卑た声を上げる。

『金？　あんな紙切れいらねえヨ。あれはヤル。独り占めだぜ？

その代わり……お前らの命を貰ウ』

「ッ！」

『ナァニ、安心しろ。お前だけは生かしておいてやるヨ。お前らの汚エ血はいらねえかう、あの倉庫ヲ血のプールにしテ、二人で踊ろうぜ。お前は金を手にした喜びヲ、俺は“復活”のダンスでも踊るかナ！　ギャツハツハツハ！』

魔物の笑い声が残響のように頭のなか響く。

去来するのはハリオやマリオ、仲間の顔。言葉より先に、身体が動いていた――

浅間は両手を広げて魔物から距離を取った。瞬間、浅間の両手が黄金色の発光で満たされる。魔物は浅間を見もせず、笑い続けた。

「死ねよ、くそつたれ――」
アース・オブ・メイデン『大地の拷問器具』！」

浅間が咆哮して床を叩きつける。地響きとともに床板が砕け魔物の前と後ろにそれは顕現した。

魔物の眼前にあるのは虚無を内包した棺のような入れ物。屹立する棺の天頂には柔らかく笑う女性の顔。その表情は聖母マリアのような慈悲をたたえ魔物を見下ろしていた。しかしその後方には無数の鋭い槍のような突起を備えた壁が屹立している。

『鉄の処女カ……趣味がいいネエ！ テルキ！』
アイアンメイデン

魔物は愉悦に歪んだ顔を浅間に見せて立ち上がった。そこから動く気配はない。

『知ってるカ？ テルキ。鉄の処女を作らせた女は自分の若返りのために血を集めてたんだぜエ……なんだカ、運命感じちまうナアッ！』
アイアンメイデン

「黙れバケモノ」

浅間がいうとその拷問器具はなにもかもを巻き込んで、その棺に魔物を納めた。棺が閉まる寸前に浅間を見ていた魔物は変わることなく笑っていた。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

耳障りな断末魔が耳朵を叩く。浅間は少しでもその音を遮断しようとしてフードを深く被った。

「なにが、魔物だ……ハツタリかましやがって」

これで終わった。浅間は断末魔の余韻を聞きながらふらつく足取りで玄関へと向かう。

『アアアアア……ッハッハッハア！』

断末魔が笑い声に転換した。

「なッ……」

轟音とともに拷問器具が四散する。なかから無傷の魔物が笑いながら出てきた。破れたクッションから出た羽が舞うなか魔物は手を広げる。その手のひらには灰かに黄色い燐光が残っていた。

グレンは火を特化属性とする魔導士。この魔物はその特化属性ではなく基本属性で浅間の発導に耐えたようだった。グレンと魔物を別のものとして扱うべきなのかもしれないが、力の差は歴然としていた。

『無駄ダヨ、テルキ。お前程度ジャ、俺は倒せねえぜ……まア、お前も“目覚めれば”話は違うかもだけどナア!』

浅間はその言葉を聞きながら崩れるように膝をついた。

魔導士は魔物に対抗するために存在すると聞いたことがある。しかし——こんなの、無理じゃねえか……。

『あと一人ダ。分かったナ?』

浅間は従うしかなかった。仲間の命が乗った天秤は片方になにが乗ろうとも動くことはないのだ。

これは翔太がエムズと契約した翌日のことである――

「翔太あー！」

「ひっ！ まっ、正道君」

終業のチャイムとほぼ同時に2組のドアが勢いよく開かれる。名前を叫ばれて跳び上がった翔太はなんだか謝りたくなったが、昨夜の友情同盟を思い出して心を落ち着けた。友だちという存在に名前を呼ばれる感覚が久しぶりすぎて逆に新鮮に感じる。そしてどこか気恥ずかしい。

そんな翔太を一瞥して同じクラスの凜が「キモッ」といって正道のもとに駆けていった。もう慣れているので気にはしないが地味に傷つく。

赤い髪と胸を揺らして凜は正道に飛びついた。数人の男子生徒が揺れる胸を見てどよめき、女子生徒の舌打ちと重なる。

「正道いー！ ついに私と一緒に帰る気になったのね？」

「お前耳悪いのか？ 俺は翔太っていったぞ」

「はっ？ ……あのオタクになんの用？」

谷間を見せつける凜の目が細くなる。その目を見る正道の目も同様に細められる。密着したままの睨みあいになった。

「悪いが翔太は俺の友だちなんだ」

「嘘」

「嘘じゃねえ。凜、俺の友だちをまともに知りもしねえでオタク呼ばわりすんな」

「な、なによ！ あんなオタクと友だちですって！？ 初耳よ！」

なにながあつたの正道！」

「うるせえなあ。俺が誰と友だちだろうが関係ないだろ！」

「私と付き合うなら友達も選んで欲しいのっ！」

凜はギャーギャーと手足を振り回してわめく。口から飛び出すのは罵詈雑言の数々。なにか落ち着かせる（または排除する）手立てはないかと考えていると激しく上下する胸の谷間に黒い下着がちらついた。

「あ、お前。黒い下着は校則違反だぞ」

「そんなのバレなきゃ大丈夫よ！」

「バレなきゃな」

「は？」

正道が廊下に顔を出す。視線の先には三階へと繋がる階段の踊り場。

その人物は丁度この時間に降りてくるはずだった。

そして正道の予想は的中する。踊り場にいた生徒たちが少しざわついた。“ファンクラブ”のメンバーなのか、なかには黄色い声を上げている生徒もいる。

「きたっ」

今日の“装備”は膝までを覆う銀のブーツに赤のビキニパンツ。両腕には装飾の施された銀の籠手^{こて}。腹筋の割れた腹部は剥き出しで胸部はシルバーの胸当てで守られている。腰に携えられた細剣^{レイピア}が怪しく光る。

緩くウェーブのかかった金色の長髪、強さと妖艶さを兼ね備えた美貌。左目を隠すアイパッチは赤い十字の刻印——生徒指導部所属、情報処理担当。“美しき廃人”、天羽黎亜。その人である。

「げっ」

一緒に顔を出していた凜が天羽を見て逃げようとした。しかし正

道に首根っこを掴まれる。

「天羽先生！ 校則違反です！」

「むっ」

校則違反という言葉に機敏に反応した天羽は威風堂々歩みを進める。そして酷薄な笑みを浮かべながら凜を睨めつける。

「ほう……また、貴様か、朱川凜。国賊の色、黒を身につけるとは大した度胸だ。いいだろう、私が指導してやる。蘭！ こいつを連行しろ」

「御意」

呼ばれた蘭が忍者のように現れた。その瞳には天羽への忠誠の色が浮かんでいる。

「ま、正道いいい！」

踵を返す天羽の後ろを蘭が姉を引きずり去っていく。

急な蘭の登場に唖然としているとこちらを見ていた蘭が胸ポケットから一枚のカードを出した。

金色に輝くそのカードには『天羽黎亜公認ファンクラブ エンジェルウイング』とあった。

「蘭……お前ってやつは」

正道はなぜか親指を立てた。

ことの成りゆきと凜の揺れる胸を見ていた野次馬たちは散り、放課後の平穏が訪れる。正道は翔太のもとへと向かった。

「すまんな翔太」

「い、いいよ。あ、謝るのは僕の方だよ。僕のせいで喧嘩みたいになっちゃったし……でも、あ、ありがとう」

「礼をいわれるようなこととしてねえよ。友情同盟の同志としてはあたりまえだ」

「そ、それ、花鳥院かちょういん百合丸ゆりまるのセリフ……」

「誰だ、その花のような名前のやつは……ってそんなことどうでも

いいんだよ。さっきおっちゃんから、あ、真美の親父さんな？　メ
ールあったんだけど、今日の仕事はないんだと。引越しの依頼だ
けだったらしくて違う日に回ったらしい」

「う、うん」

「でな、今日は特訓しねえか？　俺ん家で」

「と、特訓？」

「そう、特訓」



三階建ての階層ごとに黒白黒と塗り分けられた外壁。丸みという
ものが皆無な外観。巨大な白黒の正方形の横にあるのはガレージだ
というこれまた白黒の正方形。正方形の兄弟のようなそれが正道の
家だった。その存在は明らかに周りの家から浮いている。

「親父いわくこの白と黒は正義と悪を表してるらしいぞ。」「正義が
あるなら悪はある、それを忘れないためだ」だそうだ」

「け、建築士ってなんだかすごいんだね……」

ここに向かう途中で翔太は正道の父が建築士だということを聞か
されていた。

「貧乏だがな。まあ入れよ」

庭を抜けて正道が扉を開けるとカレーの匂いが二人の鼻腔をくす
ぐる。自然と沸き出た唾を吞んで正道と翔太は靴を脱いだ。

「お、お邪魔し、します」

「そんな緊張すんなよ」

正道は笑うが、翔太は他人の家に上がる経験などほとんどない。
しかもそれが友だちの家など夢のなかにしか存在しないものだった。

家の内装も白と黒で統一されていた。玄関から延びる黒い廊下の両端に白いドアが等間隔に並んでいる。

翔太がきょろきょろと忍び足で廊下を歩いていると、カレーの匂いの漂う先から足音が近づいてきた。家人の接近になにをいうべきかと翔太の心臓が早鐘を打つ。

廊下のつきあたりの部屋から顔を覗かせたのはエプロンを身に付けた中肉中背の魔導士。目尻の下がった優しそうな目に輝くのは正道と同じ赤。無精ひげを生やした口元も優しげな笑顔をたたえていた。

「親父だ」

その魔導士が正道の父、剛だった。寝ぐせのついた頭をかく手にはお玉が握られている。

「おう、帰ったか。お、友達か？ そのヒビ割れ眼鏡は「！」

翔太は面喰った。確かに昨日の今日で眼鏡を買い替えるまでに至ってなかったが。初対面の大人にいきなりそこを突かれるとは思っていなかった。優しげな印象は崩れる。

「親父、その変なあだ名つける癖やめろ。おふくろは？」

「母さんは今頃雲の上だ」

いつて剛はお玉を高く掲げて、もう片方の手で目を隠す。

「死んだみたいない方とその動きもやめろ。また旅行か」

正道の母親は健在である。そして旅行癖とっていいほど旅行へいく。今回は海外らしい。おかげで脇坂家の財政は圧迫されている。しかし剛はその姿が見えなくなるほど尻に敷かれているので抵抗しない。

「そうだ。旅立った……帰ってこなくても、いい」

剛は再び目を隠して小声でつぶやいた。

「おふくろにいいつけるぞ」

「燃やすぞ、正道」

「フン、やれるもんならやってみろ」

そんなやり取りを翔太はただ啞然と見ていた。見ている以外なかった。正道は剛を鼻で笑うと廊下の途中にあるドアを開け、手を伸ばしてその部屋の電気をつけた。

そのドアの向こうはなんなのだろうか。翔太からは窺い知ることができない。その部屋から出た冷たい風が廊下に流れた。

「ちよっと、“潜るぞ”」

「ほう。珍しい。真の仕事に支障でも出たか」

「ちげーよ。メインはこいつだよ」

正道は翔太の肩を叩く。翔太が申し訳なさそうに頭を下げた。

「ふむ、君は魔導士か。長髪木偶でくの坊君」

「！」

「やめろクソ親父。翔太の精神が死ぬ」

「翔太君か。名乗らないからついつい。ハッハッハ」

「す、すいません……」

「謝らなくてもいいぞ、翔太。いこう」

正道は小さく謝り続ける翔太の背中を押してその部屋へと向かう。剛はお玉を振りながら廊下を戻っていった。

「でてきたら美味いカレーが待ってるぞお」

その声を背に正道と翔太は部屋に入った。



ドアの先には階段が地下に向かって伸びていた。少し埃臭く、コンクリート打ちっぱなしの壁が冷気を放っていて少し寒い。

「も、潜るってこういうこと？」

「そう。親父特製の“魔導士用”トレーニングルーム」

「魔導士用……」

翔太は乾燥した唇を舐めて正道の背中を追う。正道は防音のためなのか重そうな二重扉を開けるとなかに入っていく。高い天井で蛍光灯が瞬いて部屋の闇が取り払われる。三十畳はあるだろうその部屋には——なにもなかった。灰色の四角い箱。その表現がふさわしい。

「無駄スペースだと思わね？」

正道の声が部屋のなか反響する。ドアを閉めると自分の鼓動が聞こえそうなほどの静謐に包まれた。

「特訓は高校までだったからもうでっかいマーシャルとかドラムセツトとか置いてスタジオかなんかにしてやろうと思ってたんだが、ストレス発散とかいって親父がたまに使うんでな」

正道がぺたぺたと叩く打ちっぱなしの壁にはところどころ焦げたような跡や修復したような跡が残っていた。それも一つや二つではない、所在なく視線を泳がす翔太がどこを見てもその跡はあった。

「こ、ここで発導するの？」

「そう。ここなら誰にも怒られないし、誰も傷つかない」

「誰も……」

「魔導を使いこなそうと思ったらある程度の鍛錬が必要。魔導だけじゃない、それはどんな力だってそうだ。俺たちが箸を持てるのだっていつてみれば日々の鍛錬の賜物だろ？　それは『箸を持てる』という眠っていた力を開花させたということだ。箸を持てることで手も汚さず上手く飯を食べるようになった。それと一緒に魔導士も日々の鍛錬が必要なわけだ」

正道は箸を動かすジェスチャーを交えて語る。その分かるように分からない話に翔太は苦笑を浮かべた。

「説明下手なのは目をつぶってくれ。とにかく、魔導は眠らせておく力じゃないと俺は思ってる」

「で、でも魔導は……傷つけるための力……」

「お前のトラウマも分かるし、傷つけるためってのも本当だ。でも、その対象は悪だ。“俺たち”正義の魔導士はそのことを知ってる。

正しく使われる魔導は人を守る。最終的には魔物ってやつから世界を守るかもしれないねえんだぞ？　そんな力をぐーすか眠らせておくのは違うと思うんだよなあ。魔導士として生まれたからには意味があるんだって絶対！」

「生まれた意味……」

翔太を見つめる正道の色眼は宝玉のように透明で赤い。正道の熱をそのまま色として現わしているような瞳に翔太は正義を感じ取った。

自分もこんな目をしてみたい。正道君のようにここまでまっすぐな感情で動けたら……僕はヒーローになれるかもしれない――

翔太の手がおずおずと自分の左目に伸びる。そして眼鏡を外して、そっと眼球に触れる。

「な、なにを、すればいいの」

笑顔の正道を見つめるその瞳には強い決意の青が揺らめいていた。



「とにかくぶっ放せ」

それが正道の最初の指導だった。二次元に浸っていたおかげで翔太の頭のなかには魔導だけでなく様々な異能に対する豊富なイメージが詰まっている。自分が発導する姿がはっきりと映像化できた。

でも、恐い——口が渴く。小学校のときの友だちの泣き顔が浮かぶ。大人たちの冷たい瞳も。

でも、昨日僕は変わった。こうして支えてくれる友だちができたのだ。魔導を正しく使うことができ、あの友だちの泣き顔は消えてくれるかもしれない。そしていつか笑顔にできる日がくるのかも知れない。

『——！』

翔太は意を決して叫んだ。

自分のなかのイメージは現実のものとなった。魔力の奔流は翔太が思い描いた通りに暴れ、妄想が現実になる感覚は翔太に快感のようなものをもたらした。

しかし指示通りに発導した翔太はなぜか怒られた。

「水浸しじゃねえかッ！」

「ぼぼ、僕悪くないッ！」

翔太が発導した後、部屋は数センチ浸水した。一応排水溝はあったが、床に置いていた正道と翔太の荷物はもれなく被害を受けた。

正道は翔太の特化属性を気にしていなかったようである。

「くう……お前水の魔導士だったな……ミスった」

正道の家族に水を得意とする魔導士はいない。母親は風を特化属性としていた。正道は濡れた教科書をつまんで苦笑する。

「でも、水の魔導ってちゃんと見たの初めてだけど。なかなかすげえな」

「すごいね……」

翔太は水を打ちつけられて色が変わった壁を見ながらつぶやいた。とても自分でやったこととは思えなかった。

「他人ごとかよ」

「だって……」

「まあいいよ。お前が発導できただけよしだ！ さ、今日はここまで」

「え？」

まだこの部屋に入って間もない。特訓という言葉が似合わない唐突な終わりに翔太は拍子抜けした。

「いきなりやりすぎるとぶっ倒れるぞ。それに」

正道の腹が獣のように唸る。

正道は腹をさすって屈託のない笑顔を見せる。

「腹減ったし」



「正道に正義を教えたのはなにを隠そうこの私です」

剛は食卓につくと、スプーンを持った手を挙げた。食卓には白い皿に盛られたカレーとポテトサラダとスープが芳香を立てている。翔太は遠慮したが、正道に押し切られる形で食卓についた。

「そ、そうですか」

翔太はぎこちなく返事を返す。正道は一心不乱にカレーをかきこんでいるし、剛は完全に翔太だけを見ていた。それに、黙っているとなにをいわれるか分かったもんじゃない。

「形だけな」

正道はいいながらおかわりをしに席を立った。翔太はまだ半分も食べていない。カレーは本格的なものだったが、緊張していたため翔太の口に広がる味は曖昧だった。

剛は挙げているスプーンをくるくると回してから正道に向ける。行儀はあまりよくないようである。

「ふん。なんでも物事は一から始まるのだよ正道。一は全というだろう？ 私が形という一を与えたのなら、それは全てを与えたということと同義だよ」

「はいはい」

正道は席につき、スープを飲みながら剛をあしらうように返事をした。

剛はふんと息を抜いて挙げていたスプーンをカレーに滑り込ます。

「うむ。美味し。翔太君も早く食べなさい。食事中に会話をするの

はいかがなものかと思うぞ、親の顔が見てみたいものだ」

「！」

「そのセリフの対象は親父だぞ」

剛は「私は自分を戒めている」などわけの分からないことをいってカレーに集中した。翔太も焦って食べ始める。

食事が終わるとうさぎを模ったリンゴがデザートとして出てきた。それは耳だけをリンゴの皮で現わしたものではなく、デフォルメされたうさぎが皮に彫られているものだった。剛は非常に器用らしい。

「す、すごい」

「暇なんだな、親父」

「フルーツカーヴィングというのをテレビで見テナ。やってみた。ボケ防止だ」

この人がボケると大変なことになるんじゃないかと考えながら、翔太はリンゴを一切れ口へ運ぶ。爽やかな香りとみずみずしい果肉が少し緊張を和らげる。

「私が正道に魔導を教えだしたのは正道が小学校に入る頃だったかな」

唐突に剛が口を開く。

「なに語り始める気だ」

正道が口を挟むも剛は止まらない。翔太は聞くしかなかった。

「丁度その頃、いや、真美ちゃんがいたから幼稚園の頃か……正道が初めて発導してね。それは悪いことに使ったんじゃないが、このままなんでも魔導で解決する子になるんじゃないかと危惧して私はあの部屋を作ったんだ。私の思うところもあったしね」

「暗い話するつもりか。翔太が困るだろ」

「い、いいよ、僕は」

問われて拒否できる状況ではない。剛は満足そうにうなずいて続

ける。

「これは私たち親子の正義の素となる話だ。私は中学生の頃、目の前で友人が魔導士に傷つけられたことがある。それはその頃流行っていた魔導士の通り魔だね。そいつは友人を魔導で傷つけた後、すぐに捕まったんだが……私はなんにもできなかった。その友人からは恨まれたよ、「力があるくせになんで助けてくれなかったんだ」ってね。その友人は魔導士ではなかったし、守るのは私の役目だった……」

正道はこの話しを知っている。なのでつまらなさそうにリンゴを咀嚼しているが一応真剣に耳を傾けていた。

「いいわけではないが、その頃の私はまだ魔導というものを使ったことがなかった。でもあのときに魔導が使えていたら、と思うと悔しくてね。そこから私は魔導を訓練した。悪を許さず、魔導士としてこの手の、この目の届く範囲の人間を守るようにね。……といえば聞こえはいいが本当は失った友人との関係を取り戻したかったんだな。……まあ、そのおかげで私の正義は築かれてゆき、私のなかに流れる正義の血潮はわが息子にも受け継がれたわけだ。ハッハッハ」

剛は快活に笑い終わると、うさぎが躍るリンゴを口に放り込んだ。剛の話は一段落したらしい。

「で、なにが良かったんだ」

「ん？ 剛，sジャステイスストーリー」

（失われた友人との関係……僕もそうなのかな……）

「帰るか、翔太」

「え？ え？」

正道はおもむろに立ち上がって玄関へと歩いていく。翔太は戸惑いながらもついていくしかなかった。

廊下へと繋がるドアの前で頭を下げる。

「お、お邪魔しました」

「うむ。翔太君も悪に溺れることなく、私のように立派な魔導士になりなさい。……まあ私の息子と友だちなら大丈夫だがね」

背を向けたまま話す剛の最後の一言はどこか照れたような雰囲気带着ていた。翔太は頬笑みながら静かにドアを閉じた。

「すまん。バカ親父で」

「ううん……楽しそうな人で、いいと思うよ」

「まあな」

送っていくという正道を制止して翔太は家路につく。

「これから、時間ができたら特訓な」

「うん」

「このリュアン・キンダーグがお前を鍛えてやる」

正道は腕を組んで胸を張った。

「キンダーグじゃなくてキンダー“ク”ね」

「うっ……」

自分から乗って滑った正道は恥ずかしそうに横を向いた。その様子を見て翔太は笑う。

「じゃあ、また明日」

「おう」

なんだかんだで、楽しかったな——初めての友だちの家から帰る

翔太の足取りは軽く。鼻歌でも歌いたくなるような高揚感に包まれていた。



翔太は翌日からエムズでは正道と行動を共にした。部活動など進んでおこなっていない翔太に放課後の時間の制約などない。

翔太が発導できるのは正道の家だけで、魔導を使わない翔太は雑用などをしながら正道の仕事を見ていた。

正道は必要以上に魔力を行使せず、淡々と仕事をこなす。翔太はここまで精確に魔導を操る正道を見て素直に感動していた。

正道いわく、「親父の特訓の成果だ。お前にもできるよ」だそうなのだが、簡単にできるものではないと思う。

それに、翔太の父は“あんな”父親ではない。

正道の魔導は誰も傷つけることはなかった。むしろいく先々で感謝されていた。正道のいつていたことは本当だった。発導の結果に生まれた笑顔を翔太は初めて見た。

正道や真は翔太に魔導の強要はせず、翔太の意思に任せるとのことだった。真美もそういつてくれていた。

最近ではそんな優しい“友だち”のために力になりたいと思っている。

でも、

——僕が魔導を正しく使うことなどできるのだろうか。

その想いは消えてくれなかった。

翔太が初めて人を守るため魔導を使ったのは満月が輝くある夜のことだった。



『GAME SHOP タートル』

美泉坂通り路地裏。煌々と輝く娯楽施設のネオンが路地裏の闇の輪郭をさらに濃くしている。その店舗はその闇に紛れるように存在していた。

自動ドアの向こうに見える店内は薄暗く、人を寄せ付けない雰囲気醸し出す。亀のキャラクターが描かれた看板の電灯は明滅を繰り返し、虫すらもその場に足をとどめない。

一見いかかわしいDVDかなにかの店のようにも見えるが、ここはゲームソフトやハードだけを売る列記としたゲームショップである。

店としてはこじんまりと怪しいがその品揃えは大型店舗並み、しかもこの店は新作ゲームが“フライングゲット”できる。無口で無愛想な店主のおかげで「菓の販売をしてる」や「武器の取り引きもおこなっている」などまことしやかな噂も立っているがゲーマー間では穴場として有名である。

翔太もタートルの常連だった。

タートルでは新作ゲームを発売日二日前の午前零時丁度に販売する。その時間帯は危うい空気が漂う美泉坂だが、誰よりも早く新作ゲームをプレイできる誘惑には勝てない。

翔太はこの日新作ゲームを手に入れるためタートルに訪れていた。翔太は代金を支払い、無言の店主から商品を受け取るとそそくさと店を出る。外は一瞬目を閉じてるのかと思ってしまうほど暗く、

翔太を不安にさせた。

この闇に乗じてブラッドが忍び寄っているかも知れない。翔太の携帯が示す時刻は午前一時。

翔太は午前零時丁度に辿り着こうとしていたが十一時頃に寝てしまいこんな時間になった。エムズでの仕事や正道の家での特訓に疲れているのだ。ただ、その疲れは充実感を伴っていたので翔太本人は疲れとは感じていないが。

「も、もうこんな時間……」

翔太は辺りを見渡してから自転車にまたがった。

翔太は暗い路地を縫うように走る。ブラッドなんかがいるかも知れないが徒歩ではない分、気は楽である。明るい大通りの方に出てもいいのだが、そこにはナンパ目的の路上駐車やタクシーが多く走りづらい。深夜だというのに往来も多く、人混みが苦手な翔太にとっては避けたいところだった。

しばらく走っていると地鳴りのような音楽に自分が近づいていつてるのが分かる。ここはクラブ『チルドレン・オブ・ナイト』の裏手にあたる道だった。

チルドは美泉市で最大のクラブだと聞いたことがある。だがそれだけ。翔太はチルドに対する認識はそれだけだった。漏れ聞こえる低音から店内の様子を想像してクラブという場所は自分のいくところじゃないな、とぼんやり思う。

「あっ」

翔太は過去、この場所で不良の喧嘩を目撃したことを思い出した。そんな場所に自ら向かうわけにはいかない。

翔太はこの道を避けようと人が多くて苦手な大通りの方に向かうとしたが、視界の隅に捉えた影に気を取られた。

（うわ……なな、なに）

翔太は電柱に自転車を寄せて隠れる。

チルドの裏手には一台の車が止められており、そこに向かって三人の影が歩いていく。その影は男が二人に女が一人に見える。

会話は聞こえてこないがナンパかなにかのように見えた。

そんなところを見ている仕方ない。翔太が帰ろうと視線をそらすと慌ただしい足音だけが響いた。

（えっ？）

見ると、一人の男の影が女の影を抱いて車に押し込めていた。

（えええええっ！？）

もう一人が運転席に駆け込み、車が走り出す。そのとき裏口が跳ねるように開き、大声で誰かの名前を叫ぶ女が飛び出してきた。長髪を揺らし車を追う、小柄なシルエット。

翔太はそのシルエットと声に覚えがあった。

「朱川……凜？」



翔太の見立て通り、その女は朱川凜だった。

車を追いかけている途中で転んだ凜は後ろからきた自転車に驚いていたが、それが翔太と分かって少しほっとしたようだった。

胸の開いたワンピース丈のTシャツ、等間隔に楕円形の穴があけられている黒のレギンスに赤のパンプス。凜は学園にいるときとは違い、派手な格好をしている。化粧も一段と濃く、年齢をいくつか引き上げている。二十歳といっても誰もが納得するだろう。

濃いアイシャドー、羽のようなつけまつげの下から睨む凜の左目は青く輝いていた。

(僕と同じ……)

普段は見せない格好と色眼に翔太は息を呑んだ。

翔太が凜を見つめていると、顔を歪めて凜が立ち上がった。その顔からは先刻見せた安堵の表情は消え去り、浮かんでいるのは焦燥と怒りのようなもの。凜は眉間にしわを刻んで叫ぶ。

「なんであんたがこんなところにいんのよ！ まさかストーカーなわけ！？」

「た、たまたまだよ！ そ、それより、どうしたの？」

「……そうよ、あんたと話してる暇なんかないわ」

凜は翔太を無視して再び走り出そうとするが、転んだ際に膝を打っていたように引きずるようにしている。穴の開いたレギンスからは赤い鮮血が一筋流れていた。

見かねた翔太が凜の腕を掴んだ。振り返る凜の瞳は涙で潤んでいた。翔太のなかで揺れていた決意というものが固まった気がする。

「なによ！」

「う、後ろ、乗って。追うんでしょ、さっきの車」

「えっ？」

「い、いいから、乗って！」



凜の友だちが誘拐された――

翔太と凜。二人を乗せた自転車は夜風を切り裂き、闇を駆ける。美泉坂を抜けると目立つ灯りは街灯だけとなった。喧騒もなく、静謐な夜気のなか響くのは少女の声と少年の荒れた呼気。

車は見失ったが、携帯の『お友だちリンク』なるGPS機能を使い。さらわれた凜の友だちの持っている携帯を追跡することができた。

凜が後ろからナビゲーションするなか翔太の漕ぐ自転車は潮の匂いのする方向へと進んでいく。

緊迫した状況だが翔太の頬は紅潮している。自分でも顔が熱いのが分かった。翔太の背中には初体験の柔らかい感触が密着しているのだ。凜のことは得意ではないが男としていやがおうにも意識してしまう。

しかしそんな状況ではないと翔太は首を振る。これは完全な事件なのだ。魔導士とはいえ高校生二人が追いかけて解決できる問題ではなかった。

「あ、朱川さん。ぼ、僕の携帯から警察に連絡して」
翔太は汗を拭って、振り向かぬまま凜にいう。

警察に連絡して状況を伝える。それが考えうる最善の方法だった。犯人の行動を手にとっている今なら解決も早いだろう。しかし、凜は数瞬の沈黙の後つぶやく。

「……警察は、ダメ」

「どうしてっ」

「ダメなの！……学園にバレたら先輩、退学になっちゃう……」
凜の声は震えている。

「先輩？」

「部活の先輩なの……ユウコ先輩。先輩、この前煙草吸ってるのがバレて自宅謹慎中だったの。それを私が無理やり誘って……ユウコ先輩綺麗だから、魔導士の男に声かけられて……それで……三人で出ていって……様子見にいったら……誘拐されちゃった……五十島……私、どうすればいいの……」

嗚咽混じりの声が翔太の背中で響く。

大事な友だちなのだ。その友だちが自分のせいで危険にさらされている。少なくとも凜はそう思っているのだろう。翔太はポケットから出しかけていた携帯を仕舞い込んだ。

警察が呼べない……それじゃあ、どうすればいい？ 人間を誘拐するなんて相手はおそらく普通の人間じゃないだろう。魔導士だというその男たちはもしかしたらブラッドかもしれない。そんなところに飛び込むなんて自殺行為だ。

せめてまともに魔導が使えたら——翔太は発導できるようになったからといっても、それは正道の家だけの話だ。人を守るほどの自信と実力はない。

友人たちのおかげで魔導を人のために使いたいと思うようになった、正道に魔導を教わるようにもなった。しかし、まだ足りない。タイミング悪いよ……——翔太は歯噛みしながらペダルを踏み込む。

「あっ」

翔太は思わず声を上げた。

いるじゃないか、この状況を打破してくれそうな魔導士が。正義をその目に宿した“師匠”が。

しかし頼っていいものか……。軽くあしらわれるんじゃないだろうか。こんな危機的状況であっても翔太の頭にはそんな考えが真っ先に現れる。

「あ、朱川さん……」

「……なに」

「こ、こういうとき、協力してくれたら。それは、本当の友だちですよね？」

「……そうね」

「今からいう相手に電話をかけて僕の耳に当ててください。う、運転中の電話は危険ですから」

潮の匂いがだんだんと濃くなる。自転車は貨物倉庫が立ち並ぶ第一埠頭へ向かっていた。



『正道ッ！』

『——誘拐された——』

「ふぁ？」

正道が寝ぼけた耳で聞いたのは、叫ぶ凛の声と聞き取りづらい翔太の声。それと、「誘拐」という単語だった。

なんで、二人がペアで？ ——とまどろみのなかまずはそう考えたが日常生活ではあまり口にしない単語と緊張感のある声に正道は意識を覚醒させた。どうやら仲直りとかそういう感じではなかった。

向こうのスピーカーが拾う風の音がごうごうとうるさく、翔太の
声が聞こえづらくしている。焦って話す翔太の口調がさらに聞き取
りにくくする。

正道の問いには反応しているらしいがその返事は断片的にしか聞
こえない。

『正道く——第一埠頭倉庫——助けに——あっ……』
『きゃっ』

風の音が止んだのと凜の悲鳴はほぼ同時。そして、通話が切れた。

「おいつ、翔太!？ 凜!？」

呼びかけに応じる者はいない。心臓が早鐘を打つ、無音の携帯が
正道の不安を掻き立てる。

「くそッ！」

これはただ事ではない。

なにが起きているのか？ 誰が誘拐された？ そんな推察をする
より先に正道の身体は動きだし、正道は携帯だけを握り締めて家を
飛び出した。

静まり返る深夜の住宅街に正道の漕ぐ自転車が疾走する。
場所は聞いた。

第一埠頭倉庫街——そこは廃墟と化した倉庫が立ち並ぶ閉鎖区域。
赤レンガ倉庫のように再開発の計画が上がったが莫大な費用からそ
の計画は頓挫し、今では誰も近寄らない。

そんなところでなにをしているのかは分からないが、危険なこと
は間違いない。誘拐という言葉からしてそれは確実。

そこに今から飛び込んでいくと思うと正直恐い。
しかし、翔太が助けを求めている。叫ぶ凜の声は切実なものだっ

た。

友だちが自分に助けを求めているのだ。助けられなくてなにが友だちか。

「待ってろよ……翔太、凜！」

正道は一人叫んで、ペダルに力を込めた。
速度超過で走る正道の自転車は見えない恐怖へと突き進んでいく。



第一埠頭倉庫街。翔太と凜は二人の男と対峙していた。

ところどころヒビ割れ、草が顔を出すアスファルト、そこに点在する煙草の吸殻、スプレー缶、菓子袋。利用されていない倉庫が壁のように両側に立ち並ぶ。光源は男たちの車のヘッドライトと月明かり。翔太と正道を繋いでいた携帯は今は翔太のポケットのなかで沈黙している。

「なに、追いかけてちゃってんのよ。君たち」

「なんだ、ガキじゃん。お前らなに者？」

いいながらヘッドライトを背に受け、二人の男が歩いてくる。逆光で男たちの身体の輪郭しか見えない。しかし、そのなかでも分かれることがある。影のなか灯る黄金色と緑の光。地と風。男たちは凜のいう通り魔導士だった。

そのことを確認した翔太は男たちに合わせるように後退する。凜もその背中に隠れるようにして下がった。

その様子を見てへらへらと笑う男たちを倉庫に付けられたセンサーライトが照らす。

ホストクラブにでもいそうな整った顔立ち、金髪の『風』の魔導士と銀髪の『地』の魔導士の二人。二人は黒のパーカーに黒のジーンズという出で立ちだが、そのパーカーの下には洒落たシャツやネックスレスが見える。

「……ブラッド」

翔太がつぶやいた。凜からは声をかけてきた男たちがブラッドだ

ということとは聞かされていなかった。だから断定ではない。

クラブなどでは色眼をさらして遊ぶことが流行しているらしく、その判別はつかないらしい。男たちはあのパーカーの下で格好でユウコに接触したのだろう。男たちは車から降りる際にわざわざ着替えたようだった。

噂に聞く黒づくめの格好と男たちが纏う雰囲気から翔太は目の前の二人がブラッドだと判断する。

「ご名答」

金髪の男が口角を吊り上げる。落ち着いた態度、落ち着いた声色。しかし、目は笑っていない。

「邪魔、しねえでくれるかなあ？」

銀髪の男も落ち着いてはいるが、金髪の男とは対照的に危うい狂気を全身から放出している。銀髪の男はポケットからピンクのストラップのついた携帯を出して揺らす。それは凜の携帯にもついているものだった。

それを見た翔太の後ろで凜が息を呑んだ。

「先輩のッ……」

「なんだっけこの携帯？ お友だちリンク機能ついてるやつじゃねえ？ 便利だよねえ……追っかけてくるのが手に取るように分かっ
って」

銀髪の男の手に吊り下げられた携帯の一部が点滅している。

お友だちリンク機能は使用中、その両方の携帯の位置情報が分か
り、携帯の一部が点滅する仕組みになっている。

そのことは分かっていたが、追いかけるにはそうするしかなかった。男たちがユウコの携帯を探らないことを祈っていたのだが、運は味方してくれなかった。

「でも、もういらねえや——」

男の手から携帯が離れる。アスファルトに弾んだ携帯は男のブー

ツに遮られて翔太と凜の視界から消えた。ピンク色のストラップが一筋の血のように男のブーツの下から出ている。

「お友だちリンクが切れました……ハッハッハアッ！」

銀髪の男は踏みつけた携帯をアスファルトですり潰すように足首を動かす。破碎音のち、上げられた男のブーツの下には碎けて中身をぶちまける携帯とちぎれたストラップ。

「誘拐なんかしてなににするつもりよッ！」

男の行為は友情そのものを踏み潰されたようで――凜が振り絞るように泣きながら叫ぶ。銀髪の男は笑って、

「お前の思ってるようなことはしねえよ。というか“なにもしねえ”。俺はお前の方が好みだから後で楽しもうかと思ってるけどな……ククッ」

「あんまり仕事のことをいうな」

いやらしく笑う男を制止して金髪の男が喋りだす。

「わざわざ、場所変えたんだ。君たちのために。ここなら色々自由にできると思って」

金髪の男がフードを深々と被る。酷薄な笑みが翔太を震えさせた。銀髪の方の男も「髪型が……」と口を尖らせながらフードを被る。男たちの雰囲気が変わる、闇の中染み出る狂気がじわじわと忍び

寄る。

「これが最後の仕事らしいんだよ。君たちには分からないと思うが、大事なんだよね」

「なあに、殺しはしねえって！ ルール違反だからな。そのノッポなオタクを喋れなくして、後ろの女の子と“遊ぶ”だけだ。見るか？ お前どうせ童貞君だろお？」

「くッ……」

膝が震える。喉がひりつく。バカにされて、凜を傷つけるといわれたのに、なにもできない。なにもいえない。

翔太の背中にしがみつく凜も同じ恐怖を味わっているのだろう。正道がくる気配はない。ブラッドの二人は両手に殺気を携えてにじり寄ってくる。

もう、限界だ――

こんなとき、二次元のヒーローたちはどうする？ 力を覚醒させて戦う？ 仲間が助けに入る？ 仲間……正道君ならどうする？

駆け巡る思考のなか翔太は正道を思い浮かべた。翔太が知りうる魔導士のなかでもっともヒーローに近い存在。

正道は悪を許さない。その強さに翔太は憧れを抱いている。

『憧れてんだろ？ 魔導で敵を倒すヒーロー』

正道の声が脳内で再生される。

『力は正しいベクトルで放ったものが力と呼べる。それができるんだよ、俺たちには』

――正しいベクトル。それが向かう先は悪だ。人を傷つけることをなんとも思っていないブラッドのような。

その正しい力を僕に与えるために正道君は魔導を教えてください。ここでもしなかったら、僕は、魔導士失格だ。

正道君はきてくれる……はず。だからそれまでは僕が――

「あ、朱川さん。魔導は使える？」

翔太はブラッドの二人を見据えたまま小声で語りかけた。

「使えない……」

「分かった……こ、ここは僕がなんとかする。朱川さんは逃げて」「なにいつてんのよッ」

振り返った翔太が見た青い瞳からは大粒の涙がこぼれていた。

——ああ、まるでアニメ。ヒロインが朱川さんでそれを守る主人公が僕。いや、主人公は正道君か……それと、ヒロインは来栖さん。僕は脇役。

でも、それでいいや。主人公は脇役のピンチに遅れてやってきてくれる。それまでは守らなきゃ。男だろ、僕。

僕は『僕』というキャラクターになりきれればいい。自分の思い描く、僕に。それなら、恐くない。

「なにゴチャゴチャ喋ってやがる」

銀髪の男が怪訝そうに声を上げる。金髪の男は静かに両手を属性色に光らせた。

「走れ！ “凜”！」

翔太が叫ぶ。顔つきの変わった翔太を見て凜は驚き、ためらいながらもいわれた通り倉庫と倉庫の隙間を駆けていった。

ブラッドの二人は呆氣にとられた様子だったが、すぐに銀髪の男の方が走り出そうとした。その前を翔太が両手を広げて立ちはだかる。

身長はここにいる誰よりも高い翔太の姿は大きく、威圧感さえ放つ。

「僕が、相手だ」

ブラッド二人を前に翔太は——笑った。



流れる景色は速く。見慣れた街並みのはずなのに、自分がどこを走っているのか分からなくなる。荒れた呼吸で入ってくるのは排気ガス。潮の匂いはまだしない。

「くそっ、遠いよ!」

悪態をついてさらにペダルに力を込める。正道の家から海岸線に出るまでは距離がある。しかし、遠いなら早く漕げばいいだけのこと。距離を理由に諦めるなど正道の考えにはなかった。

ふと、ポケットの携帯が鳴動していることに気づいて、正道はポケットを探る。けたたましいギターの着信音のなかディスプレイに表示された名前を見ると『朱川 蘭（妹）』とあった。正道は必死で足を動かしながら電話に出る。

『正道。姉様がない。電話にも出ない。……正道。息が荒れているぞ。姉様とよからぬことをしているのか? “第一埠頭で”』

「してねえよっ! てか場所分かんのか?」

『分かる。お友だちリンクというGPS機能があるからそれで追える。先日の不貞行為より導入した』

蘭は抑揚の薄い伶俐な声で言葉を紡ぐ。先日の不貞行為とは凜が蘭の目を盗んでチルドにいったことだろう。

『なにか聞いてないか。正道』

「……蘭、落ち着いて聞けよ。凜と、それから翔太。なんだかヤバいことに巻き込まれたらしい。俺は今その第一埠頭に向かっている」
逡巡のちに正道は伝えた。今はそれだけしか情報がない。そこ

に誘拐などつけくわえても混乱を招くだけなのでいかなかった。正道は自分でいったその言葉が曖昧すぎてさらに不安になる。

『……』

受話口の向こうで蘭が息を呑むのが分かった。

「俺がいくから、お前は安心……」

『正道。今どこにいる』

正道を遮って蘭の強い声が響く。正道はいわれた通り今いる場所を告げた。

『了解した。正道は自転車なんだな？ それだと時間がかかる。目的地も遠い。その先の大通りを右へ曲がれ』

「そっちは反対だぞ！」

『いいから、曲がれ。早く辿り着きたいのだろう！』

「ッ、分かったよ！」

通話が切れる。怒気を孕んだ蘭の声など初めて聞いた。

正道は左へ曲がりかけていた自転車を方向転換させ右へと進んだ。焦る正道の目に映るのは寝静まった高級住宅街。家々のシルエットが大きく、庭も備えている家が多いためか、どこか間延びした雰囲気さえ感じる。

正道の足は自然と緩慢な動きになっていた。この方向に進んでも翔太や凜から離れているだけなのだ。蘭からも連絡はないし、繋がらない。焦燥から正道は叫びだしたい感覚に襲われた。

不意に道路の奥が丸く光った。その光は嘶くエンジン音とともに正道に接近する。――赤のホンダCBー400。そこにまたがっているのは少々不釣り合いな体躯。赤いライダースーツを身に纏い、赤いフルフェイスの玉虫色したシールドが街灯に煌めく。

「ありゃ、蘭か……」

正道は道路の真ん中に停まる自分に向かってきているバイクを呆然と見ていた。そのバイクの背景には周りの家々より一際大きいシ

ルエットがそびえたっている。横にも縦にも巨大な建造物は家というよりもどこか博物館のような印象を受ける。バイクは今までどこかを走ってきていたわけではなく、そこから出てきたのだ。

「金持ちなのね……てか、免許取得は校則違反だぞ、蘭……」

いいながらも正道はにやける。蘭のいつていたことが分かった、確かにこれなら早く辿り着ける。

正道は自転車を降りて手を振った。

しかし、蘭の駆るバイクはスピードを緩めない。

「えっ？　ちよっ！　ちよっ！　ぶつかる！」

「乗れ！　正道！」

その叫びと正道とが交錯する。その瞬間正道の身体が宙に浮いた。

「いくぞ。正道」

気がつけば正道は蘭の腰に手を回していた。足元にぶら下がっていたヘルメットを被ってうなずく。

「うん」

立場逆だろう——とか思いながら。



凜の駆るCBはフルスロットルで大通りを疾走する。信号には捉まるが、自転車より断然速い。

常に風を纏っているせいで、かいていた汗が急速に冷やされ寒かったが弱音は吐かなかった。正道はスウェットパンツにTシャツと、防寒のことなど考えていない寝間着姿なのでそれは仕方ないことだった。

「どういこと。正道」

信号待ち。蘭がもどかしそうにアクセルを吹かしながら訊く。

「俺も分かんねえんだ。翔太から電話があつて、凜の声もして、それで、助けを求めてて……飛び出した」

「姉様は今日またチルドへ向かうようだった。ユウコという先輩を連れて。私は反対したが飲み物に一服盛られたようで。気づいたら眠っていた」

「一服って。どんな姉妹だよ、お前ら」

「姉様を守るのは私しかいないというのに。不覚だった」

蘭の気持ちを表すようにCBが嘶く。

「お前ら親は？」

「健在だ。だが、二人ともほとんど屋敷にいない。父も母も社長でな。毎月が師走のように忙しい。私は幼少の頃から奔放な姉様を支えてきた。家事はバトラーやメイドがこなしてくれるが屋敷の外の出来事やプライベートには介入してこない。だから、姉様を守るのは私。姉様はあの性格だから昔からトラブルが多かった。最近では夜の街に出よう出ようとする。私はそんな姉様を危なっかしくて見てられない」

朱川凜と蘭。二人は双子だが全く違う人格がその繋がりを曖昧にさせている。蘭は凜と常に行動を共にし、想いを共有する。まるで蘭は凜の従者のようにしているがそれは凜の行動を把握し、予測するための行動なのかもしれない。

信号が青になる。

一緒に並んでいた車がぐさま見えなくなるほどの速度上昇。嘶くCBは弾丸のように道路を滑る。

「今日は今までで最大のトラブル」

「俺もだ。こんなこと経験したことねえよ」

「正道。私は姉様を守るため幼いころから様々な武術に触れてきた。同じく魔導もある程度は使える。私も戦力になるぞ、正道」

その身にそぐわない臂力はそのためか。しかも魔導まで……――

しかし、

「……そうならないことを願う」

戦いはできるだけ避けなければならない。



「僕が相手だあ？ 笑わせんな、ガキが」

両手を広げて立ちふさがる翔太を銀髪の男が睨み上げる。その瞳を睨み返して、聴覚を集中させる。翔太の耳に凜の足音は聞こえない。うまく逃げてくれたようだった。

これで凜を巻き込む心配はなくなった。翔太が使うとすれば水の魔導である。それは水という性質上、周りを巻き込みやすい。心配事は冷静なときに減らしておかなければ。凜まで怪我をしたのでは洒落にならない。

「君は魔導士？」

金髪の男の問いかけに翔太は無言で右目のコンタクトレンズを外した。そこに輝く青が真っ直ぐに金髪の男の色眼とぶつかる。

「水か」

「どうせ、シヨンベン臭い魔導しか使えねえんだろ……どうでもいいけどよ。その目……むかつくぜ」

それが鬨とぎの声となる——いうやいなや、銀髪の男が暴力的な笑みを浮かべて後方へ跳んだ。

両手には黄金色の閃光——男はその手を地面に叩きつけて咆哮する。

「砕けろ！ 『乱暴者の泥人形』！」

翔太の視界からブラッドの二人が見えなくなる。

入れ替わるように見えたのは空気を震わす咆哮とともに現れた巨大な土気色の上半身。振りかぶられた拳は異様なほど巨大で、なに

もかを押し潰してしまいそうな圧力を持っている。
その拳が翔太目がけて振り下ろされる。

『——！』——衝突の衝撃にその声は呑み込まれた。

乱暴者の名にふさわしく泥人形の攻撃は一撃では止まらない。一撃、二撃、泥人形は自らの破片をまき散らしながら破壊の手を休めない。四撃目で右腕が折れ、次で左腕が折れ、泥人形は哀切な咆哮を上げ消滅した。

「ハッ！ 死んだか？」

ブラッド二人の目には翔太の姿は映っていない。土煙りが舞う状況、月明かりと車のヘッドライトの仄かな光源のなかでは視界が悪すぎた。

「油断、するなよ」

「あんなガキの水の魔導じゃ俺の魔導は防げねえよ。あの女捜しに……！？」

金髪の男の忠告を無視して銀髪の男が歩き出す。土煙りに近づいた銀髪の男は不意に跳び退く。

土煙りのなかからは“冷氣”が漏れ出していた。やがて雲が晴れるように土煙りが風に流れていく。そこに青い光点が灯った。そして吃音もない翔太の声が響く。

「水なら確かにダメだったかもしれない、でも氷なら防げると思った……『氷結障壁』フリージングシールド、一発もらったけど僕としては上出来」

ブラッド二人の前に現れた翔太は崩壊しかけた氷壁に守護されていた。

ただ、一発もらったというのは嘘ではないらしく、眼鏡は地面でひしゃげ、後ろでまとめていた長髪は束縛から逃れ、風になびいていた。

「チッ」

銀髪の男が悔しそうに舌を鳴らす。

「……氷も水と同じ属性だったね。あの瞬間に発導するとはたいしたもんだよ。でも、二人同時ならどうなるかな。挨拶は終わりだ――

――『牙風^{がふう}』」

金髪の男がずっと片手を突き出して静かに発導した。不意打ちのように放たれた風に翔太は反応できなかった。刃のような緑色の風が氷壁を砕き翔太を切り裂く。その風に押されるように翔太は倉庫のフェンスに衝突する。センサーライトが作動し翔太の姿をスポットライトのように照らした。

「今度は外さねえ……押し潰せ^{ヘンマリングアース}『叩きつける大地』！」
『氷結障――』

それを好機と見て銀髪の男が発導した。槌のように隆起した大地が翔太を倉庫のシャッターごと打ち抜く。轟音のなか、かすかに聞こえた翔太の発導と氷の残滓に銀髪の男は苦々しい顔で倉庫のなかへと進む。その後ろを金髪の男も追従した。

倉庫のなかは大型の棚が整然と並び、荷物が置かれていた名残を残していた。天井はところどころ抜け落ち、月を垣間見ることができる。そこから差す月光がわだかまっている闇を照らす。

棚に残されたドラム缶やダンボール、その影に翔太は息をひそめていた。

赤い血がひび割れた床を打つ。もはやどこが痛いのかも分からない。全身が痛い。鼓動するごとに痛みが襲い、身体まるごと血管になったような気がする。

「おい、どこだクソガキ。隠れても無駄だぞ」

電気は生きていたようで天井の照明が灯る。どこか少しげな銀髪

の男の声が倉庫に響く。その音のなかにはもう一人の足音も鳴っている。

二人の足音は確実に翔太に近づいてきていた。翔太は息を整えて、ぼやけた視界で月を見る。

「僕はなにをしてるんだろ……ゲーム買いにきただけなのに」
翔太は息だけでつぶやいて笑う。

正道君は今どこにいるのだろうか。ほんとにこっちにきてくれているのだろうか。……多分それは大丈夫、そんな予感がする。この状況に縋っているだけかも知れないけど、正道君は正義のヒーローだから。

翔太はなるべく音をたてないように棚に背を這わせて立ち上がった。

朱川さんは……大丈夫だろうか。ちゃんと逃げてくれたみたいだけど。でももしあの二人のほかにブラッドがいたら今頃朱川さんは……——ゆっくりしてる時間はない、か。

「——どこだー、オタツキーなイケメンくん。……イケメンってのが癪に障るぜ」

棚と棚の間を覗きながら歩く銀髪の男の足元に空き缶が転がって届いた。

「あ？」

思わずその缶に視線が奪われる。

「僕がイケメン？ まさか」

「あ」

声に顔を跳ね上げた男の顔の前には青く光る広げられた両手。

ハウリングレヴィアタン
『海竜の咆哮！』

アースオブ
「クソが……『大地の——』」

神話上の海の竜を模した水流が顕現する。男の発導は間に合わず、男は土片を散らせて水流に呑み込まれた。

海竜はその口に男を挟むようにして倉庫の壁面に叩きつける。その衝撃に倉庫全体が揺れ、弾けた水流の波濤のような水圧に棚が数架倒れた。

翔太は目を凝らす。舞い散る飛沫と粉塵のなか呻きながら這う銀髪の男の姿が見えた。

「よかった……死んでない」

翔太は胸を撫でおろす。相手の命を奪ってしまえばそれは悪である。ダークヒーローという道もあるのかも知れないが翔太は違った。翔太は息も絶え絶えに辺りを見渡す。もう一人の姿が見えない。

「甘いね。敵に情けは無用だよ。こんな風に……『拳風』」けんぷ

その声は翔太の頭上から。金髪の男は緑色の閃光とともに翔太の前に降り立った。

直接攻撃——『装備魔導』と名称されるその魔導は魔導を使役する魔導士の格闘能力を支え、強化させる。

「がッ……！」

近接距離からのボディブロー。男が右拳に纏った緑色の旋風は翔太の鳩尾みぞおちを的確に打ち抜いた。

「君はよくやったよ」

男の声は消えてしまいそんな意識のなかぼんやりと響いた。



倉庫と倉庫の隙間。そこになにかがあるのかさえ可視できない闇のなかですすり泣くような声だけが響く。

凜は暗闇のなか一人震えていた。

寒さもあるが、不安と恐怖。それと自責の念が凜を震えさせていた。

翔太のいわれるがままに走った。自分のもといった場所がどこなのかもはや判然としない。

だが本当にそれでよかったのだろうか。時折鳴る地響きのような音は翔太が戦っている音なのだろう。

——ただのオタクだと思っていた翔太が自分をかばって戦っている。まったく関係のない先輩のために一緒に追ってくれた。私が五十島を嫌ってるのは分かっているはずなのに、なにも聞かずに助けてくれている。全ての原因は私にあるのに私はなにもできない。

このまま私は先輩も五十島も放っておいて逃げるのか。一人じゃなにもできないのか私は。

「……戻らなきゃ」

凜はメイクの崩れた顔を拭って立ち上がった。齒を食いしばって頬を叩く、そして音の響く方へと走りだした。怪我をしている膝は気にならなかった。

——私だって魔導士なんだ。誰かを守ることくらいできなくてな

にが魔導士よ！

「神様……」

走りながら凜はつぶやく。神様なんているとは思っていない。いるならこんな状況にはなっていないはずだから。でも縋れるものがあるなら縋りつきたい。凜は願った。

お願い、私に二人を守る力と勇気を。



「だあー、くそつたれ！ 寒いし、痛えよ、ボケが……こりゃ肋骨何本かいったな」

血の混じった唾液を吐いて水浸しの銀髪の男が翔太に近づく。うずくまる翔太の横には金髪の男が立ち、翔太を見下ろしていた。

「だから、油断するなといったんだ」

「はいはい、悪かったね。で、こいつどうすんの？ まだ気も失ってないみたいだけ、どっ！」

「がッ」

銀髪の男が翔太の腹を蹴り上げた。翔太はその勢いに任せて仰向けに倒れる。手放しそうになった翔太の意識はギリギリのところまで保たれていた。

口のなかで鉄の味で満たされている。息苦しい。耳鳴りと自分の鼓動の音で男たちの会話はよく聞こえない。これからどうする……手は動くか？ 声は出るか？ 翔太はかすむ視界で男たちの姿を確認しながら打開策を練る。

翔太は身体に力を入れるが仰臥した身体はうまく動いてくれない。

重力が何倍にもなったかのように感じる。

——万事休す、なのか。いや、まだだ……主人公がまだ登場していない。ふがない脇役の時間稼ぎはまだ……終わらせちゃいけない。

「うう……ああ……あ」

翔太は呻いていた。呻く翔太の口を銀髪の男が押さえつける。男の手は冷たく、髪から滴った水滴が翔太の頬を打ち、感覚を少し鋭敏にさせた。

「もういいって。充分だよ、充分。お前の役目は終了。あの巨乳の女のことは俺が責任とって“保護”してやるから安心しな。……だから」

翔太の口を押さえている手が黄金色に光を放つ。

「お前はここで寝てろ——」

魔導の零距离発導。愉悦に歪む男の口がゆっくりと開く。次の瞬間、翔太の耳に聞こえたのは男の声ではなかった。

「ひっ、『火の玉』！」

それは聞く者にも緊張を与えてしまいそうな裏返った声。“霊的な火の玉を目撃してしまったときのような叫びにも聞こえる。しかし、それは違った。

翔太は銀髪の男の顔面に小さな火球が直撃するところを間近で見た。

「ぎゃあッ！」

銀髪の男が煙と髪の焦げる臭いを放ちながら翔太の横を転げる。翔太は火球の飛んできた方向へ首を曲げた。そこには不思議そうに自分のてのひらを見る凜の姿があった。「ほんとに出た……」などどつぶやいている。

「あ……朱……川さ、ん？」

「“凜”じゃないの？ 五十島」

凜は腕を組んで翔太を指差した。ぼろぼろの翔太を見て泣きそうになったがこらえた。自分がしっかりしないとこの場は乗り切れない。

よく頑張ったと口に出そうとしたが声に出すと嗚咽も漏れてしまいそう。代わりに凜は突き出した手の形を変え、親指を立ててみせた。

——あいつの色眼、私と同じ色してる。……五十島ってあんな顔してたんだ。結構イケメンじゃん。背も高いし……終わったらちゃんと褒めてやる。

「なんで俺ばかり……このクソアマガツ」

凜が翔太から今までにない印象を受けていると銀髪の男が跳びはねるように起き上った。フードは焼け、前髪も半分なくなっている。

「ひっ！ 生きてた！」

「ああッ!？」

「ハハハ、殺す気だったの？」

今まで傍観していた金髪の男が笑う。

「ねえ君。その意気込みはいいけど君の属性は水だろ？ 殺す気なら水を使わないと。初めて使ったって感じかな？」

「わ、悪い？」

いい当てられて、凜の目が泳ぐ。凜は魔導に関しては無知だった。金髪の男は翔太から離れ、凜のもとへと歩いていく。

「悪くないよ、別に。どうして戻ってきたの？ せっかく逃がしてもらったのに。こっちとしては捜す手間が省けてありがたいけど」

「助けに、きたのよ」

「魔導もまともに使ったことのない君が？」

男が一步踏み出す。

「近寄らないでッ、発導するわよ」

凜が両手を突き出すが少し腰が引けている。

「……いいけど。君が怪我するだけだよ。でもそれでもいいか。そろそろ時間がない。君たちは呼んでくれてないから安心してたけど、このままだと警察もきちゃいそうだし」

「さっさとやっちゃえ！」

銀髪の男も翔太から離れて凜へと近づいていった。火の玉の件もあり、今にも発導しそうな危うさを持っている。

「僕はこいつと違って優しいから安心して」

「んだとお？」

金髪の男は食ってかかる銀髪を無視して続ける。

「ああ、そうだ。君の友だち……あの女の子は——残念だけど多分殺される」

「えっ」

「これがオーナーの依頼する最後の仕事。ヒントはあの子が風の魔導士ということ。そして最後の“ターゲット”ということ……勘のいい人間ならこれだけで分かるかも」

「仕事のことはいわねえんじゃないのかよ」

「この子の勇気を賞してね、ささやかな情報という名のプレゼント。友だちがいなくなるのも気の毒に思うしね」

金髪の男はまるで関係がないことのように飄々という。

「殺、される？ そんな……」

凜は突き出していた両手を力なく降ろしてしまった。「殺される」

以降の男の声は自分の意識の外で鳴っているようであり入ってはこなかった。戦意というものが漏れた声とともに出ていく。

「まさ、か……」

翔太は気づいた――吸血鬼の事件のことか？ ブラッドが吸血鬼？ 確かにニュースじゃ狙われていないのは風の魔導士といていた。あのヒントもそうとしか思えない。でも殺すのはルール違反とってなかったか？ 現に僕はこの状況で殺されてないし……金髪の男のいい方もどこかおかしい……実行する誰かが別にいるのか……オーナー。そいつが？

「ふう。よほどショックだったか。戦意喪失だね。……なるべく痛いようにはしない」

金髪の男の手が伸びる。凜は呆然とその場を動けずにいる。

翔太は推察するのを止め必死に身体を起したが、立つまでには至らない。

「朱川さんっ……！」

「ブラッドとしてもこの仕事を失敗するわけにはいかないんだ。ごめんね」

凜の顔が緑光に照らされる。化粧も落ち、毒気の抜けたようなその顔はどこか人形のようにであった。毒気と一緒に生氣も抜けてしまっている。

「くそっ――」

発導しようと翔太は手を伸ばした。その視界を遮ったのは銀髪の男の靴底。

「ッ！」

顔を蹴られた翔太は再び倒れる。

「邪魔すんな」

そのときだった――

「――翔太ッ！ 凜ッ！」

エンジン音が嘶いて、翔太の耳朶を芯の通った強い声が打った。天井を仰いでいる翔太にその姿は見えないが待ち望んでいたその声に翔太は思わず笑いだした。

バイクで登場って、仮面ライダーみたい。それに、このタイミング。やっぱり、正道君はヒーローだ。そういうなにかを“持つてる”。

僕は、脇役の役目、果たせたかな……。

強烈な安堵感。力が抜けてこのまま地面と融合してしまいそうな感覚。快感ともとれる妙な感覚のなか笑いながら、翔太の意識は溶暗していった。



「正道！ 蘭！」

正道たちの到着で我に返った凜が今にも泣きだしそうな顔で二人に駆け寄る。

凜を迎え入れようとしているのか蘭は軽く両手を開いた、しかし凜がいこうとしたその瞬間響いたのは乾いた破裂音だった。

「蘭……」

それは蘭が凜の頬を叩いた音。蘭は真っ直ぐな目で自らの姉を射抜くように見る。開かれた口から漏れた声はその行動とは反したもので、少し震えていた。

「姉様……無事でよかった」

凜は大声で泣いて蘭に抱きついた。

「泣いてる場合ではありません。姉様、状況を」

しばしの抱擁のあと蘭が怜悯な声で訊ねる。その瞳は幕を張ったように潤んでいるが涙をこぼすことはなかった。

「ユウコ先輩が誘拐されて、五十島がいて、追いかけて、五十島が私を逃がして、戻ってきたら、翔太が倒れてて、それで、それで……」

「あいつらだけか？」

凜のぶつ切りの説明に正道が口を挟んだ。その声は低く、怒気を孕んでいていつもの正道の声ではなかった。両手は自壊してしまいそうなほど強く握られている。

倉庫に点在する発導の残滓。それは対峙する二人の色ではない。

翔太が凜を守るために発導したのだ。その翔太は傷だらけで倒れている。その顔は安らかで、どこか笑ってるようにも見えた。

——頑張ったな、翔太……遅くなってすまん。正道は歯を食いしばって心のなかでつぶやく。

もっと速く辿り着けていたらという自責と翔太を傷つけた目の前の男たちに対する怒りが正道のなかで渦巻いている。

「多分、あいつらだけ」

「お前らは友だち助けにいけ。外の車にいるんだろ？」

「でも……」

「ここは俺に任せろって」

心配そうな凜を見ることなく正道は言葉だけで制止する。その視線はずっとブラッドの二人へ向けられている。

「正道……五十島を、助けてやって。あいつ頑張ったんだから……」
「分かってる。凜……あいつ結構かっこいいだろ？」

正道は少しだけ凜に顔を向けた。その顔は柔和で、どこか誇らしげな印象さえ受けた。

「うん」

凜は正道の問いにためらうことなく頷いた。

「正道。すぐ戻ってくる」

再び前を向いた正道の背中に抑揚のない声かけられる。

「おう」

その返事に頷いて、蘭が凜を支えるようにして倉庫から出ていった。

二人が出ていった倉庫のなかに静寂が降りる。時折聞こえるのは水滴が床を打つ音と自分の浅い呼吸音。

ブラッドの二人は闖入者^{ちん}の登場になにもせず立ち尽くしている。ことの成りゆきを見ていたようだったがただ、二人の目には殺気がかもっていた。ブラッドの二人は声を上げた男が魔導士だということとが分かってそれを増援と見なしていた。

「かーっ！ またガキかよ」

沈黙を破ったのは前髪の半分だけがない奇妙な髪形の男。服は濡れ、男の足元には黒い染みができている。脇腹を押えている男が吐く唾には血が混じっていた。

翔太はこいつと戦ってたのか。

もう一人の金髪の男の服に汚れは見受けられなかった。静観するような男の佇まいはもう一人の粗暴な男とは対照的である。

「邪魔ばっかりしやがって、近頃のガキはしつけがなってねえなッ！」

銀髪の男は自分にも当てはまりそうなことを叫んで、歩き始めた。いらいらと大股で歩く男は正道の前で歩みを止める。

「お前も、あのガキみたいになりたくなかったら帰れ」

男が顎で示す先には翔太が倒れている。自分を信じてずっと耐えてくれた友人。凜を守るために勇気を振り絞って発導したのだ。その友人が鼻や裂傷から血を流し無残な姿をさらしている。

それをやったのが目の前にいる二人なのだ。おそらくブラッドなのだろうがそんなことはどうでもよかった。

正道のなかに今まで感じたことのないほどの感情が込み上げてくる。

「ガキ？ 見下したい方すんじゃないよ。あいつはお前らよりよっぽど強え」

吐きだした声は自分でも驚くほどの怒りを帯びていた。

「ああ？」

「あいつは魔導士としては全然かも知れねえけど、優しいやつなんだ。友だちでもないやつを守るためにあんなにぼろぼろになって……人を傷つけても笑ってられるお前らとは違う」

「んだと、こらあ」

銀髪の男は自尊心を傷つけられたようで、片眉をひきつらせて詰め寄る。一触即発な緊迫に割り込むのは冷静なもう一人の声。

「君の大事な友だちを傷つけたことは詫びるよ。でもね仕方なかったんだ。仕事の邪魔は殺さずに排除する。それがブラッドのやり方なんでね。君も邪魔するなら僕たちは君を排除しなければいけない」金髪の男は口元に笑みをたたえて物騒なことをいう。その目は氷のように冷たく凍てついている。

やっぱりブラッドか……——正道は男が放つ静かな威圧感を感じながら応える。握り締めていた手を開閉し緊張から解き放つ。

「思いつきり邪魔するつもりだ」

「それは、困ったね……」

再び沈黙が降りる。同時に息苦しいような緊張感が正道を包み込んだ。

——始まる。

その予感と同時に三人の男が地面を蹴った。



『ローエンアース
燃え上がる大地！』

先手を取ったのは正道の発導。地面から噴き出た火柱がまるで生き物のようにうねりながらブラッドの二人を襲う。

轟々と燃える火柱に銀髪の男が立ち向かい、土の壁を展開した。炎の音で正道の耳に発導鍵語は届かなかった。

火柱はその壁に衝突し、猛々しく燃える炎を希薄なものにさせる。

土の壁はブラッド二人の姿を隠している。火の勢いが弱まり、正道が次の発導を仕掛けようと構えると、見計らったように金髪の男が壁を踏み台に跳躍した。

『らせんふ
螺旋風』

無駄のない冷静な発導。回転するドリルのような風が正道を切り刻まんと迫る。男の虚を突くような攻撃に正道は発導もできずにただの脚力で回避するしかなかった。その風は風の音とは思えぬほど硬質な音を立てて地面に衝突して散った。

『スピアロック
突き刺す槍岩！』

『フランメヴェール
炎膜！』

畳みかけるように無骨な槍が正道目がけて飛んでくる。

正道は反射的に投げるように発導する。飛来してきた槍は正道の頭上に広がった炎の膜に絡めとられるようにして爆散した。

そこで発導の応酬は一時的に止まり三人は対角線上に位置をとった。その間隙に正道は息を整える。

二人は本気できている。翔太はこの二人相手に……分が悪すぎたな、翔太——正道は翔太の運の悪さを呪ったが、かくいう正道もこれはまだ二回目の“戦闘”。場馴れしていそうな目の前の二人とは差があるように感じていた。

今考えるとハリオとマリオはよっぽどのほほんとしていたような気がする。あの二人は余裕にふんぞり返っていた節があったが、本気を出せばどうなのだろうか。

今はそんなことを考えている場合ではない。正道は考えを押しやると大きく息を吐いた。緊張からか呼吸が上手くできていない気がする。

「君、なかなかやるね」

息も乱れていない金髪の男が口を開いた。

「もしかして、ハリオとマリオがやられた高校生って君？」

その言葉は正道に少しの衝撃をもたらした。

「有名人かよ……俺」

「やっぱりそうなんだ。じゃあ君も一緒に持って帰っちゃおうかな」「はあ？」

男は怪訝そうに顔をしかめる正道に笑ってなおも続ける。

「理由は聞かされてないけど、ハリオとマリオが指示も受けてないのに高校生に手を出すわけない。ということは君にはなにかあるわけだ」

金髪の男の言葉に正道は少し首をかしげた。

あの日の狙いは俺？ 俺、なにかしたか？ ——思い起こしたところで正道は判然としない。普通に魔導士として日常を生きていただけである。

「なんもねえって、こんなやつに。あいつらがただバカなだけ」
銀髪の男が言って、笑って、痛んできたのか脇腹を押える。

「……そうかも知れないけどね。まあ僕たちはあの二人みたいに簡単には負けないよ。勝ったら君も持って帰る。それでいいよね？」
「俺らが勝つけどな。お前ぶっ倒したら、全員ボコってあのガキの横に並べてやるよ！ ハッハアッ！」

「てめえ……」

銀髪の男の挑発に理性が崩壊しそうになる。正道は沸き上がる怒りのなか声を絞り出した。

この状況、俺が負けたら全部終わり。翔太も凜も蘭も誘拐された友だちも、そして俺も。

悪が勝つ？ ——そんなことあってたまるか。

「負けるかよ……」

どうしても勝たなくてはならない。みんなを守らなくてはならない。どんな手を使っても……それが自分の正義に反する行為だとしても。

正道は自分のなかで蠢く感情の奔流が抑えられないような気がしていた。この感情に任せて放った魔導は正義なんてものとは程遠いものなのではないのか。それは怒りを原動力にした殺意のこもった魔導になってしまう気がするのだ。

正道の信念が揺らぐ。正道の強い光を放っていた色眼にどこか昏い色が差した。

やはり正義など綺麗事にすぎないのか。

この状況でもし自分の魔導が人を殺めたとしても結果的にみんな

が笑っていれば自分の正義は遂行されたことになるんじゃないのか。

それは悪なのか？ ブラッドと同じ悪？

いや、違うはずだ。正義だけじゃ乗り越えられない場面だってあるはずだ。今はそのとき。正義にもいろんな形が存在するんだ。

でも俺は、歪な正義は嫌だ。

でも……。

答えの出ない自問自答。

不意に声が響いた。

『どうしようもない正義バカっすねえー、マサミチはあ』

それは語尾の下がる気の抜けた高い声。少年のような、少女のようなどっちも取れるその声は聞き覚えのないものだった。ここにいる誰のものでもない。

——それは正道の内側から響いていた。



「誰？」

『あ、聞こえたんすねえ？ マサミチ。でも独り言はやめた方がいい
いっすよお。心療内科に連れていかれますう』

内から響いた声が返事したことに驚きながら、正道は視線を泳が
す。

目の前の二人は様子のおかしい正道を見て顔を見合わせている。
どうやらブラッドの二人にこの声は聞こえていないようだった。

これは幻聴？

この緊迫した状態に精神が耐えられず崩壊したのか？

そうだ、それ以外考えられない。よりによって、こんなときに…
…。

『幻聴じゃないっすよう。僕はマサミチのなかに“ちゃんというっ
す”』

また返事が返ってくる。それは正道の心を読んだような回答であ
った。まるで口を膨らましている“なにか”が見えてきそうなムス
ツツとした声だった。

『マサミチ、さっき悪の方向に心が動いたっすう。正義バカのマサ
ミチだから反動が大きかったんすねえ。だから僕の声が聞こえてる
っす』

「なにをいって……？」

『今は僕との甘い会話を楽しんでる余裕ないっすう。魔力反応びん
びんっす——くるっすよう』

甘いかどうかは別として、内なる声のいう通り、銀髪の男がその手を黄金色に光らせている。正道は目の前の現実に取り戻された。

「なにぶつぶついつてんだこらあッ！ 『弾ける墓石』！」
バーストグレイブ

その名のごとく、暗闇を塗り固めたような三基の墓石が地面から勢いよく飛び出して弾けた。大小様々な破片が石つぶてとなり正道に降り注ぐ。

「ッ！」

謎の声に気を取られていた正道は発導することができなかった。数個のつぶてが正道の身体を傷つける。

頭から熱いものが流れてきて目に入った。

『アイツ、趣味悪い発導っすねえ……あーあ、大事な血が。大丈夫っすかあ？』

正道は目をこすって、それが血だと確認すると大きくため息をついた。

「お前のせいだ……」

『そんなあ。じゃあ、じゃああ、お詫びに協力してあげますう』

「協力？」

『そうですね。強力な協力……なんつつてえ』

「うるせえ。断る」

『うるせえってなんですかあ……ひどい』

内なる声は消え入るような声で落胆の色を正道のなかに響かせた。その声から正道の頭のなかにはデフォルメされた妖精のようなキャラクターが生まれていた。そのまま消えてくれればいいのだが、一度感じた形のない気配は消えてくれない。

「さっきから誰と喋ってるの？」

当たり前の疑問を金髪の男が投げかける。

『ほら、おかしいと思われてるう。マサミチい、声に出さなくても』

思うだけで僕と話せるよう?」

「それなら早くいえよっ!」

正道の突っ込みはむなしく響く。

質問に対する答えでもない的外れな発言にブラッドの二人は目を丸くした。

「お前、おかしくなっちゃったのか! ハッハハ、傑作だぜ」

「これは、まいったね。すぐに楽にしてあげないと、悪化しちゃうね」

『あーああ、“キ印”認定されちゃったあ』

『お前のせいだッ』

『おー、できたねマサミチ。これでトモダチー』

脳内通信の成功を喜ぶ内なる声はどこぞの宇宙人のような声を出す。多分人差し指も一緒に出している。指先が光ってるかどうかはどうでもいい。

『な、なんなんだお前はッ!』

『僕? 僕は……んー、今はやめておこうかなあ……時期尚早? って感じ』

内なる声は思うところがあるのかためらいを見せる。

『とにかく、邪魔すんな!』

『しゅん』

内なる声は感情を声にして奇妙な通信を終える。

「独り言の次はだんまり? 危ないなあ……『拳風』」
けんぷ

両手に旋風を纏った金髪の男が軽快なステップで距離を詰めた。

喧嘩をするような動きではない本物のボクサーのような動き。

そこに重なる装備魔導など威力は計り知れない。しかも男は正道の呼吸を読むように隙を突いて発導するのでタイミングが取りづらい。

『しゃがむっす』

「はっ？」

また通信が始まった。

男が右腕を放つモーションに入る。一瞬の判断、正道は指示に従った。

しゃがんだ正道の髪の毛を男の拳がかすめる。

『マジか』

『マジっす。後ろに跳ぶっす』

正道は跳んだ。その目の前を男のアップercutが緑の尾を引いて撃ち上げられた。旋風から垣間見えた顔は不思議そうな表情を浮かべていた。

指示に従ってなければ……正道は撃ち抜かれて宙を舞う自分の幻を眼前に見た。

間髪入れずに次の指示が飛ぶ。

『炎膜でも張るっすう』

「おかしいな……『牙風』」
がふう フランメヴェール
『炎膜！』

二人の発導はほぼ同時。ぶつかった風と炎は相殺されるように消滅した。流れるような正道の対処にブラッド二人の顔に困惑の色が浮かぶ。

『マジか』

『マジっす。あの程度の魔力なら読むの簡単っすう。エッヘン』
内なる声が腰に手を当てふんぞり返っている絵が想像できた。

しかし、それを咎める気はしない。内なる声がいつてことは嘘ではない気がする。

この声の主がなにかなんて分からない。気持ち悪いが、分かる
うとするには時間もない。

ただ——なにかいる。それが自分に味方してくれていることは確
かだった。

『ちゃららーらら、ちゃららららー。強力な協力はいかがすかあ
ー？ いまならタダだよ』

内なる声はなぜかチャルメラの音楽を軽妙に口ずさんで心を見透
かしたようなことをいう。

『心読めるんなら……分かるだろ』

『……まいどありい』

その声はゾクリと背筋が粟立つような響きと身を震わす快感のよ
うな響きをあわせ持っていた。

内なる声が酷薄に笑う顔が想像できる。

正道も笑っていた——まるでその表情を体現するように。



「気持ち悪い。マジでイッちまったのかよ。なんかキメてんのか」

動きも変わり、酷薄に笑う正道を見て銀髪の男が顔をしかめた。
はたから見れば寒さと痛みで顔色の悪くなってきている金髪の男の方がジャンキーに見えるのだが。

『キャツキャツキャ、次はジャンキー認定！ マサミチ、正義とど
んどん離れていくねえ』

『うるせえ』

正道は気づかぬうちに笑っていた口元を手でほぐす。顔を引きつ
らすような今までのことのない笑い方をしていたようだった。

『変な笑い方させやがって……で、協力ってなにしてくれるんだよ』

『うーん、魔力の流れ読むのと……魔力の強化！』

『強化？』

『そ、ずがーん！ ばぎゅーん！ ちゅどーーん！ って感じい』

内なる声は嬉々として歌うようにいうが、

『分かんねえよ』

正道は会話をしているつもりだが、ブラッドの二人からすれば思
案気に黙りこんでるようにしか見えない。

ブラッドとしてももうこれ以上余計な時間をかけるわけにはいか
なかった。まだ二人、対処しなければいけない人間もいる。いまだ
サイレンの音は響いていないが警察がくるのも時間の問題だ。そん
な焦燥感と苛立ちに飛び出したのはやはり銀髪の男だった。

「また意識飛んでんのか？ こねえならこっちからぶっ飛ばす！

『叩きつける——』
ハンマリング

『まあとにかくう……』

『くるぞ』

『——大地』
アース！』

『——僕と踊ってよ』

槌のように隆起した大地が地面を揺らす。立ち上る白煙とその轟音に隠れるようにその声は響いた。

「なんかいったか!？」

正道思わず声を出す。

轟音と回避に気を削いでいたせいで内なる声に耳を傾けていなかった。

『なにもいってないっすう。マジで幻聴っすかあ？ マサ……』

「なにもいってねえよ!」

反応したのは白煙の向こうにいるであろう銀髪の男だった。それは声を出した正道に対する当然の反応だったが、

『僕とマサミチの会話を邪魔するとは、不届きものですねえ、てんちゅーでござる!』

内なる声は不機嫌そうな声を出した。

邪魔するものにもないだろうと正道は思うが、そんなこと関係ないらしかった。どうやら声の主は世界は自分中心に回っていると思っているタイプらしい。

『マサミチ。あの“金髪クソ野郎”の魔力はそろそろへろへろですう。さっさとあの“金髪クソ野郎”を仕留めちゃいまショウターイムう』

内なる声は金髪クソ野郎のところだけを強調して、嬉しそうにそ

の声を響かせた。

『へろへろ？ 魔力に限界あんのか？』

確かに発導は疲弊を伴う行為だったが正道はまだ魔力の底を感じたことはなかった。

『力ってもんは有限っすう。魔力はみんなだいたいみんな一定っす。マサミチのように鍛錬を繰り返すことで使い方が巧くなるっただけですう。あの金髪クソ野郎は肉体的苦痛と精神的な乱れから消費が激しいんすねえ。バカっすねえ……ちなみに今僕は中指を立ててるっすよう』

『知らねえよ……でも、そんなこと分かるってことはお前は俺の魔力ってとこか？』

『魔力』というものが言語を操るとは初耳だが。正道はニュースというものに興味がなかったためすでにそういうことが発表されているのかもしれないと思ったのだが。

『遠からず近からず。惜しいって感じっすねえ……おっと、“マシンな方”がくるっすよう』

声と同時に白煙を緑の旋風が切り裂く。金髪の男の両腕はすでに旋風を纏っていた。

ファイティングポーズの隙間から見えるのは獲物を狙う猛禽類のような眼光。

『懲りないっすねえ。先にこっち……あっ、というか“二人”一気に片付けちゃいましょうぜマサミチの旦那あ。ゲッシッシ……おっと、左っすう』

正道の右頬をかすめるようにして男のストレートが伸びる。

内なる声がふざけたい方をしているせいで危機一髪だったが、指示は的確だった。

『右っすう』

『左っすう』

『右右左っす』

『左、と思わせて右っすう』

正道は淡々と男の放つパンチをかわしていく。指示に従えばあとは身体を動かすだけだった。

金髪の男は自分の攻撃が当たりもしない状況に初めて表情を歪めた。

「なんで……」

装備魔導のデメリットは肉体を動かす場合が多いため体力まで持つていかれるということである。息を切らした金髪の男はよろけるように後退した。その横にいる銀髪の男は戸惑うように金髪の男を見ている。

『おほっほう。もう二人ともへろへろっすよう。そろそろいいっすかねえ。どかーんとやっちゃいましょーう。魔力は強化されてるっすよお。“僕”を感じるっすマサミチ』

『お前を、感じる……』

『そうっす……ほら、魔力どっかーん!』

——ドクン。

「ッ……!」

小太鼓だった鼓動がいきなり大太鼓に変わったように強くなる。身体が熱い。血が身体中を駆けまわってる。嬉しそうに。まるで踊るように。

頭が刺すように痛い。正道は膝をつきそうになったが、明滅する視界のなか倒れている翔太の姿を捉えて耐えた。

『大丈夫っすかあ？ これでも少しだけっすよう。でも充分っす…全部いっちゃうとマサミチ死んじゃいますから。それは僕も困りますう』

その声をぼやけた頭で聞いているとやがて痛みは消えていき、正道は荒い息を吐いた。

『な、なにがどつかーんだ…これじゃあマジで薬キメてるみたいじゃねえか…』

『大丈夫っす。ドーピングには引っかけられないっすよう。言動さえ気をつければ警察だって怖くないっす。さ、マサミチ。力を解放するっすよ！ クフフ』

堪え切れないように笑う声にどこか怪しい雰囲気を感じながらも正道はブラッド二人を見据えた。

顔色の悪い男と無表情の男。その姿はどこか幽鬼のような雰囲気さえも漂わしていた。

「お前がキメた薬、俺にも教えてくれよ」

「ほんとだよ…強くなる薬？ それどこに売ってるのさ」

二人は口々にいいながら同時に両手を突き出す。

『おお、この流れ、合体魔導すねえ？ 二つの魔導が奏でるハーモニー！ クライマックスにはいいじゃないですかあ！ ひゅー！ハレルヤ！』

踊り狂うような興奮している声は無視して、正道も両手を突き出した。

三人の魔導士の両手が光を帯びる。

緑、黄金色、そして赤。向かい合うその色は歪な信号機のように

ある。

数瞬の睨み合いの後、ブラッド二人の唇が同じ形に動く――

トルネードオブガイア
『大地神の颯風！』

黄金色の閃光と緑の閃光が重なりあい黄緑色の閃光へと色を変える。

その発導で顕現したのは大砲のような旋風。そこにこの場にそぐわないほどの巨大な岩が巻き込まれ、風に削られた岩は無数の刃と化した。

触れるものなにもかもを穿たんとするその風の砲弾が正道に迫る。

『さあマサミチ！ 僕と声を合わせるっす！ かつこよくいくっすよお』

暴力的な風が正道の髪を乱す。正道は微動だにせず、意思が赴くままに、響く内なる声と声を合わせる。

その感覚は浮遊感を伴い、まるで自分が魔力の泉のなかに浮かんでいるような気がした。泉の魔力はどれだけ使ってもなくならない――正道は有限のなかの無限を感じながらその泉に人影を見た。

それは白い歯だけを浮かせた黒いなにか――

正道の意思と正義が“蹂躪”される。黒い水に正道は溺れた。

「深炎よりいでよ闇黒の竜――」
フランメダハーカ
『炎獄の三頭竜』」

正道の唇が静かに鍵語を紡ぐ。

ダハーカ。元となるのはアジ・ダハーカである――それは神話上の「悪」の三頭竜。その三つの頭はそれぞれ、「苦痛」「苦悩」「

死」を象徴する――悪魔。

また巨大なその翼は天をも多い隠すといわれる。

――今、黒炎を纏いし三頭竜が風の砲弾を呑みこみ、その両翼を広げた。

それはあまりに強大で、あまりに禍々しく、あまりに異形だった。

不規則に揺らめく三つの頭は幻想世界のドラゴンそのもの。鮮血のように赤く灯った瞳からは全てを蹂躪せんとする眼光が放たれ、広げられた漆黒の両翼は闇を生みだし光を食らう。黒炎という肉体を持つその巨竜は人の心に闇を植え付けるような咆哮を上げた。

「なんだ、これ……」

気がつけば膝をついていた。茫洋とした意識のなか正道はそのまま巨竜を見上げる。

正道の視界の全てを躍動する黒炎が埋めつくす。例えるなら黒い壁。それほどまでに目の前の存在は巨大だった。

そこから感じるものに正義なんてものは欠片もない。あるのは得もいわれぬ、魂が震えるような恐怖の感覚。

その魔力の塊は常識と常軌を逸脱していた。これが自分の発導したものとどうしても思えなかった。

『ひゃあっほう！ 最高じゃないすかあ！ これが力というものですう！』

内なる声の快哉が正道の頭のなかを踊る。

『こんな、バケモノ……お前、俺になにを……』

発導した記憶が夢のように曖昧になっている。この発導に正道の意思はなかった。

『別になにもお。ちよつとマサミチを“支配”しただけですう……支配人ですね僕。クフフ』

『支配……？』

「な、なんだよこれッ！」

悲鳴のような声が巨竜の向こうから上がる。正道は立ち上がり、巨竜の脇へと駆けた。そこには腰を抜かした銀髪の男とそれを立ち上がらせようとする金髪の男の姿。それを睥睨する三つ首の竜。

「お、お前なにもんなだよ！ クソガキッ！」

正道の姿を確認した銀髪の男が狼狽した様子で叫ぶ。

「俺は……」

問われたところで正道は応えられない。声が響きだしてからなにかがおかしい。心のなかになにかわだかまるものが生まれた気がする。

それは声の主の存在そのもののような気もするがその正体は判然としない。

正道の心の迷いを見抜くように声が響く。

『マサミチは正義の魔導士っすよう……ただ、正義と悪は表裏一体。大きな正義の裏には大きな悪があったりしますう。白と黒。まさにオセロっすねえ……僕はその黒い面の存在。それはマサミチだけじゃないっす。魔導士全員が僕のような存在を宿してるっすう。びっくりでしょー？ このたびの僕とマサミチの記念すべき邂逅はマサミチが僕に触れてくれたことで起きたんですう』

『じゃあ……』

いって正道はブラッドの二人を見る。

『そう、あの二人にも。もちろんショウタ君にも。ただ、僕“たち”みたいな存在は憶病なんです。僕はそうでもないですけど……“強いんで”。あの二人ももう声の聞こえる状態のはずです。でもなかの存在は僕と違ってお口にチャックしてるです。それは自己防衛のためともいえるのですが……おっと、流れでいろいろ喋ってしまいましたです。でも僕たちがなにか……それはひ・み・つ。アハッ』

『ふざけんな。ちゃんと説明しろ!』

『アハッ』

「逃げるよ」

正道が脳内で会話していると金髪の男が銀髪の男を支えて立ち上がった。

『おっと! 逃げる気ですねえ。卑怯ですねえ! やっちゃいましたよ!』

『こんなバケモン使う気ねえよ。消すぞ』

『えええええー、せっかくかっこいいのに……いいです、“僕が使います”』

声が響くや否や、意思に反して正道の両手が上がった。それに合わせるように巨竜の巨体が蠢く。

「なッ」

腕は棒のように突き出され動かない。肩から先が自分のものではない感覚。

支配という言葉が現実味を帯びる。

『発導者はマサミチでもあり僕でもあるのですよ……久しぶりに暴れさせてくださいよう——もう、“殺したくて”しようがないんだ』少女のような少年のようなその声が鮮烈な狂気を纏った。

『ッ! やめろッ!』

『いつけえええええええええッ!』

轟く咆哮。正道の叫びは届かない。

巨竜の身体がふわりと浮き上がり、爆発するように一段と燃え盛った。そしてそのまま滑空する。

走り出したブラッド二人の背中を巨竜は狙う。振り返ったブラッド二人の顔に浮かぶのは死の恐怖。

殺すだど……? 俺の魔導が人を? 人を助けるための魔導が?

やめろ……——やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめ
ろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、
やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめ
ろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ！

「やめろおおおおおおおおおッッ！」

喉から血が出るほどの正道の聲が響きわたる。

「ハア……ハア……やめ、た？」

「お前……」

「……—てけ」

いうか……僕の矜持^{きようじ}はどこいったんすかねえ、恥^はずかしい……。あれ？ 矜持^{きようじ}ってなんでしたっけえ？ アハハ』

矜持——誇りや自信。プライド。自分の能力を優秀だと誇ること。この内なる声の主は“殺すこと”をその矜持としていたのか——そんなやつが自分のなかにいる。いや、自分だけじゃない。声のいうことを信じれば、同じような存在が“魔導士のなかにいる”。

『てか、さつきからなんかいつてません？ 声に出さなくても……』

正道は吐き気を感じながらも言葉を絞り出した。

「——出ていけ。俺のなかから。お前は、危なすぎる」

『ありや……そんなことが簡単にできてたらこの世は終わってますよう。まあ、とりあえず黙ります。初コンタクトにしては充分楽しめましたです。いずれまた僕の力がいるときがきますです。一人、二人……なんだか楽しそうな気配がこちらにはいろいろあるので。クフフ』

内なる声に反応するように小さな音が倉庫の天井で鳴ったが正道は気づかなかった。

溶暗するように段々と響く声が遠のいていく。

『では、ごきげんようです。マサミチ……また会える日を——』

それを最後に内なる声は聞こえなくなった。



正道はしばし立ち尽くした。

荒涼とした倉庫のなかにはブラッド二人の呻き声だけが響いている。

俺のなかになにかいる——そいつは魔力の塊のようなやつで、存在自体が愉悦に歪んだようなやつで、宿った肉体を内側から弄ぶ、悪魔のような存在だった。

そいつは俺が触れたことで俺のなかに生まれた。あいつは俺が呼んだようなもののなか。

あの声の主は俺の『悪』の部分。悪と魔力が直結するのかは分からない。しかし、あいつの口ぶりからだそうだ。

幻聴でも精神が崩壊したわけでもない。あれは俺のなかの悪が目覚めたのだ。

ブラッドの二人は聞こえる状態といった。

じゃあ俺はあいつをいままで『正義』というもので抑圧していたのか？

俺が悪意のある魔導の使い方をしていればあいつの声は聞こえていたのか？

あいつはなに者なんだ？ あの力は？ なんだ、なんだ、なんだ

……—

「正道！」

その声にはっとする。

正道に近づいてくる足音は三人分。振り返れば駆けてくる凜と正道の知らない魔導士の女を支えて歩く蘭がいた。

見知らぬ人物が凜の先輩なのだろう、泣いて崩れたメイクとおぼつかない足取りはだいぶ疲れた様子だったがどこにも異常はなさそうだった。

「大丈夫だったか？」

「うん。正道、怪我してる」

「あ？ ああ、これくらいなんともねえ」

正道は凜にいわれて思い出したように顔を流れる血を拭った。

「大丈夫か」

次は蘭が問う。

「だから大丈夫だって」

「そう。どこか雰囲気違ったので」

蘭は正道の心を見透かすような真っ直ぐな目をして正道を見ていた。

蘭の「大丈夫」は正道の怪我に対してではないらしい。

「……ああ」

少しの動揺。正道は心なしに暗い返事になってしまったことを後悔した。

「正道、君……」

かすめるような声が正道を呼ぶ。声のする方を見ると翔太が必死に身体を起そうとしていた。

「翔太！」

「五十島！」

正道と凜は翔太に駆け寄る。正道が支えとなって翔太の上半身を起こした。

身体はボロボロだが意識はしっかりしているようで正道は胸をなでおろす。

「やっぱりきてくれた」

翔太は弱い弱いながらも笑顔を見せた。その笑顔は柔和で嬉しそうなものだった。

「当たり前だ。友だちだろ」

「ありがとう……迷惑かけて、ごめんね。やっぱり僕じゃ無理だった」

その言葉に正道は首を振る。

「違うぞ翔太。俺は迷惑だなんて思ってない。それに、お前がいなきゃ凜の友達は助けられなかった。それと凜もヤバかったかも知れない。お前がみんなを助けたんだ」

「僕が……」

「五十島あー」

飛びこむように顔を涙と鼻水でぐじゅぐじゅに崩した凜が翔太に抱きついた。

凜は翔太のもとにきてからずっとヒクヒクと嗚咽をこらえていた。それが限界にきたらしい。

「ごべんね、ごめん……わたしのぜいでえっ、ひっぐ……」

もはや言葉にならない言葉を発する凜に抱かれながら翔太は正道に困ったような視線を送る。正道は苦笑いで応えるしかなかった。

「きもいとかいってたくせに」

「きもぐないいいい、五十島はかっごいいいいい、好きいい……えっぐ」

「好き!?! 俺は!?!」

返事は嗚咽にかき消されて返ってこない。

正道はなんだかフラれたような気分になった。いや、多分フラれたのだろう。

つきまとわれて迷惑していたがこれはこれでなんだか男として寂しい。そんな気持ちを感じつつ正道は頬を紅潮させる翔太と笑い合った。

「逃げる」

冷静な蘭の言葉が響く。正道が蘭の視線を追うとブラッドの二人が倉庫の外へと向かうところだった。足取りは重く、ほうほうの体といった感じだった。二人とも背中が焼け焦げ、地肌が露わになっている。もしあのまま、自分の発導が当たっていたらと思うと正道はぞっとした。

「待てっ」

逃がすわけにはいかないと正道は追いかける。凜は泣いているし、蘭はユウコを支えている。この場で咄嗟に動けるのは正道しかないなかった。

追いかけてくる正道を二人は恐怖の表情で見た。それはまるでパニック映画のワンシーンのようだった。

「こ、殺さないでくれえっ！」

青ざめた銀髪の男が叫びながら逃げていく。その叫びは正道の足を止めた。その間にブラッドの二人は倉庫を出ていく。

そんな顔で俺を見んな……俺はバケモノ扱いかよ……殺す気なんて……——なかったといえるのか？

ぞわりと血が騒ぐ。身体の中を虫が蠕動しているかのような感覚だった。またあの声が聞こえそうな気がして正道は足に力を込めた。地面を蹴って倉庫を出る。

ヘッドライトに照らされた影のような二人が車に辿りつこうとしていた。

一人の男が立ち止り振り返る。一瞬照らされたその顔は思い詰め

たような緊張感のある金髪の男の顔だった。

「僕たちの負けだ。逃がしてくれないか」

その声は震えを帯びている。

「……逃がせるかよ」

「君たちのことは報告しない。これは僕たちのミスということ片付ける。それでどうかな？ 金がいるなら用意するから。治療費とか。ね？」

男の後ろでドアが閉まる音がする。銀髪の男が乗り込んだようだった。

「そんなことできねえ」

「……そう。なら、強行突破しかないね」
影が揺らめく。

『塵風』
じんぷ

瞬間、砂塵を大量に含んだ風が巻き起こった。

暗闇での発導はその出所がつかみにくく、砂の粒子を目に受けた正道の視界は奪われる。

奪われた視界のなか、正道の聴覚は近づくエンジン音を捉えていた。必死に片目だけを開く。そこには急加速で接近する男たちの車が間近に迫っていた。

「くそ……」

正道はその勢いを止めることもできず横へ跳んだ。その脇を車は猛然と駆け抜ける。

車はそのままスピードを落とすことなく走り去っていった。

その車を“白い影”が屋根伝いに追っていたがそのことを正道は知らない――

「だ、大丈夫！？ 正道君！」

翔太の声に振り返ると倉庫から全員が出てくるところだった。

翔太は凜に支えられて立っている。身長差があるので翔太が腰を曲げる格好になっている。自分が支えられてもわがままをいったのだらうか。

「ああ、でも……逃げられた」

正道には忸怩^{じじ}たる想いがあつた。逃げられたのは自分のせいのような気がしてならなかった。

「高校生にしては充分。よくやった」

蘭が慰めの言葉をつぶやく。

「そうよ！ 充分よ！ 私も火の玉でばーんっとやってやったんだから！」

ほっとしたのか凜が調子を取り戻す。

「姉様が魔導を……？」

蘭は不思議そうに姉の言葉に首を傾げた。少し眉根を寄せて信じられないといった表情になる。

あの髪は……正道は銀髪の男の奇妙な髪形を思い出して納得した。しかし……正道は凜の青い色眼を見て思う。水の魔導士が火の玉とは。焦っている凜の姿が浮かぶ。

凜も勇気を振り絞ったのだ。

「……そう。でもそれだけで、なんにもできなかったけどね」

凜は自分の無力さを感じて声のトーンを落とした。同時に悔しさが沸いてくる。

ぎゅっと翔太の服を掴む手に翔太の手が重なった。翔太が小さく凜にしか聞こえない声でつぶやく。

「ありがとう。助けて、くれて」

翔太は緊張と恥ずかしさから唇を舐めまわす癖が出た。思わず眼

鏡を上げようと手を顔にやるがそこに眼鏡はなかった。

「きもいよ……“翔太”」

頬を紅潮させてうつむく凜の目からぽとりと涙滴が落ちた。

「いちゃいちゃしやがって……で、凜の友だちは大丈夫なのか？」

正道はそんな翔太たちから視線を移す。

そこには凜と同じような派手な格好をした緑の色眼の女が申し訳なさそうに頷いていた。

「先輩、どこも怪我してないみたい」

蘭が教えてくれる。確かにユウコは顔が汚れているくらいで血らしきものは見受けられなかった。

「じゃあよかった。でもなんでこんなことに巻き込まれるんだ？」

凜、なんかしたのか？」

「なにもしてないわよっ」

「クラブへいった」

蘭の氷のような声が凜を刺す。

「うっ……でも、それだけよ。こっちからは本当になにもしてない」
狙われたユウコもこくこくと首を縦に振る。

正道は突発的な事件だったのかと思いつつもどこか判然としなかった。

逃げたブラッドの二人が必死すぎた気がするのだ。

「正道君。そのことなんだけど――」

翔太が推論だがブラッドから聞いたことを口にする。

それは美泉の街を暗躍する吸血鬼を捕える貴重な手がかり。思いもよらぬ人生の交錯。

メディアのなかだけだと思っていた情報が目の前に姿を現した瞬間だった。

動揺が広がるなか遠くからサイレンの音が聞こえる。

「今頃かよ」

正道は翔太か凜が呼んだ警察がきたものとはかき思っていた。正道は翔太と凜が警察を呼ばなかった事情を知らない。

「やばっ」

「どど、どどうしよう」

明らかに狼狽を始める凜と翔太。

「なんだよ」

「学園にばれたらヤバイのおっ」

「別に俺たちは悪くねえだろ」

そうこうしているうちにパトランプを乗せた一台の真っ黒な車が猛スピードで乱暴に突っ込んできた。正道は危うくひかれそうになる。

「あぶねえッ！」

ドアが開き、紫煙とともに巨大な影がぬつと出てくる。反対側からは細見の影。

その見覚えのある影は正道を正道だと確認すると煙草を地面に吐き捨てた。もう一方が「ポイ捨ては——」といいながらさっとそれを拾う。

スカーフェイス
巖のような傷顔が正道に近づけられ、

「派手なことはすんなっていったろ、バカ道」

肺に残った紫煙を鼻から出して、田畑巖造は正道を睨みつけた。

黒と白



同刻——第二埠頭 某倉庫

照明が落とされた倉庫内は暗く、人の影すら生まない。

風の音、波の音、コンテナの軋む音、すぐれた聴覚の持ち主であるならばそのなかに一人の男の呼気と鼓動を聞きとれるかもしれない。

普段はブラッドのアジトとしての役割を果たしているこの倉庫だが今はその面々の姿はなく、黄金色の光点が静かに闇のなかに浮いているだけである。

そんな暗く静謐な空気をドアの開閉音とそこから差し込む仄かな光が切り裂いた。

倉庫内にいた人物——浅間照樹はその男の影だけを見て誰だか判断がついた。

軍人のような体格をしたその男は重々しい靴音を立てて浅間に近づいていく。浅間も仄かな光が届くところまで歩を進めた。

「この前はすまなかったね。“うちのが”悪さをしたようで。まあ家も壊れたんだ。そこはお互い様だな」

痺れるような低音が響く。

「……なんでお前がここにくる」

「いや、待ちきれなくてね。なかなかこないんだ“注文の品”が。トラブルかい？」

男はこの暗闇のなかでも丸い跳ね上げ式のサングラスを外してはいなかった。

柔らかな男——グレンの言葉に浅間は心のなかで舌を打つ。

確かにグレンのいう通りだった。

グレンからの最後の依頼は無事に終わるはずだった。

美泉の街に送り出した内の一組からターゲットをさらったという連絡があった。これでグレンから解放され、仲間も傷つけられることはない。浅間は内心ほっとしていた。しかしそこからの連絡がない。

捕まったか、ターゲットが暴れたか、それとも……いろいろな可能性が考えられたがその一組は魔導に関しては手練れ^{てだ}ともいえた。簡単にヘマをするようなことも考えられない。

「どうしたんだい？」

「いや……」

こいつは身体の中に魔物を飼ってやがる。今は現れてないようだが……。ここで適当にごまかすことは得策ではない。こいつのなかにいるのはマジでバケモンだ。

異常な身体能力。人間が纏うべきではない狂気。その相貌。浅間の魔導にも無傷だった。まるでホラー映画のワンシーン——浅間はグレンのなかの魔物と対峙した日のことを思い出して少し眉根を寄せた。

そして正直にありのままを伝える。

「ターゲットは指示通りさらったらしいがその後の連絡がこねえ」
「ほう」

グレンの表情が一瞬消える。鉄仮面のようなその表情に浅間はパーカーのポケットに突っ込んだ手を握り締めた。

グレンはしばらく無言になる。そして誰にともなく頷くと口を開いた。

「ふむ……帰ってくるようだよ、彼ら。直接聞いてみるといい」
その頷きはまるで会話している相手が他にいるような頷きだった。

倉庫の前からエンジン音とドアの開閉音が聞こえた。その音からは焦りの色が窺える。倉庫に入ってきたのはグレンのいう通り連絡が途絶えた二人組だった。

二人は満身創痍といった感じで入ってくるなり壁にもたれかかった。

浅間が詰め寄る。

「おい、なにがあった!？」

「邪魔が入った」

襟首を掴まれた金髪の男が告げる。

「邪魔? ホワイトナイトか？」

ブラッドの仕事を邪魔してくる存在などホワイトナイト以外にはいなかった。それ以外に考えられない。しかし、浅間の先入観ともいえるその考えは銀髪の男の言葉に崩される。

「ガキだよ……白騎士じゃねえ」

「ガキ？」

「そうだよ、リーダー。ハリオとマリオがやられたっていった子とその仲間の子たちだ」

「なッ……タカタカのカキだとッ!？」

浅間は驚愕に目を見開き、金髪の男から手を離れた。

ハリオとマリオと戦っていた名前も知らぬ少年の姿が浅間の頭のなかに蘇る。

あのときはそこまで危険な魔導士とは思っていなかった。正道を強いというグレンもかいかぶりすぎだとさえ思っていた。

「あの子たち鷹光の子か……あの子には近づかない方がいい。なに
か、普通の魔導士とは違う」

勝手な行動をしたハリオとマリオへの怒りでまともに見れていなかったのか、俺は。おっさんの願いなんか無視して潰しておけばこ

んなことにはならなかったんじゃないか。あのガキに仲間が傷つけられた……。

「くそつたれッ！　ぶっ殺す！」

浅間はルール違反や曲がったことには厳しいが仲間想いな面があった。仲間を傷つけられることは復讐を意味する。

「ククク……素晴らしいじゃないか」

グレンが報告を聞いて手を打ち鳴らした。

「世界は狭い。だから運命は絡まり合う。ん？　目覚めたんじゃないかって？　いいじゃないか、戦いたい。こればかりは私に主導権を握らせて欲しいなあ……それは分かてるさ、そうだ君の復活に招待するってのはどうだい？」

グレンは一人で会話しながら歩を進める。浅間にはその会話の相手が分かっていたが、他の二人は訝しげな表情でグレンを見上げている。

「最後の依頼はもういいよ。今日のことですでいろいろまづくなっただろうからね。私も警察の“数”には勝てない。悠長にしている時間もないしね……最後は“この子”にするよ——」

いつてグレンの右腕が“消えた”。

刹那聞こえてきたのは金髪の男の声にならない声。

グレンの右腕は金髪の男の鳩尾みぞおちにめり込んでいた。グレンはそのまま白目をむいた金髪の男をすくい上げるように肩に担ぐ。

「！」

浅間は反射的にグレンのコートを掴むが、振り返ったグレンの顔に思わずその手を離した。

グレンの顔に柔和さの欠片もなく、あるのは剥き出しになった狂

気だけだった。あの日、浅間の前に現れた魔物が目の前に再び姿を現した。

「ひいいッ……ッ！　がぶッ」

銀髪の男は悲鳴を上げるが、グレンのブーツが顔面にめり込みその声は途絶えた。

『うるさい』

「お前ッ」

『悪いナ。少しいらいらしてるんだ。なんでだか分かるよナア？　テルキ。ハマしやがッテ。仕方ねえからこいつで我慢してやる。丁度風の魔導士でよかったぜ』

「クソがッ」

『マア、文句いうなヨ。全員死ぬカ、こいつだけ死ぬカ。どっちがイイ？』

魔物は裂けるように笑う。悪魔の囁きに浅間は言葉を呑んだ。

『しかしガキに邪魔されるとはネエ。あのガキと戦うなんて最初は反対だったガ、俺もむかついてきたぜ。グレンのいう通り、俺の復活パーティーの招待状を送ってやるカナ……あ？　ああ、お前の話に乗ってやるぜ』

魔物はなかのグレンと会話をしているようだった。

『会場はここを借りるぜ？　テルキ、お前らはその会場の警備についてくれ。お仲間もいるみたいだからナ。それが最後の仕事ダ。テルキもこうなったのがあのガキ共の仕業だと思ったら殺したくなるだロオ？　ケケケ』

グレンの姿をした魔物は下卑た笑い声を残して悠然と倉庫の出口へと向かう。その肩に乗った仲間の姿を見て浅間は唇を噛んだ。途中魔物が振り返る。その顔はグレンのものに戻っていた。

「乱暴な真似してすまないね。連絡は君たちが捕まる前にするよ……いや、ジョークさ。楽しいパーティーになればいいんだが。来てくれるかなあの子は……いや、きてもらおう」

グレンは想いを馳せるように遠くを見て微笑む。

浅間はなにもできず去っていくその広い背中を見送った。

グレンは黒に染まった海を見ながら鼻歌混じりに歩く。一見すると散歩する外国人旅行者のようだが肩に背負われたものと軍人のような服が異様である。

ふと、グレンは足を止め倉庫の屋根を見上げる。

「ん？ ああ。ホワイトナイト君にも興味があっただが……彼は臆病者のようだ。それでは張り合いがなくてね……男は強いものに憧れるのさ」

グレンは一人で会話を終えると、興味がなさそうな目をして再び歩き出した。

グレンの姿が見えなくなる——倉庫の屋根の上で、“白い”人影がピクリと動いた。

ホワイトナイトは臆病者である。

——数時間前美泉坂。クラブ『チルドレン・オブ・ナイト』付近屋上。

眼下を連綿と流れる光の群れは光源を背負った虫が蠕動しているように見える。極彩色に色づいた夜が星を消し。闇の底から突き上げるような低音が夜の印象を希薄なものにする。

白い影は誰もいない屋上からその“事件”を見ていた。

細身の身体に纏うは闇のなかに浮かび上がるようなプロテクターつきの白のコスチューム。顔面を覆い隠すこれまた白のフルフェイスは昆虫のような爬虫類のようなものをモチーフにしているようどこか普遍的な変身ヒーローといった趣がある。

テレビの世界、もしくはヒーローショーから抜け出たような格好をしているその“男”は眼下で起きている事件を止めようと思ったのだが、その犯人以外の男女の姿を見て動き出した身体の動きを——止めた。

五十島翔太、朱川凜、木ノ下ユウコ——闇のなか屋上という高所から尋常ではない視力でホワイトナイトはその顔を確認する。それと同時にホワイトナイトの頭のなかには名前が浮かんでいた。

それはホワイトナイトの知っている人物だった。



白い影——ホワイトナイトは夜のパトロールを日課としていた。最近では吸血鬼の事件のこともあり注意していたのだが、広い美泉の街のなか一人ではそれを止められることもなく既に三人の犠牲者が出てしまっている。

最近ではブラッドの動きも落ち着いており、ホワイトナイトが活躍する場はほとんどなかった。最近の働きといえば酔っ払いの喧嘩の仲裁をしたくらいである。

かといって暇と嘆くわけではない。平和が一番なのだ。

それにホワイトナイトは街を守るという大義で動いている、“わけではない”。

ホワイトナイトが戦っているのは自分の臆病さ。

それを克服するため白いコスチュームで変身を遂げ、臆病さを包み隠し、夜の街で悪と戦っているのだった。そこに自発的な正義はない。

今、最大の悪が美泉の街にいる。それは吸血鬼と呼ばれる魔物——ホワイトナイトは吸血鬼の正体が魔物だということを感じていた。

美泉の街に蠢く禍々しいような狂気の塊。本能的に感じるそれは吸血鬼なんてものじゃなく——“ホワイトナイトと同じ”存在。

臆病者の“魔物”。それがホワイトナイトの正体だった。

ブラッドの活動が弱くなったなかホワイトナイトの目下の目標はその吸血鬼の活動を阻止することだった。

ホワイトナイトとしての活動は未だにその臆病さを打ち消すに至

っていない。しかしその吸血鬼という強大な悪をこの街から駆逐することができれば自分の臆病さを克服することができ、自分が魔物ということに怯えず、“人間として”この世を生きていける気もしていた。悪を倒すことは魔物である自分を否定することにも役立っていたのだ。

しかし人間と同じで魔物にもいろいろいる。人を殺すという自分とは性質の真逆な吸血鬼という名の魔物。純粹な恐怖を感じるその存在。それが臆病者のホワイトナイトの動きを鈍らせる要因となっている。

この夜も「吸血鬼と出会ったらどうしよう」などと本末転倒なことを思いながらホワイトナイトは闇に紛れるように夜の街を跳んでいたのだった。

そこでホワイトナイトは事件に出会う――

「なんで……」

ホワイトナイトは走り去る車とその後を追う二人乗りの自転車を見てつぶやいた。ホワイトナイトは異常な跳躍力で屋上を跳び、その車の後を追うが止めることはしない。否、止めることができなかった。

――五十島翔太と朱川凜。今その前に自分が出ていけば僕の正体がバレてしまうかもしれない。魔物としての僕もだが、“もう一つの正体がバレるのも恐い。”

でもこの状況は止めなければならない。

二人のことは顔と名前は知っているが直接的には知らない。車に押し込められた二年の“先輩”のことも情報として知っている。それならずホワイトナイトの頭には“鷹光学園”の全員の顔と名前が

インプットされている。

それは自分の正体がバレるのを避けるための情報だった。

だが知っているだけで“同じ学園”に通う三人は友だちではない。五十島君と朱川さん。二人の友だちらしい脇坂君ならなりふり構わず飛び出すんだろうけど僕は違う。

だからといって助けないのは道徳的に違う。

ホワイトナイト——“さへじまどうや冴嶋斗夜”は魔物とはいえ人間として生活を送ってきた。それゆえ人間としての感性を、価値観を、道徳観を備えて生きている。そのなかで臆病という余計な感情はその他の感情を差し置いてすくすくと育っていった。

相手は魔導士二人。助けられる自信はある。でもバレたくはない。それだけは避けたい。

顔面を覆うフルフェイスのなかを葛藤が満たしていく。

ホワイトナイトのくせに！　僕が憧れたホワイトナイトはこんなんじゃないはずだ！　ホワイトナイトのくせに！　ホワイトナイトのくせに！　やっぱ僕には正義なんてものは荷が重すぎるんだ！　ホワイトナイトのくせに！　ホワイトナイトの——

流れる景色のなか正義のコスチュームに身を包まれた斗夜はそう自分を叱咤し続けるも吹きすさぶ臆病風は止むことはなかった。さらに事件を目撃してしまったことへの後悔らしき感情まで顔を出してくる始末。

斗夜も以前は正道と同じホワイトナイトに憧れる少年——魔物だった。

斗夜が身につけている正義のコスチュームは初代のホワイトナイ

トから受け継いだものだった。

美泉の街を守る都市伝説的ヒーロー、ホワイトナイトは冴嶋斗夜で二代目である。



三年前。斗夜^{とうや}はホワイトナイトになった。

とはいえ真似ごとである。

白く塗った木の板を張り付けた白い全身タイツに白いフルフェイスのヘルメット。そこに軍手。軍手のゴムの部分が黄色く気に入らなかった。その部分は切った。

ホワイトナイトに写真などはない。三年前の時点でホワイトナイトは現れなくなって久しく、都市伝説のように情報だけが一人歩きしていた。

魔導で悪を倒す正義の味方——そんなホワイトナイトに憧れた斗夜はネットから情報を集めそのコスチュームを自作したのだった。

鏡に歪な姿の白い少年が映る。160センチ程の細見の身体をへんてこな白いタイツが包み、整った顔立ちはサイズの合っていないヘルメットに隠れている。

それは学芸会の衣装のような稚拙さを漂わせていたが斗夜は思わず感嘆の声を上げた。そんな歪で滑稽ともいえる姿でも斗夜は自分が自分ではないような気がしたのだ。鏡のなかでポーズを決める自分は紛れもなくホワイトナイトに映った。

斗夜は自分の力を知っている。自分の本能的な臆病さも。

斗夜はその臆病さが嫌だった。

人間として生きていくことを決めたのに他人とは必要以上の接触は避け、周囲の目に怯える疑心にもみれた日々。怪しまれない程度に喋り、打算的に友だちを作る。

特にトラブルはない。魔物だということを看破するものもない。黒い瞳の両眼は人間そのもので魔導を使えるとも思われない。ただ、自分の臆病さだけが邪魔をして斗夜を苦しめていた。

フルフェイスのなかで斗夜は笑う。

これでホワイトナイトと同じことをしていけば人のためになる。魔物である自分を否定できる。それは自分が本当の人間に近づくことと同義だった。

臆病者の自分もこれで消えていく。
なんでもできる気がしていた。

歪な姿のホワイトナイトはその姿に見合わぬ力と想いを胸に夜の美泉へ足を踏み入れた。



魔物には人間や“ただの”魔導士にはない特異点がある。

その一つとして魔力の流れ、気配などが読めること。魔物によって個人差はあるが斗夜は目に見える範囲程度なら察知することができる。

斗夜は自分の姿がバレてはいけなかったのでできるだけ高い建物を選び美泉の街を跳び回った。ビルが多く近代的な街並みの美泉では高層建築に事欠かない。

白い影は魔力の気配を探知しながら夜空を飛ぶように跳ねる。

斗夜は魔導は使わず脚力だけで跳んでいた。異常な身体能力。その力も人間や魔導士、さらには地球上に存在する動物を超越した魔物特有のものだった。

美泉坂の猥雑な明かりが見えた辺りで斗夜の聴覚が怒声と泣き声

を捉える。そこは地上百メートルはあるかという大手企業のビルの上。魔物は聴覚も尋常ではなかった。

斗夜はラジオの周波数を合わせるかのように聴覚を集中させていく。ノイズのような音の海を潜ってその声に辿り着く。

見つけた――斗夜の耳にはその音だけがクリアに響いた。

「――助けてください……」

「助けてほしけりゃ金置いてきな」

「発導しちゃうよ？」

かすれるような女の声。下卑た笑いに、にじり寄るような数人の足音。ハイヒールが鳴り、シャッターにぶつかるような音。

そんな“いかにも”なシチュエーションに斗夜は少し興奮した。このまま放っておけば救済の悲鳴は闇の中に溶け、悪の笑い声だけが残ってしまう。その場面に足りないのは正義の味方という存在だけだ。その存在に僕はなれるはずだ。

僕はホワイ Tonight なんだから――臆病さを興奮と急ごしらえの正義で包み隠し、斗夜――ホワイ Tonight は空を跳ぶ。



三年前、美泉の街では既にブラッドが夜の街に蠢いていた。

それはホワイ Tonight にとってショッカーのような悪の軍団的存在。必然的に斗夜の最初の相手はその“構成員”となる。

いかにもな路地裏に、いかにもな四人組。

黒づくめの四人組は口角をいやらしく吊り上げ、色眼をきらきらと輝かせ、バッグを胸に抱いたOL風の女を追いつめる。頭から足

元まで黒に染まった四人組は本当にショックのように見えた。

危機的状况。自分の姿と対極的なその男たちの姿を見て斗夜は――震えていた。

その路地裏に面するビルの屋上に設置された看板の裏。その看板に隠れるように斗夜は眼下で起こっているいかにもな危機的状况を覗いていた。

あんなところに飛び込めるわけじゃないかつ！ 恐すぎる！

それはコスチュームの下に隠された少年としては正当な感情なのだが、斗夜は普通の少年ではない。

魔物のくせに！ あの程度の魔導士なら負けないはずなのに！
……なんでこんなに僕は臆病なんだ！

いや、しっかりしろ。その臆病を治すんだろ。今の僕はホワイトナイトだ。正義の味方だ。なんでもできるし、悪には負けない。膝を震わすなんてヒーローなんかじゃない！

斗夜は自分の膝を握り締めた。風が吹き、脇の汗が冷たい。

ふと視線を感じる。危機的状况に陥っている女が潤んだ瞳で斗夜を見上げていた。

「助けて……」

斗夜にも聞こえない声。女は唇の動きだけで斗夜に訴えかけた。

「ひっ」

そのメッセージは読みとったが、斗夜はそれ以前に見つかったことに動揺していた。身体が小さく跳ねたせいでヘルメットが看板に当たり、鈍い音を響かせた。眼下にいる全員の視線が注がれる。

「あ?」「誰だ?」「白くね?」「コスプレ?」

男たちは口々につぶやく。訝しげな視線が斗夜を突き刺し、はっきりと聞き取れるつぶやきが斗夜の頭のなかでぐわんぐわんと渦巻いた。色々な感情を巻き込んでぐわんぐわんと。

「わあああああ!」

気がついたときには声を上げて飛び出していた。



尋常じゃない人知を超えた異常な身体能力を持っている魔物の斗夜は二十メートルほどのビルから飛び降り、着地で尻餅をついた。目を瞑っていたことと足に力が入っていなかったことが原因だった。

「うわ、なに変態じゃん」「白っ」「なんのコスプレ?」「あんなところから跳んで無傷かよ」

異様な存在のマヌケな登場に男たちは口々に言葉をこぼす。

男たちのなかには感心している者もいたようだが、その言葉は斗夜の耳をすり抜けていった。斗夜の耳には「変態」や「コスプレ」の言葉が引っかかっていた。その言葉は恥ずかしさや緊張や後悔を増長させる。

次第に男たちの声は笑い声へと変わっていく。

——僕は笑われているのだ。斗夜は立ち上がりながらぐっと軍手のはまった手を握り締める。

バカにされて、感情の奥底にくすぶるものがある。そこにあるのは怒りというものなのだろう。

その怒りを原動力に目の前の悪を倒せばいい。しかし、あまり出したことのない、自分から避けてきたようなこの感情は出さない方がいいと本能的に斗夜は思う。

僕は人間でも魔導士でもないから、怒りのままに動いてしまえば——殺してしまうから。そうなってしまえば僕は人間として生きていけなくなる。“本当の”魔物となった僕もすぐに死んでしまうだ

ろう。研究されるか、魔導士たちの本来の目的となるか……一人ぼっちの魔物なんて生きてはいけないのだ。……死にたくはない。

笑い声が響くなか斗夜は感情を抑えた。震える声で“偽物”のホワイトナイトは名乗る。

「ほ、ホワイトナイトだ」

小さく聞こえた少年の声に男たちは笑いを止めて顔を見合わせる。

「誰？」「戦隊もの？」「誰？」「白い夜？」

悪の組織としては知っておいてほしかったが、男たちはホワイトナイトを知らないようだった。

だからといって失礼しましたと帰るわけにはいかない。自分がホワイトナイトであれなんであれ、この状況で逃げてはだめだ。これは自分との戦いなのだ。

そうだ、魔物“らしくない”ことをして自分を否定するんだ。そして自分を叩きなおすんだ！ そうだ！ そうだ！

心のなかで自分を鼓舞して斗夜はぐっと胸を張った。その視線の先には困惑の表情で固まっている女がいる。そして斗夜は朗々と、

「さあ、お嬢さん！ 私がきたからには安心です。お逃げなさい」

「あ、ありがとうございますっ」

そのセリフは斗夜の声質には似合わない。衣装もあいまって本当に学芸会の雰囲気が漂っていたが、そのセリフを聞いて女が鞆を胸に抱いて走り出す。

そんなセリフを本物がいうかは知らない。斗夜の頭のなかにあるホワイトナイトを演じたただけだ。斗夜の想像ではホワイトナイトはスーパーマンのような「H A H A H A」と快活に笑いそうなイメージだった。

「あッ」「逃げた」「このガキッ」「俺が追う」

男のなかの一人が逃げた女の後を追う。その男の目の前に一陣の白い風が吹いた。

「逃げた女性のお尻を追うとは情けないですよ、あなた」

「うおっ」

瞬間的に移動してきた斗夜に男は小さく叫んで目を見開いた。

どこか紳士的な少年の声と表情の読みとれないフルフェイスが不気味すぎて、男は得もいわれぬ恐怖を感じながらも問う。

「お前、魔導士か」

「……“そうです”」

噂に聞くホワイトナイトは魔導士だった。斗夜は自分もそうだったらしいのにと落ち込みそうになる。少し声のトーンも下がった。

そこで目の前の男から魔力の流れを感じる。それは蚊が飛ぶ軌道を線に起こしたような弱弱しいもので、斗夜の冷静な部分は発導するまでもないかと落ち着いて考えていた。

身体は自然に動いた。

「ぐえ」

鈍い衝突音と蛙が潰れたような音が同時に鳴り、男が腹を押さえて崩れ落ちる。その両手は仄かに赤く光っていたがそれもすぐ消える。

斗夜はその姿を極力見ないようにして呆然としている残り三人のもとへ歩く。見てしまえば自分のやったことに土下座してしまいたくなるのは分かっていた。

仕方ない、僕は悪くない。でも、大丈夫かなあの人……初めて人殴ったよ……でも仕方ない、僕は悪くない。僕はホワイトナイトなんだから。

「ひッ」「なにしやがった!」「てめえ!」

わめく残り三人の男たちからも微弱な魔力の流れを感じる。斗夜の能力的に三人ほぼ同時に叩き伏せることもできるが、それでは力の加減ができるか不安だった。

斗夜は立ち止り、すっと両手を突き出す。それに追従するかように三人の男の手も上がった。

斗夜の両手に魔力の奔流が収束される。突き出された斗夜の両手を満たすのは、単色ではなく玉虫色のような不思議な色だった。

自分の記憶のなかではこれが初めての発導となる。しかしなんのためらいもなく、隠されたその顔は愉悦に歪んで――

『三叉の閃光』
トライデント・レイ

刹那瞬いたのは“三色の”光。斗夜の両手から放たれた魔力の奔流は赤、青、緑、三つの属性の色をほとぼしらせていた。矢のように放たれたそれは貫くように男たちに襲いかかった。

――魔物の瞳は黒い。それは黒すぎるほどに。

魔導士とは違い、魔物に特化した属性などはない。地水火風全ての属性が均衡を保って存在している。それゆえ魔物は違う属性を同時に使うことができた。

闇をくりぬいたような瞳の色はそのためである。

尋常ならぬ身体能力に強力な魔導。そんな最強ともいえる魔物が魔導士たちに破れた理由――それは魔物である斗夜でさえ知らない。否、知っているのかもしれないがその記憶にはなかった。

――やってしまった。僕はなんてことを……

呻く黒づくめの四人をあたふた、きよろきよろと斗夜は見ていた。

幸い死んではない。

発導したときの記憶はあまりなく、気づいたときには全員倒れており、自分は笑っていた。

——なにがホワイトナイトだ！ 発導してにやついて、人が傷つくのを笑って……なんでそこだけ臆病じゃないんだよ！ やっぱ僕は魔物だ。なにがホワイトナイトだ！ ごめんなさい、ごめんなさい……。

倒れているのは悪なのにどうも自分が悪い気がしてならない。なんだか本物のホワイトナイトにも悪い気がしてくる。臆病風が再びびゅーびゅーと吹き始める。

——こんなこととしてほんとによかったのだろうか。ホワイトナイトはもっと平和的に解決していたんじゃない……でも魔導を使うって聞いているし、同じだね……僕は悪を倒したんだよね。最初は誰でも恐いはず。これは通過儀礼みたいなもの……だから次は大丈夫。僕の臆病は気づいたときには消えてるはず。大丈夫、大丈夫、大丈夫……。

路地裏の向こうからざっざと数人の足音がする。斗夜は瞬時に聴覚を集中させ、布擦れの音や装着物のぶつかりあうかすかな音からそれを警官と判断した。足音からその警官たちの体格まで想像できていたがそんなこと関係なかった。

「ひっ！」

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ！ ——捕まる……！

「ごめんなさいー！」

なにに対する謝罪か、人を助け悪を挫いた斗夜は叫んで空中に跳ね上がった。そのまま兆弾のように跳ねて闇に消えていく。

斗夜の聴覚が聞いた通り、現れたのは数人の警官だった。しかし現れたのは斗夜が跳び出してから“三分後”。

斗夜の驚異的な聴力は些か早すぎる逃亡を成功させた。

結局、臆病者の魔物は憶病なまま。斗夜はその夜震えながら眠った。



もうやめてしまおう。

何度もそう思った。しかし、やめたところで待っているのはいつもの人目を気にした打算的な日常。

つかず離れず、最適な距離感を常に意識しつつ話す友だちというもの。心から笑ったことなどない。笑っちゃいけないとも思っってしまう。

心を開いたその隙に入り込まれそうな気がして恐い。自分の正体がバレてしまいそうで恐い。

でも、人間を演じるのではなく、心から笑える人間にはなりたい。否、「人間」と認めてもらえるような魔物に。それが願い。また夢ともいえた。

それを阻害しているのは周りの魔導士や人間ではない。友だちを友だちとも思えないのは自分の弱い心のせいだ。自分を取り囲む環境は幸いにも優しく温かい。斗夜は日々申し訳ない気持ちで満たされていた。

疑心暗鬼。それは分かっている。このままじゃなにも変わらないことも。この日常を変えるなにかを斗夜は欲した。

結果として歪な偽ホワイトナイトとしての活動は続いている。偽とはいうが最近ネットの掲示板にも「ホワイトナイト復活」などの書き込みが見受けられた。そこで斗夜は自分が相對している組織の名前も知る。

『ブラザーフッド』通称『ブラッド』。

「兄弟の縁」などを意味するブラザーフッドだがほとんどブラッドという名で通っているらしい。

兄弟の縁と「血」——どこか似ているその二つから斗夜は勝手にブラッドという組織の絆を感じた。イタリアのマフィアはファミリーを大事にするとなにかの小説で読んだ。そして仲間を傷つけられたらその復讐をすると。

怒ってるんだろうなあ……——斗夜はそう思いながら、自分の弱い心と戦うため夜の美泉を跳んだ。恐いし、罪悪感もあるが斗夜にはこれしかなかった。

とある日の夜——

ブラッドはやはり怒っていた。

いつものように高所からのパトロールをしていると、斗夜の聴覚が遠く離れた第一埠頭の方からの怒声を拾った。それも一つや二つではなく十数人の怒鳴り声。騒々しい不規則な足音となにかを蹴るような音。物騒な叫びとともに叩きつけられる金属的な響音。

斗夜はそこへ向かうのをためらった。その声のなかに助けを叫ぶ声はない。ならば、喧嘩両成敗。放っておけばいい。しかしもし、その場所に声も出せずに倒れていたり、捕えられている“人質”でもいれば……。

そんな状況を想像して斗夜は確認だけでもと、音のする方へと跳んだ。

——思いつきり罨だった。

まず遠くから確認しようと降り立った倉庫の上にブラッドのメンバーが潜んでいた。

斗夜は空中でその姿に気づいたがどうすることもできず、斗夜が倉庫の屋根に着地する直前にそのブラッドのメンバーが発導。屋根が爆発して抜けた。

それに関してはダメージはない。着地点が十メートルほど遠くなったくらいのことです。些細なことだったがそこから問題だった。倉庫内に降り立つや否や、待ち構えていたように十数人の黒づくめが乱入してくる。

おそらく全員が倉庫に入りきった時点で斗夜は耳を澄ました。斗夜の耳には喧嘩の音などにも聞こえてこなかった。

——うわ……罨だ、これ。どうしよう、どうしよう、どうしよう……。

「よお、白騎士。会えて光栄だ」

集団のなかから凶暴な笑みを張りつけた男が出てくる。黄金色の色眼にフードの隙間から見える金髪と耳を埋めつくさんばかりの大量のピアス。

斗夜はその男から周りの魔導士より濃い魔力を感じ取っていたが今はそれどころじゃなかった。

斗夜は目が回りそうな感覚に陥り、膝が震えだしていた。

それは憶病ではなくとも中学生という肩書きの斗夜としては正常な反応。だが今はその上にホワイトナイトという肩書きもプラスさ

れている。目の前にはそのホワイトナイトが敵対している組織の面々。

臆病を見せる場ではないのだが、この状況は今までにない。大量の明らかな敵意が自分に向けられている。

十数人の魔導士に囲まれているホワイトナイトという“魔物”。

斗夜はその構図に自分の終末を見た気がした。

だから――逃げた。

斗夜はそのまま跳ねあがり、掴みかかってきた屋上の男を反射的に気絶させ、とりあえずわけも分からず跳んだ。

「待てこらアツ!」『――!』『――!』

倉庫街から怒声とともに流れでできたブラッドが空中に向かって発導する。閃光を帯びた殺意が夜空を貫き、どこか異星人に対抗する地球防衛軍のような構図となっている。もちろん異星人は斗夜。地球防衛軍はブラッド。

「逆だよっ!」

そんな思いに突っ込みをいれつつ斗夜は跳んで、跳んで、飛んだ。ブラッドも車やバイクを駆りながらしつこく追ってくる。

斗夜の逃げる先を発導する黒づくめの集団が追う。斗夜の逃走は住民の悲鳴を生んだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい!」

斗夜は誰にともなく謝りながら逃げた。

眼下に広がる美泉の街はちょっとした地獄絵図を描いていた。

やがて、パトカーのサイレンが鳴り響き、斗夜を追っていたブラッドは追われる側となる。

見事逃げきった斗夜は誰もいない郊外の小さな公園に降り立った。

そしてベンチに座ってヘルメットを外す。そこから目を真つ赤にした少年の相貌が現れた。斗夜はため息を吐いて膝を抱える。

「恐かった……ああ、でも逃げるなんて最悪だよ……結局、なんにも変えられないのかな……ホワイトナイトのくせに」

もはや口癖となる勢いの言葉をつぶやいて斗夜は沈み込む。

一瞬の虚無。斗夜は近づいてきた足音に反応することができなかった。バネ仕掛けのように顔を跳ね上げたときにはその男に話しかけられていた。

「いたいた、“偽”ホワイトナイト。なんてださい格好だ、今どき小学生でももっとマシなものを作るぞ。モノづくりの国、ニッポン！ハッハッハ」

辛らつな言葉に斗夜が啞然としているとその男は笑いながら斗夜の横に腰を降ろした。男の左手のコンビニ袋がガシャリと音を立てる。

ラフな格好の中肉中背の中年男性。目尻の下がった目に無精ひげ、柔和な顔立ちのその男の左目は赤く輝いていた。

斗夜は動くに動けなかった。明らかに敵ではない。

この男は自分が偽物であると知っている人物。それに「いたいた」という言葉も気になった。そして男から感じる魔力も今までにないものだった。上手くい表わすことはできないが、ブレのない魔力、芯の通った魔力。そういった印象を受けた。

魔力がここまで形成されるということは以前に魔力を行使していた人だ……斗夜はこの男に興味を持った。

「あの……」

「いやね、私が妻に頼まれてコンビニへ出かけていると空を白い影が飛んでるじゃないか。幽霊かとも思ったが、思い当たる節があっ

てね、きてみたらやはり噂の偽ホワイトナイトだった。しかし飛びきりの偽物だな君は」

男はいつて、笑いながらビールを取り出して飲みだす。

「あ、いや……ごめんなさい」

自分ではこの人と会話できないんじゃないかと斗夜は思う。

「謝ることはないさ、臆病者の変態君」

「！」

出会って数分で面と向かって変態といわれるとは思ってもいなかった。

斗夜は未知の生命体と遭遇した気分になった。男は続ける。

「あの騒ぎ、君だろ？」

「え？」

「なーに、御安心。私は警察ではない。ただの“建築士”だ。騒がしかったので警察のお友だちに聞いてね。実は私は寝ていたんだがそのせいで起きてしまった、起きたついでに妻と息子の買い物までいかされる始末だ……くそったれいっ！」

「ひっ」

「いや、気にせずに。不満とは爆発するものだ。君との邂逅は嬉しい。ホワイトナイトを知っているおじさんとしては、少し興味があつてね。見たところ、お悩みのようなが。君はなんのためにその恰好をしているんだい？」

男は空いている手を握って斗夜に向けた。まるでマイクを向けるリポーターのように。

「……」

答えに窮している斗夜を男はビールを啜りながら待っている。

「恥ずかしいかい？ ではこれならどうかな」

男はビールを置くと、斗夜のヘルメットを取って、そのまま被った。

「どうだい？　すごくシユールだろう？　笑うといい」

斗夜の目の前にはフルフェイスを被った寝間着のような姿の男。片手には再び取ったビール。男の向かいにいるのは全身タイツの自分。

その光景を想像して斗夜はおかしくなってきた。

笑うと緊張がほぐれてくる。斗夜はためらいがちに口を開いた。

「僕は、自分を鍛えなおすというか……弱い自分の心が嫌いで、それで……ホワイトナイトの真似をすれば自分は強くなれると……そう思っ。正義とかじゃないんです、自分のためなんです」

さすがに魔物のことはいえなかった。

心情を吐露した斗夜に男はふむと頷くと立ち上がった。

「なるほどね。それでなかなか変わらない自分に悩んでいると……ふむふむ、なるほど。それは君がそんな“下らない”小さな理由で動いているからじゃないかな？」

「え……」

寝間着姿のフルフェイスの男は厳しい言葉に目を丸くする斗夜にびつと指を突き出した。

「ホワイトナイトになる以上、正義という大義で行動せねばならない！ 正義というものが人を強くさせる！ 少なくとも初代のホワイトナイトはそうしていたはずだ。君も本気で正義を背負ってみるといい……いつか変わるはずさ」

男はフルフェイスをそつと外すとわしと乱れた頭をかいた。

「……しかし、君はすごいな、こんな見えにくいフルフェイスでよくもまあ」

どこか違和感のある感想を述べた男から斗夜はフルフェイスを受け取って、踵を返す男の背中を呆然と見ていた。

「君にその気があるなら、明日の同じ時間またこのベンチにくると

いい。君がその気なら明日はきっと君にとってのターニングポイントとなる」

男は歩き出す。数歩歩いたところで男はなにかを思い出したようにその歩みを止めた。

「ああ、あと——臆病さを完全に捨てたら君はなに者でもなくなるぞ。この世に無駄なものなんてないのさ。臆病という感情もその一つ。さ、それらしいことをいったので私は去る」

男は振り向きもせずというとそのまま公園を出て行ってしまった。少し離れたところで「遅くなった。“正道”と母さんに怒られる」というつぶやきと慌ただしい足音が聞こえた。

斗夜は膝に置いたフルフェイスと見つめ合って真剣なのかふざけているのか分からない謎の男の言葉を反芻する。

「正義を、背負う……明日このベンチに……——」



——翌日、深夜。

とある公園のベンチの前に一人の少年が立っている。

街灯に照らされるように闇に浮かぶそのベンチの上には綺麗にたまたまれた純白のコスチュームが“本物”の輝きを放っていた。綺麗にたまたまれたボディースーツの上には昆虫か爬虫類をモチーフにしたようなフルフェイス。洗練されたデザインには稚拙さの欠片もない完璧なものだった。

その少年――斗夜はそれを見て息を呑んだ。

正義を背負う覚悟ははっきりいって百パーセントのものじゃない。ただ、変わりたかった。斗夜は謎の男の言葉に縋った。

まさかこんなものがあるとは夢にも思わなかったが……。

コスチュームとフルフェイスの間から小さな紙片が見える。

そこには、

『臆病者の変態君へ。』

これを読んでいるということは正義を背負う覚悟ができたということだね。素晴らしい。強くなる第一歩を君は踏み出した。

そんな君にこれを送る。臭いなどは気にしないでおくれ。もしあったとしたらそれは正義の匂いだ！……突っ込んでくれる相手がいないので手紙というのは嫌いだ。なのでそろそろ終わりとする。

君がこれを纏うことによって君は本物になれる。つまり二代目だ。私の意思が受け継がれるのは正直なところ嬉しい。正義というものは重い。背負った正義の重さに負けることなく強くなれ、少年よ。そして臆病さを忘れるな。

なお、この手紙は五秒後に爆発する……なんてことはないので御安心を。では健闘を祈る』

「ハハ……あの人、ホワイトナイトだったんだ。すごい、すごいよ……僕、強くなります……どれだけ時間が経っても」

手紙を胸に抱き斗夜は虚空に誓った。

こうして斗夜はこの夜、初代ホワイトナイトの意思を継ぎ、二代

目ホワイトナイトとしての道を歩み始めたのである。



時は経ち――

――なにが強くなりますだ！　どれだけ時間がかかっても……つて、もう何年も変わってないよ！　どれだけつてどれだけだよ！　臆病さを忘れるな？　忘れなさすぎだよ！

ホワイトナイトのくせに！　ホワイトナイトのくせに！　ホワイ
ト……――

あの日から本物のホワイトナイトとなった斗夜はほぼ毎日夜の街をパトロールし、悪と戦ってきた。最初の頃は自分が本物という高揚感や感慨深さもあって張りきって夜の街を清浄化していた。正義という指針が自分を変えてくれると確実に思っていた。

しかし慣れというものは恐い。

斗夜は本物のコスチュームの感覚にも、その正義にも慣れてしまった。正義という大義を胸に行動したところで結局やってることは同じだった。

そうすると斗夜の心に吹くのは臆病風。

臆病さを忘れるなというのは分かる。臆病さは抑止力になるから。魔物の斗夜にはなければいけないものだ。でも、自分にはその分量が多すぎる気がする。自分は魔物としてじゃなく人間として生きていきたいのだから。

そんな斗夜だったが変わったところがないわけではない。

高校に進学して斗夜は自らテニス部に入った。それはとても勇気のいることだったが、斗夜は思い切って踏み込んでみた。高校は義務教育ではないし、いざとなったらやめてしまえばいいとまでいい聞かせて。

入ってみればなんてことなかった。友だちは増えたし、特におかしな目で見られることも、噂もない。斗夜は魔物として持ち前の身体能力は“セーブ”して汗を流した。

疑心暗鬼という名の鬼は心に居座ったままだったが、それでも臆病になることはないんだと、斗夜は思った。

しかしそれは学園のなかだけのこと。ホワイトナイトとしての斗夜には問題が増えた。

高校生ともなると活動の範囲や時間が広がる。それはホワイトナイトとしての活動を消極的なものにした。

街で助けた人間が学園の同級生、先輩、または教職員だったらどうしよう。

斗夜は学園でも人間と思われているし、フルフェイスで顔も見えない。特徴的な体格でもないホワイトナイトを斗夜と看破する者はいないと思うのだが、相手は見えてなくとも自分は見えているのだ。そのときにおかしな言動をしてしまいそうで怖い。斗夜は鷹光学園の関係者の顔と名前を全て叩き込んだ。

できるだけ、避けられるように。

——最低だ、僕。

それでも自分が部活に入れたりしたのはホワイトナイトのおかげ、正義のおかげ！ と自分にいい聞かすようにホワイトナイトとしての活動を続けた。

幸い学園の生徒がトラブルに巻き込まれているような場面には出

くわしていない。一度、“同じクラスの魔導士”がブラッドと戦っているのを見たが、その魔導士が勝ったので自分には関係なかった。それに、それは朝の出来事だった。

——今、斗夜は学園の生徒が巻き込まれたトラブルを追っている。

止めることはできなかったが、回避することもできなかった。

見てしまったものを見なかったことにはできない。そんな人間的な想いといっしか根づいた正義感——斗夜は少しか成長していた。臆病さが邪魔をして自分ではその成長を感じ取ってはいないのだが。

木ノ下ユウコをさらった車の行先はどうやら第一埠頭の倉庫街らしい。耳を澄ますと車のなかの男たちの会話も聞こえる。「なんか追ってきてるぜ?」「始末しないとね」などの物騒な言葉がクリアに聞こえた。車は誘うようにスピードを落とした。

罨だ! ——斗夜は過去に自分が罨にはめられたのと同じ場所。

第一埠頭の倉庫の屋上に先回りして身を潜めていた。

罨だということは分かった。しかし伝えられない。斗夜は見ているしかなかった。危なくなったら助ける、危なくなったら助ける……と念仏のように心で唱えながら。

やがて車が到着し、遅れて翔太の声が聞こえてきた。

それは斗夜のクラスメイトである脇坂正道に助けを呼ぶ声だった。

脇坂正道——陽気な音楽好きの同級生という印象。茶色の髪は今どきで、無邪気そうな整った顔立ちはテニス部の女子のなかにも「イケてる」といった女子もいるぐらいだ。その女子は同じクラス

の来栖真美さんが彼女だといって諦めてたけど。

運動神経もいいが勉強は苦手らしい……。誰にでもわけ隔てなく接するムードメーカー的存在の魔導士。

脇坂君は自分のことを正義の魔導士といった。色眼も自分の意思で隠していない。自分を隠している僕とは違う、心が強い魔導士。脇坂君の魔力の流れは本物のホワイトナイトに似ている。あの人の“息子”だから似ているのかもしれないけど、脇坂君はホワイトナイトの正体を知らないようだった。ほんとには僕じゃなくて脇坂君が二代目のはずなのに……。僕が真似したせいだよ……。――

斗夜が思考に没して落ち込んでいるうちに色々と動きがあった。

翔太と凜が二人の男と対峙している。翔太も凜も魔導士だということは斗夜は気づいていたが対峙している男をどうにかできるレベルではなかった。

「走れ、凜！」

翔太が叫んで凜が逃げていく。人が変わったように手を広げて立ちふさがる翔太。それを密かに見ながら斗夜は感動していた。

――かっこいい。あんな人だったんだ。あの人。すごい……。あんな勇気僕にはないよ……。

翔太に関する情報はそれほどない。見た目でオタクっぽいと判断していたくらいだ。斗夜は人知れず落ち込みながら戦況を見守った。危なくなったら助ける、危なくなったら助ける……。念仏は止まない。

翔太は善戦した。弱さを感じる魔力の流れだったが、最後には翔太の気持ち支えたようにしっかりとした魔力の流れとなった。

——すごい。ほんとにすごい。あれが勇気というものだ。僕もあんな風になりたい……。

思いながら、倒れる翔太を見ても斗夜は飛びだせなかった。こちらに向かつてくる凜の足音とそしてエンジン音、そこに紛れる蘭と正道の声。それが分かったゆえでの待機だった。否、そういうことにした。

やがて凜がきて、自分の特化属性じゃない火の玉を男にぶつけた。初めての魔導を必死にぶつけた凜も勇気の魔導士だった。

強大な力を持った臆病者の魔物は誰よりも震えた心を持って屋根の上から危機的状況をただただ傍観していた。羨望と焦燥と後悔と当惑と無力と、様々な感情がないまぜになって逃げ出したくなる。

——みんなすごいよ……。それにくらべて僕は、唾棄すべき存在だ。ホワイトナイトのくせに。

震える斗夜の数メートル下から吸血鬼の事件をほめかす発言が聞こえてくる。

——吸血鬼。ブラッドも絡んでいたのか。最近おとなしいのはそのせい……。くそ、僕がもっと早く止められていれば……。くそつ、くそつ、くそつ。

斗夜が悔しさに身を震わせていると、嘶くエンジン音が空気を切り裂いた。

蘭が運転するバイクは滑るように止まる。後ろに乗っていた茶髪の魔導士はヘルメットを投げて飛び降りた。

「翔太ッ！ 凜ッ！」

——脇坂君……あれ？

飛び込んできた正義の魔導士は怒りに震えていた。斗夜は正道からいつもと違う危うい魔力の流れを感じ取っていた。なにかが正道のなかで蠢いている。

それは楽しそうに、まるで踊るように。



斗夜は知っている。

その“存在の存在”を。

それは斗夜としての自分が知っているわけではない。

その存在を知っているのは魔物としての自分。

記憶の最奥、闇に葬られた歴史の記憶。それは魔物が魔物として存在し、魔導士や人間と争いを繰り広げていた頃の記憶。“その歴史に存在した者の記憶”。

呼び覚まされた記憶、もはや本能的に感じるその部分が警鐘を鳴らす。

危険だ、危険だ、と。

それは得体の知れぬものに対する恐怖感にも似ていた。

「あ……ああ……」

斗夜は眼下で繰り広げられる魔力の衝突を見ながら、自然に呻いていた。

——なんであんなのが脇坂君のなかに……あれは……あれは……なんだ——思い出せない。思い出したくない。

斗夜は霧のように曖昧な記憶を探ったが、その存在の名前や顔、なにからなにまで判然としなかった。分かるのはそれが存在していたということ、それは自分が恐怖を感じる対象だったということ。斗夜はその記憶に触れてはいけなような気がして考えるのをやめた。それにその存在が特定できたからといっておそらくメリット

はないのだ。

正道の魔力の流れが揺らぎ、不意にその存在の気配が膨れるように濃くなる。

——話してる？ 干渉し始めた……？

その予想が正しいものかは分らない。斗夜の尋常ではない聴覚も聞こえないものは聞こえない。しかし嬉々として邪悪な魔力の流れ、独り言を話す正道の姿からはそう取れた。

そこから正道の動きは変わり、ブラッドの二人を呑み込んでいく。ブラッド二人の魔力が弱弱しくなり、この局面の終わりが見えた。ブラッド二人の顔にも焦燥が見てとれ、魔力など読めなくとも正道が優勢なのは誰の目で見ても明らかだった。

斗夜は自分が出る幕はなかったと胸を撫で下ろす半面、正道のなかで嬉々としている気配が気になって仕方ない。ここにきて正道の魔力が膨れ上がったのだ。

いや、膨れ上がるという表現は適切ではないかもしれない。“正道の魔力が呑み込まれて吸収された”という感じが適切かもしれない。

魔力の質そのものが変わってしまった。正道の魔力は希薄なものとなり、濃い禍々しい純粹な魔力が覆いかぶさりその姿を増大させている。

まさに“魔力の力”。それは、魔力の読める斗夜としては必要以上の魔力だった。

ライオンはウサギを倒すのにも全力を尽くすという表現があるが眼下の状況はそれにあてはまった。

正道の様子もおかしい。

その瞳は虚無を孕み、遠くを見ているようながらんだ瞳をし

ている。そこに斗夜が綺麗と思う色眼の輝きはない。

艶を失った瞳、正道は両手を突き出したまま――笑っていた。

楽しそうに、歪んだ笑み。その笑みに斗夜の背筋は粟立った。それと同時に既視感を感じる。――あの笑みは自分もしたことがある笑みだった。

ブラッドの二人が声を合わせて発導する。それは強力な発導だったが戦況を見越した斗夜にとってそんなことは些細なことだった。あの二人、死ぬ――斗夜がそんな予感を抱いた刹那、正道は静かに発導した。

咆哮とともに顕現した黒炎の塊はブラッド二人の発導を餌のように食らう。

ライオンとウサギなんてかわいいものじゃない、ドラゴンに睨まれるネズミ。そんな言葉通りの状況が斗夜の眼下に広がった。

足元で唸る異形の巨竜に斗夜は息を呑んだ。

――これを、止められるか？ 僕は。

斗夜はそう考えていた。正道に人殺しをさせるわけにはいかない。正義の魔導士がする行為ではないと思うし、この発導には正道の意思はないはずだったから。それに先代のホワイトナイトの息子に今のホワイトナイトとしてそんなことをさせるわけにはいかない。

発導した後膝をついた正道は混乱しているようだった。表情に正気は戻ってきているが、複雑な表情をしている。ブラッドの言葉にも上手く反応できていない様子だった。

飛びだすタイミングを見計らっていると、正道が再び手を上げた。合わせて黒炎の巨体が揺らめく。

驚愕の色が浮かぶ表情から正道の意思ではないということが窺え

る。

——いくか、今だ、今だ、いけっ、いけよ、僕！

巨竜が燃え盛り滑空し、逃げたブラッドの背中を追う。

——でもバレたらどうする……脇坂君なら見抜かれるかも……つてそんなこと関係ないだろ！ このままだと脇坂君が人殺しになる……いけよ！ 僕！ いけっ！

斗夜は飛びだそうと身体に力を入れた。その瞬間に異変を感じる。——……あれ？ 魔力が乱れてる？

狂気に満ちていた正道のなかの魔力が和らぎ、落ち着いてきたように感じる。そこには諦念のようなものも混じっているように感じた。

滑空する巨竜からも瓦解する気配が見える。

「やめろおおおおおおおおおッ！！！」

正道のその叫びを合図のようにして巨竜は爆散した。吹き荒れる熱風が斗夜のフルフェイスを撫でる。

斗夜が危惧していた出来事は起きなかった。結局斗夜の出番はなかったが、どこか釈然としない気持ちを抱いていた。

正道のなかから感じていた気配が薄れていく。

——なにがあったんだろう。あれだけ危ない魔力だったのに。あの存在は僕が知っている存在と違うのだろうか。でも、あれは確かに……ッ！

薄れていく気配から刺すような“視線”を感じた。
——！

斗夜は思わず反応してしまい天井の音を鳴らしてしまうがそんなことはどうでもよかった。

斗夜は震えながら倉庫の上で膝を抱える。送られた視線とともに斗夜の頭のなかに去来したものがあった。視線という不可視なもの奥にはつきりとその姿が見えた。閃光のように最奥の記憶が弾ける。

——思い、出した……あれは、あれは……——

斗夜は震えながら一つの名前を口にする。

「リリス……」

その存在の役割やなぜ恐怖を抱いていたかまでは思いだせなかった。ただ魔物としての斗夜の本能がその名前を口にさせた。



ブラッド二人だけを乗せた車が走り去っていく。これでこの場には自分の知り合いを傷つける者はいなくなった。自分が動くことなく終幕を迎えたことに斗夜は少しの安堵感を覚えたが、すぐさまそれは違うと思いなおす。自分は見ていただけなのだ。傷つく前に止められることができたはずなのに。

後ろめたさと得体の知れない『リリース』という名の存在への恐怖。斗夜は走り去る車を追って逃げるようにその場から去った。

車の行先は吸血鬼に繋がる可能性があるのだ。今まで斗夜は自ら進んで敵陣に乗り込んだりすることはなかった。パトロール中に見つけた犯罪を阻止するのが主だ。第一そんな勇氣はない。

しかし、このチャンスを逃すわけにはいかない。今のホワイトナイトである自分にとって最大の敵がそこにいるかも知れないのだ。自分の臆病を打ち破り、みんなのように勇氣が得られるチャンスが。ふがないホワイトナイトは今夜でさよならだ。

そう思って斗夜は車を追ったのだが——そこにいた男は斗夜の足を止めるには充分な狂気を備えていた。

第二埠頭の某倉庫。逃げていった車とほぼ同時に斗夜はその倉庫の屋上に辿りついた。月光に照らされるそこは大型の貨物を置くような倉庫なのだろう、その規模は大きく堅牢な外壁と天材に覆われている。斗夜は中二階へと出るドアの小窓から気配を消してなかの様子を窺った。

暗い倉庫のなかにいるのは逃げた男を含めて四人。消え入りそうな弱い魔力が二人と少し異質な濃い魔力の男――これは数年前第一埠頭で毘にはめられた際に感じた魔力。おそらくあの集団のなかにいたのだろう。男はブラッドのリーダーらしい。

そして、残るもう一人の男――ホワイトナイトの最大の敵、吸血鬼。

無骨な骨格に金髪のオールバック、丸いサングラスの中年の男。漆黒のコートを巨軀に纏い、一見外人のように見える。流暢に操られる日本語は柔和な口調だが纏う空気は人間や魔導士のものではない。

美泉の街を蠢いていたうねるような狂気。その正体。間近で見る男から感じる魔力は殺意や狂気という不穏なもので満たされていた。

やはり男は魔物だった。正確には“魔導士としての身体を魔物が支配している”状況というのが正しい。なぜそういう状態に男が陥ってるのかは“純粹な魔物”である斗夜には分からない。

狂気の塊――魔物としてはそれが正当なあり方なのかもしれない。だが自分はその対極に位置している魔物。そこから感じるのは純粹な恐怖。先刻正道から感じたリリスという名の存在とは違う感覚だった。

リリスから感じたものは恐怖というより畏怖というべきなのだろうと本物の恐怖を前に斗夜は思う。

――“こいつ”が吸血鬼だったのか。

それは正道がハリオとマリオと対峙していたときのこと。その様子を登校中だった斗夜は野次馬のふりをして密かに見ていた。もちろんコスチュームなどは着ておらず制服姿なので手を出す

つもりは毛頭なかった。面倒事に関わるのはホワイトナイトの姿のときだけと斗夜は決めている。

魔力を探ることもなく、マリオが吹き飛ばしてきた小石で額に怪我を作ったりしながら戦況を覗いていると、その場を取り巻いている空気に異質なものを感じて斗夜はその出元を探った。

その男はビルの屋上から楽しそうに正道たちを覗いていた。気配は消しているのか強烈ななにかは感じない。しかし男からは抑えきれないように不穏な空気が溢れ出していた。

そのとき斗夜は分からなかったのだが、その男はやはり異常な存在だった。

——あいつを倒さない。でも怖い……まだそんなこといつてるのか僕は。弱い自分を叩きなおすんじゃないのか。あの男のせいで何人も傷ついた。それなのに……やっぱり自分には正義も勇気もないんだ……。

逃げてきた男たちはリーダーである男に逃げ帰ってきたことの説明をしている。リーダーの男から自分の名前が出たがそれは当事者によって否定される。逃げてきた男は「ガキ」という表現で自分たちがやられた魔導士のことを伝えた。

リーダーの男はその報告を聞いて激昂する。脇坂正道の名前は出てこなかったがブラッドの男たちは正道の存在を知っているようだった。

それを聞いて吸血鬼の男が嬉しそうに手を打ち鳴らす。

斗夜は男から溢れ出している狂気が増大するのを感じた。否が応にも恐怖は増大していく。

吸血鬼の男も正道のことを知っているようだった。しかも戦いたいとまでいった。

男は誰に対するかは分からないが会話をするように喋り、逃げ帰ってきた一人の男を昏倒させ、自分の肩に担いだ。吸血鬼の男の狂気は爆発的に膨れ上がり、男はその狂気を表情に現わした。

——あれが、吸血鬼の正体……バケモノだ。でも、自分も同じ輪のなかに入るのか……。

斗夜は同族嫌悪のようなものを感じながら男の下卑た声に耳を傾けた。

そこから分かったことは正道たちが狙われていること。吸血鬼としての目的が達成されようとしているということ。

吸血鬼の男はブラッドを完全に掌握し、蹂躪していた。吸血鬼に血……冗談のようなその関係はその関係通りに運命を進んでいた。

斗夜は倉庫から出ていった吸血鬼の男を追う。

——今だ。今しかないぞ。あの男は一人だ。やるには今しかない。

禍々しい雰囲気も先刻より収まりを見せ、鼻歌まで歌っている。

——なにしてるんだ。早く飛び出せよ、僕。でも……勝てるのか。こんな精神状況じゃ無理かもしれない。いや、無理だ！ いや、なに考えてる……五十島さんも朱川さんも勇気を持って立ち向かってたじゃないか！ 僕もあんな風になりたいのに……。

男の足が止まり、視線を上へ向けた。

斗夜の位置を的確に掴んでいた男の視線に潜んでいた斗夜は飛び出すこともなく、自分の弱い心に従いその姿を隠した。

「——ホワイトナイト君にも興味があったんだが……彼は臆病者

のようだ。それでは張り合いがなくてね……男は強いものに憧れるのさ」

男は興味もなさそうに簡単に背を向け立ち去っていく。

まるでホワイトナイトなどその場にいないように。

斗夜はその場から動くことができなかった。なにもできない自分はいないも同然。斗夜は自分でもそう思ってしまった。

男は鼻歌混じりにその背中を小さくしていく。呆然と膝を抱えて沈む斗夜の耳に男の声が聞こえる。

「あの子がきてくれるにはどうしたらいいかな？ ……なるほどね。大切なものを奪うかあ……それはいいかもね」

あの子とは誰か。それは分かった。その魔導士に危険が迫っていることも。

しかしそれは伝えられない情報。その情報を伝えることは自分の正体とこの夜の自分の行動を露見することになると思った。

そしてこの行動が他人を危機にさらすことも知っていた。それを知らながら斗夜は自分を守ることを優先する。

臆病者の魔物は憶病なまま。

膝を抱えた正義の味方は自分の背中に背負われた正義というものに押し潰され、静かに泣いた。

翌日。

曇天の空に規則的な鐘の音が響く。荘厳で雄大なその音はどこか上品さや高貴さも兼ね備え、まるで鷹光学園の外観を音で現わしているようだ。豪華な門の上で羽を休める金色こんじきの鷹が登校する生徒たちを見つめ、その横で三毛猫が気だるそうに鳴く。いつもの日常が今日も始まる。

登校する生徒の波が収まった頃、ヘッドホンから歪んだ音楽を垂れ流し、鞆代わりのギターケースを担いだ正道がうつむき加減で歩いている。

その頭には鉢巻のように包帯が巻かれている。特に大した怪我ではないのだが、昨夜第一埠頭に厳造が現れてから病院に連れていかれた。

怪我の程度が一番酷かった翔太はそのまま入院の運びとなったが一週間程度で退院できるらしい。

厳造は第一埠頭で起きた出来事については深く触れず、正道たちは深夜ということもありそのまま帰された。正道はある程度説明はしたが詳しい事情についてはあとで聞きにいくとのことである。

昨夜正道のなかに響いていたあの声は聞こえない。

聞こえなくていい。あれは夢か幻か。そういう類いのものであつてほしい。ああいう未体験な状況で精神的に支障をきたしたのだ。そう思いたい。あんな魔導も偶然の産物だ。

不意に耳を澄ましてしまつて正道は首を振る。意味はないと分かっているがプレーヤーの音量を上げた。

門を潜り階段を上がる。正道は一年生だが教室は二階にある。一階は職員室や特別教室などでスペースは埋まっていた。

包帯を巻いた正道に廊下にいた生徒からは心配する声が上がったが、正道はなんでもないと気丈に振る舞った。昨日の出来事は他言無用。怪我の理由など説明できるわけもなかった。

——この怪我についてとやかくいわれるのは面倒だな。

そう思うと正道の足取りは重くなる。

かといって包帯を取るわけにもいかない。朝に取って風呂に入ったところ、再び血が流れた。流血しながら授業を受けるのはインパクトはあるが違うと思う。

正道の怪我について父の剛から特に言及はなかった。ただ一言「若気の至りか」とつぶやいていたので喧嘩とでも思っているらしい。

正道は教室のドアの前で立ち尽くした。廊下からはどんどん生徒の姿が教室へと消えていく。

——真美になんていおう……。

真美には昨夜の出来事はなにも伝えていない。もしかしたら凜や蘭が伝えているかも知れないが、時間もそう大して経っておらず、昨夜の騒乱の疲労や困惑もあるだろう。それをわざわざ真美にいう必要もない。それに、もしそうなら真美の性格上、心配して電話でもかかってきそうなものだったがそれもない。

自分がこんな姿で入っていったら確実に心配する。正道は真美にもおどけて誤魔化すつもりでいたが、真美の瞳に見つめられると本当のことをいってしまいそうな不安もあった。その状況で嘘はつけない。

正道をせかすように鐘が鳴り響き廊下の向こうに担任である森沙希の巖のような顔が見えた。頭一つ抜き出た体躯、ジャージパンツにスポーツブランドのＴシャツ。そのＴシャツのロゴを引き伸ばすほどの豊満な胸は酢豚のなかのパイナップル級に忌避されている。体育教師然とした格好の森は虫を払うように、他クラスの廊下に残っている生徒を教室へ叩き込みながら近づいてくる。森は一人佇む正道の姿を見つけると頭の包帯を見て眉根を寄せた。

正道はため息一つ、ヘッドホンを外して教室のドアを開けた。

案の定、クラスメイトたちが怪我の理由を聞いてくる。「転んだ」だの「隕石が……」と正道は適当にはぐらかして笑っていたが、真美の視線に気づく。

黒い大きな瞳は揺れ、形のいい唇はなにかいおうとしているのか少しだけ開いている。手を胸に当て、心底不安そうな真美の姿を見て正道は上手く笑えなかった。

森が勢いよく扉を開けて教室に入ってくる。真美は浮かしていた腰を仕方なく降ろして前を向いた。

——余計心配させたかな。

正道はため息をつきながら席につく。ふと、なにかが足りない気がして正道は隣の席を見た。

そこにいるはずの冴嶋斗夜の姿がなかった。

「珍しい、冴嶋は休みか……。脇坂。どうした、その怪我」

出席を取りながら男のような太い声で森が訊いた。やはり担任教師としては気になるらしい。

森のその言葉を待っていたかのように真美が正道の方へ身体を向けた。他の生徒も気になるらしく正道に注目している。なかにはどんなボケをいうのだろうと期待しているような顔の男子生徒も見受けられた。

そんな衆人環視の状況でも正道が気にしているのは真美の視線だけだった。

「えっと……転びました」

正道はいい淀んでそういった。数瞬の沈黙の後「フッー！」という誰かの声で笑いが起こる。

その場でクスリともしてないのは真美と正道の二人だけだった。

森は鼻で笑って怪訝そうに、

「……だそうだ。お前らも脇坂のように頭悪くなりたくなければ転ぶんじゃないぞー。……脇坂、ちょっと前かい」と笑いを誘って名簿を閉じた。

森にいわれた通り正道は教壇へ向かった。森が手招きしていたため無視することはできない。その際に真美と目があったが、正道はぎこちなく笑うことしかできなかった。

教壇へつくと森の腕が首に巻きついた。女とは思えない硬い腕の筋肉の感触と女としか思えない柔らかく無駄にたわわな胸の感触が正道の顔を挟み込む。

「お前、なんかしたのか」

傍目にはふざけているように見えるが、森の小声は真剣味を帯びていた。

「ふえっ？ ……なにも」

「朝一に警察の田畑という刑事から電話があった」

「えっ!？」

正道は素直に驚嘆した。

昨夜、正道は病院で厳造に「このことは学校に伝えなくてくれ」と念を押していた。正当防衛とはいえあれほどのこと、バレてしま

えば処分は免れない。ユウコを退学にしたいくない凜からの懇願もあった。

厳造は渋い顔を見せたが、正道が「黙っておいてくれれば吸血鬼についての手がかりを教える」と交換条件を提示したことにより交渉は成立したかのように見えた。しかし、

——くっそ、吸血鬼の情報はいらないのかよ！ 厳ちゃん！

「なに驚いてるんだ。すごいじゃないか」

「へっ？」

「朱川の双子と五十島とで暴漢から市民を守ったんだって？ 転んだだと？ 恥かしがりやがって。せっかく話振ってやったのに。名誉の負傷とでもいいえはいじゃないか。五十島が無茶したらしいなあいつは名誉の戦死といったところか……そのことに関して訊きたいことがあるそうだ。内密にということだがお前の口からいうんないいと思うってたんだがな。お前も口止めされてんのか？」

どうやら厳造は昨夜の出来事はなかったことにして事情を聞きにくるらしい。

それにしてもあながち間違っただけではないすれすれのでっちあげだ。正道は目を丸くしたまま、森の胸のなかで頷いた。

「その田畑って刑事は昼休みにくるらしいぞ。朱川の二人にはあっちの担任に伝えるようにってある。まあきたら呼び出すから帰ったりますんよ」

森は正道を解放すると名簿を脇に抱えて去っていった。

入れ替わるように一限目の教科の教師が入ってくる。

正道は席へと戻る途中で真美に話しかけられた。

「まさちゃん、その怪我どうしたの？」

「転んだんだって」

正道は極力真美の目を見ないように、ぶっきらぼうに。

意地っ張りの子供のようないかたになってしまって、自分でも嘘臭いと感じる。

真美がなにかいおうとしたのは息を呑む音で分かったが正道はそれを無視して席に戻った。

別に怒っているわけではない。ただ、心配させたくない一心だった。

それから正道は真美を避けるように昼休みまでを過ごした。

そして昼休み――



その戦乙女の朗々たる声は響く鐘の音とともに。

『生徒指導部の名において、天羽黎亜が命ずる！ 一年二組の朱川凛、蘭！ 一年一組の脇坂正道！ 休戦を告げるこの鐘が鳴りやむまでに即刻生徒指導室へ召喚されたし！ 以上！』



一階生徒指導室前。正道の横には息を乱している朱川姉妹が立っている。

正道は天羽の無茶な放送が終わるや否や教室を飛び出した。同時に朱川姉妹も飛び出し、三人でおこなう徒競争のような様相を呈した。廊下は走ってはいけなが走らせているのは本来注意する側の教師だ。

天羽の強くブレのない言葉は絶対的な命令のようで、いうことは聞いておいた方がいいような気になってしまう。

生徒指導室の前にはなぜか中世の甲冑が一体、番人のように屹立している。その横には腕を組み胸を強調させる森と、まさにジャンヌダルクな格好をしているアイパッチ姿の天羽黎亜がこれまた腕を組んで立っていた。中世の甲冑に挟まれる形となっている森の頬はなぜか紅潮していた。

天羽が金色の長髪をかき上げ口を開く。甘い芳香が天羽の髪から漂った。

天羽黎亜ファンクラブ会員の蘭が表情を変えぬまま鼻を動かした。

「揃ったな。では私はゆくぞ、森先生。この部屋はお貸しする。お前ら、なにをしたかは知らんが客人はなかでお待ちだ。一人は軟弱者のようだが、もう一人の男は屈強そうだ……防具は最小限でいいだろう、重戦士はSPDパラメータが弱いから……武器は戦斧、いや、鉄鎚？ ……ハルバートも捨てがたい………フフ、フフフ」

天羽は企んでいるような笑みで、わけの分らないことをつぶやきながら甲冑を鳴らし去っていった。蘭がその背中に頭を下げる。

「なんだあれ……」

「おかしくなってるのよ、廃人め」

「姉様。エンジェルの悪口はいけない」

「「エンジェル!？」」^{エンジェル}

蘭にとって天羽は天使らしい。頬を紅潮させる蘭の趣味嗜好は分からないが、だいぶ入れ込んでいたようだった。

「……」

森は呆けたような顔をして、沈黙している。先刻の天羽の言葉にも目の前で三人が天羽に対して訝しんでいても反応は見せていない。

「先生？ 敵ちゃ……田畑さん、なかにいるんでしょう？」

「あ、ああ……脇坂。そうだ。た、田畑さんがお待ちだ。入れ」

森はハッと我に返るように指導室のドアを開けた。冷たい鉄錆のような臭いを帯びた空気が部屋から漂う。

蘭がその目に嬉しそうな感情を浮かべて先陣を切る。その後には凜がため息をつきながら続いた。正道もその後ろに続こうとしたのだが、その途中で森に腕を掴まれた。森は万力のような力で正道の腕を握り締め、そのまま臂力にものをいわせて横へ引きずる。

「ぎゃっ」

正道はなにをされるのかと短く悲鳴を上げたが、すぐに解放された。そして森の些か巨大な顔が接近する。その顔は紅潮し、つぶらな黒瞳は少し潤んでいる。まるで恋するメスゴリラ……そう考えた瞬間自分に危機が迫っているのではという考えに至る。

——奪われる！ 俺の唇、奪われる！ ファーストキスは人間がよかった……。

ぞつと血の気が引いた正道は咄嗟に口元を覆い隠した。ただ、森はそんな防御など突き破ってくるだろう。正道はとりあえず目を閉じた。とりあえず。

森の鼻息が顔にかかる。正道の魂が抜けかけた瞬間、森は静かに口を開いた。

「脇坂。あの刑事さんとは知り合いらしいな。た、田畑さんといったか」

目を開けると恥じらう巨大な乙女がもじもじしていた。

「……え？ ああ、はい。厳ちゃん……父の友人の弟さんです」

「げ、厳ちゃん……厳ちゃんか……その、なんだ。げ、厳ちゃんは、結婚とかしてるのか」

ははーん。そういうことか、と正道は得心がいった。

森は田畑厳造に恋してしまったのだ。類は友を呼ぶというのが確かに惹かれるところがあるのかもしれない。厳造もいつてみればゴリラのような男だ。

正道はにやついて答える。

「自分で聞けばいいじゃないですか。厳ちゃんは独身っすよ。彼女もいたとか聞いたことないです」

「そ、そうか！ ……そうか、なるほどな」

「正道！ なに話してる。早く入ってこい」

そんなやり取りをしていると指導室のなかから厳造の低い声が響いた。

呆けた顔で「なるほどな……」と繰り返しつつぶやきながら去っていった森の背中を見送って、正道は指導室へ足を踏み入れた。

そこは部屋というか武器庫だった。

一対のソファとテーブル。窓際には重厚なパソコンが置かれたデスク。天羽はあのパソコンでネットゲームに興じているのだろう。それらを囲む壁面にはその世界から飛び出してきたようなような武器の数々。

鈍い輝きを放つ両刃の剣に鎧や弓に鞭まである。この部屋に足を踏み入れたことのない正道だったが、噂以上だった。

部屋のなかで唯一日常的な物体に凜と蘭、厳造とその部下が腰を降ろしていた。はち切れそうなスーツをだらしなく着た厳造が手を挙げて笑う。

「よお正道。事情聴取にきたぞ」

「事情聴取って、なんか俺らが悪いことしたみたいじゃねえか」

「まあ、似たようなもんだろ。ハッハッハ。……それにしてもなんだこの銃刀法違反な部屋は。ここの主もどうかしてるぞ」

キツと蘭が厳造を睨む。厳造の横に座っている部下の方がびくりとした。

厳造が仕切りなおすように手を叩く。

「さ、学生の時間ってやつは尊いものだ。さっそく本題に入ろう。昨夜なにがあったか、それと——吸血鬼の情報を」

主に凜と正道で昨夜起きた出来事をできるだけ詳細に厳造に伝えた。

『チルドレン・オブ・ナイト』で起きた誘拐事件。それを追った凜とたまたま居合わせた五十島翔太。男たちはブラッドのメンバー。翔太が倒れ、凜が危機に面する。そこに連絡を受けていた正道と蘭が助けに入った。

正道がブラッドの二人を倒し、凜と蘭が誘拐された風の魔導士のユウコを助ける。失敗したブラッドの二人は車で走り去り逃げた――

「――そういうことだな」

「ああ」

厳造は揺るぎない瞳で正道たちの話を聞いていた。横で厳造の部下がペンを走らせている。

「そこに吸血鬼が絡んでくると」

「翔太がそうだった。狙われたのは凜の先輩の風の魔導士。最後のターゲット。それはブラッドが誰かに頼まれて誘拐してみたんだ。オーナーと呼ばれてる誰か」

「あいつら、ユウコ先輩には“なんにもしない”っていった」

「なるほどな……オーナーね。そんな話聞いたことねえな。買収でもされたのか。血のオーナーが吸血鬼とは笑わせる。強姦目的でもなきゃ、前の被害者もチルドでやられてる……信用できるかもな。ブラッドが共犯で、そのオーナーとやらが実行犯。最近おとなしいと思っただらどえらいことに首突っ込みやがって。それに、昨日失敗したってことはまだ四人目は狙われてるってことだろ」

厳造はテーブルを叩いておもむろに立ち上がる。

「よっしゃ。まずは五十島翔太に聴取取りにいくぞ。それからブラッドのアジト捜さねえとな。あいつらこころと変えやがる。四人目の被害者が出る前にそのオーナーとやらをパクるぞ」

「はい！」

部下の刑事が鼻息荒く頷く。

「お前らもう帰っていいぞ。それと、こういうことには二度と関わ

るんじゃない。死んでたらどうするんだ。オネーちゃんもああいうところには大人になってからだ」

オネーちゃんと呼ばれた凜が目を潤ませて頷く。蘭に連れられるようにして凜は出ていく。

「オネーちゃんって、そういうお店じゃないんですから、田畑さん」
「うるせーな。ほれ、正道も帰れ。大事な昼休みが終わっちまうぞ」
厳造は蚊でも払うように手を振る。

「協力したのにそれかよっ。でも、処分とかなんもなしに済みそうだよ。ありがとな厳ちゃん」

「上手く誤魔化せたる？ いいってことよ、ガッハッハ！ ……あ、そうだ正道。一つ聞きたいことがあるんだが」

「なに？」

「あの綺麗な先生は誰だ？」

「綺麗な先生？ ああ、天羽先生ね」

ここで聞く綺麗な先生といえば美しき廃人天羽黎亜しかいない。天羽は変態だが美しいのだ。あれほど甲冑を装備して画になる女性も少ないだろう。

しかし、

「天羽って、あの鎧女だろう？ 俺が聞いているのはジャージ姿の先生のことだ」

——まさか。

「……森沙希………」

正道はうわごとのようにその名前を告げた。

それを聞いて厳造はポリポリと傷ついた頬をかいた。

「沙希さんか。ぴったりの美しい名前だ……昼食に誘ってみよう」

——まさかの両想い。

二人がバナナを囲む情景が思い浮かべられる。

最強カップル誕生の予感に正道はその身の震えを禁じざるを得なかった。



「ゴリサキが綺麗？ ……理解できん」

非常に複雑な気持ちのまま正道は食堂の方へ歩く。

森に恋した厳造はあの後はち切れそうなスーツをなおしてパンパンのまま職員室へと歩を進めていった。正道には厳造の美的センスが分からない。以前には真美を見て綺麗になったといったのだ。森には悪いがその差は月とすっぽんである。

「むー……」

真美のことを思い浮かべて正道の足取りは重くなった。

少ないながらもエムズからの給料は出て、昼飯代の確保はできた。しかし真美は弁当を作ってきてくれている。正道は昼食で真美の作る弁当を食べるのがもはや日課となっている。給料が出るまでと考えていた正道には嬉しい誤算だった。

正道はいつものように食堂へ向かっていたが、今日は面倒くさいことがあるのを思い出した。

頭に巻かれた包帯——ハリオとマリオのときはこんなことなかったが。

呼び出されたこともあって「転んだ」なんて理由は通用しない。追及されると多分嘘はつけない。心配をかけるのも嫌だし、釘を刺されるのも嫌だ。それに、真美が「無力だ」と自分を責める姿も想像できる。それはなんだか真美を傷つけているようで嫌だ。

終わったことでもないのかも知れないがなんか嫌だ。

そんな得もいわれぬ憂鬱さを胸に正道はふらふらと真美のもとへ

辿りついた。

色彩豊かな花を咲かす花壇がテーブルを囲むように設置されているテラス席。午後から天気は崩れるらしく、雨の気配を帯びた風は少し肌寒い。真美はいつもの席に座っていた。

風に揺れる黒髪は曇天の空の下でも確かな輝きを放ち、どこか妖艶な魅力を感じさせる。生まれながらにしての黒瞳は宝石のように煌めき、相対する者を魅了する。その瞳に見つめられると心のなかを見られているようで正道は少したじろいでしまう。

真美は正道を待っていたようで弁当には手をつけていない。可愛い花柄の包みに包まれた弁当が向かい合うように置かれている。正道は気づかれないよう静かにため息をついて真美の向かいに座った。

「よ、よお、遅くなった」

「……ぎこちない」

「えっ」

「その怪我どうしたの」

「——うっ、いきなり。」

「だから、転んだ……」

「別にそれがほんとならそれでいいよ。でもなんか今日のまさちゃんおかしいもん。普通に話してくれなかったし、なんか隠してるでしょ？ 森先生にもなんかいわれてたし、さっきの呼び出しだって

——」

「むう……」

正道は朝に言葉を交わした後、無視するように真美とは喋っていない。真美は今まで溜まった疑問をたたみかけてくる。正道は応えに窮した。

心配をかけまいとした言動は自爆だったらしい。上手く接するこ

とができていないのは自分でも気づいていたのだが……。
どうも冗談ではない嘘は苦手である。

「ねえ、まさちゃん」

真美がぐつと身を乗り出す。胸の膨らみがテーブルの上に乗り形になり強調される。

正道は厳造が作った「暴漢から市民を守った」という嘘で誤魔化すことも考えたが上手くいえる自信はなかったので観念した。

目の前には無言で正道を見つめる真美の顔があるのだ。真美には珍しく少し眉根を寄せ、訝しい顔をしている。

知らず知らずのうちに寄せられた胸と無理して怒ってるような真美の顔。正道の鼓動が少し速くなる。

正道は気を紛らわせようと弁当に手を伸ばしたが、真美がそれを制して正道の分の弁当を自分の方に寄せた。そしてさらに顔を近づける。シャンプーの香りなのか甘い芳香が正道の鼻をくすぐった。

「うっ……そんなに気になんのかよ」

「うん。だってなんか隠してるもん」

「分かったって……昨日な——」

正道はできるだけ柔らかく、でも嘘はつかないように昨日の出来事を真美に伝えた。

誘拐ということは伝えたが、吸血鬼のことは伝えていない。それ以前に、誘拐の理由を正道がいい淀んだことで真美はその目的が強姦目的だと解釈したらしかった。

あの声のことも伝えていない。それは自分以外知らない情報だった。

真美は正道のことも心配したが、同じエムズの仲間であつた翔太が入院していることを知ってショックを受けた様子だった。

「……私も魔導が使えたら」

案の定、真美は自分を責めた。

魔導士の家に生まれた真美であるが、魔導はなぜか使えない。真美の母が真美を生むときに亡くなったときに魔力のバランスが崩れたんじゃないかという考えがあったが、原因は不明である。

エムズでも力になれない、こういう友だちの危機にも力になれない。そういう忸怩たる思いが真美のなかにはある。

うつむいた真美の瞳から落ちた涙滴がテーブルを打つ。

「だあー、泣くなって！ お前なんも悪くないだろ！」

傍目から見れば正道が真美を泣かしているように見える。

彼氏が彼女を泣かしているように見えるのだろう。周囲の視線も痛い。

「それに……俺は例えお前が魔導士でも、そういう場には立ってほしくねえ。だから泣くな」

「え……」

真美がきょとんとして顔を上げる。涙が白い頬を伝わり落ちた。

潤んだ黒瞳が紅潮し始めた頬とコントラストを生む。

正道もなんだか恥かしくなって視線をそらす。

「あの、その、なんだ、お前には怪我とかして欲しくないっつーか、心配っつーか、その……まあ、そういう感じだ」

「まさちゃん……」

二人はぎこちなく視線を合わせる。

なんだか雰囲気が変わった二人の姿を見て周囲からため息が漏れた。

なかには歪んだ羨望が生んだ舌打ちも混じっていたが、正道の耳には届かない。

「でもまあ終わったことだからな？　もう心配すんな、入院してるけど翔太も元気だし。そうだ、今日凜とかも誘って見舞いにいこうぜ」

「うんっ」

真美の花が咲くような笑みは正道の心に安堵を生む。

正道はこの笑みを見るために真美と話している気がしていた。

正道にとって来栖真美という幼なじみの存在は確実に“大切なもの”の一つだった。



放課後——美泉医科大学付属病院。

美泉の中心部に存在する白亜の医療施設。病院としての歴史は古いが昨年に竣工した病棟は近代的な街並みの美泉に溶け込んでいる。数年前に設置された救命救急センターの活躍はテレビにも取り上げられるほどで、各メディアからの注目度も上昇している。最新鋭の設備と豊かなサービスで県内ならず県外からの評価も高い病院だ。

正道と真美は病院へ向かう道すがら花を買って翔太の病室へと向かっていった。

凜と蘭も誘おうと思っていたのだが、その必要はなかった。

凜は終業の鐘の音とともに教室を飛び出し、病院へ向かったらしい。必然的に蘭も姉を追いついて病院へ向かっていることだろう。

凜は翔太のことがよほど心配らしかった。

一夜明けても凜の気持ちは変わっていないようである。

オタク扱いしていた翔太を凜は好きになった。それは吊り橋効果というものでもないのだろう。正道は翔太のことを格好いいと思う。オタクなのは確かにそうだが、それを取り除けば翔太は勇気があって、強く、優しい。……おまけにイケメン。それに凜が気付いただけだ。

それまで凜の恋愛の対象は正道だったが、もう正道のことは凜の眼中にないようである。『私のものは私のもの、蘭のものも私のもの』という考えのもと、妹を使ってまでものにしようとする不純で変則的な方法で迫ってきていた凜だったが今日はその傾向も見られなかった。凜の傀儡的ポジション（実は陰で支えているのだが）の蘭からもなにもない。

本当の恋を見つけたという感じだろうか。

昨夜、凜と翔太はなんだかい雰囲気だったが、翔太の想いは知らない。翔太は真美のことが好きなようだが、今回のことで気持ちが動いたかどうかは未だ判然としていない。

そのことに関して真美にはなにも伝えていなかった。翔太への対応が変わった凜の姿を見たら驚くんだろうなと思うと、正道のなかの悪戯心が働いた。

正道と真美は並んで清潔でなかば鏡面のような廊下を進む。その廊下には色分けされた矢印のような線が伸びており、どちらに進めばどこへ辿り着くかが分かりやすくなっている。

巨大な院内で迷う患者や見舞客も多いのだろう。そんなことを考えながら歩いていると矢印の甲斐なく、明らかに迷っているようなスーツ姿の男が立っていた。

痩せ形の中背、特に何の特徴もないスーツ姿。顔立ちは「平均」を絵に描いたような顔で特に目立つところもない。髪は黒く、髪型にもそれといって特徴はない。歳は二十代前半といったところだろうか。そんな普通な男はペンと黒い手帳を片手に、普通の眉を寄せ、普通に困っていた。

唯一普通じゃないのはその男の職業が警察という点だろうか。

「まさちゃん、あの人」

「ああ、厳ちゃんの部下だ。名前は……あんこ？ あれ？」

正道が首を傾げていると件の刑事が正道たちに気づいた。とはいえ部下の刑事が進む方向を定めた先に正道たちがいただけだったが。

刑事はペンで進行方向を示しながら正道たちに近づいてくる。その顔は明るい。

「やあやあ、脇坂君に、来栖さん。昼間はご協力ありがとうございました。お見舞いかい？」

刑事は正道に軽く敬礼をして訊ねる。

「はい。えっと、厳ちゃんは？」

「田畑さんはあの“綺麗”な先生とお昼へいったよ。そのあと署に戻ったんじゃないかな」

「……綺麗な、キレイな？ 切れ否？……」

真顔でそう告げる刑事に正道は自分の美的センスを疑い始める。もはや言葉の意味もよく分からなくなっているが、自分は間違っていないはずだと思う。

おかしいのは厳造とこの刑事の方だ！ そうに決まってる……大人になればなにか変わるのか？ そんな……—そんな世界嫌だ！

「あの、あんこさんはなにを？」

正道がしばし呆然としてしていると真美がなんの疑いもなく訊く。目の前の刑事を「あんこ」という名前で認識しているような口ぶりに目の前の刑事が苦笑を浮かべた。

「あんこさんって……田畑さんじゃないんだから。僕はこういうものですよ！」

刑事は手帳を胸ポケットにしまい、代わりに警察手帳を出して広げて見せる。

立て開きの手帳には「POLICE」の文字輝く金色のエンブレムの上に制服姿の刑事の写真が乗っている。階級は巡査。名前は斑

鳩崎 笑夢――

「……あの、なんて読むんですか」

「まだら、はとさき……わらむ？」

今まで見たことのない名前に正道と真美は首を傾げる。

刑事はフンと鼻を鳴らして、

「いかるがさき えむ。です！」

斑鳩崎 笑夢――見たところなにもかも普通な男の名前は普通じやなかった。

「なんちゅう……」

「すごい名前……」

「いい名前でしょう？ 名前負けとかいわないくださいね、いわれ慣れてますから……そうだ、僕がなにをしていたかでしたね？」

田畑さんが森先生とお食事にいつてしまわれたので、翔太君から話を聞くのを頼まれまして。それで。あまり単独行動ってだめなんですけどね。でも、田畑さんの恋のためっす！」

笑夢は表情をころろと変えて鼻息荒く右手を握り締めた。

「森先生と厳造さん？」

真美が判然としない様子で正道に顔を向ける。

「ま、まあ色々な。類は友を呼ぶというか、俺たちは見守るだけだ、そのうち分かる……多分」

「？」

森と厳造の色恋など正道的には特に関係はないし関わりたくもない事項だった。勝手にやってくれ。その一言に尽きる。

「聴取はだいたい正道君のいていた通りだったよ。それはそれでよしなんだけど……脇坂君！」

ずいと正道に笑夢の特徴のない顔が迫る。

「出口はどっちだい？」



笑夢^{えむ}は極度の方向音痴らしく、もう病院内を何周もしていたようだった。誰かに尋ねればいいと思ったのだが、尋ねた上での迷走だったらしい。

丁寧に出口までの経路を教えた正道に笑夢は礼をいって、去り際、「五十島君の部屋すごいことになってるよ。五十島君が死んだのかと思った」と意味深なことをいって去っていった。

「——ここだ」

『五十島翔太』と一人のプレートだけ掲示された病室。翔太は病床の空きがないとのことで個室に入っていた。

スライド式のドアに手をかけると少し病室にあるまじき芳香が漂っていることに気づいた。翔太の病室の前だけ病院特有の消毒液の匂いが消えているのだ。

それをかき消しているのは華やかで情熱的なバラの香り。正道は訝しんでドアをスライドさせる。

「なんだこれ」

「すごい……」

幕を開けるように徐々に見えた病室の景色は紅色に染まっていた。白を基調とした清潔な病室の中央には患者用のベッドがある。その周りを取り囲むように深紅の情熱がその花弁を咲かせていた。それはもう床一面に。笑夢がいつていたことも理解できる。バラの中央で苦笑をこちらに向ける翔太は棺桶に入った亡骸の様相を呈していた。

しかし本人は元気らしく、今は半身を起している。

「正道君。きてくれたんだ。あ、来栖さんも……あ、ありがとう」

正道は手を上げて応え、ベッド脇の椅子に腰を降ろした。

翔太は正道の後ろにいた真美を見つけると恥かしそうに、でも嬉しそうに礼をいう。どうやら翔太はまだ真美の方に気があるらしい。

この態度、凜が見たら怒るな——そう思うが病室に凜の姿はない。蘭の姿もなかったが、鞆が二つ椅子の上に置いてあるので一時的にどこかへいつているだけのようである。

「これ、お花……って間に合ってるね」

真美が買ってきた花を所在なく見せる。真美のいう通りこれ以上この部屋に花はいらないだろうが、

「いるいるいる！ いるよ！」

翔太は焦って包帯が巻かれた手を伸ばした。花を真美から大事そうに受け取り自分の目の前に置く。

「ありがとう……く、来栖さんも座ってよ」

真美は微笑んで椅子に腰かける。翔太の頬がほのかに紅潮した。

「元気そうだな。しっかしなんだこの部屋？　そういうオプションか？」

正道はバラの花を拾い上げてお手玉のように遊ぶ。

「あ、朱川さんだよ。昼間に朱川さんのお手伝いさんがきて、バラをまいていったんだ。なんか「お嬢様からのお見舞いでございます」とかいって……」

「凜ちゃんと蘭ちゃんってお金持ちなんだよね」

「そ、そう！　僕もびっくりしたよ。お手伝いさんなんてアニメ以外で初めて見た」

「で、そのお嬢様はどこにいんだよ？　トイレか？」

「——私のトイレを想像するなんてとんだ破廉恥野郎ね、正道」

その声とともにドアが静かに開く。胸を張り、腕を組んだ凜が高圧的な瞳で正道を睨めつける。

「破廉恥、正道」

ドアの開閉をしながらつぶやく蘭の両手には許容量いっぱいのコンビニ『スプリングマート』の袋が二つ。この病院にはスプリングマートも入店しているので二人はそこへ買出しにいったようである。しかし中身は知らないが買いすぎなのが気になる。

凜は深紅のバラのカーペットを蘭という従者をひきつれて悠然と進む。嘲笑のようなものを浮かべた凜は、“高慢ちき”なお嬢様然としていて赤いバラによく映える。ものすごく薄幸の美少女をいじめそうだ。

対照的な蘭は直進する姉のいく手を阻むバラをよけたりと地味な作業を無表情にこなしている。

「なんか、キャラ変わってね……」

「あれが普通だよ」

真美が小声で教えてくれる。

あれが普通らしい。正道は「普通扱い」に降格したようだ。先日まで積極的にいい寄られていた身としてはそれが寂しくもあり、また「これが、女というものかっ!」という恐怖もある。

凜は椅子に座るでもなく翔太のベッドの上に腰かけ、足を組む。胸元は開いているし、スカートは短い。非常に目のやり場に困る。凜は寄り添うように、

「翔太、色々買ってきたから好きなもの食べてね、あれだったらうちの料理人を呼んだっていいのよ」

「ふむ」

備え付けられたテーブルに買ってきたパンやおにぎりを次々に並べていた蘭は

全てを並べ終わると翔太に紹介するように満足げに手を広げた。

小さいテーブルに食糧がピラミッドのように積み重なっている。

「べ、別におなかすいてないよ……」

「な、なんだったら私の手料理でもいいのよ……目玉焼きが得意なの」

困惑している翔太をよそに凜は頬を紅潮させた。

「卵落とすだけじゃねえか……」

そんなやり取りに呆れていると真美がちょんちょんと正道の膝をついた。

真美は苦笑を浮かべ無言で首を傾げている。

真っ先に病院へ向かったり、花を贈ったり、翔太を毛嫌いしていたはずの凜の態度が一変しているのだ。凜がどういう感情を抱いているのかは一目瞭然だが、その背景を明確には伝えていないので判然としていないらしい。

「驚いたろ？ まあ見た通りだ。ヒーローに恋したお嬢様って感じだな。そのヒーローは気持ち動いてないみたいだけど……」

翔太はなぜか今口にパンを突っ込まれてもがもがと呻いている。

真美は翔太の気持ちを知っているはずだが特になんの反応も見せていない。

翔太からのアプローチもなければ、真美が断るなんてこともない。少しぎこちない会話を交わす友だちという関係が続いている。

ちゃんと告白しろと思う反面、真美が誰かのものになると考えるとなんだかモヤモヤもする。その気持ちが恋だと正道は薄々感じていたが確証は持てていない。幼なじみが離れていく寂しさのようなものを感じているだけかも知れないのだ。

恋というものを特に意識してこなかった正道は自分の気持ちに戸惑いを感じている。

「そうなんだ……凜ちゃん積極的だよね……私もあんな風になれた

らな」

あんな風に――ベッドの上では翔太を羽交い絞めにする蘭と翔太の口に突っ込もうとパンとおにぎりを構えている凜。

「あんな風にはならないでくれ……って、お前らどういう展開だ！怪我人だぞ！」

見かねた正道が飛び込むように止めに入る。

もちろん真美は今の凜を見ていったわけではない。凜の恋に対する積極性と貪欲さが今の真美には羨ましい。

真美のなかでわだかまる正道への気持ちはなんだかそのまま伝えられずに終わってしまいそうで恐い。

そんな確証もない不安を真美は感じていた。

ベッドの上には凜と正道が立ち、苦しそうにしている翔太を挟むようにもみ合っている。病室にあるまじき光景が展開され、騒音が響く。真美もあわあわと立ち上がった。

その騒乱と音のせいで誰も背後から近づく人間に気づくことができなかった。

「うるさああああいいッ！！」

耳をつんざくような金切り声が病室に響き、静寂が訪れる。

でっぷりと脂肪を蓄えた短軀、カマキリのような眼鏡をかけた看護師が腰に手を当て叫んでいた。

『すみません！』

その迫力にその場にいる全員、被害者の翔太さえもが一緒に頭を下げた。



看護師（婦長だった）の一喝で病室は本来の姿を取り戻していく。作業の邪魔だということで、華やかな芳香と情熱をまき散らしていたバラの花も婦長の鶴の一声で若い看護師たちに回収された。赤から一転して白い床が露わになった病室は光度が増して眩しいくらい白い。

お叱りを受けた当の本人たちは今はおとなしく座っている。

同じ顔をした朱川姉妹が並んで座り、その反対側に正道と真美。

翔太は両サイドからの視線を気にしながらベッドの上で横になっている。

「——ほんとに元気そうでよかった。まさちゃんから聞いたときにはもう、どうなったのかと」

真美は自分の胸に手を当てて話す。そのときの状況は詳しくは知らないが翔太は誘拐された先輩と凜を魔導を使って守ったと聞いている。よほど無茶したんだろう、でも翔太は頑張った、傷つけるのが恐いと泣いていた翔太が人を守るために強くなった。

真美は友だちの成長と無事を心から喜んでその瞳を潤ませていた。

「う、うん、元気だよ！　だだだからもう心配しないで、だだだ大丈夫！」

そんな言葉と瞳に見つめられて翔太が冷静でいられるわけがない。

「だ」を連呼した翔太は唇を舐めまわし、壊れたためかけてない眼鏡を上げようと自分の目を突いた。

「ぎゃっ」

翔太は短い悲鳴の後、「目がああああ、目がああああ」と悶絶す

る。束ねた黒髪が蛇のように右へ左へうねった。

その狼狽ぶりを見ていた凜が鬼のような形相で翔太を睨みつけていたことを本人は知らない。赤みがかった陽光が凜の赤髪を照らす。自然の光が凜の髪を燃え盛る炎のように演出した。

「やべー、怒ってる……」

「う、うん……私の、せいかな」

「んー……」

あながち間違いいでもないので正道は答えに窮する。真美はそういうつもりでいったのではないだろうが、正道がキザな性格なら「惚れさせた真美が悪いんだぜ」と気取った笑顔とともにいつているところだ。だが正道はそんな性格でもなければ、冗談でもそんなことをいうのは恥ずかしい。

翔太はしばしの悶絶ののちに落ち着いた。でもまだ痛いようで少し充血した目をこすりながら口を開く。

「ぼ、僕が元気なのは正道君のおかげだよ。あと朱川さんも。みんなが助けにきてくれなかったら今頃僕はどうなってたか……」

「まあ、そのことはいいいじゃねえか。終わったことだし、みんな元気だ。厳ちゃんもブラッドを潰すみたいなことってたし、俺たちはこの街の清浄化に一役買ったっつーことでよくね？ 前向きに考えようぜ」

病室に暗い影が落ちかけたので正道は声を上げた。

「うん。そうだね……」

返事をしたのは表情の暗い翔太だけだった。やはり昨夜のことは翔太たちの頭に恐怖を植え付けているらしい。その場にいなかった真美の表情も心なしか暗い。

正道も昨夜の出来事に恐怖を覚えていないわけではないが、一部

始終を体験した翔太たちよりはダメージは少なかった。それより『内なる声』という翔太たちとは性質の異なる恐怖を感じている。耳を澄ます。声はやはり聞こえない。

——正義があるなら悪はある……か。昨日の俺はどっちだ。正義か、それとも……。

“あいつ”は悪だったが、結局俺のことを聞いた。“お前は、俺のなんなんだ……。

正道は内なる声の存在を認め、心のなかで問いかけるように考えた。しかしなんの反応もない。それが普通なのだが昨夜は自分のなかのなに者かと会話をしていたのだ。何度呼びかけても中性的で幼さのある気の抜けた声は聞こえることはなかった。

「正道」

「ん？」

呼んだのは凜だった。怒りから一転して少し表情に陰りが見える。「翔太がこんなことになったのは私が魔導を使えなかったからだと思うの……だから、翔太は一人で戦ったし、私はなにもできなかった」

「朱川さんにも助けられたよ、あの火の玉……」

「ダメなの！……ダメなの。もっと強くなって、友だちも……好きな人を守るようになりたいって思ったの！」

凜はその瞳に涙を浮かべて立ち上がる。

「姉様」

「朱川さん……」

凜は口を固く結び、ぐっと目をこすって決意のまなざしで正道を見た。

凜は左目のコンタクトレンズを外す。濡れた蒼穹の輝きが露わに

なる。

そして静かに指を正道へ突き出して“命令”する。

「正道。私に魔導を教えなさい」

凜の悔しさは一夜明けてさらに増していたのだった。このまま使える力を眠らせておくのは違う。凜は決意した。いつも守られていたお嬢様を守る側へと変わる決意を。魔導士として生きていく決意を。

凜は誰かを守るために力を欲している。それは力のあり方として正しいと思う。傲岸不遜な態度をとる凜だが正道はそれも凜らしいと微笑んで立ち上がった。

「御命令とあらばお嬢様」

恭しく礼をして正道はその願いを聞き入れた。

「御立派です姉様」

蘭が小さく拍手をしながらこくこくと頷き、短めの黒髪を揺らす。今まで凜を陰で支えてきた妹としては感慨深いものがあるのだろう、その瞳に涙はなかったが、薄く微笑む顔はいつもの人形のような表情ではなかった。

「これで正道は姉様の奴隷」

規則正しく手を叩いたまま蘭がつぶやく。妹の言葉を聞いて凜は嗜虐心を満たしたように哄笑した。それはもう高らかに。

「なにするつもりだ……」

冗談であれ！と正道が祈っているとすすり泣く音が二つ。

「なんで泣くんだお前ら」

その音はベッドと正道の隣から。

「だ、だって、感動して……」

「翔太が泣くのはなんとなく分かるけど、なんで真美まで」

真美は花柄のハンカチで目元を押さえて、鼻を吸っている。

真美は正道の問いかけに小さく首を傾げ、自分でもなぜ泣いてるのかは分からないという表情を見せた。

実際真美の気持ちは複雑だった。感動もあるが、凜の強さに対する羨望、それを持ってない自分への叱責、魔導という力がないことへの失望。それがないまぜになっている。

魔導という自分にはない力を支えに内も外も強く生きている真美の友人たち。

自分にはその力はない。

正道は真美に危険な場には立って欲しくないという。その気持ちは嬉しいが、力を持たない真美はそもそも立てないのだ。

もし今回のようになにかあっても同じ場所に立てないのが悲しい。

——やっぱり、私はまさちゃんとは……。真美はそう考えてしま
う。

不意にいつも近くにいる正道を遠くに感じる。

それは正道が自分から遠ざかっているのか、自分が正道を遠ざけているのか、それとも——二人以外の“なにか”がどちらかを連れ去ろうとしているのか……。

真美の不安はどんどん強くなる。

どんどんと、どんどんと——

事件と現場―2

――某日。美泉海岸。

天気の良い日は絶好の散歩コースやドライブコースとなる海岸道路。雲ひとつない空には太陽が煌めき、穏やかな陽光を放っている。海を望む海岸道路には爽やかな潮風が吹き、今日も絶好の散歩コースとなりえるはずだったのだがこの日は様子がおかしかった。

散歩コースとして広くとられた歩道の一部に人だかりができている。その人だかりと向かい合っているのは明らかに散歩客ではない制服姿の警官。

その警官の後ろ、海岸道路から砂浜へと降りる階段が黄色と黒の警戒色なテープで遮られている。路肩に止められたパトカーのパトランプが日常をかきまわすように回っていた。

一般人は入れない警戒色の先、ブルーシートで切り取られた空間のなかに数人の刑事が一つの亡骸を見降ろしていた。その中には田畑蔵造とその部下、斑鳩崎笑夢の姿もある。いかるがさき えむ

笑夢はいつもの手帳を広げて今までに分かったことを蔵造へ報告する。

「被害者は指紋から美泉坂のホストクラブ『ナイトウィザード』で働く田中健也、二十歳。ちなみに源氏名は……」

「あー、源氏名なんか知ってどうする」

蔵造は笑夢の報告を遮って被害者がくるまれているブルーシートをめくった。そして合掌する。

砂に汚れた金色の髪、光を失った緑色の色眼。色を失ってはいるが整った顔立ちはホストというのも頷ける。蔵造は被害者の顔の特

徴を見ると、首の傷を見つけ目を細めた。

「こりゃあ……」

「目立った外傷は首の切創のみです。殺害後、海に投げ入れられ、ここに打ち上げられたと」

「んなこと、分かってるよ……それより、四人目かこいつ」

「状況が違いますので、なんともいえませんが、類似するところがあります。それと……この田中健也という男、おそらくブラッドかと。それに脇坂君たちに聞いていた内の一人とも特徴が一致します。あの晩、第一埠頭にいたのではないかと思われます」

笑夢の報告を厳造は無言で聞いていた——正道たちにやられたブラッドのメンバーが死んだ。そいつは残っていた吸血鬼最後のターゲットである風の魔導士^{イロッキ}。

おそらくあの日、こいつともう一人は四人目の女を吸血鬼のところに運ぶ予定だったはずだ。それが正道たちに阻止された。その失敗に対する罰や見せしめという可能性もあるが、この首の切創……血が抜かれてたら確定していいだろう——こいつが四人目だと。

「くそつたれ」

厳造は吸血鬼への憤慨と四人目の被害を防げなかった自分への憤懣を憎々しく吐いて立ち上がる。

「四人目へマして自分の血吸いやがったか、吸血鬼。しかしいつものメッセージはどうした？ 無造作に捨てやがって、なんか焦ってるのか……それとも待ち切れねえって感じでやっちゃったか？」

独白のように喋りながら厳造はブルーシートから出ていく。青い空、青い海、爽やかな潮風に潮騒。同じ青でも全く違う一種異世界のような青の景色が厳造を迎えた。

厳造にとってはブルーシートで創られた青の世界も自然な青の世界も日常に存在する世界なのだが、死がわだかまった青の世界はやはり日常と乖離^{かいり}している。

「これが四人目なら吸血鬼の魔導士への復讐はこれで終わりなんですかね……」

追従してきた笑夢が不安げにこぼす。

確かに大方の予想はそうだった四人目の被害者で最後だろうと。確かにそれはそうかもしれない。しかし厳造は引っかりを感じる。復讐が目的なら最後の被害者をメッセーじも残さずに捨てるとは思えない。

四人目ではないという見方もできるが、それならわざわざ同じ殺し方をする必要もなく、第一埠頭の出来事と鑑みててもやはり四人目という線が濃い。

本来の目的は復讐ではない気がする。

それは笑夢も同じようで、

「でも、本当に復讐なんでしょうか。抜いた血はどうしたんですし、まさか本当に飲んでは考えにくいですし……吸血鬼に見せかけるならもっと方法があると思いますし。やはりなにかに使ったんですかね、黒魔術の儀式とか……」

「魔導士の血に儀式ねえ……オカルトだな。狂ってる」

「すいません」

「謝らんでもいい、“笑夢”」

——あながち間違ってたねえかもな。

煙草に火をつけた厳造がそんなことを思い、空を睨みながら紫煙を吐く。

蒼穹を一羽の鴉が羽を広げていた。不吉な予感が煙草を不味くさせる。厳造は煙草を握り潰した。

——パトロールの強化、美泉からでないように検問を張るのもい

いかも知れないな。兄貴に頼まないと……。

自分の車へと向かいながら署長である兄、田畑伝の顔と今後の対応策について考えを巡らせていると後ろから頓狂な声が響く。

「えっ、今名前呼んでくれました？ マジすか？ 幻聴じゃないっすよね！ 田畑さぁーん！」

「やめろ、気持ち悪いッ」

「ふげえふっ」

背中に飛びついてきた笑夢をそのまま背負い投げのように砂浜に投げ伏せて巖造はなにこともなかったかのように歩き始める。

笑夢を投げ飛ばしたところで不吉な予感が消えてくれなかった。



美泉坂某ビル屋上。エムズ事務所。

「ましゃ、おはようー……って誰だい！？ その『下僕らぶそでいー！』の“炎のサディスト”こと如月キサラのような情熱ボディーの子と『バウンティーヒエラルキー』の“冷酷天使”こと氷室零華のような冷静ボディーの子は！？」

魔導便利屋エムズの室長である来栖真は正道の後ろについて入ってきた凜と蘭の姿を見て一息にいいきった。真は今ので息を吐き切ったのか椅子に沈みハフハフいつている。興奮しているのか眼鏡が下の方だけが曇りだしている。

「意味分からんがよく噛まずにいえたな……冷静ボディーってなんだよ」

本日は日曜日。もちろん学園は休みであるし、全員私服である。

正道はロングのバンドTシャツにジーンズ姿、凜は胸元の開いた丈の短いワンピースにミニスカート、膝上までのソックスで絶対領域を作り出し扇状的なボディラインを強調させている。蘭は姉をバイクに乗せてきたので膨らみの少ないボディラインに密着した赤いライダースーツだ。

正道の方には朝方蘭からの「姉様が特訓を希望しておられます」と連絡があった。

既に凜への魔導の訓練を始めていた正道だったがバイトを放ってまでつき合うわけにはいかず、「バイトが終わってから」と伝える

と凜と蘭がついてきたのであった。ちなみに凜たちにはバイトのことは伝えてあるが顔を出すのはこれが初めてである。翔太も働いているということにも興味があるのだろう。

真美の父が室長ということも伝えてあるのだが当の凜と蘭は目の前の光景に気を取られているらしく真の叫びに対する反応はない。

凜と蘭の目の前には大小様々なフィギュアがところ狭しと整然としている。

正道はもう慣れているがお嬢様育ちの二人には馴染みがないのか、特に凜の方がフィギュアを雑に扱っている。蘭の方は天羽のファンクラブに入っているだけあって、鎧を装備したフィギュアを少し嬉しそうに触っている。

「おい、あんま触んなよ」

「うへえー外もだけどなかもすごい。ここなに？ 超オタクなんだけど。こんなところで働いてんの？ あ、腕取れた」

正道の忠告むなしく、雑に扱っていたせいで案の定真のフィギュアが壊れた。

「ちよちよちよ！ なにしてるのっー！ 僕の1／32魔法機兵スクリームハウンドの腕をおおっ！」

たまらず真がフィギュアの名前を叫びながらデスクから飛び出した。

短い足で白衣をはためかし、地面を蹴る真。

「ひっ！ なにあの七三メガネデブオヤジ！」

「不明です」

凜と蘭はやっと真の存在に気づいたらしいが真を真美の父とは認識してはいないらしかった。確かに真のどこにも真美を想起させるパーツはないのだが。

「あれは……」

正道が身構えた蘭の姿を見て止めようとしたが間に合わなかった。自分のフィギュアを取り返そうと手を伸ばす真が意外と速かった。

「排除します」

その姿が姉を襲う変質者に見えたのか、蘭は静かにいってすつと短く息を吸い――跳んだ。

それはまさに赤い旋風。

「ぐえっ」

蘭の細い両足がハサミのように真の首を挟み込む。蘭はそのまま真を中心に旋回し下半身の力で真を投げ飛ばした。

「べぶしっ！」

真はソファアーの上を奇妙な声とともに跳ねた。投げ飛ばされた場所がソファアーの上だったため大事には至らなかったが、うんうん呻いている。それはまさしくメキシカンスタイルのプロレス。ルチャリブレの空中殺法、ヘッドシザーズホイップと呼ばれる投げ技だった。

「真美の父親……」

正道は額を押さえて言葉の続きをこぼしたが時すでに遅し。

「排除完了………正道、いまなんと？」

「このオヤジが室長？ 真美パパ？」

「だからいったろ……」

頷く正道に顔を見合わせ困惑を見せる凜と蘭。その間を真美が駆け抜けた。

「パパー！」



なんとか自力で自分のデスクまで戻った真は真美から水を受け取るべくぴくぴくと小指を立てて飲み干した。

「大丈夫かおっちゃん」

「ああ、僕の世界がぐるぐると回ったが世界は回るものだ。そして僕は基本的に被虐愛者だ、ただし女性のみの受け付けだが。だから大丈夫。むしろ気持ちいい」

凜から「キモい」との言葉が小さくこぼれたが聞かなかったことにする。

真の世界を回した蘭は無言でぺこぺこと頭を下げている。

「いや、謝らなくていい。よく見ると双子なんだね。だとすると君たちが朱川さんか……ましゃと真美たんから話は聞いているよ。色々大変だったみたいだね——」

真は真美と正道から第一埠頭での出来事を聞いている。

正道の頭の怪我や翔太の入院で話さざるを得なかった。その際に吸血鬼のことも真美に話した。

真は凜と蘭を慰めるように柔らかに話し始める。

その会話を端に聞きながら正道は真美に訊く。

今日の真美はいつもの制服とは違い、ジーンズに白のブラウスに黒いカーディガンと大人っぽい私服姿である。

正道は真美の顔に心なしか元気がないのが気になった。

「大丈夫か？ 最近体調でも悪いんじゃないか？」

「え？ ……色々あったからかな……でも、大丈夫、ありがとう」

「……そか。それならいいけど」

真美の浮かない表情の原因は胸にわだかまる得もいわれぬ胸騒ぎと不安感。

そこからくる表情の変化に気づいてくれたことは嬉しいが正道に気を使わせたことが少し申し訳ない気持ちも感じていた。

真美はできるだけ“上手く笑って”話題を変える。

「凜ちゃんの特訓、上手くいってる？」

「ああ、もうコツ掴んだみたいだぞ。あいつ水だからいつもびしょびしょだけど。今度水着でやるかって感じだぜ」

「みつ、水っ……ぎ……」

真美の“隠れ変態”な部分がもぞもぞと蠢く。

「まあそれは蘭に拒否されたが」

「な、なんだ……そうなんだ」

「ん？」

「いや、なんでも、ない……」

正道は赤くなる真美に首を傾げて真たちに視線を戻す。

「特訓、蘭も一緒にやってるんだが、あいつは超人的だな……身体動きが……力も……そうそう、股に手を入れて、頭を持って……ってなにしてる!？」

「みぎあああああ!」

「アーハッハッハッハア!」

聞こえてくるのは真の悲鳴と凜のサディスティックな哄笑。

真は蘭の“頭の上”でその身体をギシギシと軋ませていた。要はアルゼンチンバックブリーカーである。様々な格闘技を身につけている蘭だが今日はプロレスモードらしい。

「こういう展開だ……」

「さ、さあ……」

真の表情は苦悶のなかにも快感が見受けられるので正道と真美はしばらくその様子を見ていた。



「――で、四人目の被害者が昨日見つかったね。なんでもブラッドのメンバーだそうだね」

「――で、じゃねえよ。変態。なにごともなかったかのように話しやがって」

蘭から解放（名残惜しそうに）された真は椅子に腰かけ、汗を拭きながら真顔で会話を再開させた。

真のいう通り四人目の被害者が昨日、美泉海岸で見つかった。普段ニュースを見ない正道だったが吸血鬼の存在を知ってからというものその関連のニュースには目を通していたので知っている。

被害者はあの日にいた二人のうちの一人だということも分かった。

「仲間割れ……みたいだな」

「でもこれで終わりでしょ？ ユウコ先輩じゃなくてよかった……」

あんなゴミみたいなやつらが一人減ってよかったじゃない」

「姉様。人の死を喜ぶのはよくない。でもユウコ先輩ではないのは喜ぶべき。複雑です」

確かに複雑だ。敵としてだが関わっていた人間が死ぬというのは気分がいいものではない。

「複雑だろうね。これで終わりという見方も強いが、警察は死体の状況からなにか引っかけるところも感じてるようだ。僕らは魔導で活動する身、といっても今は正道だけだけど。なにがあるか分からない。充分に気をつけるんだよ」

真はいうと立ち上がって時計を確認すると手を叩いた。

「さあ仕事の時間だ。さっさと着替えて正道。今日も元気に魔導の素晴らしさを広めてらっしゃい！ あつと、朱川さんたちも手伝ってね」

「えっ？」

「御意」

なぜか素直に反応した蘭と不服そうな凜をつれて正道はエムズを飛び出していく。

手を振って送り出してくれる真美の姿がどこか寂しそうなのが少し、気になった。



その声は低く、少しの愉悦を帯びて。

「『魔導便利屋 エムズ』……か。私もなにか依頼しようかな」

その声の主。“軍人のような出で立ちの男”の手には剥がされたチラシが握られている。

止まることなく歩く男の反対側の車道には走り抜けていく一台の赤い二人乗りバイクとそれを追うように走る――茶髪の火の魔導士。その姿を視界の端に捉え、男は嬉しそうに頬をゆるめる。

「忙しそうだね……日曜日くらいはゆつくりとさせてあげようか……
“招待状”はまた後日」

男は足を止め、跳ね上げ式の丸いサングラスを跳ね上げてビルを見上げた。

赤黒い色眼が太陽に照らされて怪しく光る。

「楽しみだ……楽しみだなあ……」

再び歩き出した男はエムズのチラシを几帳面にたたみコートのポケットにしまい込む。代わりに男のポケットから出てきたの派手な包みのロリポップ。

男は包みを綺麗にはがすとロリポップを口にくわえて乱暴に砕き始める。

それはとても楽しそうに。溢れる自分の感情を抑えつけるように。

そして、誰かの日常を噛み砕くように。ガリガリ、ガリガリと。

戦場と魔物―1

――「戦場の魔物」という噂話がある。

それは昔から戦場というものを経験した者のみが知る噂話。

話の出元はどこか分らないが、魔導士が戦争へと投入されていたところから続く話だとされている。そしてそれが魔導士の軍事利用の禁止へと繋がったとその噂話は告げている。

中東亡国。

現在この国では大規模な反政府デモから発展した内戦が起きている。

燃え盛る瓦礫のような街、飛び交う銃弾に、転がる亡骸。淀んだ空気に漂うのは硝煙と銃声と悲鳴。

そんなこの世の終わりの光景に要請を受け派遣された若い白人の傭兵が二人。自動小銃を装備した二人は見たところ二十歳そこそこといったところだ。

二人は焼け焦げ、骨組みだけとなった車に身を寄せしばしの休息を取っている。敵の攻撃が一段落したところだった。

二人の顔や装備は黒く汚れているが怪我はなく、二人で美味そうに煙草をふかしている。

戦場から戦場へと伝播した噂話は戦争に魔導士が投入されていたことすら知らぬような若い傭兵にも伝わっていた。

「おい、知ってるか？」

「ああ、ネイトがあのおネーちゃんと上手くいったって話だろ？」

「ちげーよ、戦場の魔物の話だ」

「なんだそれ？ 戦場で戦うやつなんか全員悪魔みたいなもんだろ

う」

「まあ異論はないが。いや、爺さんから聞いた話でな、噂話なんだが、昔魔導士が戦争にも参加してたって知ってるだろ？　すぐに魔導禁止条約つつう条約で禁止されたが」

「……知らん」

男はとぼけた顔をして煙草をふかす。

「バカめ。とにかく、昔は兵器として魔導士が利用されたんだと。今は条約で軍隊にも傭兵部隊にも入ることも禁止だがな。こんな内戦じゃ条約無視の“無所属”でバカな魔導士も出るがそんなやつ一発でやられちまう。戦場に出てくる魔導士なんて圧倒的に少ないからな。的^{まじ}だ、的」

男は紫煙を吐いて自分の額をとんとんと叩く。

「で、なんだよ。戦場の魔物？　だっけか」

「そうだ。魔物の話だ。でもこういう状況で見る幽霊だの死神の話じゃねえぜ。そういうのは見慣れてるからな」

若い死線は潜ってきたのだろう、二人は無言で汚れた顔を見合わせ自嘲のように笑う。

「魔導禁止条約。表向きは魔導士の保護のためだ。人間より魔導士の方が少ないし、魔導は人を殺すための力ではないという保護団体からの圧力もあったらしい。それにそのまま兵器利用しちまうと魔導士が暮らせなくなっちゃうからな。魔導士だって人だ。どこの国のお偉いさんもその尊厳と自由を無視できなかった。そうして条約は結ばれた訳だが——爺さんの話によるとこの条約締結にはもう一つの理由があるらしい」

「それに魔物ってのが関係してるってか？　魔物ってえと魔導士が殺したくてうずうずしてるあれ？」

「それは分かんらしい」

「？」

一瞬沈黙する二人の間隙を突くようにミサイルが二人の隠れる車の向こうに着弾した。

「うおっ！」

爆音と爆風は二人を戦場へと連れ戻す。男たちの前から敵対する兵隊が現れ、周囲にいた傭兵の仲間たちが銃撃戦を開始、それに男たちも加わった。

「おいおい、今からってときによおッ！」

「死ぬんだったら話してから死ぬよ！ 気になって俺が死ぬねえ！」

あ、死ぬねえならお前の話聞かない方がいいか！ 話すな！」

「いわせろ！」

小銃を放ちながら男たちは銃声に負けじと大声で会話を続ける。

「戦場に投入された魔導士はよ！ こうやって俺らみたいに人間を殺してるとおかしくなるらしいんだ！」

「ああ！ 頭がおかしくなりそうだな！ ハハッ！」

「確かにそうだが魔導士の場合は違うって話だった！ なんでも、

“魔導士が魔物になっちまうらしい”！ いったんそうなっちまう

と“敵味方関係なく”無差別にやっちまうんだと！ それが条約締

結のもう一つの理由らしい！」

「なんだそりゃ！ ぶっ飛んでるな！ いかれてる！ お偉いさん

はそんな魔導士にビビったってか！」

「まあ簡単にいえばそうなんだろうな！ 魔導は戦争みたいに大量

の人間を殺すには向いているから力としては欲しいところだろう！

身体一つだからコストもかからなければ隠密行動にも向いてる！

でも狂って“魔物”なんて状態になったときにやたまったもんじゃ

ねえ！ それは敵さんも同じだ、その部分でも納得の締結だったの

かもな！ まあ爺さんの話を信じた上での推測だがな！」

「なるほどな、そんな話どの大統領からも聞いたことなかったぜ！」

「噂が本当なら公表するはずがねえ！ 情報操作ってやつだ！ 噂は噂のままだろうよ！」

「でかい力は恐いねえ！ でも魔導士の敵の魔物が自分なんて泣ける話だな！」

「はっ！ まあそれとこれとは違うんだろう！ 魔導士が魔物なら魔導士なんて存在はいないはずだ！ 全員自殺して魔物が滅んだってか！ そりゃ泣けるぜ！」

「それもそうだな！ ……そういや三年前のテロの報復戦争に魔導士がいたって噂があったがあれマジか！？ マジなら爺さんの噂検証できたんじゃないね！」

「かもな！ でももしそこに魔導士がいて噂通りなら今頃国に消されてるんだろうな！ って今は三年前に想い馳せてる場合じゃねえぜ！」

「おうっ！ 消されるのは勘弁だ！」

二人の若き傭兵は硝煙と銃声と死の渦巻く世界へ身を投じていく。

——こうして噂は転がる。

様々な憶測と可能性を孕みながら、銃弾と死者の間をすり抜けるように。

そして火のないところには煙は立たない。

噂もまた、同じ。

戦場と魔物―2



グレン・F・タカサキ―ロシア系アメリカ人の父と日本人の母親との間に生まれた日系アメリカ人。母は魔導士ではないがグレンは父の血を濃く受け継ぎ、魔導士として生まれた。

グレンは祖国を愛し、曲がることなく健やかに育つ。非行などに走ったことも一度もない。むしろそういう行為を許せないと思う人間だった。グレンにとってコミックのヒーローが憧れだったし、国のために戦うアメリカ軍というものにも憧れがあった。軍需産業に従事していた父の影響も少なからずあるのだろう。

母方の祖父はアメリカ陸軍の少将を務めていたこともある軍人だったことも大きな影響となった。グレンは『This we'll defend（我らこれを護る）』というアメリカ陸軍のモットーを胸に抱くほどグレンは正義に憧れ、そこに生きる意味を見出していた。

そう、グレンは正義に憧れていたのだ。

子供の頃から自分は祖父と同じ陸軍へ入り、国を守るのだと決めていた。しかし、魔導禁止条約の存在を知りその夢はついえる。それでもグレンはひねくれることなく国を守るために魔導士でもなにかできないかと模索し、民間軍事会社（Private Military Company）の設立という結論に至った。

民間軍事会社―PMCとは軍隊や国家など依頼者の要請に応じ、戦闘要員を戦場へ派遣したり、要人や施設の警護、また物資の輸送や兵器の整備など後方支援などのサービスを行う傭兵組織の事であ

る。

大学に進学したグレンは国際法や経済学を学び、卒業と同時に父と祖父のコネも生かし、アメリカ最大の民間軍事会社『ピースセキュリティー』の主に後方支援を行う兵站部門へいたんへと入社した。

そこには同じ思いを持つ仲間がいた。そのなかには魔導士も含まれる。

魔導士は戦場へ出てはいけないというだけで軍需産業へ従事することは認められている。グレンはそこで夢を叶えるために経営学や軍事に関する様々な知識を学びながら働き続けた。

時は経ち、中東の紛争地へ派遣されたピースセキュリティーの社員による民間人虐殺によりピースセキュリティーの世評は失墜する。グレンはその行動に憤りを感じたがPMCとしての活動自体は正義だと信じていた。

ピースセキュリティーはこの行動により民間軍事会社の協会であるIPOAを除名され、政府から見放された。社内からの反感もあり、多くの社員がピースセキュリティーを去っていく。そして会社を背を向ける人のなかにはグレンの姿もあった。

数人の仲間とともにピースセキュリティーを去ったグレンはこれを機に主に後方支援を行うPMC『レッドアイコーポレーション』を立ち上げた。

グレンの色眼に由来した名のPMCは基本的に戦闘へは参加しない。魔導士の経営するPMC所属の兵士が戦地へ赴くのは印象が悪いからだ。

レッドアイコーポレーションは戦地での護衛、治安維持活動、危険地域での輸送、生活環境の提供、兵器の調整等を主に提供する。

上位陣に魔導士が多く、魔導士が経営するPMCということで最

初は白い目で見られていたが、派遣される兵士の質やグレンや幹部たちの手腕のよさでレッドアイコーポレーションの経営は順調だった。

終わらない戦争を根絶するため、自分たちが支えるという強い思いがグレンにはあった。グレンは子供のころから抱いていた夢を叶えたが、心のどこかに「自分も戦いたい」という気持ちを持っていた。

そして時はさらに経ち——三年前。

グレンは戦場にいた。

そこでグレンが体験したものは——

鐘の音が学生としての一日の終わりを告げる。

またそれは始まりの合図でもある。ある者は部活へ、ある者はバイトへと急ぎ足になり、教室という閉鎖的空間からでていく。

正道も急ぎ足になっているなかの一人だった。理由は後者である。いつもは余裕を持ってエムズに向かう正道だったが今日はバイトの前に翔太の入院している病院に見舞いにいく予定ができた。

正道や真美に朱川たちもあの日以降は見舞いにいっていない。

しかし面会謝絶だとかそういうものではなく、翔太の怪我の経過は順調のようで、予定より早く退院できるとのことだったのだが、見舞いの帰りに婦長に注意を受け見舞いを自重するようにいわれてしまった。「頻繁に見舞いにこなくても五十島君はすぐに退院できます！ 必要なときだけきてください！」とのことである。よほど迷惑だったらしい。

しかし今日は渡すプリントやノートなどがあるらしく、昼休みから凧が嬉しそうに騒いでいた。なので正道はそれについていくことにしたのだ。

凧には病室にバラを敷き詰めるという前科があるのでなにをするか分からない。凧の過剰な愛が翔太の退院を遅らせる可能性だってある。要は監視役だ。

鷹光学園の上空を覆う雲は黒く、分厚く、今にも雨粒が落ちてきそうな空をしていた。

学園を出ていく生徒の流れも心なしか焦燥が感じられる。

「早くいくわよ！ 正道！」

「早くいってエムズへ」

正道と凜と蘭は校門までの道のりを走りながら会話する。

「今日はなにを食べさせてあげようかしら……メロンを丸ごと……」

凜はメロンのような胸を揺らして翔太への想い(?)を。

「今日はジャーマンスープレックス」

蘭は冷たい笑いを浮かべエムズで待ち受ける“おもちゃ”のことを。

凜と蘭は魔導の訓練をするようになってからというものエムズに顔を出すようになっていた。特に蘭の方があの空間と真を気に入っていたらしい。

おかげで最近の蘭はプロレスに凝っている。たまに同席する昼食時には携帯でプロレスの動画を見ているときがあるし、この前エムズにきたときは御丁寧に覆面まで被っていた。

真もまんざらではないようで蘭のプロレス技を楽しみにしているような節がある。

それと困ったことに、蘭のプロレス技を楽しみにしているのがもう一人増えた。正道の父、剛である。

凜と蘭が正道の家に来た初日に特徴をそのまま捉えた辛らつな呼び名を二人にいつて、真と同じく凜に“排除”された。そして真と同じく“ハマッた”らしい。父親の性癖など知りたくもないが、あの技のキレとそれを見て笑う凜の哄笑がたまらないらしい。――あのDMめ。

エムズに顔を出すようになったからといっても二人はエムズに所属していない。魔導は素質があるのか上手く扱えるようになってきているので、正道の仕事を手伝うときもあるが、正道の仕事が終わるまでを待つ暇つぶしみたいなものだ。

それに二人は金に困るような家庭環境ではないためバイトする意味がない。凜の部活動もたまにはあるらしいので、それを理由に真からの誘いを跳ね退けた。

凜が断ることで蘭も自動的に断る運びとなる。

ちなみに凜の部活というのは最近売れている韓国人の俳優を研究するという部活だった。先日誘拐されかけた先輩のユウコと凜と幽霊部員で構成された存在も希薄な冴えない文化系の部活らしい。活動は韓国ドラマ視聴など、昼下がりの主婦的な活動をするようである。

正道は嘆息して言葉を返す。

「あのなあ、凜、もう翔太の口になにも突っ込むな、それと蘭、あんな固え床にジャーマンなんかしたらおっちゃん死んじまう」

「スイカを丸ごと……」

「雪崩式ブレーンバスター……」
なだれ

妄想が飛躍していた。正道の声は聞こえていないようである。

「まさちゃん」

走る正道たちの後ろから真美が自転車で追いついてきた。正道は走りながら手を挙げて応える。

最近元気がないように見えた真美だったが今は表情と声にもかげりは見えない。

凜と蘭は妄想に耽^{ふけ}っているようで反応はなかった。

「お見舞いいくんだったけ？」

「おう、こいつらがいくつていうんでな。ついていかなきゃならぬるか分からん」

真美は苦笑だけを浮かべて肯定する。

「エムズにはすぐいくからな。先いつて今日の依頼まとめといてく

れ」

「うん、分かった」

「あと、おっちゃんにも気をつけるようにいっとけよ。蘭が狙ってる。今日は頭割れるコースらしいぞ」

「……え？　パパの頭が？　割れる？　……まあ、気をつけろっていつとくね。ヘルメット被ればいいかな？」

「ああそれいいかもな！　じゃあ、気をつけていけよ！」

エムズへ向かう道は病院へ向かう道と反対である。豪華な校門を抜けた四人は三対一に別れた。

正道は真美へ手を振り朱川たちと駆けていく。

真美は遠ざかる正道の背中で揺れるギターケースをぼんやりと眺めていた。

ごうと冷たい風が吹いて降り出した雨粒が真美の頬を打った。涙のように頬を伝う雨を手で拭って真美は正道に背を向けエムズへ自転車漕ぎだす。

雨は次第に強くなり、街の景色が煙る。走り出す往来に色とりどりの傘の花。雨粒が光を反射し、ぼやけた世界に淡い光源を増やす。そんな世界を真美は美しいと思った。

真美は制服を濡らしながらエムズへと向かう――今から向かうその先に、なにが待ち受けているのかも知らず、真美はペダルを漕ぐ足に力を込めた。



——同刻。エムズ。

「んー、とある荷物をとある人物に受け渡してください……？ そんな依頼は却下！ 魔導関係ないし、うちは平和的な依頼しか受けないのです」

雨音に包まれている事務所のプレハブのなか、真は一人パソコンの依頼メールを見ながらラーメンを啜っていた。

真は従業員である娘の真美や正道に入院中の翔太がいない時間帯は受けれる依頼の調整や希望日時の連絡などを一人で行っている。経営を始めてから間もなく、やっていけると胸を張るには不安だったが楽しく仕事ができているのは確かだった。それは前職にはない感覚で、真は四十過ぎにして仕事へのやりがいや快感を再認識している。

真の前職は防刃ベストや防弾チョッキなどを開発、販売する企業の開発部門。“魔導防御装備開発担当チーフ”だった。いまや全国の警察で採用されている、対魔導士用装備MDAの開発責任者であった。

「……」

そのことを想起すると、必然的に余計な記憶まででてくる。退職する原因となった、自分のなかに閉じ込めた記憶。

真はふうと息を吐いて真剣なまなざしで虚空を見つめる。そこには味気ない蛍光灯が白く光っているだけだった。

「おセンチな僕……」

小さく死語を吐いて真はラーメンの汁を飲みほした。

——招かれざる来訪者がドアを開けたのはほぼ同時だった。

雨音のなかから現れたのは黒の無骨なブーツ、モスグリーンの軍用パンツ、濡れた漆黒のロングコートの男。

筋肉の鎧を纏ったような体つきが服の上からも分かる。髪の色や肌の色からして日本人ではなさそうだ。

丸い跳ね上げ式のサングラスで男の目は見えない。ハンマーで殴ってもぐらつかなさそうな顔の骨格にそのサングラスは少し不釣り合いな印象を受けた。年齢は真と同じくらいか、それ以上に見える。

男の纏う雰囲気はなんとも異質だった。

なんかヤバイ依頼しにきたか——そう思って真は身構える。

男は190センチはありそうな巨軀を少しかがめて事務所のなかに入ってきた。そして興味深げに事務所内を見まわす。

「あの……」

真が声をかけようとすると、男はなにかを見つけたようで嬉しそうに整然と並ぶフィギュアの列へ歩を進めた。

「キャプテンマックイーンだ」

一体のフィギュアを手にとると男は嬉しそうに真へ見せる。それは四十年ほど前に放映されていたアニメのフィギュアだった。

真は男の口から流暢な日本語がでてきたことに驚いたが警戒は緩めない。

「私の子供の頃の憧れだ。『正義のヒーロー！ キャプテンマックイーン！』。ハハハハ、懐かしいな」

男は声を変えてキャプテンマックイーンのものまねを大声で叫んだ。そしてゆっくりと丁寧なフィギュアを棚に戻すと真に向き直った。

「すまなかったね。懐かしくて、つい」

縦にも横にも大きい壁のような男が真と対峙する。柔和に話すが、男の見えない圧力に真は息を呑んだ。

——なんかヤバイよ……絶対にヤバイ。なにしにきた？ 時間は……クソ……まだ、くるなよ、真美たん。

真は時計を確認し、娘の到着が遅れるよう願った。そうさせるほど目の前の存在は怪しかった。本能的な部分が危険を感じ、警鐘を鳴らす。

とりあえず話さなければことは進まない。真はできるだけ冷静に、事務的に言葉を発した。

「あの、依頼ならメールでお願いしてるんです」

「おっと……これは失礼。でも今日は依頼ではないんだ」

「なんでしよう……」

「ちよっと届け物をね」

男はコートのポケットから一枚の白い洋式の封筒をだして、真に見せる。

「あ、ダイレクト“メール”。これがある人に渡して欲しい、というのが依頼というのはどうだろう？ メールだし、だめかな？」

男はジョークのようなことをいったようだが真は笑えない。

その封筒に書かれた『Invitation（招待）』という文字が気になった。

「誰に……」

誰を？ どこに？ なんて？ いつ？——真は訊くしかなかった。訊いてしまった。

「――“脇坂正道”君に」

男は笑みを浮かべて、さも当たり前のようにエムズに所属する魔導士の名前を告げた。

「ッ！」

瞬時に空気が張り詰める。気づかぬうちに握り締めていた拳が湿っている。

――どうして？ なぜ？ ましやになんの用だ？ こいつは、誰だ？

「そんな恐い顔をしないでくれないか。私は正道君に興味があつてね。“ブラッド二人を簡単に退けた高校生の魔導士”。今度ちよつとした催しを開くことにしたんだ。それに招待しようというわけさ」

「なぜそれを……？」

正道たちがブラッドと第一埠頭で戦ったことはどこにも報道されていないはずだった。野次馬という可能性もあったが、そんな雰囲気は微塵もない。

男の雰囲気は“当事者”のそれだった。なにかも知った上で正道をどこかへ誘おうとしている。そこに待っているのは穏やかなものではないはずだ。

「なぜ？ 知ってるからさ。それに、“彼は私と戦う運命”なんだ……」

そう告げる男の顔は段々と酷薄なものへと変わっていく。それは人間には到底できないような禍々しい狂気 of 表情だった。

「……ッ」

真は男の変貌に戦慄を覚えるしかない。まるで見えない緊張の糸に縛られるように真の身体は硬直した。

人間離れた表情を浮かべる男は突然糸が切れたように首を落とし、人間離れた声を発する。

「なーにガ運命ダ」、邪魔しやがったクソ野郎を殺すだけだろうガ。これだから「正義」なんてものを掲げたバカは困ル。でもようやくだ、三年間じわじわ支配していった結果がようやくでるゼエ！

“血は集まッタ！” もうこいつの顔色窺う必要もねエ！ 完全に俺のものダァッ。ギャーッハッハァッ！ ……まア、“最後”の御褒美にその運命とやらを味あわせてやろうと思ってるがな」

いいながら振り上げた男の顔はホラー映画で見る悪魔憑きのような顔をしていた。

異質な声で話す男のいつていることはところどころ判然としない。ただクソ野郎というのが正道というのは混乱する頭のなかでも分かった。それと、正道が狙われていることも。

逃げ出したくなるような危機感と“死の恐怖”が真を苛む^{よこな}。真はここで自分は死ぬのだと“当たり前のように”思った。

化け物のような顔をした男は柵から適当にフィギュアを手にとり続ける。

「でナ？ その招待状ってわけダ。でも、それだけじゃインパクトに欠けるダロ？ こないで、警察だけ呼ぶとかもありえル。そこで、俺に名案があるわけヨ」

男は子供が遊ぶようにフィギュアの腕や足を無造作に動かす。そして、花占いでもするように、フィギュアの腕をちぎった。

「――大事なもののヲ、奪ウ。あのガキが命に代えても取り返したくなるほど大事なもののダ。それなら確実にきてくれるダロオ？」

男がフィギュアの両腕をちぎりそのまま床に落とす。

真は男の狂気に呑み込まれ慄然としている。いつている意味もいまいち分からない。

ただ男は普通じゃない。もしかしたら人間や魔導士でもないのかもしれない。

人間ではない——邪魔をした正道……血は集まった……。

「吸血鬼……」

真がその結論に至った時、揺れた床を叩くような音が外から響いた。

「きたきた……大事なもノ」

男が裂けた笑いを浮かべる。

「！」

正道にとって大切なもの。吸血鬼がここにきた理由。それが近づいてきていた。

それは今の真にとって一番姿を現してほしくない人物の足音だった。

「じゃあナ、依頼頼んだぜ。あと、警察には黙っておいてくれヨ？」
男が音のする方向だけを見て片手を真に突きだす。

「真美ッ！　くるなあああッ——！」

——その叫びを真美は爆発音と同時に聞いた。

「パパ……？」

“壁を突き破り”、事務所のなかから黒いなにかが風のように飛

び出してきた。

怖い顔、サングラス、外人さん？　それが真美の受けた一瞬の印象――なにが起きたのかも分からず、黒い風に呑み込まれた真美の記憶はそこからしばらく失われる。

真の、そして正道の大事なものは男――グレンによって呆気なく奪われた。



「なんだ、これ……」

グレンが去ってから数十分後。降り続いていた雨は小雨に変わり、西の空にはうつすらと光も見える。

鈍色の柵に囲まれた屋上世界。濡れて色を変える地面には大小様々な破片が、まるで絵具を散らしたように散在していた。

正道たちの目の前には変わり果てたエムズのプレハブの姿がある。入り口とは別の場所に人が出入りできそうなほどの穴が穿たれ、なぜか薄暗いなかの様子を覗かせていた。壁は外側にめくれ、内側からなにかが爆発したような痕跡を見せている。乱雑にめくれた外壁が滴る雨を歪に跳ね返す。

外壁に描かれていたキャラクターの顔が歪み、正道たちを嘲笑うような不気味な笑みを浮かべていた。

「なにこれ……」

「不明です……」

凜と蘭も状況がつかめていない様子で呆然と荒涼とした風景を見ている。

正道も同様だったが、心臓を掴まれてそのまま揺さぶられるような激しい胸騒ぎを感じていた。

——なにがあった？ おっちゃんがかしたのか？ ……でも、静かすぎる……。真美は？ そうだ、真美はッ！？

正道は肩にかけていたギターケースを投げ出して跳ねるように事務所に飛び込んだ。

「真美ッ！」

プレハブのなかは滅茶苦茶だった。

蛍光灯が数本砕けているせいで事務所のなかは暗い。ソファやテーブルはひっくり返り、壁にぶつかって止まっている。真のコレクションであるフィギュアや漫画などが散乱し、派手な色を床にぶちまけている。まるで巨大なおもちや箱をひっくり返したような雑多で混沌とした世界が広がっていた。

そこに真美の姿はない。

「なんだよ……真美ッ！ おっちゃん！」
叫ぶも反応はない。

真のデスクがあった方もどこになにがあったのかも思いだせないほど乱れている。唯一、今正道が立つ場所だけが綺麗になにもなかった。横を見れば屋上の景色が見える。ここを中心になにかが爆発したような感じだった。

「正道、あそこ」

蘭が真のデスクの方を指さす。折り重なるようにしている事務機と事務機の間から白い布の端が見えていた。

「白衣……おっちゃん！」

三人で駆け寄り、事務機をどける。そこにはがっくりとうなだれ、血を流す真の姿があった。

髪は乱れ、眼鏡のレンズは砕けている。頭から血は流れているがそれほど多い量ではない。気絶しているようだったが、幸い息はあった。

「おい、おっちゃん！ おっちゃん！」

正道が真の肩を揺らし呼びかけるとすぐに真は目を開けた。それに正道たちは安堵したが、

「真美ッ！ がッ……」

次の瞬間に真は叫んで正道の腕を振り払って立ち上がろうとした。しかしどこかを痛めているらしく、立ち上がることはできなかった。

た。真は再びうなだれるとうわごとのように娘の名前を呼んだ。

「おっちゃん……なにがあっただよ」

正道は冷静に訊く。正直冷静ではいられないが状況を聞かなければなにをしていいのかも分からない。

この状況を作り出したのは真ではない。真は誰かに傷つけられたということは自明だった。そしているはずの真美がないということとは——ここで起きたなにかに真美が巻き込まれているのは確かだった。

「真美が……さらわれた……」

時間が、止まった気がした——

正道たち三人が声も出せずに驚愕するなか、ぼつぼつと涙滴を床に落としながら真は続けて言葉をこぼす。

「さらったのは……吸血鬼だ」

さらなる驚愕が正道たちを襲う。

真はいいながら震える手で白衣のポケットを探る。でてきたのは折れ曲がった洋式の白い封筒だった。表には『Invitation』と書いてある。

真はそれを正道の手に握らせると、正道の手に食い込むほどの力で正道の手を握った。正道を見る潤んだ瞳は哀願の域を越えてもはや恐怖さえ感じる色を浮かべている。それほどに真は必死だった。

「御丁寧に、ポケットに入れていった……これを、正道に、と。……頼む……真美を……助けてくれ、正道……正道しかないんだッ」

「分かった」

正道は強いまなざしを真に向け、即答した。

手紙の内容は分からない。なぜここに吸血鬼がきたのかも分からない。なぜ自分だけなのかも分からない。でも、分かることがある。

——真美を助ける。

その気持ちさえあれば例えどんな状況であれ、飛び込む覚悟ができる。

その気持ちゆえの即答だった。

「蘭！ 今すぐ救急車と警察を」

「はい、姉様」

「ダメだッ」

凜が指示した当たり前の行動を真は阻止した。

「どこにも連絡したらダメだ。警察には連絡するなど吸血鬼がいつていた……そんなことすれば、真美が、殺される……」

「そんな……」

「では屋敷の救護担当を呼びましょう。怪我の手当だけはしておかないと」

この状況でも冷静な蘭は携帯を取り出し、自宅へと電話をかけている。

正道は真美が殺されるという最悪なイメージを打ち消しながらも、吸血鬼からの招待状を眺めていた。

——俺に、なんの用だ。四人目の邪魔したからか？ でも四人目は殺したじゃねえか……。ブラッドの復讐か？ ……そんなことどうでもいい。真美まで持っていきやがって、卑怯者が。許さねえ。許さねえぞ、吸血鬼。

正道は乱暴にロウで封されている洋式封筒を開けた。

『Dear 脇坂正道君』

この招待状を君が読んでいるということ。まずそれだけで、私は嬉しい。君がきてくれることが決まったようなものだからね。

少し手荒いことをしてしまっただろうが、それもこれも確実に君を呼ぶためだ。すまないね。

では、本題だ。

率直に書こう、私は君に興味がある。君と戦いたい。

こう私が書いても君はきてくれると信じているから隠さずに書いてみた。

会場は第二埠頭 七番倉庫。

時刻は本日深夜二時。

こんな招待状は気に召さないだろうが許してくれ。お詫びに私の本当の目的を君に見せてあげようと思う。

では、お友だちも御誘いの上、きてくれることを願う——グレン・F・タカサキ』



——それは幼いころの記憶。

おぼろげな記憶のなかで、唯一しっかりと形の残った大切な思い出。大事な大事な、初恋の記憶。

十年前——

美泉駅近郊某公園。

小さな砂場、小さなブランコ、錆びた鉄棒が大小各一つずつ。

遊具はそれだけ。あとはベンチが外灯の下にぼつんとあるくらいだ。なので休日の午後だというのに人気はなく、ここの周辺の住民からは『ボロ公園』と呼ばれている。もう少し離れたところに遊具の充実した大きな公園があるため、自然と子供たちはそこへ流れる。まるで個人商店がコンビニに客を取られるような状況に陥っている公園だが、小さな個人商店には常連がつきものというもので、この公園にも常連が二人砂場にしゃがみ込んでいた。

一人は短めの黒髪にやんちゃそうな顔をした男の子。冬も始まったというのに半袖半ズボンでしきりに鼻を吸りながら砂を掘っている。なにか歌を口ずさんでいるが、英語の歌詞を適当に歌っているらしく呪文のようになっていて。

もう一人は男の子と対照的にコートとマフラーでしっかりと防寒した黒髪おっぱ頭の女の子。小さな顔に大きな黒瞳が目立つ。人形のような、花のつぼみのような女の子はじーっと男の子が掘り進

める砂場の穴をしゃがんで見ていた。

二人は同じ幼稚園に通う友だちで、この公園の近くに住んでいる。来年は小学生になる年齢なのだが、女の子の父親の仕事の関係で引っ越しが決まり、同じ小学校に通うことはできない。こうして遊ぶことも簡単にはできなくなる。

そのことを二人は知っている。女の子の方は前から知っていたが男の子が知ったのは公園へくる数時間前。

「まさちゃん。それ、なんのお歌？」

女の子が男の子——正道に訊ねる。

しかし正道は顔を上げるだけで応えず、逆に大声で歌い始めた。そして歌い終わると、ばんつと砂を叩く。そして舌っ足らずに、
「くいーんの「ういーういるろつきゅー」……知らねえの？ だっせえ」

「知らないよ……そんなの」

心なしか二人には元気がない。二人の間に掘られた穴になにかの亡骸でも入っていそうな雰囲気だった。

「まみ……どこいくんだよ」

正道は少し口を尖らせてつぶやくように女の子——真美に訊ねる。

正道は初めて体験する“別れ”というものに戸惑っていた。

ずっと仲よくしてきた友だちと会えなくなる。その事実を小さな

正道はどう処理しているのか分からなかった。

考えれば考えるほど寂しく、心のなかのなにかが抜け落ちてしまふような感覚がする。

もちろん小さな正道に自らの複雑な気持ちを表現する語彙は備わっておらず、正道は更にもやもやしていた。

「わかんない」

小さく応える真美も同じような気持ちを抱いていた。

真美は幼稚園でも外で遊ぶときもいつも一緒にいる正道のことが好きだった。それは正道以外の友だちに抱いている『好き』ではない気がしていた。

愛だ恋だのは幼稚園児の真美にはまだ分からない、なんで好きかと問われても正確には応えられないだろう。でも、ただただ好きだった。

そんな好きな人と離れるのは辛い。引っ越しすることが決まったとき、真美は泣いて父の真に猛抗議した。

真美が「私だけでもおいていて!」といったときは真はさすがにうろたえていたが、結局引っ越しするという事実には覆らなかった。

「……わかんないってなんだよ」

「……わかんない」

——なにが分からないのか分からない。

泣きだしそうな顔で口を結ぶ真美に正道はなにいえなくなった。小さな二人の間に沈黙が流れる。

真美は困ったような顔でちらちらと自分の顔を見る正道を見て「このままじゃいけない」と思った。

正道と一緒に過ごせる残り少ない時間。そんな大切な時間を沈黙で埋めてはいけない。そんな心の機微は真美自身にも分からないが、とにかくこのままじゃいけないと思った。

「よしっ」

だから真美は立ち上がった。

離れ離れになる前に、なにか大きな思い出を作ろうと。

それは少し前から考えていたことだった。

このまま一生会えなくなるかも知れないと真美は思っている。そ

のまま正道に忘れられてしまう可能性だって考えていた。だから離れていてもお互いを忘れないようななにかが欲しかった。その“なにか”には心当たりがある。

「な、なんだよ」

正道は急に立ち上がった真美を見て怪訝そうな、少し怯えたような表情を見せた。それもそのはず、泣きだしそうだった顔は今やその影もない。ぷっくりとした白い頬は赤く紅潮し、小鼻は興奮からか膨らんでいる。大きな黒瞳はららんと輝き、決意の色が浮かんでいた。

「まさちゃん、四つ葉のクローバー、探しにいく！」

「は？」

真美はきょとんと見上げる正道の服の袖を引っ張って、引きずるように歩き出す。手を取ればいいのだが、真美は正道と手を繋ぐことの恥かしさをこの頃から感じていた。

「四つ葉のクローバー探すって、おっちゃんがダメっていったじゃないかよ」

無理やり立たされた形になった正道は少し伸びたTシャツを直しながら口を尖らす。

「でもまさちゃん欲しいんでしょっ」

「そりゃ……うん」

四つ葉のクローバー——三つ葉のクローバーの変異種。それを見つけた者には幸運が訪れるという。四枚の葉にはそれぞれ『愛情』『希望』『幸運』『誠実』を象徴しているとされているが、そんなこと正道たちは“知らない”。

以前正道はテレビ番組で四つ葉のクローバーを手に騒いでいる大人たちの光景を見た。正道は「なんで葉っぱくらいで？」と子供な

がらに思い、父の剛に質問したところ、「四つ葉のクローバーを見つけられれば夢が叶って好きなものがなんでも手に入る」と教えられた。もちろん剛はからかっていったのだが正道はその言葉を信じた。そしてその嘘の伝説は真美に伝播する。真美も当たり前のように信じた。

なんでも夢が叶う四つ葉のクローバーは真美とっても欲しいものだった。

四つ葉のクローバーがあれば正道は自分のことを忘れないし、また会える。真美はそんな希望を四つ葉のクローバーというものに抱いていた。

過去に一度二人だけ四つ葉のクローバーを探しにでかけたことがある。そのときは夕暮れまで探したが見つからなかった。そのときに真美の父の真にこっぴどく怒られ、もう探すことはできなくなった。

ただ、収穫がなかったわけではない。自然が多い別荘地の方にクローバーが群生しているところを見つけたのだ。そこを探す前に真に見つかったのでまだそこは二人にとって未開の地である。なので、自然と足はそちらへ向く。

「やばいってーまみー」

からし色のコートと赤いマフラーを揺らして真美はずんずん歩いていく。歩くたびにふんふんと鼻息を鳴らして意気揚々と正道を先導する。

「さっと見つけて帰ればだいじょうぶっ！ 夢がかなうよ、まさちやん！」

むふーっと息を吐いて、真美はぶんぶんと手を振って歩く。

「夢……」

ずっと不機嫌そうだった正道だったが真美の一言と、自信満々の

背中を見ていたらなんだかその気になってきた。自分のつぶやいた言葉で妄想も広がる。

「よっしゃ！ 走るぞ、まみ！」

目を輝かせた正道が真美の手を取り走り出す。

真美は頬を紅潮させながら正道の足取りに合わせ走った。

夢を叶えるために。二人が離れないように。真美は正道の手をぎゅっと握り返した。



真美たちのいた公園から別荘地までは結構な距離がある。

ましてや子供の歩幅、真美と正道が辿りついたときには既にあたりは薄暗く、別荘地周辺の森からは一層濃い冷気が漏れ出していた。冬に近づくにつれ日没は早くなった。このままだとあと一時間もしないうちに夜が訪れる。別荘地ということもあって人気も少なく、せきばく寂寞としている。木々の切れ間に突然現れる家の全てが怪しく見えた。

近づく夜の気配となにかお化けでもでそうな雰囲気にとどきどきしながら二人は手をつないだまま目的地へと急いだ。

目指すは泉周辺の森。そこにクローバーが群生している。

「まさちゃんはなにをお願いするの?」

「んー、ゲーム、漫画、お菓子……ああ、あとギター弾いてみてえ! だからギターかな」

正道はいつて豪快にくしゃみを一発。

寒そうだったので真美は正道にマフラーを貸していたのだが、あまり意味はないらしい。

「あっ!」

唐突に正道が叫ぶ。

「ひゃっ」

「願い事っていったらかなわないんじゃない? やっべえ……さっきのなし! うそ!」

「う、うん! うそだよね! うそです神様!」

必死に発言を撤回しようとする正道に真美も協力した。どこかで聞き耳を立てているかも知れない神様にまで頼んだのだから大丈夫

だろう。でももし正道の願いが聞き入れないのなら、自分が正道の分を願えばいいだけのこと。真美はそう思って心を落ち着かせた。

「まみはなに願うんだよ」

「そういうのを“ひきょう”っていうんだよ、まさちゃん」

半眼で訊ねてきた正道は真美から願いを聞きだせなかったことに口を尖らしてから悪戯っぽく笑った。

真美は正道のその笑顔が好きだった。

手をつなぎ、歩く二人の前の視界が開ける。泉にでたのだ。

薄暗い中でも分かる、透き通った薄緑の水面。大きな円形の泉を囲うようにサイクリングロードが設置してある。春は桜が咲き、秋は紅葉も見られる人気の場所だが、今は冬ということもあり人影は見えない。いや、冬であろうと散歩客くらいはいそうなものなのだが、“とある原因が泉から人を遠ざけていた”。それを二人は知らない。

泉は小さな二人には大きすぎて、まるで海のように見えた。

「おれ、もう一つ願いがある」

「なに？」

「いわねえけど……まみのこと」

正道は恥かしそうにマフラーに顔をうずめてごにごによと。

正道が真美のなにを願うかは知らない。でも真美は嬉しくなって、恥かしくもなって頬を赤く染めた。

「いってるよ、それ。また神様にお願いしなくちゃ」

「くわしくはいってねえだろ！ だからかなうんだよっ！」

正道は赤くなった顔で、真美の手を振りほどいた。

「おれ、あっち探すからな！ まみ向こうなっ！ 見つけたらここ集合！」

「うんっ」

主導権はもはや正道に移っているらしい。真美は素直に頷いて走っていく正道とは反対の方へ歩き出した。

クローバーが生えているのは泉よりではなく森の方で真美は一人で暗い森の小道に入っていた。その入口に『野犬注意』と比較的新しい看板が立っていたが、漢字が読めない真美にはその意味が分からなかった。

それよりも足元にクローバーが群生していることに真美は嬉しくなってどんどんと森の奥へと入っていく――

「じゃんごーうえうかむとーざじゃんごー……しゃなななななななな――」

一方の正道は上機嫌で舌っ足らずな英語の歌を歌っていた。それもそのはず、正道の手には四つ葉のクローバーが握られている。森の奥まで入らなくとも、舗装されたハイキングコース付近にそれはあった。

四つ葉のクローバーは土のなかで芽の状態のときに踏まれ葉が傷つき生えるパターンがある。正道の見つけたのはまさしくそれだった。突然変異で生えたものとは違うが四つ葉のクローバーには違いない。

「夢ってすぐ見つかるじゃん」

そんなことをいいながら正道は四つ葉のクローバーを見つけた喜びを早く真美に伝えたくて走った。正道はまだなにも願わない。正道は真美と一緒に願い事を願おうと思っていた。それに真美がもしなにも見つけられていないのなら真美に譲ってやってもいい。

二人が別れた場所に真美はまだ戻ってきていなかった。空は赤黒

く、カラスの鳴き声が不気味に聞こえる。鏡のような水面が空の夕景を映し、正道を不安にさせた。

「まーみー」

その場に留まると余計に不安になりそうだったので、正道は真美を探しに歩き始める。

冷たい静かな空気のなか、遠くに犬の遠吠えが聞こえて正道はオオカミかと身を震わせた。もちろんオオカミなどいない。だが、同じように獰猛な存在は森のなかにいた。

真美の悲鳴が聞こえたのはすぐだった。

「まみっ!？」

それは確かに真美の声だった。今までに聞いたことのない大きな声は正道の背筋を震え上がらせた。

うろたえ、辺りを見渡すも誰の姿もない。空は黒を塗り重ねていくように暗くなっていく。

「まみ……」

——まみになにかあったんだ。誰もいない。おれしか気付いていない。

あんな人間の声はテレビでしか聞いたことがない。しかもそれはいい場面では聞かない声だった。

——まみが殺される!

血の気が引いた。正道は悲愴な顔をしてわけも分からず走り出した。握り締めた四つ葉のクローバーが潰れるのも気にせずに。

森のなかを走りながらずっと正道は心のなかで願っていた。

——まみを助けられますように。まみを助けられますように。ま

みを助けられますように!!!!!!

「まみーッ！」

正道は叫びながら鬱蒼とした森のなかを駆けていく。黒い木立の一本一本の木目が嘲笑う化け物に見える。正道は泣きそうになるのを必死で抑えて真美の姿を探した。

「あッ！」

やはり声のした方に真美はいた——ただそこにいたのは真美だけではなかった。

真美は大きな木に背中をくっつけて立っていた。真美はなにかを守るように胸に手を当て震えている。正道の方に顔を向けるが口をパクパクさせるだけで言葉はでない。恐怖からかその顔は歪み、目のあたりは涙で濡れている。

それもそのはず、真美の周りには唸りながら歯を剥く野犬が四匹。真美を取り囲むように威嚇していた。

——まさちゃんがきてくれた。

真美はそのことに安堵するも、この状況をどうにかできるものとは思えなかった。

野犬は大きく、汚れており、そこに真美が抱く犬のイメージは微塵もない。頭に浮かぶのは動物園で見たハイエナやオオカミ。本能を剥きだしにした獣が真美に牙を剥いていた。

「——ッ！」

正道の名前を呼ぼうとするも上手く声が出ない。野犬たちは正道の存在に気付き始め、一匹、二匹と真美の方から視線を移していく。正道の強張った顔が真美に不安と後悔を感じさせた。自分のせいでこんなことになっているのだ。そう思うと視界がぼやける。涙でぼやけた視界に映るものは輪郭を失い、木立の黒と同化して真っ暗で怖くなった。

真美は涙をコートで拭う。するとギャンツという“犬”の悲鳴が聞こえた。

真美が驚いて見ると四匹のうちの二匹が尻尾を巻いて森の奥へ消えていくところだった。

「どっかいけよ！ お前らああ！」

叫ぶ正道の手には石が握られていた。おそらく逃げた一匹は正道の投げた石が当たったのだろう。

正道は適当な石を拾っては野犬たちに投げつけていく。命中はしないがひるんだ野犬たちが少し真美から離れた。その隙に正道は真美の前に立ち両手を広げた。

「大丈夫だぞ！ まみ！」

その声は少し震えていたが、真美は正道の背中を見て安心した。しかし状況は変わっていなかった。むしろ悪化していた。明らかに敵の登場で野犬たちがさらに興奮している。低い唸り声を上げ、短く吠える。

誰も助けにきてくれる様子はない。あたりはもうほとんど真っ暗で、光源もない。子供の二人にとってはそれでも恐怖だが、今はさらなる恐怖がその闇のなかにいる。

震える真美に正面を向いたままの正道の手が伸びてきた。真美は縫るようにその冷たい手を取る。

「まみ、走ろう」

「……うん」

正道はいうと石を拾って適当に投げた。野犬が少し距離を置く。

「走るぞッ！」

その間隙を突いて二人は走り出した。

野犬が追いかけてこないことを願ったが、背中に響くのは躍動する足音と獣の咆哮。

小さな二つの影は木立の間を縫うように駆け抜けていく。

正道が引つ張っている真美の足取りが重くなり、正道の走るスピードが落ちた。それでも手は離さない。

「まさちゃんだけっ、にげて！」

「そんなこと、できるわけっ、ねーだろ！」

息が上がる。小さな二人の身体には野犬から逃げきるだけの体力はなかった。

野犬たちは獲物を追い詰めるように余裕で追走してくる。二人は必死に走り出したが、

「きゃっ」

真美が木の根に足を取られ転んだ。つないだ手が離れる。

「まみっ！」

倒れた真美はなにかを守るようにその場に丸まった。手放してはいけないものが真美の手のなかにあった。

真美は見つけていた。自分と正道を繋ぐ四つ葉の幸福を。

これだけは放してはいけない。今日の行動はおそらくバレルだろう。そうするともう二度と探しにいけない。正道と会えなくなってしまうかもしれない、正道が自分を忘れてしまうかもしれない――それだけは嫌だった。

野犬の荒い鼻息とにじり寄るような土を踏む音が近づく。真美は自らが作り出した闇のなかで震えていた。怖い、怖い、怖い、怖い。

――まさちゃん……助けて！

真美は悲鳴を上げた。野犬がそれを合図に跳躍する。同時に正道も叫んだ。

「くっそおおおおおおお！――ッ！」

正道がどう動いて、なにをいったのかは分からない。

静寂を突き破る爆発音に驚き、真美が振り返ったときには赤い炎と正道の背中があった。

揺らめく炎の向こうに逃げていく野犬の姿が見える。

真美はこのとき魔導士という存在をあまり知らなかった。正道がなにをしたのかも分からない。ただ、正道が自分を助けてくれたという喜びと安堵感が真美を満たした。

正道は自分がなにをしたのかもよく分からず、炎の熱を感じながら自分の両手を見ていた。

「おれ、まどうしってやつらしいんだ。父さんがいった。目にもなんか入ってるし。……たぶん、今のはそのなんかだと思う……わかんないけど」

振り返った正道はいつも通りに笑って見せた。
そして少し恥ずかしそうに、でも胸を張って、

「まみはおれが守る。なにがあっても！ どっかいつでもおれが守る！ これ約束な！」

いって真美の好きな笑顔を浮かべて手を伸ばす。その笑顔が好きすぎて、なんだか分からなくなって、感情の赴くままに真美は泣いた。

「なんで泣くんだよ」

「わがんだい……」

森の奥から数本の光の線が見える。大人の声も聞こえる。

「あーあ。みつかった」

「ごめん……」

二人は離れていた手を再び取り合って、その場から動くことなく大人の到着を待った。

「あやまん。まみ、なにをもってんだ、そっちの手」

「あっ……ぐしゃぐしゃ」

真美の握り締めた手のひらから出てきたものは潰れた四つ葉のクローバー。

「まみもみつけたのか？」

「まさちゃんも？」

正道は頷いて、口を尖らせる。

「おれのどっかいっちゃったけどなあー……」

——でもまみを助けることはできた。

正道は誇らしげにへへんと鼻を鳴らした。

「じゃあこれあげる」

「いいの？」

「ぐしゃぐしゃだけど。ひとつくらいならお願い事かなうよ……たぶん」

「ありがとうな」

「……うん」

「真美！」 「正道！」

手をつないで立ち尽くす二人を眩しいライトが照らした。

迎えにきたのは正道の父、剛と真美の父の真。真美と正道は緊張の糸が切れ、子供らしく泣きながら走り出した。

それでもつないだ手はしばらく離れなかった。

真美は正道の温もりを感じながら安堵の涙を流し続けた。



——まさちゃんは、覚えてないかな。

「——……」

幼いころの記憶を見ていた。まどろみから醒めたようなふわふわとした浮遊感のなか真美は意識を取り戻した。目の前は薄暗く、鼻を通る空気はどこか無機質で冷たい。口はテープで塞がれ声は出せない、簡素なパイプ椅子に座らされているが手は後ろで縛られ、足も縛られている。

辺りを見回してみれば、光源は絞られているのか、真美のいる周りだけが明るかった。窓から漏れる光はないので、時間はだいぶ経過したのだろう。

スポットライトのように照らされた明かりの周りにはシルエットだけだが大きなコンテナのようなものが見え、コンクリートの床やこの空間の広さから、ここは倉庫かなにかかと真美は感じた。

——私は誘拐された……？

エムズの前で起きた出来事があまりに一瞬すぎてよく分からなかったが状況から鑑みるとそうなのだろう。

——あの恐い顔をした、外国の人。あの人はエムズでなにをしたの？　なんで私を？　パパはどうなったの？　まさちゃんは？

真が今どうなっているのか。あの後きたであろう正道たちは大丈夫なのか。あの瞬間を思い出せば思い出すほど悪いことしか浮かんでこない。

「——おや、お目覚めかな？」

ゴツゴツと重い靴音を鳴らして、闇のなかから巨軀の男が現れた。漆黒のコートにモスグリーンの軍用のパンツ。金髪のオールバックに夜だというのに丸い跳ね上げ式のサングラス。男——グレンは柔和な笑みを浮かべて真美に近づいてきた。

あのとき屋上で一瞬だが見た男とは似ているが印象が違う。柔らかく笑う男の顔には狂気のようなものは見受けられない。

グレンは真美の顔を覗くように、腰をかがめた。跳ね上げられたサングラスの向こうから薄いブルーの瞳と赤黒い色眼が現れた。同じ赤だがそれは正道とは違う色。固まった血のような色をした色眼を真美は睨んだ。

「君はとてもいい目だね」

グレンはサングラスを戻して立ち上がる。

「怒らせてすまない。どうしても君の友だち、いや、恋人かな？」

正道君をここに呼びたくてね。どうも君のお父さんにも手荒な真似をしてしまった“らしい”が、“多分”そちらは大丈夫と“聞いている”」

曖昧でおかしな話し方をする男に真美は内心首を傾げた。

まるで自分をさらったのが別の誰かのような口ぶりだった。

——私を誘拐したのはやっぱり別の人？ でも、似てる……。

それより、「正道君」っていった……この人の狙いは、まさちゃん。

自分でもおかしな話し方をしてしまったと思ったのか、グレンは苦笑を浮かべて独り言のように続ける。

「最近なんだか調子が悪くてね、起こったことも事後報告さ。参ったよ。記憶が抜け落ちてたりね……まるで二重人格みたいだ……。こうなると自分がなにをしてるのか分からなくなるときがあるが、もう正道君は私の目的となったからね。特に気にしてないよ……君

には関係ない話だったね」

——なにが目的？　こんなところに呼ぶなんて、まさちゃんになにする気……。

悪い予感しかしない。真美は静かにグレンを睨み上げた。普段あまりしない表情をしているせいで眉根がひくつく。

「美しいな……君の瞳は吸い込まれそうだ。なにかいいたいのかい？　そうだな、君の声も聞いてみたくなった。……叫んじゃダメだからね」

ゆつくりと真美の口を覆っていたテープが剥がされる。

真美は小さく呼吸をして、静かに口を開く。この状況で騒いだり泣いたりするのは得策ではない。真美はグレンの柔和さもあるのか、この状況で意外と冷静だった。

「まさちゃんに、なにをするつもりですか」

でも声は震えていた。鈴の音のような声が小さく響く。

グレンは満足げに頷くとコートのポケットに両手を突っ込み顔を突き出すように真美に近づいた。冷たい息が真美の顔にかかる。

「？」

真美は感じた。目の前の男の“なかでなにかが蠢いた”気がした。

——なんだこの人。なんかおかしい……。

その変化はすぐに現れる。

「なに、大丈夫さ。殺しはしないよ……——」

真美の目の前で優しく微笑んでいたグレンの表情がどんどん酷薄なものへと変わっていく。

みちみちと音を立てて裂けたように吊り上がる口角は笑顔というものとはかけ離れている。もぎ取るように握りつぶしたサンガラスの向こうから見えたのは見開かれた“二つの黒瞳”。白目は血走り、赤い血の色をしている。

魔導士でも人間でもなくなった男の顔は真美の脳裏に焼き付いていた男と一致した。

グレンは下卑た声をあげる。

「殺しはしない？ ギャッハッハ、まだいつてやがるのか！ こいつは綺麗事が好きでナ。情け？ 正義？ 反吐がでるぜ。もうこいつと俺は別ダ。そんなクソみたいな感情につきあうこともネエ」

化け物のような顔になったグレンは真美の顎を乱暴に掴む。

「殺すにきまってんだロ？ あのガキも、お前モ。それだけじゃねエ……人間も！ 魔導士も！ 全員、皆殺しダァッ！ まあ今日はそのための儀式みたいなものサ……」

グレンは顔を近づけ、真美の顎を掴んでいた手を真美の胸へ滑らせる。

真美の首筋にざらついた舌が這い、真美は身をよじらせた。叫びたいところだったが喉にふたをされたように声がでてこなかった。

不意に真美からグレンが離れる。

「ハハ……お楽しみはガキがくるまで取っておくカ。死にかけてる自分の前で恋人が“魔物”に犯されて殺されル……最高ダナ！ ギャーハッハッ、やっと楽しくなってきたぜ……」

真美は自然と流れる涙も拭えずに、笑いながら踵を返したグレンの背中を見ていた。グレンは光のなかから光源のない闇へと歩いていく。

「時間はまだある、静かにしておいてくれヨ？」

いってグレンは闇のなかに消えた。悠然たる足音だけが響く。

「ああ、そうダ。自己紹介がまだだったナ。俺は吸血鬼。この名前は嫌いなんだがナ……知ってるよナ？」

闇のなかから声だけが真美に届いた。

「吸血、鬼……」

「そうダ。あのガキに邪魔されたんでナ、俺があのガキを殺す理由はそれとしておく。まア、殺すことに理由なんていらねえがナア！ギャーッハッハッ」

笑い声が遠くなっていく、気配が希薄になり、外に出たのか足音が消えた。

暗い倉庫のなか、弱い光に照らされて再び一人になった真美はなにもいえず唇を噛みしめた。

正道は助けにきてくれるだろう。でも、きて欲しくないという気持ち強い。

くれば殺されてしまう。いくら正道が強いとはいえ相手は異常過ぎた。

耳を澄ませば小さく何人かの足音も聞こえる。おそらくブラッドだろう。あの男一人ではない……。正道がいくとなれば他の友人たちもついてくるはず。

みんなが傷つく姿は見たくない。

「まさちゃん、みんな……こないで」

そんな真美の祈りにも似た声は正道たちに届くはずもなく――



——くそ、なんで真美が。

午後八時。正道ははやる気持ちを抑えて依然滅茶苦茶なままの事務所のなかにいた。床には乱雑に真のフィギュアが散在している。破碎された壁から冷たい夜気が流れ込み、蛍光灯の光が落ち着かない心を表すように明滅していた。

凜や蘭、真も事務所のなかにいる。

真はあの後蘭が呼んだ朱川の人間によって手当てを施された。肋骨が数本折れているとのことらしいが、事情が事情だけにどこへも連絡していない。

真は今鎮痛剤を打ってもらい、ソファーに寝ている。

凜と蘭はその向かいのソファーに腰を降ろしていた。

凜はずっと泣いていた。

「私のせいだ……私のせいでみんなが関わっちゃったんだもん。……真美」

凜は第一埠頭での出来事がすべての原因と思っていた。吸血鬼の邪魔をしたことがこの状況を生んでいると、そう思っていた。そして第一埠頭のことは自分が原因だと凜は思っている。それは違うと周りからいわれるが、どうしてもそう思ってしまう。

「姉様は悪くない。それにあの手紙。内容からいって吸血鬼は正道のことを元より知っていたような感じ。あの日のことが直接的原因とは考えにくい。そう、思います」

蘭は姉の肩に手を置いていう。正道も蘭のいう通りだと思っていた。

しかしなぜ知られているのかは判然としない。

あの日以前に力を使ったといえ、ハリオとマリオしかない。それを吸血鬼が見ていた？ 吸血鬼はブラッドと関わりがある。だからそれを使って自分を探していたのか？ ——正道は色々と勘繰るもそんなこと“どうでもよかった”。

とにかく真美を助けて吸血鬼だろうがブラッドだろうがまとめてぶっ飛ばす。正道のなかにはそんな思いしかない。

真の苦しそうな寝息と凜のすすり泣きが荒涼とした暗い事務所に充満していた。時間はまだある。手紙を読んだあと、破り捨てて飛び出しそうになった正道だった。真に止められた。余計な動きはしない方がいい。真は涙を流しながらそういった。

一番悔しいのは真だった。そして真美と真を救えるのは自分しかない。

「……俺一人でいくからな」

吸血鬼は正道を呼んでいる。誰も巻き込むつもりはない。

「なにいつてんのよっ！ 私たちもいく！」

凜が泣きながら立ち上がった。

「俺を御指名なんだ。それにブラッドもいるかも知れない。危なすぎるだろ」

「だからなによッ！ 助けにもいかないでなにが友だちよ！ そのための魔導でしょ！ 放っておけるわけない！」

「でもなッ！ ……」

凜のいつていることは分かる、でも巻き込むわけにはいかない。正道も意地を張っていい返そうとしたが、二人の間に入るように蘭が無言で正道の目の前に立った。

蘭の短めの黒髪が揺れる。蘭は少し身体をひねったかと思うと、

正道の頬にビンタを浴びせた。

乾いた破裂音が響く。痛みより驚きの方が強い。今自分になにが起こったのかよく分からないほど蘭のビンタは速かった。

蘭は表情を変えず、正道を見つめる。それはいつもの氷の瞳ではなかった。炎のような熱いなにかを内包した氷。そんな印象だった。「私の張り手すらかわせないような人を単独で“戦場”へ送り出せと？ ……正道が私たちのためにいつているということは了解している。しかし、そんな友人の姿を見せられて放っておけるとでも？ ……ふざけるな、正道」

「蘭……」

眉根を寄せず、眼光だけで睨む蘭の目が揺らいだ。それは初めて見る蘭の涙だったのだと思う。それを隠すように蘭は制服のスカートを翻して凜のところへ戻っていく。

「私たちは絶対ついていくからね、正道」

凜の言葉にもう正道にはなにもいえなかった。

どれだけ止めてもついてくるつもりなのだろう。無理やりにも止めるという手もあるが、友だちに手を上げるということも気が引ける。それにもしそんなことになったとしてもこの二人相手、一筋縄にはいかない気がする。

なにもいえず、居丈高に腕を組む凜と視線を交錯させていると正道の携帯が鳴った。携帯を取り出して開く。表示された名前を見てそのタイミングの悪さに正道は苦笑いを浮かべた。

「……翔太」

『あ、もしもし、正道君？ あ朱川さんいる？ もらった古文のノートなんだけど、じゅ、授業内容じゃなくてなんか、そのっ、ラブレターみたいなのがい、いっぱい書いてあるんだっ！ どどどどどどういうっ——』

聞こえてくる声のテンションが違いすぎて正道は思わず嘆息する。

「落ち着け。今ちょっと相手してらんねえわ、ごめんな」

『……なんかあったの？』

「なんもねえ。お前は寝て……あっ！」

「もしもし翔太！？」

凜が横から正道の携帯を奪い取った。声の調子からしてまずい。

「真美がさらわれたの！ 協力して！」

「あ……」

間に合わなかった。凜は正道が取り返す前に端的に要点だけを翔太に伝えた。

「事情は後で説明するから。もう動けるでしょ？ エムズに二時までにきなさい！ ……真美が好きなんでしょ、翔太。分かった！？ こないと許さないからねっ！」

凜は涙を目いっぱいにためて一方的に電話を切った。

そして携帯を正道に突き出して、

「私はあきらめないんだからねっ」

「翔太にいえよ……」

「正道は真美を助けて王子様になりなさいよ！ 命令！」

「そのつもりだけど、王子様ってのは、その……」

「この状況でそんな顔できるなんて、よっぽど好きなのね。……むかつくわ、両想いとか！ えいっ！」

「ぎゃっ」

凜は嫉妬の力を込めて思いっきり正道のすねを蹴った。

「いってえ……てか、翔太にいうなよ。一応病人だぞ」

「明日で退院！」

「五十島も友人です」

確かに翔太は明日退院することだった。翔太は絶対にくる。焦って病院から抜け出そうとしている姿が容易に浮かぶ。

「結局こうなのか」

正道はうなだれてがしと頭をかいた。

「ああ、もういいよ！ 全員で真美を助ける！ でも絶対に無理すんなよ！」

凜と蘭は満足げに頷く。それで当たり前だみたいな顔をされると自分が悪いみたいな気になるが、こうなる運命だったのだろうと思うことにした。

時刻は八時半。時間はまだある。

「とりあえず飯！ そして仮眠！ ここは一時に出発！ 万全の態勢で……絶対に真美を助けるぞ」

「分かってるじゃない、正道」

「御意」



凜と蘭がコンビニへ向かい、エムズの事務所のなかには苦しそうな真とそれを見つめる正道だけとなった。

「おっちゃん……絶対俺が連れ戻してくるからな」

うわごとのように娘の名前を呼ぶ真が痛ましい。

こんな状態を作り出した吸血鬼への怒りがふつつと湧き上がる。

『僕の出番っすねえ』

少年のような少女のようなその声はまるで踊るように楽しげに、正道の内側から響いていた。

『お前の力は借りない』

『おつ。なんだあ、聞こえてたんすねえ？ いじわるつすねえ、マ・サ・ミ・チ』

『黙れ。さっきからずっとうるせえんだよ。わけ分かんねえ歌、人のなかで歌いやがって』

『ウへへ、やっぱりずっと聞こえてたんすねえ。寂しかったつす』

『もう無視する。俺からの返答は金輪際ない。もう一度いどうぞ。お前の力は借りねえ』

『……そうっすか。でも、無理だと思うつすがねえ。まあ、僕は優しいからピンチにはちゃんとでてくるっすよ』

『消えろ』

『はいはい。怖いっすねえマサミチは……——では、“また”』

声が溶けるように消える。なにもなかったかのように、薄暗い事務所のなかには真の呻き声だけが響いた。



深夜——第二埠頭。貨物専用の駅である美泉埠頭駅周辺。

赤と白のカラーリングの巨大なガントリークレーン。コンテナなどを運ぶ巨大な鉄の塊は夜の闇に沈み、そのシルエットはまるでキリンのように見える。

その麒麟の頭頂部。地上から五十メートルは離れた高さのところに蠢く白い人影が一つ。

その人影——ホワイトナイトは尋常ならぬ視力と聴力を生かして遠くに見える倉庫の様子を眺めていた。

「どうしよう……」

あの倉庫には数日前に吸血鬼を追い、辿りついた場所だった。目下最大の敵である吸血鬼に遭遇したホワイトナイトだったが結局臆病なままなにもできず、正道に危機が迫っていることを知りながら保身に走った。ホワイトナイト——ホウスイトナイト 冴嶋斗夜は後ろめたさから学園も休んでいる。理由はインフルエンザということではぐらかした。

しかし身体はいたって健康。吸血鬼がなにかを企んでいることは分かっていたため夜のパトロールは続いていたのだった。

四人目の被害者がでて、数日は動きがなかったものの今日になって一気に動き出した。

深夜になり斗夜は不穏な魔力の流れを感じて美泉の街を跳んだ。美泉の街に散在する魔力の流れを感じさせる存在。それが一つの場所に集約していく動きを見せた。その方向からいって目的地は第

二埠頭のようなだった。

斗夜はガントリークレーンの上で状況を見守った。すると予想通りブラッドと思しき人間が集まりだした。それはあの日に吸血鬼がいた倉庫で、そして今日も吸血鬼の魔力がそこにはあった。

黒い血を固めたような重く禍々しい魔力に斗夜は震えあがったが、なんとか逃げることなくこの場に留まっている。それに気になることもある。

吸血鬼から感じる魔力の流れ、それがどこかおかしかった。分離しているというか、魔力が完全に肉体から離れている……？ そんなともいい表わせないような感覚を斗夜は感じていた。

数日前のことと、異常ともいえる聴覚から吸血鬼がここに正道たちを呼ぼうとしているのは確定している。正道を確実に呼びだすために来栖真美をさらってきたことも知っている。ブラッドたちも殺気立ち、遠目に見える倉庫の周辺は濃い魔力で歪んでいるように見えた。

——ここに脇坂君たちだけでくるのか？　いくらなんでも……。でも……脇坂君なら……。

斗夜はあの日の夜のことを思い出した。

正道のなかにいる強大な力の存在。『リリス』というあの“なにか”。思い起こすと正道はあの力を制御した気がする。

もしかしたら正道一人でもこの状況を打ち砕いて真美を助けだすのではないかという考えが斗夜の頭に浮かぶ。

「いや……」

それは確かに浮かんだ考えだったが。同時に逃げの考えでもあった。

——また僕はなにもしないつもりかよ！　なんのためのコスチュームだ！　ホワイトナイトのくせに！　正義を見せてみる！　今日こそは……僕もあの日のみんなみたいに……強くなるんだろ。

ホワイトナイトは戦うことを決めた。ただ一人ではいけない。それでは囚われている真美に危害が及ぶ可能性がある。

いくならここに正道たちが到着してからだ。それは自分の正体がバレることを一番の恐怖にしている斗夜にとって単独で動くよりも勇気がいる決断だった。

とはいえそのときになるまで分からない。自分の心は大事な局面ですぐ折れることを分かっている。

ただ今回ばかりはそうなりたくない。

——大丈夫、強くなれる。助けに入れる。大丈夫、大丈夫、大丈夫……。

心のなかで念仏のように唱えながら、斗夜は震えた。この震えは心の震えではなく、上空を吹き荒れる風によるものだといいい聞かせて。



七番倉庫前。

闇のなか蠢く男たちの影。目立つのを避けるため明かりは落としてある。

緊張からか男たちの間に会話はあまりない。波の音に混じるのは小さな衣擦れの音や、咳払いや鼻を吸る音くらいだ。

そんな暗い緊張のなか倉庫の壁に寄り添う形で会話している人影が二つ。

「——マジでくるんだろうな」

「邪魔されたこと忘れちゃったのかア？　さらったガキ助けにすっ飛んでくるようなやつだ。くるぜ。絶対ナ」

「楽しそうだな。ぶっ殺してえ」

男——浅間照樹がグレンの言葉にナイフのような鋭い視線を送るも、

「ギャツハツハツ、できるもんならやってみればいいイ」

笑って受け流されるだけだった。

「チッ」

浅間も歯噛みするぐらいで特になにもしない。いや、なににもできなかった。

浅間にとってグレンは鋭利な刺だらけの鉄の壁のようなものだった。対して浅間は棒つきれだけ持った子供のようで。そんなものに立ち向かったところで死ぬのは目に見えている。

グレンのことはブラッドのメンバーに説明せざるを得なかった。

“本物の魔物”ということ伝えたがそれを全員が信じているかは分からない。ただ浅間でさえも抵抗できないほどの力を持っていることや、グレンが吸血鬼ということは納得したらしかった。グレンの変貌した性格と凶顔も信じさせる要因の一つだろう。

今日、ブラッドのアジトで起こることについては「死んだ仲間の復讐」ということになっている。

風の魔導士を殺したのがグレンというのは自明だが、その原因が正道たちにあると浅間はメンバーに説いた。本当に牙を剥くべき相手がグレンだということは全員承知している、しかしそんなことをすればもれなく全員血の海に沈むことだろう。

グレンからはこの“会場の警備”が最後の仕事といわれた。その後どうなるかは分からない。それが一番懸念すべきことだった。その最後というのはグレンと手が切れる最後か、それとも事切れるという意味での最後か……。

全員で結託し、逃げだすという手もあったが犠牲は必ず出るだろう。グレンに抵抗することは自殺行為に等しかった。

ブラッドはグレンの絶対的な力の輪のなかで踊るしかなかった。

——あのガキとその仲間が邪魔しなければあいつは死ぬことはなかった。そういう聞かせることで浅間はなんとか自分を保っている。他のメンバーも同じようなものだろう。

本当は自分がグレンと手を組んだことがすべての始まりだったのは分かっているのだが、もうそんなことを悔やんでいられる状況ではなかった。

「まア、ちゃんと頼むぜ？ テルキ」

肩にグレンの分厚い手が置かれる。背筋が粟立つような感覚を覚えたが、浅間は微動だにせず、その手を払って冷たくい放つ。

「黙れ」

「ククク……」

グレンは笑いながら倉庫の闇のなかへと消えていった。

——そんな様子を遠巻きに見ていた二人組がいる。

二人のシルエットは長身痩躯と短身肥満の凸凹コンビ。長身の男の目に光るのは青い光点。黒い長髪を風に流して下唇に刺さったピアスを内側から舌でいじっている。常に何かを睨んでいるような三白眼が整った顔立ちに浮かんでいる。

「——やべえよな……うち」
ブラッド

「なにが？　なにが？」

二回繰り返し返すのが癖なのか、長身の男のつぶやきにもう一人の男が奇妙な返事で反応した。その声は高く緊張感がない、まるで道化のようだった。それに声だけではない。その大きく丸い鼻を赤く塗り、丸い風船のような体に派手な服を着せればそのままこのサーカスにでも潜入できそうだ。

その男の丸い目に光るのは緑の光点。トライバルのタトゥーが入った禿頭とくとうを左手で撫でながら右手には湯気を立てる肉まんが握られている。

「なにがじゃねえよ。話聞いとけ」

長身の男——ハリオが肉まんを頬張る短躯の男——マリオを見降ろす。

「ふが。聞く、聞く……キック！」

「あでっ。蹴るんじゃねえ！」

「くふふふふ」

不気味に笑うマリオに舌打ちしてハリオはその場にしゃがみ込んだ。その足元にはマリオが買いこんできた食糧が袋に入って置いてある。

ハリオはそのなかからコーヒーを探り出して啜る。

星もない暗い空を見上げる瞳は特にどこを見るわけでもなく、ど

こか遠くを見つめていた。

「吸血鬼の片棒担いで、四人も死にしまった……俺らも一人さrachちまったし。仲間だって死にしまった。もう終わりだろ、うち。それに今からくるのあいっだぜ？ あのカキ」

「タカ、タカ、ぴーひよろろー……それは鳶^{とび}。鳶。くふふー」

マリオは思い出したようで正道の通う学園の通称を口にした。

「覚えてんのな。浅間はあのカキのせいでこうなってるっていうけどよお。……元々、俺らが負けたからこんなことになっちまったんじゃないねえのか？ もちろん借りは返すつもりだけどよ……」

「大丈夫、大丈夫」

釈然としない様子で嘆息するハリオの言葉を聞いているのかは分からないが、マリオが両手に肉まんを持って笑っていた。

「なにが大丈夫なんだ？」

「なんとかなる、なんとかなる」

「だからなにが？」

マリオは嬉々として肉まんを頬張る。そしてもがもがと、

「むがっ……もごっ……あの子強い、強い」

マリオは確かにそういった。

「……お前どっちの味方だ」

ハリオは苦笑を浮かべて携帯を開く。時刻は一時を回った。

「そろそろか——」

月が雲に隠れ、美泉の街が闇に沈む。その闇の底に蠢く血と吸血鬼が、今か今かと獲物を待ち受けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453w/>

正しい魔導の使い方(仮)

2011年11月17日14時02分発行